
僕とちっさい幼なじみと召喚獣

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕とちっさい幼なじみと召喚獣

【Nコード】

N1624P

【作者名】

レフェル

【あらすじ】

明久の家の隣に住む小さい幼なじみが明久達を巻き込んで起こすハチャメチャコメディ！！バカとテストと召喚獣の二次創作です！！ちなみに色々フラグを折るかもしれません（汗）やってしまったが、後悔はしてない！ロリ最強！

ただいま期末試験編を書いております

設定 改2（前書き）

明久のちっさい幼なじみを書きたくて書かせてもらいました！

まあさまとGAUさまには応援されていますので頑張りたいと思います！！

誰か、つぐみのイメージを書いてくれないかな

設定 改2

名前

あまみや
雨宮つぐみ

性別

女

年齢

明久達と同じ

身長

138cm

体重

内緒

性格

世話焼きさんで明るくて優しくツツコミ気質。

容姿

ふわふわなミルクティー色のポニーテールで緑色の瞳。

髪の毛の長さはお尻くらいまで、目は眠そうな感じで童顔。

うさ耳風のピンクのリボンに小さな鈴がついた髪留めをしている。

胸のサイズはD〜F。

胸を抑えめに行っている為Dくらいだと思われる。

実はスタイル抜群。

能力

サイコネシス テレパス テレポート サイコメトリー
念動力・精神感応・瞬間移動と接触感応など

備考

明久のお隣さんで小柄な女の子。見た目は小学生くらいにしか見えない為、よく間違えられる。

明久とは同じ病院で生まれたの明久とは長い付き合い。

体力はなく、運動が苦手。

特技は家事全般で炊事が得意でスイーツ関係はプロ並。

超能力は必要な時がいはいあまり使わない。

お仕置きなど、明久に危害が加えようとする輩が大嫌い。

Fクラスに行ったのは体調不良で出席できなかった。

巨大ピコハンを両手に持って瑞希と美波を止めることが多い。

スタイルと身長にコンプレックスをもっている

体格や胸のことで結構いじめられていたことがある。

いじめで一瞬気が緩んで一度誰かを力で傷つけてしまったからは自分の能力が嫌いになっていた。

召喚獣)

うさぎの耳と猫の尻尾が生えた姿で容姿はつぐみをデフォルメした感じ。

武器はキャロットバトン。

好きな食べ物)

クリームパン

嫌いなこと)

いじめ、暴力

得意なこと)

明久を起こすことと声帯模写や料理とバイオリン

得意科目)

数学と家庭科

苦手科目)

物理

宝物)

幼い頃に明久からもらった鈴付きうさ耳風のリボンとバイオリン。

設定 改2（後書き）

書きなおしました

追加事項もくわえました

つぐみのリボンはうさ耳みたいなリボンです

つぐみの超能力は絶対可憐チルドレンの技ネタです
つまり技のみクロスとなっています。

つぐみの従兄弟ともう一人の転校生

名前)

天城 あまぎ 富士也 ふじや

年齢)

明久達と同じ

性別)

男

容姿)

前髪に白銀のメッシュがかかった黒髪のざんばらヘッドに淡い黒のクールな瞳。

182cmのほどよく引き締まった体格で顔立ちはややクール系服装に統一性が無く制服姿もほとんどが着崩しスタイル

性格)

曲がった事が大嫌いで義に厚い熱血漢

成績)

保険体育・現国・情報：500点台

それ以外：300点台後半

詳細)

2-Fに転入してきた青年でつぐみの従兄弟

転入前は名門の進学校に通っていたが、クラスとの折り合いが悪くて自分から進んで転入願いを出した

つぐみとは親戚同士が集まる場でよく会い、一緒に遊んでいた為結

構仲が良い

中学時代は我流ながら武闘術をたしなんでいて、不良からも一目置かれていて『けんらんぶてい絢爛武帝』の通り名で畏怖と羨望を持たれていた

とにかく曲がった事が大嫌いで、特に明久に酷い仕打ちをしている人（主に雄二）には地獄では生温い程の制裁を与える

ちなみに、恋愛に対しては意外と純粋でキスはおるか異性と手を繋いだ事すらないという純情っぷり

腕輪の能力は『フレイティング・カーニバル絢爛武闘祭』：50点を消費して最大10人の相手の召喚獣をパンチやキックの乱舞で倒して戦死させる

召喚獣の姿は本人のデフォルメ姿で両拳両足に魂の炎が立ち上っている

名前)

かみなぎあやひと
神薙綾人

年齢)

明久達と同じ

外見)

スパロボのレナンジエス・スターロードそっくり。

容姿)

黒髪のきりつとした瞳

カッコイイ

性格)

性格は普段は冷静沈着だが心には熱く燃える闘志を秘めている

備考)

自衛の手段として様々な武術を学んでおり腕っ節は結構強い。
趣味は漫画やゲームといった所謂オタク趣味で、その中でも仮面ライダーとウルトラマン、ガンダムを愛している。

小さくて可愛い生き物を見ると愛ではいられないという特殊な性癖を持っているが本人はきにしていない。

親の都合で引っ越してきて転入生として文月学園にきた。

作者：カトラス様

つぐみの従兄弟ともう一人の転校生（後書き）

綾人と富士也の詳細！

オリキャラ設定

つぐみ「今回はあたしとアキくんプロフィールを紹介するよ！」

明久「宜しくね！」

つぐみ「まずは、最初に自己紹介した、狩谷君から！」

明久「つぐみからみたら、巨人ぽかったんだよね」

つぐみ「そうなんだよね。背が高い人は羨ましいよ」

名前)
狩谷晃希かりやこうき

性別)
男

身長)
186cm

特技)
剣道

一人称)
僕

容姿)

赤色のショートヘアで紫色の瞳でイケメン。

備考)

成績はAクラス並。

Fクラスに行ったのは面白そうだからという理由で、テストを白紙で出したのが原因。

剣道部主席でエース的存在。

暇な時は剣道部に行き鍛練している。

色恋事に疎くて鈍感。

どこからともなく竹刀を出してFFF団の攻撃をしりぞく。

得意科目)

全て

苦手科目)

特になし

召喚獣)

顔はデフォルメされた晃希で服装は着物で獲物は刀。

愛刀『鬼斬丸』を持つてる

明久「でも、何考えてるか、わからないよね」

つぐみ「うん。気まぐれというか、冷静に分析しての行動って感じ」

明久「確かに・・・あのタライトラップには驚いたしね」

つぐみ「あー、あれね。狩谷君がしかけたのかな？」

明久「僕は見てないから知らないよ（汗）」

つぐみ「そうだよね（汗）」

明久「つ、次に行こう！」

名前）

どろじまともみ
堂島知美

性別）

女

一人称）

わたし

身長）

160cm

趣味）

薬品調合と薬品作り

容姿）

黒髪のロングヘアで茶色の瞳で綺麗系。

称号）

万能少女

備考）

成績はBクラスくらい。

Fクラスに行ったのは寝不足気味で良い点数が取れなかったが原因。自白剤や色々な薬を作ることが多い為ラボが学園のどこかにある。

得意科目)

化学、数学

苦手科目)

特になし

召喚獣)

顔は智美をデフォルトした感じで服装は和風武者で槍。

つぐみ「この人も美人で綺麗なんだよね」

明久「かなり人気があるみたいだよ」

つぐみ「え？そうなんだ！」

明久「凄いよね」

つぐみ「うん！」

明久「次に行こう！」

名前)

あとりとおる
鴉取透

性別)

男

一人称)

俺

身長)

177cm

趣味)

空手

容姿)

ハニーブラウンの髪色でオレンジ色の瞳。

備考)

成績はCクラス並。

Fクラスに行ったのは名前の書き忘れが原因。

空手部主席でエース的存在。

身体を鍛えることが多いが、Eクラスほどバカじゃない。

ノリでボケることがある。

得意科目)

物理、英語

苦手科目)

化学、歴史

召喚獣)

顔は透をデフォルトした感じで服装は胴着で武器は三節棍。

つぐみ「この人はキツイ感じだけど、どこか優しい感じがあるんだ」

明久「小動物系には目がなさそうだね」

つぐみ「あはは(汗) そうだね」

明久「空手が得意で趣味とか、よほど好きじゃないとできないよな」

つぐみ「うん。親から習ってるらしいよ..」

明久「へ〜」

つぐみ「次に行こう!」

名前)

久蘭由香里
くらんゆかり

性別)

女

身長)

163cm

一人称)

わたし

趣味)

スケッチブックと絵を書くこと。

容姿)

薄紫色でふわふわロングヘアで垂れ目な瞳。
かなり可愛い。

胸のサイズはCくらい。

備考)

成績はDクラス並。

Fクラス行きになったのはテストの時間うつかり絵を描いてしまったことが原因。

いつでもどこでもスケッチブックを手放さない。

部活は美術部に入ってる為、色んなコンテストで入賞している。

絵はかなり上手で人物画や風景画や動物の絵などを描いたりする。ひなたぼっこが好きでもある為、よく猫が集まる場所に行く。

得意科目)

美術、家庭科

苦手科目)

歴史

召喚獣)

顔はデフォルメした感じで服装は白いワンピースで武器は絵筆。

明久「このこはどこかふんわりというか、穏やか系だよね」

つぐみ「ぼんやりもしてるけどね。スケッチブックは手放さないし、猫にいつも埋もれてるみたいだよ」

明久「猫に好かれてるのかな？」

つぐみ「かもね」

明久「次は」

名前)
神崎深紅かみさきみく

性別)
女

一人称)
わっち

身長)
150cm

口調)
京都弁

容姿)
水色のふわふわロングヘアで花のヘアピンをつけている。
瞳は緑色。
胸のサイズはDくらい。

趣味)
ゲームやパソコン関係や情報集め。

備考)
成績はAクラス並。
Fクラスに行ったのは名前を間違えたことが原因である。
得意なことは暗躍と情報収集。
彼女の行動はミステリアスで誰もがつかみにくい。
恋愛ことはもっぱら応援側で協力したいヤツには協力する。

お気に入りの人を傷つけられるとキレる。
とある組織の一員だという噂がある

得意科目)

物理以外は普通

苦手科目)

物理？

召喚獣)

紅いドレスに紅い歪な剣を構えた騎士、容姿はデフォルメした深紅。

明久「ここまでだね」

つぐみ「博士号とかもとってそうだよね」

明久「ゲームとかも得意なんだって」

つぐみ「なんで観察処分者になったのかな？」

明久「サボりまくりだったからじゃないかな(汗)」

つぐみ「そっか」

明久「うん。では、読者のみなさん」

二人「また、会いましょう！」

オリキャラと投稿キャラ

名前)
よしのとも
芳乃朋

性別)
女

イメージキャラ)
芳乃さくら

身長)
146cm

体重)
40kg

外見)
金色のポニーテールで可愛く瞳は蒼色。
蒼いリボンをつけている。

一人称)
ぼく

特技)
プログラミングや開発やハッキングなど

備考)
たびたび学園長室にいりびたる謎の少女。

深紅とは知り合いかも？

祖母の血をひいているのでクォーターと思われる。

エンジニアとして有名で学園とかに研究施設をもっている。

本来なら三年生になるはずだったが、とある理由で二年Fクラスに在籍している。

「心の傷はなかなかおらないんだよ？」

「ぼくは本当に信頼できる人にしか手を貸さない」

「にやははは、ぼくは自由気ままでいたいのだ」

名前 九条院 響くじょういん ひびき

歳 20 学年 高2

身長 173 スリーサイズ 103 J 58 86

髪 ローズピンクのポニーテール

顔 目が大きく童顔。

呼び方 自分 ボク 明久 ダーリン つぐみ つぐちゃん 瑞希
みいちゃん

特技 迷子 会って5秒で友達

極端な方向音痴のせいで出席日数が足りず、20歳で高2になつてしまった。

明久君達とは幼なじみ。

気に入った人を抱きしめる癖があり、特に明久君が大好きでつぐみと瑞希はお気に入り。

成績はBの上位からAの下位くらいだが振り分け試験の時は迷子になつてこられなかった。

趣味が料理で（明久君程美味しく作れない）らしい。

第1話 改

「ねえねえ、あきくん!」

「なに、つぐちゃん」

「あたし、おつきくなったらあきくんのおよめさんになりたい!」

「え、ぼくの?」

「うん!だめ、かな?」

「ううん、だめじゃないよ!」

「よかった、あきくん、だいすき」

「ぼくもつぐちゃん、だいすきだよ」

と、そこで目覚ましが鳴り響いてつぐみは目が覚めた。
天井を見つつ、夢の光景を思い浮かんで頬が赤らんだ

「ないない、これはないよ!」

恥ずかしさのあまり布団をかぶり直して身悶えてつぐみは呟いた。

「いくら幼稚園児の頃とはいえ、恥ずかしすぎるよ!」

枕を抱えて身悶えてから、落ち着くと顔をあげる。

「ま、まあ。小さい頃の事だし、アキ君も覚えていないし。時効だよね」

少しだけ、残念のような複雑のような気持ちで呟いた
そして、小さな体で起き上がると、黒髪を櫛で綺麗にしてベツト脇に置いた。

鈴付きリボンをつけてポニーテールにし、制服に着替えて、自室を出て洗面所に行き、顔を洗い、洗濯物を干して、朝食の準備をする。彼女の名前は雨宮つぐみ。

身長は小学生みたいだが、真面目で明るく元気で素直な所は普通の子と変わらない。

「さて、今日も頑張るぞ！」

私は笑顔で言うつと玄関に向かう。

私の両親はいまは海外におり、ここにはいないけど。

これもいつものことだから、気にはしてない。

生活できるほどの仕送りももらっているのだ、時たま両親は帰ってきて、心配するが何事もないと、少しだけ泊って、また海外に戻るの繰り返しなのだ。

「行ってきます」

キイツ……バタン！

戸締りもしてから、朝食を持ってお隣の家に居る。

あたしの幼なじみである明久を起こす為に合いカギを使い開ける。

これは、明久の両親から、明久の面倒を見てもらおう為にあずかった物であるから、大事に使ってる。

後、アキ君の生活費の仕送りがこちらになぜか送られてくる。

多分、アキ君に任せると仕送りを使い果たすからだと思う。なぜ、それを知っているかというと、その手紙が届いたからが理由である。

「アキ君は遊びに使いすぎなんだよ」

ふうつとため息をつきながら、明久の家に入り、明久を起こすべく、寝室に向かった。

そして、ノックもせず扉を開けると、案の定でまだ眠っていた。

「アキ君！起きて、朝だよ！」

「うん。あと十分」

そういうと、寝返りをうつ。

「駄目だつてば！早く起きてー！！」

ゆさゆさと明久の体を揺らして起こそうとする。だが、明久は全然起きない。

ここまで寝付きがいいのも、考えものだ。どこかの某駄目駄目中学生と同じくらいに。

「もう！こうなったら、奥の手を使うからね！」

いまだに布団を被って起きない明久を睨んで言うと、キッチンに行き、フライパンとお玉を装備して、

戻ると明久のベット前までいき、奥の手を発動！

「秘儀！死者の目覚め！」

カンカンカン！！！

そう言うと、思いつきり耳元で鳴らす。

ちなみにこれは明久がゲームでしていたネタを思いついてやった。近所の人に迷惑ではないかと？

これは、日常茶飯事というか、他にもしている方がいるので容認されている。

「うわあああ！！！！？」

「やっと、起きた？」

明久と飛び起きるとつぐみは笑顔で聞いた。手にはフライパンとお玉という装備だ。

「お、起きたよ。てか、それは止めてって言ったよね！！？」

「早く起きないアキくんが悪いんだよ」

つぐみはくっつかかる明久を見て呆れながら言う。

「うっ」

「はあ、朝食の用意をしてあるから、ちゃんと起きて歯を磨いて顔を洗ってから、リビングに来てね？」

「う、うん」

つぐみは明久の返事を聞くと笑顔でキッチンに向かう。

そこで、もってきた朝食をテーブルに置いて、明久が来て二人で食

べるころには時間がやばかった。

慌てて朝食を食べると二人で全力疾走で文月学園に向かう。

「はあはあ、も、もう！ち、遅刻したら、アキくんのせ、所為だからねっ！」

「ごめんってば！」

二人でこうして走っているのは訳があるのです。

いつまでたつても降りてこない、明久を心配して部屋に入ると、玲さんのお古のセーラー服を取り出そうとしてる明久を見て、慌てて止めに入ったからなのだ。

その後、慌てて家を飛び出して今に至る。

「だ、だいたいさ。な、なんで玲さんのお古が今、家にあるの!？」

「知らないよ!!？姉さんが全部持って帰ったと思ってたのに！」

二人は走りながら言いあうが、体力は大丈夫なのだろうか？

やっと、学園の校門前まで来たが、つぐみの体力は限界にちかかった。

小柄な体で全力疾走はキツイのだろう。

「つぐみ、大丈夫？」

「も、もう、無理」

つぐみがそう言うと明久は走るの止めて歩き出した。

「え、このままじゃ、遅刻しちゃうよ？」

「いいの！つぐみを置いて行くなんてできないし」

明久は笑顔でキツパリと言うとつぐみの手を引く姿は兄が妹の手を引いて歩くみたいなお景だと思う。

そんなこんなで玄関についた時。

「吉井、雨宮、遅刻だぞ！」

玄関の前で呼びとめられた。

浅黒い肌、スーツ姿だが、その内に詰め込まれた、針金の束ねたかような筋肉質の肉体は隠しきれない。

「おはようございます。鉄じ……じゃなくて、西村先生」

「おはようございます！西村先生」

文月学園が誇る、鋼鉄の生活指導担当教師、西村教諭である。趣味はトライアスロンというのがあり、生徒の間で鉄人と渾名で呼ばれている。

真冬で半そでというのも理由の一つ。

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

明久の言葉にごまかされている西村先生。

「それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろう」

「あ、遅刻してすみません」

「あたしも遅刻してすみません」

二人が遅刻の謝罪をすると

「よろしい、ほら。受け取れ」

西村先生はこちらに二つの封筒を渡す。

「雨宮。残念だったな」

「いえ、体調管理ができていなかったのがいけないので」

つぐみは封筒を受け取りながら言う。

「そうか。次は頑張れよ」

「はい」

「でも、残念だったよね。つぐみなら、Cクラスには行けたんじゃない？」

「そんなことないよ」

明久も封筒を受け取りながら言うと、西村先生は遠くを見つめながら明久に声をかける。

「吉井、今だから言うがな」

「はい、なんですか？」

明久は封筒を開けようと悪戦苦闘している。

「俺はお前を去年一年を見て、『もしかすると、吉井はバカなんじゃないか？』なんて疑いを抱いていたんだ」

「それは大いなる誤解ですね。そんな誤解をしているようじゃ、さらに『節穴』なんて渾名をつけられちゃいますよ？」

まだ、封筒を開けようと頑張りながら答える。

「ああ。振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違えに気づいたよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです」

結局綺麗に破ることを諦めた明久は上の部分をビリビリと破る。

「喜べ、吉井。お前への疑いはなくなった」

折りたたまれた紙を開き、書かれているクラスを確認する。つぐみは気になって明久の封筒を覗きこむ。

『吉井明久……Fクラス』

「お前は正真正銘のバカだ」

第1話 改（後書き）

さて、書けた方がいいが。

これは俺と彼女と召喚獣の外伝編にするべきか…悩むな。

というわけでアンケートします！

1・俺と彼女と召喚獣の外伝にしちやえ！

2・新たな作品として、書きすすめ！

3・どちらでもいいんじゃない？

どちらがいいですか？

では、次回の話も期待しててください！

アンケートの期間は試召戦争の終わりまでです。
長いでしょうか？

…気にしないでおきます

第2話 あたしとFクラス？（前書き）

ちっこい幼なじみをご愛読いただきありがとうございます！
これからも、もっと頑張るので応援してください！

ここでお礼を、蒼さま、まあさま、光闇雪さま、リザクさま！
感想まことにありがとうございます！

第2話 あたしとFクラス？

「うわゝ……大きい教室」

「こんなに大きい教室あったんだね」

去年はほとんど来たことのない三階に足を踏み入れると、まず目の前に現れたのは通常の五倍はあろうかという広さを持つ教室だった。

その教壇に立つにはクールで知的な大人の女性の高橋洋子先生が居た。

黒板ではなく壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイには高橋先生の名前が表示されていた。

「学年主任の高橋先生か、知的で大人の雰囲気か素敵だなゝ。」

低い身長に童顔な自分がコンプレックスなので知的美人には憧れを抱く。

その一方で明久はAクラスの設備に目移りをしていた。

「うわっ！席広っ！エアコンにパソコンに、あ！冷蔵庫まであんの！？」

「なんだか、豪華なホテルみたいだね」

この設備には苦笑いを浮かべるしかない。

「では、はじめにクラスを代表を紹介します。霧島翔子さん。前に

来てください」

「……はい」

名前を呼ばれて席を立ったのは、黒髪を肩まで伸ばした日本人形のような白い肌を持つ少女。

物静かな雰囲気を持つ彼女は、その整った容姿と相まって、穢れを近づけない神々しさを放っていた。

「……霧島翔子です。よろしくお願いします」

先ほどと同じようにプラズマディスプレイに大きく名前が表示された。

「綺麗な人……」

「つぐみ？」

「さて、そろそろ、行くところ？」

「あ、うん」

つぐみがポツリと言った言葉は聞き取りにくかったはずだが、明久には聞こえていたようだ。

でも、すぐに笑顔にして明久の手をひっぱって旧校舎にあるFクラスに向かう。

「な、なんというか」

「うん…… Aクラスとは別の意味で凄いね」

場面変わってFクラス前で明久もつぐみも呆然と佇んでいた。同じ旧校舎にあるEクラスと比べてもこちらは酷い。

2年F組と書かれたプレートがボロボロの木の板であることから推測すると部屋の中はさぞ酷いだろう。

「設備格差にしては酷い気がするよ」

そう呟きながら、つぐみは教室の戸を開ける。

「遅いぞ、ウジ虫やる……」

教壇に立つ野性味たつぷりの顔の少年はつぐみに気づいて固まった。

ドサツ、つぐみは学生鞆を落としてしまう。

「ふえっ……ウジ虫……じゃ、ないもん」

みるみるうちに目に涙が溜まり、涙目になるとボロボロと頬とつたつてこぼれおちる。

「す、すまん！明久だと思って勘違いを『総員ねらえ〜！！』うおっ！？」

誰かの号令で雄二に向けてFクラスに大半が上履きを構える。

「お、お前ら！！落ち着けて……ぎゃあああ！！！！」

「黙れ！こんな可愛い子を怒鳴りつけるなど」

「言語道断だ！」

「幼女最高！！！」

「ロリっ娘最高！！！」

「ロリっ娘は人類の宝だ！！！」

清々しいほどの連携ぶりだ。

「あれ、つぐみ。どうしたの？」

「う、ウジ虫って……言われて」

「あ、明久か！助ける！」

「雄二、くたばれえええ！！！」

「お前もかああ！！！」

数分後、雄二が謝るということで、みんなは矛を収めた。

「君、悪かった。さっきのは君の後ろにいるバカに言おうとしていたんだ。

だから、君に対して言ったわけじゃない」

精悍そうな少年は素直に謝った。

「まったく、雄二ももう少し考えてからいいなよ」

「バカに言われたくないな。ウジ虫野郎」

「なんだと!」

「えーと、ちょっと通してもらえますかね?」

メンチを切り合う二人の後ろから覇気のない声が聞こえる。

振り向くとそこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにもさえないおっさんがいた。

「それと、席についてもらえますか? H Rをはじめますので」

どうやら担任教師が到着したようだ。

明久も雄二もつぐみも男子生徒もそれぞれの席に座る。

「大丈夫、つぐみ?」

「ぐすつ……うん、大丈夫だよ、アキくん。」

ニコツと笑って言うつつぐみは改めて周りを見る。

「良かった。それにしても凄い教室だね」

「凄いというより、酷い教室だね」

ホッと安心した明久も周りを見て言うつつぐみは周りを見ながら答える。

「畳敷きに卓袱台に座布団。畳はカビ臭いし……あ、蜘蛛の巣だ。明日から、カビキラーとファブリーズでも持ってこようかな」

そうつぐみが言ってるうちに先生は教壇に立ち、自己紹介をする。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

福原先生はお世辞にも綺麗とは言えない黒板に名前を書こうとして、やめた

「あれ、なんで黒板に書かないのかな？」

「ああ、それか。俺が教壇に立った時にみたら、チョークのくずしかなかった」

つぐみが不思議そうにしていると雄二が答えた。その状態に苦笑いをこぼす、明久とつぐみ。

「そういえば、自己紹介がまだ、だったな。俺は坂本雄二、そのバカとは、去年からの付き合いだ」

「あ、雨宮つぐみです。アキくんとは生まれた直後からの付き合いです」

「どづいつことだ？」

「僕とつぐみの両親は親友同士でお互い同じ病院を選んでそこで僕

とつぐみが生まれたんだ」

「で、家もお隣同士で家族ぐるみの付き合いというわけなんですよ」

「へー、それにしちゃあ、去年は見たことないんだが」

「去年はCクラスだったから。でも、Dクラスの噂を聞いてたよ」

雄二はそれを聞いて苦笑いする。

「ろくな噂ではなかっただろう？」

「ノーコメントでいいかな」

つぐみは苦笑いしながら言う。

第2話 あたしとFクラス？（後書き）

感想と評価をお待ちしています！

第3話あたしとアキくんと自己紹介！（前書き）

ヒヨウガさま、まあさま、光闇雪さま、まいくさま、祐介さま、F
OOLさま。

感想ありがとうございます！

第3話あたしとアキくと自己紹介！

「必要な物があれば極力自分で調達するようにしてください」

どこからともなく、教室全体からかび臭い独特の空気が漂う。

きつと床に敷き詰められている古い畳のせいだろう。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生から指名を受け、廊下側の生徒の一人が立ちあがり名前を告げる。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

男子の制服を着た可愛い女子がそう言う。

「こつ見えてワシは男じゃ。」

「え!？」

つぐみはこのとんでも発言に驚いた。

「じよ、冗談だよね」

「気持ちはわかるが。あいつは男だ」

もう一回その男子を見るとどうみても女子にしか見えない容姿だ。

ちらつと、明久を見ると悶えていた。

「僕は狩谷晃希かりやこうきです。趣味は剣道ですね」

その声を聞いて振り向くと坂本より身長が高いと思った。

小柄で低身長なつぐみと比べたら彼の方が186cmの身長では巨人に見える。

「おっ、おっきい」

「ブシャアアア!!!」（鼻血放出）

「うわ!? 何事! …… ってムツツリーニ! ?」

つぐみの言葉でいきなり鼻血を放出したムツツリーニに明久は驚いた。自己紹介しようと立ちあがったが、つぐみの会話に独特なセリフを考えたのだろう。

「……ふちやほつた（土屋康太）」

鼻血がまだでている影響なのかうまく喋れていない。てか、鼻血を止めてから喋ろうよ。

「だ、大丈夫?」

「……」（コケッ）

ムツツリーニの後ろにいた白い髪で紅の瞳の少女が心配して聞いた。

「そ、そう」

苦笑いしながら彼女は言つと立ちあがる。

「堂島知美どうじまちみです。趣味は薬品関係が得意です」

ペコリとお辞儀がして彼女は座つた。そして中肉中背の男性が立ちあがり名前を告げる。

「鴉取透あとりょうだ。趣味は空手かな」

それだけ言つと座りこんだ。簡潔で言つところはムツツリー二と同じ気がする。

「久蘭由香里くわんゆかりです。趣味はスケッチブックに絵を書くことです」

つぐみより少し背の高い女性がすらすらと答えて座ると次の女性が立ちあがる。

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話できるけど読み書きが苦手です」

また、綺麗な女性だと思ひながら、つぐみは見ていたが次の言葉にムカツときた。

「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は吉井明久を殴ることです」

チリンッ

つぐみが動くとき鈴が鳴り、立ちあがって美波を睨んだ。

「な、何？」

「そういう趣味はよくないと思うの。」

「喧嘩はそこまで。島田さん、席についてください」

もの凄く不機嫌な彼女にそう言われた美波はムツとなるが、福原先生が止める

「…はい」

「…すみませんでした」

つぐみも座りなおすと美波も座った。どこかギスギスした空気になったが、明久には分からない為つぐみに聞いた。

「つぐみ、どうしたの？」

「ううん、なんでもないよ」

明久に聞かれたつぐみは微笑んで言う。その様子を雄二は見ていた、どこか危うさがありそうで儂いような感じがした。

「……です。よろしく」

つぐみの前にいる人が終わると、次はつぐみの番が来た。

「雨宮つぐみです。部活は美術部です。趣味は料理で特技は声マネです」

ペコリとお辞儀するが勢いあまって卓袱台に顔をぶつけてしまう
教室内が鎮まる。

「つ、つぐみ？」

「ら、らいらりようぶ」

『ぐはあっ!!』

涙目でなんとか痛みに耐えながらみんなを明久を見るとFクラスの
男子数名が鼻血の海に沈んだ。

「…明久」

「うん。あれは慣れててもキツイよ」

雄二と明久もクリーンヒットしたみたいだが、なんとか耐えてる。

その後、つぐみが座ると明久が立ちあがる。

「……こほん。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』と呼
んでくださいね」

『ダアアーリーーン!!』

野太い声の大合唱が響く。

これはキツイ。なにがって？色んな意味で。

「……………失礼。忘れてください。とにかくよろしく願います」
気分悪そうに明久は座るとつぐみが明久を見た。

「なにやってるの」

「いや、これくらいのノリがないと盛り上がらないかと思って」

「いらなと思うよ。そういうのも」

明久の言葉に苦笑いしながらつぐみは言う。

「あ、あの、遅れて、すみま、せん」

「えっ?」

誰からともなく、教室全体が豆鉄砲を喰らった鳩のようになった。クラス内が騒がしくなる中、数少ない平然としている人物の一人、担任の福原先生がその姿を認めて話しかけた。

「丁度良いですね。みなさんに自己紹介して貰っているところなので、姫路さん、あなたもお願いします」

「あ、はい！ えと、姫路瑞希です。よろしく願います……………」

つぐみほど小柄ではないがその体をちぢこませて声を上げる瑞希。肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかかそうな髪は保護役をかきたてるようだ。

「はい！質問です…！」

「あ、は、はい！なんですか？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて驚く姫路さん。その小動物的な仕草が可愛かったりするらしい。

「なんでここにいますか？」

聞きようによっては失礼決まわりない質問が浴びせられる。でも、これはクラス全員が思っている疑問だ。

可憐な彼女の容姿は一目を引くし、なにより彼女の学力は入学して最初のテストで学年2位を記録し、その上位一桁以内に常に名前を残しているほどだった。

だから、誰もが彼女はAクラスにいるに違いないと思っていた。

「そ、その、ですね……」

緊張した面持ちで体を固くしながら瑞希は答える。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました……」

その言葉を聞き、クラスの皆は『ああ、なるほど』と頷いた。試験途中での体積は0点扱いとなる。

結果としてFクラスに振り分けられてしまった。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは高難度だったな』

『俺なんか、事故にあつた弟が心配で集中できなくて』

『ああ、お前には妄想の弟がいたんだつたな』

『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』

『異端者だ!』

『嘘です! すんません!』

これは想像以上にバカだらけだ。

「で、では、一年間よろしくお願ひしますっ!」

そんな中逃げるようにして明久と雄二の隣に空いてる卓袱台に着く。

第3話あたしとアキちゃんと自己紹介！（後書き）

感想と評価をお待ちしてます！

現在の投票数は1外伝で行こう！が1票

2・新作で書きすすめ！が6票

3、どちらでもいいんじゃない？が1票です！

まだまだ、アンケートは募集します！

第4話あたしとアキくんと試召戦争の引き金（前書き）

蒼さま、光閻雪さま、リザクさま、ヒョウガさま、GAUさま！

感想ありがとうございます！

第4話あたしとアキくと試召戦争の引き金

「き、緊張しましたあゝ……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す瑞希。

「あのさ、姫……」

「姫路」

坂本が明久の声にかぶさるように隣の席に座っている彼女に声をかける。

「は、はいっ！なんですか？えーっと」

「坂本だ。坂本雄二。よろしく頼む」

「あ、姫路です。よろしくお願ひします」

深々と頭を下げる彼女。挨拶も丁寧だから、育ちは良いのだろう。

「ところで、姫路の体調はいまだに悪いのか？」

「あ、それは僕も気になる」

「あたしもー！」

明久とつぐみは坂本との会話に口をはさむ。

「よ、吉井君！？それにつぐみちゃんまで！？」

よほど緊張して周りが見えていなかったのだろう。今気付いた様子で言う

「姫路。明久が不細工ですまん」

「そ、そんな！目もパッチリしてるし、顔のラインも細くて綺麗だし、全然不細工なんかじゃないですよ！ その、むしろ……」

「そうだよ！アキくんはカッコイイんだからね！！」

姫路のセリフに便乗するようにキツパリと言う。

「そう言われると、確かに見てくれは悪くない顔しているかもしれないな。俺の知人にも明久に興味を持っている奴がいたような気がするし」

「え？ それは誰……」

『『それって誰ですかっ！？』』

「確か、久保……」

二人が明久のセリフをさえぎって聞くと坂本が話だす。

「……………利光だったかな」

久保利光

（性別／オス）

「……………」

明久は黙ってしまふ。

「明久……うつつうしいからさめざめと声を殺して泣くな。」

「もう僕、お嫁にいけない!!」

「冗談だ……半分はな」

「え？残りの半分は？」

「ところで姫路。体は大丈夫なのか？」

坂本は明久の質問を無視して姫路に問いかける。

「あ、はい。もうすっかり平気です」

「良かった。アキくんに聞いて心配したんだよ？」

「心配かけてすみません」

「でも、誰が連れて行ってくれたの？」

二人で悩んでいると、明久が声を張り上げる。

「ねえっ!!!! のこりの半分はっ!!!!?」

「はいはい。その人たち、静かにして下さいね」

さすがに福原教諭に注意されてしまった。四人が居住まいを正して謝ろうとした瞬間。

バキィッ　バラバラバラ……………

教卓か音を立てて崩れ落ちた。寿命だったのかもしれない。

「…………えーと、替えを用意してきます。みなさんはしばらく待っていて下さい」

福原教諭は気まずそうにそう告げると足早に教室から出ていった。

「あ、あははは……………」

苦笑いする、瑞希を見てから、明久は坂本に声をかける。

「…雄二、ちよつといい？」

「ん？　なんだ？」

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

立ちあがって廊下に明久と坂本は出る。その時一瞬だけ、瑞希と視線が合った。

「どづしたの？」

「あ、つぐみちゃん。吉井君が坂本君と廊下に出たので気になって
教卓の残骸を片付けながら廊下を見る瑞希に話かける。秀吉と須川
君も手伝ってくれています。」

「アキくんと坂本君が？なんだろう」

明久が真剣な時は大抵だれかが絡んでいることが多い。予想を立て
るとしたら、瑞希の為だろう。
お人好しな彼らしいことだ。

『それで、話ってなんだ？ 断っておくけど俺は男に興味は無いか
らな？』

『雄二が僕をどういう目で見てるか聞きたいよ？
まあ、今は置いとくけど。そうじゃなくてこの教室についてのこと
なんだ』

『Fクラスか。想像以上に酷いもんだ』

『雄二もそう思うよね？』

『もちろんだ』

『Aクラスの設備は見た？』

『ああ、凄かったな。あんな教室見たことがない』

『そこで、僕からの提案。折角2年生になったんだし、<試召戦争
>をやってみない？』

『戦争、を仕掛けたいと？』

『うん。しかもAクラス相手に』

『……なにが目的だ？』

坂本は目を鋭くしながら明久に尋ねる。

『いやあ、だってあまりに酷い設備だからさ』

『嘘をつくなよ。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが』

『そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校にくるわけが』

『

『お前がこの学校を選んだのは、<試験校だからこその学費の安さ>が理由だよな？』

『……姫路のためか？』

『な、なぜそれをつ?!』

『バカ、カマを掛けただけだ』

楽しそうに坂本は笑う。からかうのが好きな男だ。

『ま、気にするな。Aクラス相手の試召戦争なら俺もやるつもりだ』

『たからな』

『へっ?! 雄二も勉強なんかしてないよね?』

『何、世の中学力だけじゃないってことを証明してみたくてな』

『???』

『それにAクラスに勝つ作戦も思いついたし……おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ』

『あ、うん』

坂本が先に入るとタイヤが降ってきた。

ガイン!!

「がっ!」

「ゆ、雄二!!!?」

なんと古典的なトラップだ。

「あははは、面白いくらいにひっかかりましたね」

「……傑作」

のんびり屋な子と狩谷君が楽しそうに笑っていた。

その後、新たなボロイ教卓を置いて自己紹介に戻る。

須川も立ちあがる。

「えー、須川亮です。趣味は……」

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原教諭が雄二に声を掛けた。

「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて雄二は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。

その雰囲気、Fクラス中の視線が集まる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ」

そこで、少し……間を空けた。間の開け方が上手いとやり方だ。

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

カビ臭く、すき間風が通る教室。

古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。

最後に皆を見据えると口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『大アリじゃあっ！！！！』』』』

教室を揺るがす、魂の叫びだ。

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄二は仰々しく同意する。すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

それらをまとめ、引き継ぐように雄二は口を開いた。

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

自信たっぷり、野生味溢れる笑顔で、言い放つ。

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思
う」

彼、坂本雄二は戦争の引き金を引いたのであった。

第5話 試召戦争準備！ (前書き)

ヒヨウガさま、光闇雪さま、GAUさま、FOOLさま。

感想ありがとうございます…！

第5話 試召戦争準備！

Aクラスへの宣戦布告。

それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんかいれば何もいらぬ』

『雨宮を抱きしめたい』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる。一部おかしなセリフも交じっていたが、気にしないでおこう。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されている。

一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことができるのだ。

テストの点数に上限はなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。

そして、科学とオカルトと偶然から生まれた、『試験召喚システム』これは、テストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が使用可能になる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。

その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争………試召戦争と呼ばれる戦い。

その戦争で重要なのがテストの点数だ。AクラスとFクラスの点数は文字道理解が違う。

正面からやりあっても、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうかは分からない。

どうあがいても勝つことなど不可能としか思えない。

だが、雄二はそれを否定してみせる。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せる」

圧倒的な戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言した。

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

『そんなことより、雨宮を愛でたい』

否定的な意見が飛び交うが、また、おかしい意見も出てきた。

「根拠ならあるさ。このFクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

雄二が自信満々に笑って言う。

「それを今から説明してやるよ」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす雄二。
晃希は面白そうに雄二を見て、智美は目を細める。

「おい康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「ひゃわっ」

雄二に呼ばれた少年、土屋康太は必死に顔と手を横に振って否定する。

瑞希が慌ててスカートを押さえて離れると、顔についた畳の痕を気にしながら壇上へと歩き出した。

「土屋康太。こいつがああの有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

『ムツツリーニ……………だ……………と？』

『ヤツがそつだというのか？バカな……………』

『だが見る。ああまで露骨な覗きの証拠を、未だに隠そつとしていゑぞ……………』

『ああ……………まっただな。ムツツリの名に恥じない姿だ……………』

畳の痕を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

「?????」

ただひとり、瑞希だけが、訳が分からないという顔で首を傾げている。

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだ」

「えっ！ わ、私ですかっ？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

突然に話をふられて慌てる瑞希。それを見て頷く雄二。

確かに彼女ほど頼りになる人材はいないだろう。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『まったくだ。彼女がいれば、ほかに何もいらさないな』

『雨宮たん、かわゆす!!!』

さきほどから、瑞希やつぐみにラブコールを送る輩が増えていた。

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……！』

『確かアイツ、木下優子の……』

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたらしいな』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良なんかだったのか』

『なんだよ、Aクラスレベルが二人もいるんじゃないか、このクラス』

いけそうだ、やれそうだという雰囲気は教室内で満ちている。

「それに、吉井明久だっている」

が、一気に冷めた。

「ちよっ?! 雄二っ!! どうして僕の名前がそこででてくるのさ!」

ぜんぜんそんな必要なかったよね?! 今!」

『……誰だ? 吉井明久って』

『いや、知らん』

『誰だっけ?』

「せっかく、もり上がっていたのに、鬨りが見えてきたし！ わざわざ、もり下げる必要があるの!？」

「なんだ、みんな知らないのか？ こいつは《観察処分者》だ」

「なんでバラすのっ!」

『それって、バカの代名詞じゃなかったか?』

「ち、違っよっ! ちょっと、おちゃめな16歳につけられる愛称で」

「そっだよ! アキくんはおちゃめでおっちょこちょいだけど、実は優しいし頼もしいんだから!」

つぐみも慌ててフォローするが意味がない気がする。

「そっだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二!」

「酷いよ!坂本くん!」

「でもさ、《観察処分者》の召喚獣は特例として、物に触れると聞いたぜ」

「おっ、知っていたのか。」

「まあね」

雄二が透を見て言うと不敵に笑って言う。

「明久以外にもこの《観察処分者》がいる」

「わっちのことやね？」

「ああ、宜しく頼むぞ。神埼深紅^{かんざきみく}」

にんまりと笑った女性に雄二は答える。

「まあ、教師立ち会い下でしか召喚できないし、フィードバックで疲労やダメージの何割かを召喚者が被るんだがな」

『て、ことは《観察処分者》は召喚獣がやられると本人も苦しいってことか』

『おいおい、それじゃあ、おいそれと召喚できないヤツが二人いるってことじゃないか』

「あ、ちなみに神埼に課された 観察処分者 の肩書きは、バカの代名詞という意味ではない」

雄二はみんなに説明しているが、肝心の深紅はどうでもよさそうにしている。

「あ、明久はザコだから、いてもいなくても関係ないがな」

「どこまで追い打ちかけるのっ?!」

「とにかく。まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「人の話を聞け!!」

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろうっ?」

『当たり前だ!!』

「ならばペンを執れ! 出陣の支度を始めるぞ!」

『おおーっ!!』

「お、おー……」

周りに流されながら瑞希は腕を上げる。その中には流されない奴や、面白そうだからという理由で参加してる奴もいた。

第5話 試合戦争準備！ (後書き)

感想と評価をおまちしております！

第6話あたしとアキくんと使者(前書き)

F O O L さま、 ヒ ヨ ウ ガ さま、 G A U さま、 光 闇 雪 さま、 蒼
さ さま、 ま あ さ さま、 リ ザ ク さ さま。

感想ありがとうございます！

第6話あたしとアキさんと使者

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ行ってみる」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「ゴリラ」

シーン

『……(汗)』

「今、言ったのは誰だ!？」

「さあ?」

「と、とにかく。大丈夫だ、俺を信じる。俺は友人を騙すようなマネはしない」

「じゃあ、あたしが行くね!」

「ちょっと、待て！！お前は行ったらダメだ！」

「どうして？安全なら、あたしが行っても問題ないよね？」

「そ、それは」

「もしかして、雄二。僕を騙してるな！！」

明久はそう言うと雄二に掴みかかり大騒動になったのはいうまでもない。

「で、本当に誰が行くの？」

「ウチとしては坂本が行ったらどうなの？」

「わっちも賛成や、代表としての生きざまを見せてもらいたいわあ」

『代表、代表！』

突然の代表コールの嵐が響く。

「くっ・・・わかったよ」

「じゃんけんで決めるのはナシだよ！」

「おま！また、心読んだのか！？」

「坂本のくんの顔に書いていますから」

晃希はにこやかな笑顔で言うと苦虫をつぶしたような表情で雄二は

俯いた。

「あんさんが行かないなら、わっちが行くえ」

「あー、わかった、降参だ！」

そう雄二が言うのと立ちあがってDクラスに行き、Dクラスに宣戦布告をしに行ったとか。

「雨宮、あの時はごめんね」

「島田さん。あたしもごめんね」

「ううん、ウチも悪いしね。これからはウチ、素直になっってみる」

「うん！頑張っつてね」

いつのまにか来ていた美波につぐみはお互いの非を認めて笑顔で会話を話した。

これにて一件落着かな？

「吉井、大丈夫？」

「へ？あ、うん」

「良かった」

「心配してくれてありがとう。つぐみとも仲直りしてくれたしね」

「え！？あ、う。う、ウチも悪かったし、謝るのや心配するのは当

「然よ！」

美波は明久に近寄って聞くと明久は笑顔で言い、ドキドキしながら美波は素直に気持ちを言う。

「ほら、お前等作戦会議するから、屋上に行くぞ」

「あ、うん！行こう、アキくん、島田さんに瑞希ちゃん」

「あ、待ちなさいよ！雨宮」

「はい」

「そうだね」

「…行く」

つぐみと美波と瑞希と明久とムッツリー二と秀吉と由香里も一緒に向かった。

屋上に通じる扉を開けてくぐると、太陽の下にでる。

雲ひとつない青空に、優しい春風が吹いた。

その春の日差しに、はためく瑞希のスカートに注視するムッツリー二以外のメンバーは目を細める。

「坂本、宣戦布告はしてきたんだな？」

「ああ、今日の午後の開戦予定だ」

「なら、先にご飯だね」

「そうなるな。しっかり腹ごしらえしとけよ？ 明久」

「わかってるよ」

「アキくんのお弁当はちゃんとあるよ」

ニッコリ笑って笑顔で言うとムツツリーニが明久を妬ましそうに見る。

「妬ましい……」

「なるほど。今までの弁当は、可愛い幼なじみのお手製か？」

「全部じゃないよ。僕も作ってるし」

「ほう、ということは明久もお弁当は作れるということじゃな」

秀吉は明久を見て言う。明久にゲームはあまり買わせないようにしている為、二人で日程を決めて弁当と食事当番を決めているのだ。

「わたしもお弁当を作りたいのですが、許可をもらってないので作れないんです」

「え？そうなの？」

「当然だよ。料理に薬品をいれるんだよ？」

「マジ？」

「うん、一度だけ、姫路さんのお弁当食べたら、病院に入院していたんだ」

「それから、瑞希ちゃんにはちゃんとしたお弁当が作れるまでは禁止にしたんだよ」

つぐみはため息を吐きながら言うと雄二と秀吉とムツツリー二と美波は青ざめていた。

「ということはまた練習するんだよね」

「うん、まだまだ、だからね。」

「ウチも参加していい？」

「ぼく…も」

「いいよ？みんなでお料理教室しよう」

つぐみは笑顔で言うと美波と瑞希と由香里も嬉しそうに笑った。

「明日が楽しみだね」

「うむ、そうじゃのう」

「明日はごちそうだな」

男性陣も嬉しそうに笑っている。

「この件は後にして試召戦争の話に戻ろう」

この場にいる全員は雄二を見る。

「雄二。一つ、気になってたんじゃが、どうしてDクラスなんじや？」

段階を踏むならEクラス。勝負にでるなら直接Aクラスじゃろう？」

「そつえば確かにそうですね」

「まあな。当然考えあつてのことだ」

雄二が鷹揚にうなづく。

「どんな考えなの？」

「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからだ」

「え？ でも、クラスは僕らより上だよ？」

「振り分け試験時点ではそうだったかもしれない。だが、実際はちがう。」

明久、いまおまえの目の前にいるメンツをよく見る」

「えーつと……」

明久は雄二に言われた通りに周りのメンバーを見る。

「美少女が四人と美幼女が一人とバカが一人とムッツリが一人いる

ね

「酷いよ！アキくん！あたしはそんなにちっちゃくないよ！？」

「誰が美少女だと！？」

「落ち着いて、つぐみ！てか、なんで雄二が美少女に反応するのさ
！？」

「……………（ポツ）」

「ムツツリーニまで！？どうしよう、僕だけじゃツツコミ切れない
！」

と、明久が慌てていると由香里がキツパリと言った。

「……………坂本は……………バカ……………で美波と……………瑞希と……………ぼ……………くと……………秀吉……………が美
少女……………で土屋……………はムツツリだ……………よ」

シーン

「そ、そうか」

「ありがとうございます。久蘭さん」

「べっ……………に」

そう言つとそっぽ向いた。照れているのだろう。

「ま、まあ、要するにだ。姫路に問題がない以上、正面からやりあ

つてもEクラスには勝てる。

俺たちの目標は、あくまでもAクラス。Eクラスとやり合っても、得るものは無い。

だったらやる必要はないだろ？」

「Dクラス…ス…と…やり…合う…事…に意味…がある…とい…うこと？」

「その通りだ。ま、初陣でもあるし。派手にやって今後の景気づけにしたいからな。それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に役立つプロセスだしな」

「あ、あの…！」

すると、不意に瑞希が大きな声をあげた。

「ん？ なんだ姫路」

「坂本君たちは、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

「ああ、それか。じつはさっき、姫路のためについて明久に相談されて」

「それはそうと…！」

雄二の言葉を遮るように、明久が大きな声を出す。

「さっきの話、Dクラスに勝てなきゃ意味がないと思うけど？」

「負けるわけがない」

明久の心配を笑い飛ばしてメンバーを見渡す。

「おまえ等が俺に協力してくれば、必ず勝てる」

雄二は力強い言葉で言った。

「いいか、おまえら。ウチのクラスは……最強だ」

根拠のない言葉だが、なぜかその気になるという雄二の言葉にはそんな力があつた。

「いいわね……面白そうじゃない！」

「なんかやれそうだって気になるね」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「……がんばる」

「……………（グッ）」

「頑張ろうね！みんな！」

「が、頑張りますっ！！」

そう皆がいい、士気が上がる。

「そうか。それじゃ、作戦を説明する」

そう言い、Fクラスの勝つ為の作戦が説明される。

その頃、教室ではカモフラした盗聴器で雄二達の作戦を聞いている
晃希がいた。

ものすごく楽しそうに笑っていたのだ。

第6話あたしとアキくんと使者（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第7話 試召戦争（前書き）

蒼さま、光闇雪さま、ヒョウガさま、FOOLさま、まあ
さま、GAUさま、暁 巧さま

第7話 試召戦争

明久達が紛争するなか、つぐみは回復試験を瑞希と一緒に受けていた。

「次をお願いします」

「お、同じく！」

シュババツ

次々と問題を解いて行く、瑞希とつぐみにそれを素早い動作で取り、点数をつける、高橋先生がいた。

ある程度とけると、つぐみは立ち上がる。

「?もう、行くんですか？」

「うん、アキくん達が心配だし」

ニコツと笑って言うとテレポートを使い回復試験の教室から出て行く。

「邪魔者は! 殺します!!」

戦線にテレポートすると叫びとともに、明久の召喚獣に襲いかかる女子生徒がいた。

「アキくん! 危ない! 試獣^{サモン}召喚!」

魔法陣が展開され、姿を現したのはうさぎの耳と猫の尻尾が生えた姿で容姿はつぐみをデフォルメした感じで武器はキャロットバトンでそれで相手を叩いて倒した。

『Fクラス 雨宮つぐみ 化学 134点 VS Dクラス 清水美春 化学 41点』

頭上には点数が表示されていた。

「そ、そんな!……」

「戦死者は補習だー!!」

呆然としている美春に西村先生が現れて言うと肩に担ぎあげて歩き出す。

逃げようとする暇も与えられなかった。

「お、お姉さま! 美春は諦めませんからね! このまま無事に卒業できると思わないでください」

最後まで言えずに補習室に連行される、美春だった。

だが、思い人にそういう言い方はいかなものか。

「アキくん、大丈夫?」

「う、うん。平気だよ、つぐみ。それより、島田さんが」

つぐみが明久に聞くと微笑んで返事し、美波を見ると深紅に宥めら

れていた。

「よしよし、えろっ怖かったやろっ」

「うう、本当に怖かったわよう!!」

「神埼さん、いつのまに(汗)」

「あたしにもわからないよ(汗)」

本当に謎な人物である。

やっと落ち着いて美波を見て深紅は言う。

「とりあえず、島田は回復試験を受けた方がええよ」

「そうね。雨宮、助けてくれてありがとうね」

「あ、ううん」

美波はつぐみの頭を撫でて言うと言って行った。

「素直だね」。

「そうだね。さて、あたし達もこの後を頑張ろっね!」

『おー!!』

つぐみが笑顔で言うと士気が上がった。

戦線に戻り、今の渡り廊下はつぐみと深紅のおかげで持っていた。

「ところで、どうして。あんなの事になったの？」

「ああ、それはね・・・」

つぐみが疑問に思ったことを聞くと明久はあの時起こった出来事を教える。

「そ、それはやっかいだね」

「相手が嫌がってるのに、分かっているひんのやな」

「そうかもね。おっと、神崎さん」

「あらほら、さっさ つぐみん、任せたえ」

「うん、よっ！」

三人は会話しながら、敵を即席コンビネーションで倒していく。即席な子もいるのにこの三人には抜群のコンビネーションで敵をさばく。

「あ、アキくん。危ない！えい！」

「おっと、足払い！」

「ほい、とどめやで」

「そ、即席なのに、なんでこんなに強いんだ!？」

そんなの作者が聞きたいものだ。

この様子を見ていたDクラスの前線部隊を指揮している塚本は啞然となる。

召喚獣の操作は難しいが、明久と深紅がいるおかげで楽にさばけるし、つぐみのフォローも二人で補っているし、つぐみと明久は長年の仲なので相手がどうするかなど、造作もないのだ。

『明久、雨宮！ 無事か?!』

良く通る声が響くのでそちらを向くと雄二が走って来ていた。どうやら、雄二の声のようだ。

「雄二！」

「本隊が動いたみたいだね」

「そうみたいやね」

「くっ、援軍か。残存兵力は俺とともに後退だ！」

Dクラスの塚本がそう言うと彼らは後退していく。

自分達もこの後は後退して、戦力を増やすことになった。

両軍とも一時的に後退し、戦力の補強ということになったのだった。

「明久、よくやったな」

「それじゃあ」

「ああ、補給組はだいぶ回復できたぞ」

雄二はニヤリと笑って言うとFクラスメンバーを見て言った。

「そろそろDクラス代表の首級を穫りに行くぞ！俺も出る！みんな続けえっ！」

『おおー！！！！』

いよいよ、最終局面にきた。今なら、帰宅する生徒もいるし、上手く倒せるだろう。

「下校している連中に上手く溶け込め！取り囲んで多対1の状況を作るんだ！」

雄二の指令が戦場に響く。

「そっちから、周り込め！俺はこいつに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を！」

「日本史で……！！」

Dクラスの連中を囲んで、Fクラスのメンバーは倒していく。そんな中に声があがった。

『Dクラス塚本を討ち取ったぞ！』

一際大きな声があがり、ますます士気があがる。

「援護に来たぞ！ もう大丈夫だ！ 皆、落ち着いて取り囲まれなように周囲を見て動け！」

また、よくとおる声が聞こえた。そいつはDクラス代表の平賀だ。

「Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ！」

「正念場だね」

「頑張ろうね！」

「さ、行きまひよ」

そう言うのと明久とつぐみと深紅は飛び出した。

「本隊の半分はFクラス代表の坂本を狙え！ 残りは包囲されている者を救出だ！」

平賀の号令の下、あつというまに雄二を中心にたFクラス本体の周りがDクラスメンバーに囲まれる。

「Fクラス、撤退だ！ 分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

「逃がすな！ 個人戦ならそうそう負けはない！ 追いつめる！」

Dクラス代表の声に従い追撃する・・・が、Dクラス本体に隙ができた。

「Fクラス 神埼深紅が近衛隊の四人に総合科目で勝負や」

『え！？』

明久に目配せした深紅がしたり顔で言う

「^{サモン}試獣召喚！」

『し、^{サモン}試獣召喚！！』

【Fクラス 神埼深紅 総合科目 1456点 VS Dクラス
近衛隊X4 334点】

お互い頭上に点数が表示される。

『え！？』

「バイバイや」

一瞬で召喚獣が切り裂かれた
ちなみに深紅の魔方陣が展開されて、召喚獣が出現する。容姿は同じで姿はデフォルメされており、姿は某ゲームの青い騎士と同じ姿となる。

そして、平賀の方がつぐみの召喚獣と明久の召喚獣に撃破されていた。

第7話 試合戦争（後書き）

感想と評価お待ちしております！

IF 気まぐれ猫とちっちゃなロリっ娘（前書き）

『バカとテストと召喚獣〜気まぐれ猫とスケッチブック』と『僕とちっちゃな幼なじみと召喚獣』のIFの物語です

優羽ちゃんとはつぐみの初めての出会いという、もしもの妄想の世界です！

ぶっちゃけ、優羽ちゃんがこの世界に居たらでの考えでもありません

ちなみにリザクさんには許可をもらっております！

IF 気まぐれ猫とちっちゃな口リっ娘

長い校長の話を聞いてから、すぐに教室に戻り。

先生の長い話を聞いていると、一人の女の子が入ってきた。

「遠月、遅刻なんだが？」

「すいませ〜ん。まだ、時間があると思ひまして」

先生の注意も全然気にしてないような感じで言うと席を見渡すとつぐみを見て。

「先生、なんで小学生がいるの？」

「あたし、そんなにちっちゃくないよ！？同い年だよ！！」

小柄な体で立ちあがると言う。間違えるのも無理はない、つぐみは小柄な体で童顔で低身長を見たら、そう思うだろう。

「あー、雨宮は本人が言う通りに同い年だ。あんまり気にしないよ
うに」

「へー、じゃあ。その子の隣にする」

「へ？」

「いっしょね？」

「うん、うん」

優羽は笑顔で言うとうぐみの隣の席に座った。

そして、自己紹介が始まり、つぐみの番が来た。つぐみは立ち上がると言う。

「長月中学出身の雨宮つぐみです。趣味は料理とお裁縫です。よろしく願います！」

チリン

そう言うて頭を下げてつぐみは座った、瞬間鈴がなる。

「それ、可愛いね」

「？うん、アキくん、じゃなく。吉井君にこれをもらったんだよ」

「じゃあ、大切な品物なんだね」

「うん、遠月さんもある？」

「うん、大切な親友との約束がね」

つぐみは笑顔で言うとう優羽も笑顔で答える

そして、他の人の自己紹介が終わって、優羽の番となり、立ちあがると

「神無月中学出身、遠月優羽です。趣味はスケッチ、昼寝、翔子と

の会話、雄二いじりです」

にこやかに言う辺りが、彼女らしいと思うのはなぜだろうか。

順番に自己紹介が終わるとつぐみは教室を出て明久に会いに向かうと、そこには優羽がすでにいて、赤い髪の男子生徒と会話していた。

「知り合いかな？」

「あれ？つぐみ、どうしたの？」

「あ、アキくん！ クラスはどう？」

「うーん、なんとかなじめそうだよ」

「良かった」

明久と笑いあっていると優羽と優羽の知り合いがこちらにきた。

「この子が、同じクラスの子だよ」

「……小学生にしかみえないんだが」

「あー、そこまでちっちゃくないよ！」

「つぐみ、落ち着いて（汗）」

優羽がつぐみを紹介すると面白いくらいに反応するつぐみに楽しそうだった。

「面白いな」

「でしょ?」

「ああ、俺は坂本雄二。ちびっこは?」

「雨宮つぐみだよ」

「あーちゃんの隣にいる人も教えて」

「吉井明久だよ」

明久とつぐみはそれぞれ自己紹介をする。

「つぐみ、こいつさ。いきなり僕のことバカ呼ばわりしたんだよ」

「事実だろ」

「なんだと!」

「やるか!」

「ちよ、ちよっと!アキくんも坂本くんもやめなよ!遠月さんも止めて!」

「え?なんで?」

「なんでって(汗)」

つぐみは優羽の反応に苦笑いする。この時、つぐみはこの子には近

々振り回されるんじゃないだろうか。

「あーちゃんは困るの?」

「困るよ」

「じゃあ、止める。雄ちゃんもあっきーも交通の邪魔だよ」

「ちっ・・・仕方ないか」

「アキくんも!」

「...わかったよ」

なんとか二人の喧嘩を止めて帰りにゲーセンに寄りましたとき。

IF 気まぐれ猫とちっちゃなロリっ娘（後書き）

リザクさまに気に入ってもらえるといいけど（汗）

直して欲しい所がありましたら教えてください！

では、感想と評価をお待ちしております

第8話Dクラスとの戦後対談とBクラスでの出来事（前書き）

ヒヨウガさま、 リザクさま。感想ありがとうございます!!

今回の話は根元が哀れな感じになります（苦笑）

原作道理ではないので、嫌な人は見ない方がいいと思います。

第8話Dクラスとの戦後対談とBクラスでの出来事

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ!』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

「凄えよ! 本当にDクラスに勝てるなんて!」

「これで畳や卓袱台ともおさばらだな!」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな!」

「坂本万歳!」

「姫路さん愛しています!」

「雨宮を抱きしめたい!」

代表である雄二を褒め称える声がいきたるところから聞こえてきた。

「お疲れさま、アキくん」

「つぐみもね」

「わっちには？」

「神崎さんもお疲れ！」

「おおきに」

つぐみは明久を見て笑顔で言うと明久も笑顔で言い、深紅はそれに割り込んで聞いてくるとつぐみは苦笑いしながら言う。

「おい、お前等。帰るぞ」

「ん？もう話は終わったの？」

「ああ、条件もDクラス代表に言ったしな」

「そっか。なら、帰ろう」

「そうだね」

つぐみ達は今日はとりあえず帰ることにした。

そして翌日

「さて、次の相手はBクラスなんだが」

「そういえば、Bクラス代表は彼女持ちでしたね」

『なんだと！！』

雄二の会話に口をはさむ、晃希。絶対面白がってやっているのだろ

う。

「その情報はどこから仕入れてきたんだ」

「企業秘密ですよ（ニコツ）」

「……ムツツリー二協会ではそんな情報得られなかったのに」

「僕の情報網を甘くみないでほしいですね」

「あ、アキくん。土屋君達から火花が見えるよ」

「僕も今思ったとこだよ（汗）」

晃希とムツツリー二の様子を二人は見ながら言うと明久も同意見だった。

「あー。それで、Bクラスへの使者だが」

『我ら異端審問会。その役目、引き受けよう！』

フードを纏った、クラスメイト達の姿が突然現れて言った。

「そつか。頼むぞ」

「え？いいの！！？」

「いいじゃん。やりたい奴にさせとけば」

雄二はあっさり承諾するとつぐみがツッコミをいれて透は興味なさそうに言い、

明久はいいのかな？と考えていた。

「準備はいいか？ムツツリーニ」

『…できている』

今、雄二達は卓袱台に載せたモニター越しに、使者として向かった異端審問会の様子を見ている。

盗聴だけでなく、映像をライブ配信できる機材があるとは。

晃希は何者なのだろうか？

と、考えている間に異端審問会がBクラスの前に到着したようだ。フードをかぶった連中が殺気を撒き散らしながら廊下を歩いている様子は、

何も知らない生徒が見たら一目散に逃走するレベルだと思う。

『『『代表の根本を出せ！』『』『』』』

ドアを開けるなり、いきなり直球でBクラス生徒に言う異端審問会のみなさん。

彼らは欲望に素直だということが、すぐにわかる光景だ。

『ひいつ！？お、おい根本！お前の客だぞさっさと行け！』』

『ちよつと待て!?!あんな知り合いは…ぐがあ!?!』

根本はクラスメイトに蹴られて異端審問会の前に出てしまう。

『ひ、ひいつ!?!な、なんだお前等!?!』

『我らは、異端審問会』

『我らは、清らかで穢れなき乙女を守る者達』

『我らは、その禁を破るものにふさわしき鉄槌を下すもの』

血のついたペンチやら鎌やらコンパスやら鞭は、鉄槌とは呼ばないと思うよ。

『貴様がCクラス代表の小山氏と付き合っているという情報が入った』

『な!?!い、いや違つぞ!?!あ、あいつとはただの友達で』

『録音は?』

『既にやっている』

『彼女への連絡先はどうする』

『奴の携帯から引きずり出せばいい。無論、消去も忘れるな』

『ああ間違いない彼女だよ、畜生!?!』

今の根本を見て哀れに思える方は多分いるだろう。

「やりすぎなんじゃ（汗）」

「そうですか？」

「そつだよー!!」

「そついうもんですかね」

その様子を見ながらつくみは苦笑いしながら言つと晁希はどつでもよさそつに言つ。

『何？根本の奴、彼女いたのか』

『まじかよ。アイツを殴りたい』

『俺だつてできてないっつーのに…!!』

『そんな事より私女だけど根本つて普通に死んで欲しい』

Bクラスからも殺意を抱かれる根本。さて、殴ったら反感がくると思つぞ。

『そつか、認めたか。では、手はずどおりに』

『了解。…おい根本』

『なっ…なんだ!?!』

『本来ならお前には八つ裂きにした後に彼女との縁を切らせ、さらには女装趣味がある変態野郎として写真集を用意するという極刑がとられるが』

『俺に死ねと言っのか!?!』

『…Fクラスとの試召戦争を受けるならば、温情をかけてやらんこともない』

『する!するから、それは勘弁してくれ!!--』

「よし、今の発言はちゃんと録画できてるな?ムツツリーニ」

『…問題ない』

これで使者としての役割は成功したな。

【根本好きな読者の皆様に怒られないといいなー(汗)まあ、これを気に良い代表になるかも?しれませんが。】

なんか電波が混じったが気にしない方向で。

「というわけで、後は異端審問会の好きにしていーぞ」

『…今伝えた』

『ふむ、では温情だ。貴様が代表をやっている、このクラスの皆に
問うことにしよう』

『なっ!?!おま、それは!?!』

『訊こう、Bクラスの諸君!?!今自分の保身のために君たちを売っ
たこの男に、
どのような判決を望む!?!』

いや、元はと言えばお前等が嫉妬して襲い掛かったせいなんだけど
な。

『根本勝手なことしてんじゃねえぞコラ!?!』

『前から気にいらなかったんだよこの野郎!?!』

『釘ならあるよ?いるかい?』

『クラスの仲間はそんな雑に扱うものではないし、むやみやたらに
売ることは許されないんだ!?!』

さりげなく責任を押し付けているにも関わらず、Bクラスの連中は
それをスルーして根本にブーイングの嵐。

というか、Bクラスにはチャージマンがいるのか。

『では、判決。極刑』

『『『『異義なし』』』』

『ぎゃああああああっ!!!?!?』

根本の叫び声が聞こえたかと思つたら、異端審問会の連中のフードで画面が見えなくなつてしまった。女装映像は多分撮ることになるだろう。

「だ、大丈夫かな（汗）」

「どうだろう?。」

「さて、後は楽に倒せそうですね」

「喧嘩に参加すればよかった」

つぐみと明久は青ざめながら、苦笑いで言い、晃希は笑顔で言うところの場で思ったことは。

晃希にだけは逆らうまいと。

そして、根本はこの後一ヶ月入院することになり、その間に女装映像と写真によって弱みを握られ、

Cクラスの小山とは別れることとなるのであった。

第8話Dクラスとの戦後対談とBクラスでの出来事（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第9話Bクラス戦じゃなくてAクラス戦へ(前書き)

光閻雪さま、 御根通久さま、 蒼さま、 ヒョウガさま、

まあさま、 FOOLさま!

感想ありがとうございます!!

第9話 Bクラス戦じゃなくてAクラス戦へ

結論からいえば、根本がいないBクラスは楽に勝てた。

それに、根本は病院送りにされてたのでBクラス次席の奴が臨時の代表をやっていたんだが、

ムツリーニが『Fクラスの最終目標はAクラスの設備でありBクラスの設備を取る気はない』という情報を流したところ

「ゴミ掃除してくれた、Fクラスには恩があるし」

と言っであっさり負けてくれたというのもある。

流石根本、クラスメイトからゴミ扱いされている。

明久への扱いとはまるっきり蔑み方のベクトルが逆だ、これが根本クオリティ？。

そんなわけでAクラス戦に移ることになりました。

翌朝、Fクラスの教室では、明久たちFクラスメンバーが、最終目標である、対Aクラス戦の作戦説明を受けていた。

「まずはみんなに礼が言いたい」

教壇の上で、教卓に手をついた雄二は、開口一番にそう言い始めた。

「周りの連中には不可能だと言われていたにも関わらずここまでこられたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

壇上にいる雄二はいつもと感じが違っており、素直に礼を言った。

「ど、どうしたのさ？ 雄二。らしくないよ」

明久は信じられないものを見た、という面もちで、雄二に声をかけた。

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

雄二の言葉を聞いたFクラスメンバーは嬉しそうにしたり、照れくさそうにしていた。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師ども突きつけるんだ！」

『おおーっ！』

『そっだーっ！』

『勉強だけじゃねえんだーっ！』

最後の勝負の前に、皆の気持ちは一つになっている。そんな感じがした。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着つけたいと考えている」

その言葉にクラスの皆がかなり驚いているようで教室中にざわめきが広がった。

『どいつことだ?』

『誰と誰が一騎討ちをするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ。それを今から説明する」

雄二がバンバン、と机を叩いて皆を静まらせる。

「やるのは当然、俺と翔子だ」

Aクラス代表の霧島翔子さんとFクラス代表の坂本雄二。クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎討ちは当然と言えば当然だろうが、つぐみ達以外のFクラスメンバーは驚いた。

「バカの雄二が勝てるわけなあっ!?!」

カッターが明久の頬をかすめる。

「次は耳だ」

「坂本君!カッターを投げないの、危ないでしょ!」

「わかった、わかったから、そう睨むな」

カッターを投げた雄二のつぐみは抗議すると、雄二はあっさり降参する。

「アキくんもそういう事を言ったら、ダメだよ？」

「うっ、ごめん」

「うん、分かってくれたなら、いいんだよ」

つぐみが明久も叱ると明久は落ち込みながら言う。

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともによりあえば勝ち目はないかもしれない」

そう言うと雄二は周りを見ると

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？ まともによりあえば俺たちに勝ち目はなかった」

そこで雄二は言葉を区切る。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

最初は勝てないと思っていた試召戦争を勝利に導いた雄二だから言える言葉だ。

「俺を信じてほしい。過去に神童と呼ばれていた、この俺の力。今こそみんなに見せよう！」

『おおおーっ！！』

もはや雄二の勝利は核心されているものだと断言されているような感じだ。

「さて、具体的な方法だが、一騎討ちではフィールドを限定する」

「フィールドを？ 教科は何にするの？」

「日本史だ」

つぐみは小首を傾げて雄二に質問するとニヤリと笑って雄二は答える。

「ただし、内容は限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あり、召喚獣勝負ではなく純粋な点数勝負とする」

「その条件だと、満点が前提となって、ミスした方が負けるといった注意力勝負になりますよ」

雄二の言葉に晃希が反応して言う。

「……博打」

「そつだよな。それに同点だと延長戦になるだろう？」

透は由香里の呟きを引き継いで雄二に聞いた。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などと言うものか」

雄二はニヤリと野性味あふれる笑みで言う。

「なら、霧島の注意力を乱す何かがあるんえ？」

「いや、アイツなら集中していなくても、小学生レベルのテスト程度なら何の問題もないだろう」

深紅の質問に雄二は即座に否定する。

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろタネを明かしても良いじゃろっ？」

秀吉の言葉に、他のクラスメイトもうなずいてみせる。

「おっと、すまんすまん。前置きが長くなってしまったな。

俺がこのやり方を採用した理由はただ一つ。

ある問題が出れば、アイツは確実に間違えると知っているからだ」

「ある問題？」

真剣な面持ちで話す雄二を見てつぐみは少し違和感を感じていた。どこか、不安定な感情が見え隠れしているような、そんな感じが。

「その問題は……『大化の改新』」

「誰が何をしたか説明しろとか、そっいうの？」

智美は薬品を作りながら聞いた。よく爆発しないものだ。

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。単純な問題だ。」

「単純というと……何年に起きた、とかかのう？」

「おっ。ビンゴだ秀吉。お前に言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

その言葉に皆は半信半疑だ。当たり前だろう、学園の才女と言われる彼女がそれを間違えるだろうか。

「大化の改新が起きたのは645年。こんな問題、明久ですら間違えない」

「うっ」

「アキくん？」

明久が机に突っ伏しているのを見てつぐみは思った。間違えて覚えていたんだなど。

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺たちの勝ちだ。」

晴れてこの教室からおさらばできるって寸法だ」

そう雄二が断言すると瑞希が手をあげる。

「あの、坂本君」

「ん？ なんだ姫路」

「その、霧島さんとは……仲が良いんですか？」

クラス中が思っていた疑問を、瑞希が尋ねた。

「ああ、アイツとは幼なじみだ」

そう、雄二が言った瞬間に明久が言おうとした瞬間につぐみの視線を感じて止めざるおえなかった。
そして代わりに近藤が

「総員！ 狙ええっ！」

「な！？ なぜ近藤の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ、男の敵めっ！ Aクラスの前に、キサマを殺す！」

「俺が一体何をしたと?!」

「問答無用！ 待つんだ、須川。靴下はまだ早い。それは押さえつけたあとで口におしこむものだ」

「了解です、隊長」

あの時もそうだが、今も素早い対応でみんなの動きがあつのは凄いものだ。

ちなみにつぐみだけじゃなくて美波と瑞希も明久を見ていた。

「し、視線が痛い！」

明久はどうしてこんなことになったのか、かなり悩んだ。

「まあまあ。落ち着くんじや皆の衆。」

パンパンと手を叩いて秀吉が場を取り持つ。

「とにかく、俺と翔子は幼なじみだ。で、小さい頃に間違えて嘘を教えてしまった」

そう雄二の横顔にはどこかかげりが見えるような気がした。そして心もどこか落ち着きがないような感じだ。

「アイツは一度教えたことは絶対忘れない。だからこそ、今、学年トップの座にいる。」

しかし、今回はそれが仇となるわけだが、つぐみの気分が乗らない。

「俺はそこを利用して勝つ。そうすれば俺たちの机は」

雄二はここで一息おいて

『システムデスクだ！』

そう宣言した。

Fクラスのモチベーションがグンと上がるがつぐみは黙って見ていた。

第9話 Bクラス戦じゃなくてAクラス戦へ（後書き）

感想と評価をお待ちしております。

第10話Aクラスでの宣戦布告（前書き）

光闇雪さま、 ヒョウガさま、 F O O Lさま、 蒼さま、
ザクさま！

感想ありがとうございます！

第10話 Aクラスでの宣戦布告

「一騎討ち？」

「そのとおりだ。Fクラスは、試召戦争として、Aクラス代表に一騎討ちを申し込む」

雄二は、明久とつぐみと瑞希と秀吉とムッツリーニの六人でAクラスを訪問。

宣戦を布告した。

「……何を企んでいるのかしら？」

そう訊ねるのは交渉役として出てきた木下優子。彼女は訝しげに雄二たちを見てる。

しかし、それに動ずることなく、雄二は答えた。

「Fクラスの勝利。それ以外に狙うものなど無い」

優子はスキを探すかのように目を細める。

「面倒な試召戦争を、簡単お手軽に済ませられるのはありがたいけどね」

「だからと言って、わざわざリスクを背負う必要はないかな」

緊張感あふれる言葉のやりとり。

「賢明な判断だ」

「でしょ？・・・だから・・・」

優子は雄二を見ていたが、つぐみを見て固まる。

「？」

「可愛い」

「は？」

「へ？」

優子の言葉にみんな混乱した、後、優子はずぐみを抱きしめた。

「可愛いー！！お持ち帰りしたいー！！」

「わああ！！！？離してよー！！」

「……………！（パシャパシャ）」

「ムツツリーニ！？写真撮ってる場合じゃないよー！！」

ジタバタと小柄な体をよじって優子から離れようとするが、なかなか抜け出せない。

「お、おい（汗）」

「え？あー、一騎討ちなら、構わないよ。」

「あたしを抱っこしたまま会話しないでよー!!」

「そ、そうか」

「無視なの！？人の話を聞いてー!!」

「代表が負けるわけないし。それにこのちっこいこに免じて受けてあげる」

「あたし、ちっこくないよ!？」

つぐみの話を聞かずに話が進んでいる。

「そうね、お互い7人選んで、7対7で行きましょう。」

「わかった」

「や、やっと離れることができた(汗)」

「大丈夫？」

「うん(汗)」

つぐみは優子から離れると疲れていた。明久は心配そうに聞いて尋ねるとつぐみは頷いた。

「ただし、提案だ。科目の選択件はもらっぞ」

「全部は駄目だから、七回中四回は選ばせてあげる」

「いいだろう」

「交渉成立ね」

優子は笑顔で言うとカメラを取り出してつぐみの写真を撮る。

「な、なんでー!!?」

「あきらかに好かれてるね」

「ウチ、兩宮が可哀想に思えてきたわ」

「私ものです(汗)」

写真を撮られて困惑するつぐみに同情する美波達がいた。

「……それに条件をくわえる」

「…翔子か」

「あ、代表。」

「優子、後でわたしにも写真をちょうだい」

「わかったわ」

このAクラスは普通ではないのだろうか。
明久は心の中でそう思ったそうだ。

「そ、それで条件とは?」

「……負けた方が勝った方の言う事をなんでも聞く」

そう翔子が言うと雄二は頷いて

「交渉は成立だ。教室に戻るぞ」

「あ、うん」

「ま、待ってよー!」

雄二達がAクラスの教室から出る中、つぐみは焦りながら追いかける。

ここでつぐみファンクラブができたとか。

第10話 Aクラスでの宣戦布告（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第11話Aクラスとの一騎討ち（前書き）

ヒヨウガさま、 光闇雪さま、 まあさま、 蒼さま！

感想ありがとうございます！

アレックスさま、ご指摘ありがとうございます、これを糧に精進したいと思います！

第11話 Aクラスとの一騎討ち

「両名とも準備は良いですか？」

高橋先生は立ち会いし、眼鏡を押さえて代表達に聞いた。

「ああ」

「……問題ない」

会場はAクラスだ。どこか緊張した空気が満ちる。

「じゃあ、アタシから行くよ」

「頼んだぞ、島田」

「じゃあ、ウチが行ってくるね」

あつちは秀吉の姉の優子が進み出て、こっちは美波が軽快に歩いて行く。

今、まさにエリートとバカの対決が繰り広げられという感じだ。

「それでは、一人目の方、始めてください」

「さっさと終わらせましょう。どうせ、勝てっこないんだから」

「やってみないわからないでしょ!」

優子の挑発に乗る美波が言つと高橋先生が開始宣言する。

「^{サモン}試獣召喚！」

魔方陣が現れて軍服姿のデフォルメした美波が現れて頭上に点数は表示される。

【Fクラス 島田美波 数学 182点 VS Aクラス 木下優子 数学 ???】

「ウチは数学だったら、Bクラスくらいにあるんだから！」

「あら、凄いですのね。^{サモン}試獣召喚」

美波の得意げな様子に優子は慌てた様子もせず冷静に言い、召喚する。

西洋鎧に武器はランスで容姿はデフォルメした優子が現れて一撃で美波を倒した

【Fクラス 島田美波 数学 000点 VS 木下優子 数学 376点】

「そんな!？」

「あたしも数学は強いの」

美波は自分が負けたことに落ち込んで言つと優子はなんでもなさそうに言つ。

「勝者、Aクラス、木下優子。」

「ごめんね、皆」

「仕方ないよ。相手の各が違っし」

「もし、次があつたら、頑張ればいいよ！」

「ありがとう、雨宮」

美波が戻ってくるると皆して励まして、つぐみも美波を必死に励ます。
これであっちが1勝0敗。

「次の人出てください」

「私が行きます。Aクラス佐藤美穂です」

眼鏡をかけた少女が頭を下げて言う。

「次は明久、頼む」

「わかったよ」

「え、あたしが行くよ！」

「わ、わたしも！」

「雨宮も瑞希も落ち着いてくれ、まだ、出すわけにはいかないんだ」

「でも」

「大丈夫だよ」

明久はつぐみに微笑んで言う。

「雨宮。幼なじみを信じてやれ」

「……うん」

「じゃあ、行ってくるよ」

明久が出ると相手は眼鏡をかけた少女は明久を警戒しながら見る。

「いくよ。試獣^{サモ}召喚！」

「負けません。試獣^{サモ}召喚！」

【Fクラス 吉井明久 物理 143点 VS Aクラス 佐藤美穂 物理 389点】

明久の点数に全員が驚いた。どうしてこんなに点数が高いのか？と。

「吉井君でしたか。よくぞ、ここまで高めましたね」

「つぐみと神埼さんのおかげだよ」

それを聞いてつぐみは嬉しそうに笑い、深紅はニツと笑ったのは言うまでもない。

美波と瑞希が羨ましそうにしていたのは、見てない振りです。

「アキ君」

「……」

雄二が近寄るとワシャワシャとつぐみの頭を撫でる。

「ふにゃ あああ!!!?!?」

「おー、撫で心地最高だな」

「それってちつちゃいって言いたいの!?!?」

「丁度いい場所にあるからな」

「あたし、ちつちゃくないよ!!!」

小柄な体で必死に抵抗するが、雄二は止めずにもっと撫でる速さをあげる。

「いや、ちつこいだろ」

「ちつこくないやい!」

「その辺でやめんか」

「深紅ちゃん」

「嫌がることはしたらあかんえ」

「雨宮の姉貴みただな」

「あー、それええな。」

「うーん、深紅みたいなお姉さんなら、ほしいかも」

つぐみと深紅はにこやかに話合い、雄二はそれを見て安心して、明久を見る。

「でやあああ！！！」

「はああああ！！！」

明久の召喚獣の武器の木刀と相手の召喚獣の槍が火花を散らす。

お互いの点数は削られて行くが、お互い一步も引かない様子だ。

【Fクラス 吉井明久 物理 120点 VS Aクラス 佐藤美穂 物理 242点】

こっちの方がかなり削られていつているようだが、明久の目には強い光がある。

「まだまだ！」

佐藤さんの召喚獣がこっちに向かってくるが足払いしてその上に追いつ打ちの打撃を与えるが、相手も負けていられないのか明久の召喚獣に蹴りをいれると下がる。

そして、お互いの均衡が続くなか、明久の召喚獣の点数と相手の召

喚獣の点数があとわずかなくらいになる。
ここでケリをつけなければならぬ。

「これで終わらせる！」

「こちらが勝ちます！」

両方の召喚獣がツツコム。これで勝敗が決まった。

「はあああつ！！！！」

【Fクラス 吉井明久 物理 0点 VS Aクラス 佐藤美穂
物理 1点】

「勝者、Aクラス」

なかなかきわどい戦いだったが、お互い勝負をしたのか晴れやかだった。

「ごめん、まけちゃった」

「いいの！アキ君は頑張ったよ！」

「そうやで、負けても次に誰かが勝てばええんやし」

「そつだぞ」

「みんな」

「ね？」

「ええ」

「はい！」

「頑張りましたね」

「まあまあやるじゃないか」

みんな明久が負けたのに笑顔で出迎える。Fクラスが楽しいのは彼らの優しさもあるからだろう。

第11話Aクラスとの一騎討ち（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第12話Aクラスとの戦い2（前書き）

ヒヨウガさま、 リザクさま、 光閻雪さま、 まあさま、 G
AUさま、 FOOLさま、 蒼さま、 まいくさま。

感想ありがとうございます！

秋雨さま、 アドバイスありがとうございます

第12話 Aクラスとの戦い2

「では次の方、どうぞ」

「……………（スック）」

ムツツリー二がここで立ちあがる。

相手は二勝しており、後二点取られるとこちらの負けだ、負けるわけにはいかない。

「じゃ、僕が行こうかな」

Aクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出てきた。

誰もが誰だろうと考えていると女の子が答える。

「一年の終わりに転入してきた、工藤愛子です。よろしくね」

「科目は何しますか？」

「……………保健体育」

高橋先生の問いにムツツリー二が答える。

この科目はムツツリー二の最強の武器となっている。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

愛子は余裕そうにムツツリー二に話しかける。

「そ、そうです！ 永遠にそんな必要ありません！」

明久が場を壊す発言をしながら言うたあつけにとられていた、美波と瑞希も拒否する。

「アキくんらしいといつかかなんといつか」

「てか、島田に姫路！ 明久がそれはそれで死ぬほど悲しいという顔をしているぞ」

明久が不憫に思える出来事だった。

「そろそろ召喚を開始してください」

「ムツツリー二、大丈夫？」

「……な、なんのこれしき！」

高橋先生の声を聞きながら明久が聞くと康太はなんとか立ちあがる。

「はい。試獣^{サモン}召喚」

「……………試獣^{サモン}召喚」

二人に似た召喚獣が呼び声により、武器を持って召喚される。

ムツツリー二の召喚獣の武器は小太刀の二刀流。一方愛子の方は……

「巨大な斧！？」

「見るからに破壊力ありそうやね」

「腕輪もしてますね。腕輪の能力はしりませんが、用心した方がいいかもしれません」

「だろうな」

全員が愛子の武器と腕輪に注目する。

「実戦派と理論派、どっちが強いを見せてあげるよ」

愛子が艶ぼく笑いかけるのと同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光をまとわせ、ありえないスピードで康太の召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君」

そして豪腕で斧を振るう。これはよけきれないか？

「土屋くん!」

斧が康太の召喚獣を両断するかと

「……………加速」

思った直後、康太の腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレた。

「……………え？」

相手の戸惑う顔。でも、深紅はワクワクしながらそれを見ていた。つぐみ達にはなにが起こったのか、わからないままだ。

「……………加速、終了」

ボソリと康太が呟くと一呼吸おいて愛子の召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

【Fクラス 土屋康太 保健体育 572点 VS Aクラス 工藤愛子 保健体育 446点】

この戦いは康太の勝ちで決まった。

「そ、そんな……………！この、僕が……………！」

愛子は膝をついている、相当ショックだったようだ。

「これで二対一だね」

「ああ、だが。油断はできない」

「まだ、他の一騎討ちがあるもんね」

つぐみはこの結果をFクラスの勝利にもっていくにはどうしたらいいかと悩んでいた。

「次の方は誰ですか？」

「僕が行こう」

「なら、こっちへ。わっちは行くえ」

あちらはAクラスの学年次席だ。姫路がいたら、三席にいたほどの実力者。

「頼んだぞ、神埼」

「ほいほい」

「（心配だ（汗））」

楽しそうに進んで行く深紅に不安になるFクラスの面々。

「科目は何にしますか？」

「総合科目で」

「ちょっと！」

「大丈夫だよ」

「つぐみ？」

「なんでかな、深紅ちゃんなら。勝てると思えるの（ニコッ）」

そう言ったつぐみの笑顔に撃沈する輩が倒れる。
ちなみに、無自覚だ。

「明久」

「言わないで、わかってる」

明久と雄二もクリーンヒットしたもよう。

「?????」

「雨宮さんは可愛いですね」

「妹になんね？」

「うにゃああ!!?、なんで撫でるのー!!」

晃希と透に頭を撫でられて困惑するつぐみがいた。

「では、始め！」

「サモン試獣召喚！」

「サモン試獣召喚や！」

お互いの召喚獣が魔方陣から出てくる。

久保の召喚獣は戦士で武器は戦斧せんびだ。深紅の召喚獣は赤いドレスに歪な剣を持っている。

「さあ、やろつかえ」

「……っ！」

彼女の目が鋭くなる。それに久保君はおじけづくこともなく、召喚

獣を動かす。

深紅の召喚獣は明久より、機敏な動きで相手を翻弄し、まるで踊るような戦いかただ。

まるで意志があるかのような感じに見える。

「行くよ？」

「くっ！」

彼女の召喚獣が剣を振り回すと【花散る天幕】ロザ・イクトウスを使用した。久保の召喚獣は一撃で撃破されたのだ。

「なかなか、楽しめたえ」

「君は強いな」

【Fクラス 神埼深紅 総合科目 5478点 VS Aクラス
久保利光 総合科目 3997点】

「勝者、Fクラス」

「ただいま」

『お帰りー！』

深紅は笑顔で戻るとつぐみ達が駆け寄る。

「これで同点か」

「次は誰を出す気なの？」

明久の問いに雄二は考え込む。そう、まだ二戦残っているのだ。

第12話Aクラスとの戦い2（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第13話Aクラスとの対決3（改）（前書き）

光闇雪さま、 まあさま、 暁 巧さま、 蒼さま、 まいくさ
ま、 ヒヨウガさま、 リザクさま、 秋雨さま！

感想ありがとうございます！！

第13話 Aクラスとの対決3 (改)

「次の人は誰ですか？」

「あたしが行くよ！」

「なら、俺が行く」

Fクラスからはつぐみが出ると長身の男の子が出てきた。

「科目は何にしますか？」

「現国でお願いします」

つぐみは科目を選択した。

「……小学生？」

「あたしそこまで、ちっこくないよー!!」

小柄な体で低身長で童顔を見たら誰でもそう思うだろう。

「では、始めてください」

「^{サモン}試獣召喚！」

「はい、^{サモン}試獣召喚」

お互いの魔方阵から召喚獣が出現する。つぐみの召喚獣はDクラス

戦で登場した姿と同じだ。
相手の召喚獣は投影が得意な、アーチャーと似ている。

【Fクラス 雨宮つぐみ 現国 201点 VS Aクラス 武藤
雅紀 現国 220点】

「へえ、意外と高いね、ちびっこ」

「だから、ちっこい言うな！」

不敵な笑みで雅紀は言うつつぐみはツッコミをいれる。

「でも、点数が高くて操作性はどうかかな？」

「それはどちらにでも言えることですよ！」

そうつぐみと雅紀が言いあうと一斉に召喚獣を動かした。

カキン！

お互いの召喚獣の武器が反響しあう。Aクラスは特別授業がある為
熟練率が高い

だが、つぐみは明久や深紅みたいに操作性が高いわけではない為に
こちらが劣勢だ。

「あたしは、負けられないんだから！」

「それは俺にも言えるね。負けるつもりはないよ！」

相手の点数が減り、特殊技を発動した。

「行くよ。壊れた幻想！」
ノーブルファンタズム

「くっ！」

つぐみは交わすがギリギリだった。

「つぐみー！」

「……ヤバいな」

「大丈夫やて。わっち等はつぐみを信じて待つてらええんよ」

「でも！あっちの方が有利ばいし」

「つぐみはまだ、操作性が慣れてへんのや。しゃーないやろ」

「あっ」

「だけど、つぐみの頑張りがこの勝負の鍵や」

深紅はニカツと笑って明久に言うつと再び戦いを見る。

ただいまの彼等の点数はつぐみは134点で相手は133点だ。

やはり部が悪いのか？と思った時、つぐみはキャロットボタンを剣にして使ったのだ。

「可変式か！？」

「行くよ！攻式5の型五月雨！」

攻撃の瞬間に持ち手に変えて軌道とタイミングをずらす。
この攻撃には誰もかわせない攻撃だった為、相手の点数を大きく削
れた。

「凄い！」

「やるやん」

「強いな」

「……（パチパチ）」

今のでこちらの点数より、相手の点数は下回った。
こちらの点数は134点で相手は34点くらいになっていた。

「やるな」

「そつちこそ！」

二人は一旦離れて対峙するが、二人には笑みがあった。

「次で」

「最後だ！」

二人の剣激がぶつかり合う。

これには全員緊張して固唾をのんで見守っている。
剣激が止む。それは勝敗が決まったらしい。

「勝者、Fクラス！」

その瞬間歓声が上がった。

「勝てたよ！みんな」

笑顔でつぐみは戻ると言うと美波と瑞希も喜んでいた。

雄二も明久も深紅も康太も秀吉もFクラスみんなが喜んでいた。

雅紀はフツと笑ってAクラスに戻ると翔子と優子がねぎらっていた。こちらの良い勝負ができたからだろうか。

「次の人は誰ですか？」

「ワシが行こう！」

「秀吉君、頑張って」

「う、うむっ」

Fクラスの方から6人目は秀吉が出ると相手の6人目は女の子が出たが、

こちらは150cmのくらいだ。

「綺麗で身長が高い」

「羨ましいのか？」

「とっぜん！」

もはや苦笑いするしかない雄二だった。

「秀吉君だっけ、あっしと出会ったことを後悔するぜい？」

「なぜ、江戸っ子口調なのじゃ!？」

ここにて秀吉がツッコミになった。だが、誰もが思うことだろう。

「科目は何にしますか?」

「英語で」

高橋先生に聞かれて女の子が選択する。

「では、始めてください」

「行くぞい! 試獣^{サモン}召喚」

「行くよ、試獣^{サモン}召喚」

【Fクラス 木下秀吉 英語 60点 VS Aクラス 狐邑緋美
英語 232点】

二人が召喚すると魔方陣からお互いの召喚獣が出現する。そして頭上に点数が表示された。

「うわ!？」

「点数高い！」

さすがAクラス、点数も高い。これは一瞬でケリがついてしまうのか。

「負けるわけにはいかんのじゃ！」

「あっしもそうだよ」

一斉に動きだすお互いの召喚獣。得意の鉤爪で秀吉を劣勢させる。秀吉の召喚獣も薙刀で応戦するが押し切られてしまい、こちらが負けた。

「すまぬ。負けてしまったのじゃ」

「相手が強かったし、操作もあっちが上だからね」

「だが、よく頑張った」

「そ、そうかの？」

「うん！負けてしまったけど、秀吉君は強くなれると思うよ？」

「あ。ありがとうなのじゃ」

秀吉は涙ぐみながら言う。鼻血を噴出するFクラス男子数名が。こんな終わりかたもあり、か？

今の戦果結果 3対3だ。後、一勝すればこちらの勝ちになる。

「最後の一人どうぞ」

「……はい」

Aクラスからは最強の敵、霧島翔子が出る、こちらは

「俺の出番だな」

Fクラス代表の坂本雄二だ。

「科目はどうしますか?」

「科目は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ!」

ざわ……!」

雄二の宣言に、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだつて?』

『しかも小学生レベル。満点確實じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

雄二のねらいが当ればこちらは確実に勝てる。当然なかったら、こちらが負けるだけ。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。少しこのまま待ってください」

ノートパソコンを閉じて、高橋先生は教室を出て行く。

「雄二。あとは任せたよ」

「負けたらゆるさへんえ」

「ぜったい勝つてよね！」

「ああ、任された。」

雄二はニヤツと笑って言う。とまたつぐみの頭を撫でる。

「またなのー!!!？」

「撫でごこちがいいなー」

「やめてよー!!!」

つぐみは雄二から逃れようと身をよじる。

本当に勝てるのか?.....前途多難かもしれない。

「.....(ビッ)」

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「.....(フッ)」

康太は口の端をあげて元の場所に戻る。

「坂本君、勉強は大丈夫？」

「ああ、おかげさまで満点はかるく取れるだろう」

「よかった」

つぐみは笑顔で言うと再び雄二に撫でられた。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

高橋先生が戻ってきて、雄二達は教室を出る

第13話 Aクラスとの対決3 (改) (後書き)

またまた、訂正完了!!

第14話最後の戦いとその後（前書き）

蒼さま、 ヒヨウガさま、 光闇雪さま、 FOOIさま、 まあさま、
まいくさま、 秋雨さま

感想ありがとうございます！

第14話最後の戦いとその後

『問題を配ります。制限時間は五十分、満点は100点です』

画面の向こうで日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置いた。

『不正行為等は即失格になります。いいですね？』

『……はい』

『わかっているさ』

二人の手によって問題用紙が表にされる。

「吉井君、いよいよですね」

「そうだね。いよいよだね」

「大丈夫かな」

「勉強させたんなら、大丈夫やて」

「というか、代表には頑張ってもらっしかないでしょう」

つぐみ達は試験をじっと見る。

「これで、あの問題がなかったら」

「集中力や注意力に劣る以上、延長戦で負けるだろうね」

「うん、もし出ていたら」

「もし出ていたら、あたし達の勝ちだね」

誰もが固唾をのんで見守る中、ディスプレイに問題が映し出される。

次の（ ）に正しい年号を記入しなさい

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

「これなら出ていそうだね」

「うん、僕でもわかるよ」

「わっちもそう思うわ」

（ ）年 鎌倉幕府設立

（ ）年 大化の改新

「あ………！」

「出てたよ！」

「やった！」

「よ、吉井君、つぐみちゃん！」

「うん！」

「これでわっちらの卓袱台が」

『システムデスクに！』

揃ったFクラス全員の言葉。

「最下層に位置した僕等の、歴史的勝利というわけですか」

『うおおおおっ！！』

教室を揺るがす歓喜の音が響く

「騒がしい奴等だな」

「カリカリ」

「由香里ちゃん、Fクラスのみんなを書いているの？」

「コクン」

由香里はスケッチブックにFクラスのみんなの絵を描いていた。それをつぐみは上手だなーと眺めていた。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》 VS 《Fクラス 坂本雄二
100点》

この結果を見てFクラス全員は喜び、Aクラス全員は落ち込んだ。

「や、やったー!!!」

「おや、本当に勝てましたね」

「冷静だなー」

「……みんな…嬉しそう」

「そっだね」

「わっちらもいつかはああやって喜べるとええけどな」

ぽつりと深紅は呟いたが、歓喜の声に邪魔されて届かなかった。いや、聞かすつもりもないのだろう。

「3対4でFクラスの勝利です」

雄二と翔子と高橋先生が戻ってくるとそう宣言した。

「さて、Fクラスの諸君。まずはAクラス戦、おめでとう!」

「あ、西村先生!」

「確かに勝負に勝てはしたが、勉強をないがしろにするべきではないのでな。

俺がお前等の担任になることになった」

「福原先生は?」

「ああ、ナレーターだ」

『えー!!!?』

西村先生がなんでもないことのようにシレッと云うがFクラス全員は驚きながら叫んだ。

「補習もしてやるから、覚悟しとけよ?」

そう西村先生が言う当然クラスのみんなが泣いたのは言うまでもない。

「なら、僕はこの贈り物をつかって実験でもしましょうか」

「わっちは模造刀やね」

「……この鉛筆…お気に入り」

「俺は暇だし、贈り物の道着をつかってトレーニングすっかな」

「あんな重いものできるのー!!!??」

「ツッコミがさえてるわね」

晃希や深紅や由香里や透はそれぞれ言っていると聞いていた、つぐみがツッコミをいれていた。

「……」

「……翔子」

「……負けは負けだから」

離れた場所にいる雄二と翔子を見てつぐみは近寄った。

「ね、坂本君。霧島さんとデートしてきたら？」

「な！いきなりなんでそうなんだ!？」

「だって、今の坂本君。辛そうに見えるよ？」

「……!」

つぐみの言葉に雄二は視線をそらした。

「それに、逃げてもいいことないよ？」

「だが」

「何を隠してるかは聞かないよ。でも、時間は今しかないんだよ？」

「……雨宮」

「今を逃したら、もっと取り返しのつかない何かが起こるかもしれない」

つぐみは雄二をまっすぐ見つめてキツパリと言う。

「今起きなくても、いつか、ね」

「……」

「あたしが言いたいのは今できることをした方が霧島さんの為になるよって言いたいの」

つぐみはニッコリと笑って言うと雄二は苦笑いして翔子を見る。

「……何？」

「霧島さんに坂本君が言いたいことがあるんだって」

「お、おい！」

「ほら！」

「あー、俺と付き合え。翔子」

『なにー！ー！』

「みんな！邪魔はダメだよ？」

FFF団が飛び出そうとするにつぐみは怒って言うとFFF団は止まった。

「ね、ねえ。アキ、ラペデイスでクレープを食べに行かない？」

「え？それって週末のはずじゃ」

「ダメです！吉井君は私と映画を見に行くんです！」

「ええっ！？姫路さん、それは話題にすら上がってないよ!？」

明久は美波と瑞希に腕を掴まれて困惑していた。それをつぐみは眺めていた。

「……………」

「……………つぐみ？」

「え、あ？何、深紅ちゃん」

「帰ろうや。」

「うん」

明久が美波と瑞希に引っ張られて行くのを眺めてつぐみは頷いた。晃希と透は黙ってその様子を見ていた。

「……………智美……………」

「そうね。辛いように見えるわね」

由香里と智美もつぐみの様子を眺めて何かを考えていた。

第14話最後の戦いとその後（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

アンケートの結果、この作品は新作として独立して書きたいと思
います

アンケートにご協力いただきありがとうございました

第15話一目ぼれ！（前書き）

蒼さま、ヒヨウガさま、秋雨さま、光闇雪さま、リザクさま、まい
くさま、FOOLさま

感想ありがとうございます！

ここから、ゲストキャラのバカとテストと召喚獣 土佐の風雲児の
主人公、中岡心が登場します

第15話 一目ぼれ！

とある日曜日の日、由香里はスケッチブックを持って公園に来た。そこで、楽しそうにしてる人物達の絵を描く。

「…………カキカキ」

贈り物の鉛筆を使い、丁寧にスケッチブックに描く。
この時の由香里は周りの音なんか気にしないのだ。

「…………猫」

ときどき通りかかる犬や猫も彼女が描いていく。
人物画や風景画など、さまざまな分野をスケッチブックにおさめていることがある。

絵を描く理由は好きだからである。もちろん、写真も好きだが。
一番好きなことは絵を描くことなのだ。

しばらく絵を描いていると電話がなり、それに出ると親が今日は遅くなるから、早めに家に帰れという電話だった。
景色を見ると夕焼け空だった。

「…………晩御飯…………の買い物」

ぼつりとつぶやくと、公園を出る。この時スケッチブックと贈り物の鉛筆をちゃんと持っていたが、のちに落とすことになるとは思わなかったのだ。
ドカツ！

「……すみません」

「いえ、こちらこそ。すまんのう」

買い物をしているときに人とぶつかり、慌てて謝るとその人も謝る。この時にスケッチブックを落としていたのを気づかずに歩いて行くのだった。

???視点)

「あの子可愛いぜよ」

少女を見送った心は眩き、歩こうとするとスケッチブックに気づいた。

「ん?これは、もしかして、あの子のぜよ?」

そう眩くと急いで少女を捜す。
しばらく捜していると少女がキョロキョロと周りを見ているのを見つけた。

「これ、おまんのじゃろ?」

「……?…あ…これ。」

スケッチブックを少女に差し出すと少女は大事そうに受け取るとフンワリと笑ってお礼を言つと心は胸が高鳴り、少し緊張しながら言った。

「ありがとう……とう」

「いや、渡せて良かったぜよ」

「うん。…本当に…ありがとう…これ…大切な…物だから…」

「親からの贈り物か？」

「……コクン。あ、名前。」

「わしか？」

「ん」

由香里は質問に頷いて言つと。

「わしは中岡心ぜよ。おまんは？」

「わたし……久蘭…由香里」

名前も可愛いぜよ！なかようなれたら、ええんじゃけど。

由香里視点)

身長180くらい・・・だろうか。ところどころ顔に傷跡もあるが。悪い人には……見えない。

「お礼…したい…」

「え！？ええよー！」

「……でも」

「なら、名前で呼んでほしいぜよ」

「……それだけ……で……いいの？」

「おん！」

「……わかった。……心君も……わたしを……名前で呼んで……いいよ？」

心君の笑顔は暖かくて太陽みたいで心が温かくなる気がした。

「ええんか!？」

「……うん」

「じゃあ、由香里ちゃ。その鉛筆も貰い物か？」

「……うん……優しい……人が……くれた」

ニッコリと笑って言うのと心君は視線をそらした。どうしたのかな？

心視点)

笑った顔も可愛いすぎじゃ！思わず視線をそらしてしまったぜよ。

「その、スケッチブックの中身見てもええか？」

「いい……よ」

「ありがとうぜよ……」

由香里ちゃんの絵はすべて上手で、プロ並じゃった。わしは絵とかよ
うわからんけど。

でも、この絵は上手じゃと本気で思ったぜよ。

「どんな絵を描くのが好きじゃ？」

「……人物画や…動物」

「なるほどのう」

由香里ちゃんは絵を描くのが好きなんじゃな。絵と表情をみればわか
るぜよ。

今度絵に挑戦してみようかのう。

由香里視点)

しばらく会話しているともう遅い時間だった。

「……そろそろ帰る」

「あ、立ち止まらせてすまんぜよ」

「……いい。楽しかった……し」

「わしもじゃ」

「……また…会えると…いい、ね」

由香里は微笑んで言うと街中を去って行く。

心視点)

楽しく会話して、わしは由香里ちゃと別れた。

帰りながら、わしは由香里ちゃの笑顔がわすれられなかったぜよ。胸の高鳴りも激しく、これは恋でもしちゃったのかもしれないぜよ。

明日、転校する学園で由香里ちゃと出会えたらいいんじゃないけど。

同じクラスじゃとなおいいかもしれん。

第15話一目ぼれ！（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

心を描いたけど、海の永帝さんに怒られないといいな（汗）

第16話オリエンテering! (前編) (前書き)

ヒヨウガさま、マロさま、蒼さま、光闇雪さま、秋雨さま、Le
innさま、まいくさま、海の永帝さま。

感想ありがとうございます！

第16話オリエンテーリング！（前編）

ここは学園長室

「…………ふむ」

机の上に載せた。キツネのフィーちゃん達のストラップと黒金の腕輪を見る。

「ちよいと遊んでやるかね」

不敵に笑って学園長は言う。

「あれ、坂本君。どうしたの？」

「何かあった？」

Aクラス設備の教室に入るとクラスメイトと雄二がプラスマディスプレイに張られているようだった。

「何かやるようだ」

「そうなの？」

「つぐみ、見える？」

「そんなにちつちゃくないよー！！」

明久の問いにつぐみは拗ねながら言う……が……見えない。

「……見えない」

「あはは……僕が見るよ」

「文月学園主催、豪華特典の商品争奪戦」

「オリエンテーリング大会だな」

明久が教える前に晃希と透が答える。

「アキくん！、これを見て」

「え？あ！これは！」

新作ゲーム商品引き換え券、学食食堂引き換え券の隣にキツネのフイーちゃん達のストラップが載っていた。

「これこれ！！」

「なんだ、そんなのが欲しいのか？」

「頭を撫でないでよー！！」

「頭を撫でるのが好きですね」

「雨宮の頭は撫でやすいな」

「あたしはちっこくないよー！！」

ジタバタと暴れるつぐみに雄二はなんでもなさそうに言う。
ガラッ

「お前等座れ」

「あ、西村先生。」

「今日はオリエンテーリングの前に転校生を紹介する」

『先生！転校生は男ですか？女ですか？』

「男だ」

『ちっ！』

つぐみは自分の感情に正直に反応する、Fクラスのクラスメイトに苦笑いする。

「中岡、入れ」

「はいよ」

「…あ」

西村先生が言うと教室の扉をあけて入ってくる長身の男の子が入った。

その姿に由香里には見覚えがあった。

「自己紹介をしてくれるか？」

「はい。中岡心ぜよ。土佐から、来た。よろしゅうたのむぜよ」

「んじゃあ、席は。久蘭の隣だ」

「わかったぜよ」

心はそう言つと由香里の隣の席に座つた。

「昨日……ぶり」

「そうじゃな。また、会えて同じクラスになれて嬉しいぜよ」

「……わたしも……嬉しい」

お互いがニツコリと笑いあっている。

なぜかこの二人の間にはラブラブマークが飛んでそんな雰囲気だったのは気にしないでおこつ。

西村先生は出欠の確認をすると、プラズマディスプレイにチーム別けた紙を張る。

「僕は雄二と秀吉とか。」

「僕は透と智美のようですね」

「わたし……心君と……真田君」

「あたしは、新田君と武田君か」

「瑞希はウチと土屋ね」

「わっちは須川と伊達やね」

これでチームに分かれたが、つぐみは、新田の視線に困惑していた。なんだかつぐみがピンチな予感を感じていたとか。

「確認ができたなら、更衣室に行き体操服に着替えるよ？くれぐれも騒ぎを起こすな！」

確認が終わったFクラスの生徒はそれぞれ教室を出て行き、体操服に着替えると教室に戻る。

「よし。これが宝のありかをしめす問題だ。頑張って解くように」

『なんでやねん！』

Fクラス生徒全員が西村先生の言葉にツツコミをいれていた。

「頑張るじゃき」

「……心君…も。欲しい…ものある？」

「そ、それは内緒じゃ！」

「仲が良いでござるな」

まず、由香里チームが問題を解いて教室を出て行った。それぞれの得意科目を解いて出発したのである。

「えっと、あたし等も行こうか」

「ちっこくて可愛い」

「あたしちっこくないよ!?!」

「お前等、ここのでこつしてても仕方ないだろ?行くぞ」

「あ、うん!」

伊達君に言われてつぐみは新田に怯えながら、進んで行く。

「俺らも行くか」

「そうじゃな」

「そうだね」

明久と雄二と秀吉も歩き出した。

「わっちらも行くつうか」

「だね」

深紅のチームの動き出す。

第16話オリエンテーリング！（前編）（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

心と由香里が多く出しそうだ（苦笑）

でも、このカップルが好きなんだから、仕方ないよね！

明日内容を直すか、追加するかもしれません！

第17話オリエンテリング（後編）（前書き）

光闇雪さま、 蒼さま、 まいくさま、 L e i n nさま、 秋
雨さま、 ヒョウガさま

感想ありがとうございます！

第17話オリエンテーリング（後編）

「ねえ、二人の得意科目って何？」

「俺は生物ですね。他は須川や伊達と同じかと」

「俺は、歴史は得意な方だな」

「そっか、それを補いながら、頑張って行こう！」

『おー！』

つぐみが笑顔で言うと二人は笑って言う。

最初は不安だったが、知り合いからもらった、
特殊な電力スタングンがあるのでなんとかなると思ったようだ。

ところ変わって中庭。

「これなら、どうだ？」

「どれどれ？…凄いな。生物得意だってわかるよ」

「そ、そうか？」

新田はつぐみの笑顔にときめきながら言う。
ここにつぐみの魅力に落ちた輩が誕生した。

「俺もできたけど、どうする？」

「あ、見に行こうか」

「そうだな」

つぐみと新田と伊達の三人で宝の捜し場所に向かう。

「まず、一つ目！」

「何かな？」

「食べ物だといいが」

つぐみは伊達の一言に苦笑いしながら、カプセルを開ける。

「喫茶ラ・ペデイスのデザート券かあ」

「売っても金になるかな」

「友達か恋人と行くのもいいものだな」

「うーん、これは新田君にあげるよ」

「へ？俺？なんで」

「あたしが持つても意味ないし」

つぐみは新田の質問に苦笑いしながら言う。伊達はその様子を眺めて考えていた。

「とりあえず、もらっとくよ」

「そうして」

「さ、次に行くぞ？」

伊達に呼ばれて新田と急いで歩き出す。

そして、二か所目は

「二つ目は」

「はずれか」

「なかなか、当たらないな」

「一回目あたっただけでもマシだろ」

「確かに」

「そう言われるとそうかも」

二つ目ははずれたが、一回目は運が良かっただけと納得するとそれでもいい気がしてきた。

次に三か所目の場所に行くと

「樹の上か」

「じゃあ、取ってくるね。」

「俺が行こうか？」

「平気だよ」

つぐみは小柄な体をサイコネシスで浮かして樹の枝に挟まっているカプセルを取ると地面に降りる。

「こういつ時は便利だな」

「確かに」

「でも、あんまり使っなくなって言われてるかな」

「吉井にか？」

「うん」

新田の疑問につぐみはなんでもないように答えてカプセルをあける。

「あ、引き換え券だ」

「如月グランドパーク プレオープンチケット引換券」

「俺等独身には縁がないな」

「それを言っなよ」

「三人で行く？」

『へ？』

つぐみは引き換え券を見ながら二人に聞いたら、間のぬけた声が聞

こえる。

「えーと、雨宮は吉井と行きたいんじゃないの？」

「俺等に気がねなくていいんだぜ？」

「それは…行きたいよ。でも、いいの」

新田は伊達は顔を見合わせる。どちらも複雑なようだ。

誘われるのは嬉しいが、つぐみの事を考えるとそうはいかない気がする。

「それとも、新田君達、誘いたい人がいたりする？それなら、あたしはいいよ！」

「いや、そういうわけじゃないんだが」

「俺も、な」

「うーん、困ったなあ。あ！じゃあ、由香里と中岡君にプレゼントしよう！」

「あの二人の仲が進展して欲しいわけだ」

「うん！ダメかな？」

「いいんじゃないか？雨宮らしくて」

つぐみは新田達の言葉に嬉しそうに満足そうに笑った。

と、その時

オリエンテーリングの終わりをしめす鐘がなった。

「あ、終わったね」

「教室に戻るか」

「そうだな」

三人で教室に戻ると、深紅が心配そうに駆け寄る。
「なんだか、お姉さんみたいな感じだ。」

「そういえば、シークレットアイテムが手に入ったらしいで」

「そうなの？」

「……これ」

由香里が箱を持ってくる。

その中には如月グランドパーク プレオープンチケットと特殊な腕輪があった。

「えーと”翡翠の腕輪”」

「これはなんの作用があるんだ？」

「説明書には、時よ止まれと言えば相手の召喚獣の動きはとれないらしいな」

つぐみが腕輪を見ていると新田が説明書を読んで教えていた。

「へー、凄いね」

「アキ君は何手にいれたの？」

「フィーのストラップに食堂の券と黒金の腕輪だな」

「そうなんだ」

「さっき使ったら、全員分の腕輪が壊れた」

「え!？」

「なぜか、ワシだけ服が破れたのじゃ」

秀吉が隅で落ち込んでいるのはそれが原因かとおつぐみは苦笑いしながら思った。

「あ!中岡君」

「なぜよ?」

「これで由香里と楽しんできて」

「ええんか?」

「もちろん!」

「ありがとうせよ!」

如月グランパーク プレオープンチケットをつぐみは心に渡すと彼は嬉しそうに笑った。
本当に仲がいい二人だ。

「俺に渡らなくて良かった」

「坂本君、交際してるのに。その言い方はないよ」

「あー、そうか？てか、妙に照れくさくて行動に出せないんだよ」

「そういうもんなの？」

「そういうもん」

まだ納得できないようにつぐみは悩むのであった。

そういえば、他に腕輪があるのだろうか？

ふと、そんなことを思っていると、雄二は腕輪を眺めていた。

「一つはつぐみ用だとして、もう一つは誰が使う？」

「俺が使う。もう一つはクラス共有だな」

「わっちも使いたいけど、無理そうやね」

深紅は苦笑いしながら言う。この後みんなで色々話し合っただけで解散することになった。

明久は目的の物を葉月に渡せて一件落着となった。

学園長室)

明久の様子を見ながら学園長は呟いた。

「ふむ…改良が必要だね」

「だから、言ったじゃない。そこはいいように改良しないと駄目だ
って」

「勝手に新しい腕輪まで作ったあんたが言うセリフかい？」

「にははは　そこは気にしないおこづよ」

「気にするだろうが」

学園長は少女に言うと少女は動ずることもなくて席を立つと笑顔で
言う。

「あんたは今は幸せなのかい？」

「さあ？少なくとも楽しい時間を過ごせればどうでもいいよ」

そう言うと、また、新たな作品を作るぞー！と言い学園長室から出
て行く

第17話オリエnteering（後編）（後書き）

なんだろう、かなりグダグダな気がする。

アニメを見ながらの作成は難しいな（苦笑）

感想と評価をお待ちしております！

番外編 ラブレター事件？いや、脅迫状だ！！

「うん……ありえない登校時間だ」

「そうだね……でも、いつもこれくらいならいいのに」

「あー、毎日起こしてくれてありがとうね！これからは精進します
」！」

「……もう」

晴れ渡る空。澄んだ空気。暖かな日差し。

いつより一時間早いだけで混み合うはずの通学路はガラリと様相を変えて、ひとけのない

爽やかな散歩道のような雰囲気になっていた。

明久の呟きを聞いて呆れながらもつぐみはため息をはいて言う。

「早起きは三文の徳って言うし、何かイイコトがあるといいなあ」

「そうだね、アキ君のイイコトって何かな？」

「うん、食費のお金があることかな」

「現実的だけど、それをゲームに使わないでね。深紅から貰ってるんだし」

「あー、うん、努力します」

「よろしい」

小柄な体で手を腰に当てて笑顔で言うつぐみ。

この姿に癒されない男子はそうはいないだろう。

明久は昨日学校から帰ったあと、いつもどおりに過ごして早めに寝たから、いつもより二時間も早く目が覚めてしまったようだ。

「こんなに天気良いなら洗濯物でも干せばよかったよね」

「そう言われてみるとそうだね。おいしいことをしたね」

明久とつぐみは笑顔で笑い合う。

「さてさて、こんな時間から何しようかな……ん？」

「校門の近くに西村先生がいるね」

「挨拶しとっか」

「そうだね」

校門の近くにいる刈り揃えられた髪に浅黒い肌、武骨なシルエットを見て担任の先生である西村教諭だと気づく。

「先生、おはようございます」

「先生、おはようございます」

二人で後ろから元気に声をかけてみる。

すると今までみたことのないような爽やかな笑顔で振り向いて

「おう、おはよう！ 部活の朝練か？ 感心だ……」

明久を見て動きが止まった。

「あの、先生？」

「先生？」

「……すまん。間違えた」

「人違いですか？ いやそんな、別に謝る必要なんて」

「アキ君、先生はそういう意味で謝ったわけじゃないよ」

「どういうこと？」

「アキ君に接する態度と他の生徒に接する態度だよ。

そして、先生。こんな早朝に学校に来てはいますが、何も企んでいませんよ？」

つぐみは西村先生が言う言葉を先取りして笑顔で言う。

いつのまにか西村先生の手を触って接触感応をしていたようだ。

「いきなり能力を使うのは卑怯では」

「先生があまりにもアキ君をいじめるからです。」

「先生、サッカーのゴールは邪魔にならない所に置いといたし、ゴ

「ルネットは外しといたえ」

「あ、神崎さん」

「あ、深紅」

と、西村先生と会話していると深紅が割り込んできた。それに気づいて明久とつぐみは深紅を見る。

「お二人さんも早いやね」

「今日はたまたまだよ」

明久は深紅に苦笑いしながら言う。

「そつか、なら。吉井達と一緒に教室に迎え」

「了解や」

「じゃ、行くつか」

「うん」

西村先生から許可をもらうと三人で靴箱に向かった。

「……？」

「なんや？」

「何かな？」

三人は靴箱の扉を開けると三人同時に首をかしげる。
靴箱の上にあるのは手紙だった。

それに明久の名前が書かれているが、宛名はかかれていない。

「とりあえず、しまつてから後で見ない？」

「せやね」

「うん」

三人で教室に向かおうとした時、雄二が声をかけてきた。

「なんだ、お前等。早いな」

「雄二もね」

「あんさん、そのポケットの手紙はどないしたん？」

「あー、手違いではいつていたんだと思うんだ」

「せやか」

「てか、明久も、もらってないか？」

「雄二、僕のはポイズンレターだと思ってるんだ」

「は？」

「だって、僕にラブレターが来るなんてありえない！！」

「お、落ち着け！明久」

「そつだよ！落ち着いてアキ君！！」

「暴走したで！」

予想のななめ方向に暴走する明久を三人で宥める。
この後、H Rの時間になるまで時間がかかったとか。

「工藤」「はい」

「久保」「はい」

「狩谷」「はい」

四人そろって教室に入ると、ちょうどチャイムが鳴り、西村教諭も間髪を入れずに入室する。
教壇に立つと、すぐさま出席を取り始めた。

「近藤」「はい」

「斉藤」「はい」

返事をするFクラスの面々の声に覇気はない。
暖かい日差しが差し込む中、平穏な日常が

「坂本」

「……明久がラブレターをもらったようだ」

『殺せええっ!!!』

雄二の一言でぶち壊れた。

「みんな、ちょっと待つんや。坂本もラブレターもらってるえ」

『坂本も殺せええっ!!!』

「神埼、なんて事を!!!?」

「面白いわあ」

深紅は完全に雄二で遊んでいた。

『ありえん!? 吉井と坂本がそんな物を貰うなんて!』

『それなら俺たちが貰っていてもおかしくないはずだ!』

『きつと、奥ゆかしい美少女が恥ずかしくて隠したに違いない!』

『なるほど! 探せ! 自分の席の周りを探すんだ!』

『ダメだ! 腐りかけのパンと食べかけのパンしか出てこない!』

「何捜してるの!?!」

『よく探すんだ!』

『……あつた！ 未開封のパンだ！』

『おまえは何を捜してるんだ!!』

怒号飛び交う教室。

室内は、嫉妬と狂気に支配されつつあつた。

「静かにせんか！ バカ者ども！」

と鉄人の声で一喝。

ただの一言で静寂が戻る。

「それでは出欠確認を続ける。手塚」「吉井と坂本クロス」

「藤堂」「吉井と坂本クロス」

「戸沢」「吉井と坂本クロス」

「皆落ち着くんだ！」

「そつだ！クロスなら明久だけにしてくれ!!」

「吉井、坂本。静かにしろ！」

「先生ここで注意するべき相手はクラスのみんなだと思つのですが」

「だな」

「今度は西村先生で遊ぼうかえ？」

どことなく黒いオーラーを放つ三人にクラス中が鎮まり、西村先生は青ざめていた。

トラウマでもあるのだろうか。

「新田」「吉井と坂本クロス」

「布田」「吉井と坂本マジ殺す」

「根岸」「吉井と坂本ブチ殺す」

そんな後もなんとか続けられる出欠確認。

「雨宮」「みんなに忠告するよ。これ以上アキ君をいじるなら、容赦しないから」

ものすごいプレッシャーがクラスに満ちた。

「よし。遅刻欠席は無しだな。本日も、一日勉学に励むように」

出席簿を閉じる西村教諭。そして教室を出て行くと

「」「」「すいませんでしたー！！」「」「」

ものすごい勢いで深紅とつぐみに土下座してるFクラス男子（晃希&透と心除く）がいた。

「やれやれ、おまんらの暴走には加減をしらんのか」

「」「……FFF団……だし」

それを由香里と心は見て呆れていた。

「まったく」

腰に手を当てて怒るつぐみは可愛い。

横で写真を撮る康太がいるしね。

「てか、雄二にはさっき言ったけど、ポイズンレターだよ。中学の頃よくあつたんだ」

「毒手紙だと言っのか？」

「それが違うなら、脅迫状だね！」

キリツと明久が言う。なぜこうまで宣言するかと言うと中学の頃でそういう手紙が多かったからだ。

ホッと安心する瑞希と美波がいたが、内心これでは手紙すらも出せないのでは？と複雑な気持ちになった。

『なら、坂本を殺せー！！』

「うおおお！！捕まっただまるかー！！」

FFF団に雄二は追われる羽目になり、教室から雄二とともにFFF団も去る。

「あ、美波。見たいなら見る？」

「え？いや、その」

「あ、あの！読んでいいですか？」

「別にかまわないよ」

「ありがとうございます」

瑞希は明久から手紙を受け取ると、落ち込んだ。

「あれ、姫路さん、どうしたの？」

「落ち込んでるわね？」

「瑞希ちゃん……もしかして」

「はうう（泣）」

瑞希の泣いている理由に気づいたつぐみは苦笑いをするしかなかった。

明久と美波は不思議そうだったが。

「おやおや」

「前途多難だな、どっちも」

呆れて言う晃希と透だった。

これを気に直接明久に告白しようと美波と瑞希は決意した。

第18話清涼祭準備1（前書き）

ヒヨウガさま、Leinさま、まあさま、光閻雪さま、蒼さま！

感想ありがとうございます！

第18話清涼祭準備1

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。

この文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

お化け屋敷の為に教室を改善を始めるクラス。焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。

この学校ならではの『試験召喚システム』について展示を行うクラス。

学園祭準備の為にLHRロングホームルームの時間は、どの教室も活気があふれている。

「ごめんね、全員集まらなくて」

「つぐみは悪くあらへん」

「そうですね。僕らだけでも準備を決めましょう」

「あいつら、やる気ねーもんな」

「……喫茶店……か、絵画展が……いい」

「由香里は絵画がいいかもね。中岡君は？」

「わしか？わしも、喫茶店か絵画でええと思うぜよ」

我がFクラスは他の男子生徒を除いて会議中なのだ。

教室の設備はAクラスだから、多少はいい反響をえれると考えての

会議だ。

「吉井君達は何をしているんでしょうか？」

「どこかで野球でもしてたりしてね」

「あー、坂本君がアキ君達を誘ってたから、あたりかも」

「設備を手に入れたらそれで終わりというわけじゃないでしょうに」

晃希は雄二達の行動にため息をはく。

ガラッ

「ん？なんだ。お前等だけなのか？」

「あ、西村先生。そうなんですよ」

「どっかに行っちゃってて」

「はあ、これで負けてAクラスの設備を取られたらどうする気なんだか」

西村先生はため息を吐くと教室を出る。

「西村先生に任せて、わっちらは。会議を続けましょうか」

「そうですね」

「だな」

西村先生が出て行った後、つぐみ達は会議をしていた。数分後、西村先生の怒号とクラスメイトのみんなの逃げる声が聞こえた。

「西村先生は大変やね」

「というか、わざわざなんでサボるのか。」

「やる気がでないんだろうな」

「つぐみも頑張りすぎてるの、わかってないのかしら」

つぐみはノートに清涼祭でできそうな出し物を考えており、晃希達の声は聞こえていない。

「……みんな…戻って…きた」

「そつみたいだな」

「雄二が、発案者なのに。どうしても僕だけ」

「日頃の行いの差だろ」

「雄二が言うセリフじゃないだろ！」

教室に入りながら、雄二と明久は口げんかしていた。

「二人とも！喧嘩はダメだよ！」

「う、つぐみ」

「はいはい」

つぐみは席を立って明久と雄二をたしなめる。

その後、他のクラスメイト達が席にすわると、雄二は教壇に立つ。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが」

野球を中断された雄二はリクライニングシートに座っている明久達を見ながら、宣言した。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として、誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな態度の雄二。

興味がないのがわかりまくりだ。多分、全部他人に押し付けて雄二だけは寝るつもりなのだろう。

「吉井君、つぐみちゃん。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

話合いの邪魔にならない程度の小声で明久に話しかける。

「直接聞いたわけじゃないから、わからないけど、楽しみにしているってことはなさそうだね。」

「興味があるならもっと率先して動いてるはずだよ」

「そうなんですか……。寂しいです……」

いつも明るい瑞希の表情に翳りがさす。

「吉井君とつぐみちゃんも興味がないんですか？」

「あたしはそんなことないかな」

「うーん、どうだろ？ 別にそこまで何かをやりたいてってわけじゃないし」

明久の正直な気持ちから言えば、授業が潰れるのは純粹に嬉しいけど、

学園祭でこれをやりたいという目的のようなものがないのだろう。

「つぐみちゃんは同じ気持ちで嬉しいです。でも、私は吉井君と一緒に、学園祭で思い出を作りたいです」

「ほえ？」

「アキ君も瑞希ちゃんと一緒に学園祭での思い出を作ろうよ？」

どこか無理がある笑顔で明久に話しかけるつぐみ。自分の気持ちより、親友を優先していた。

「それに、うちの学園祭ではとっても幸せなカップルができやすくて噂があるんだよ」

「そうなの!？」

「はい、つぐみちゃんの言つとおりです」

つぐみが明久に笑顔で言つと明久は驚きながら言い、それを瑞希は笑顔で肯定した。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

「え？ウチがやるの？ うん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？ 私ですか？」

突然話を振られて瑞希は小首をかしげる。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会にでるのよ」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

と、手を握り締めて言つ瑞希。

「学校の宣伝みたいな行事なのに、もの好きやね」

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。」

瑞希ってば、お父さんを見返したいって言って聞かないんだから」

「お父さんを見返す？」

「うん。家で色々言われたんだって。」

『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの」

「瑞希が怒るなんて珍しいね」

「だって、皆の事を何も分かっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？」

許せませんっ」

「あはは（苦笑）」

いくら。Aクラスに勝ったといってもFクラスがバカな集まりなのは否定できないのが現状だ。

「だから、Fクラスのウチを組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

確かにこの二人なら、瑞希の父親の鼻をあかすこともできるだろう。

「三人共。こつちの話が続けていいか？」

「ウチは召喚大会に集中したいし、勘弁してほしいわね」

「なら、あたしがやるよ?」

小さな手を上げてつぐみは笑顔で言う。

「雨宮が?背が届くのか?」

「あたし、そんなにちっこくないよ!」

頬を膨らませて拗ねるつぐみに雄二は苦笑いする。

「副実行委員なら、俺がしてもいいぜ」

「透なら、大丈夫だろ。頼む」

「よし、じゃあ。決まりだね!」

つぐみは笑顔で言うと教壇に向かうが…届かない

「うう(涙)」

「つぐみ、これを使いなよ」

「あ、ありがとう!アキ君」

明久が西村先生から預かった雨宮専用土台を持っていき、置くと笑顔で言った。

「これでok!じゃあ、始めるよ!」

教壇に土台を置いてそこに上がると笑顔で仕切る。

透はパソコンで入力準備する

「クラスの出し物でやりたい物があれば挙手してね？」

つぐみが言つと数名が手を上げる。

「はい、土屋君」

「……（スクツ）」

名前を呼ばれて康太は立ち上がった。

「……写真館」

「写真館だね。」

つぐみが振り向くと透はパソコンで『写真館』と入力する。

「次は横溝君」

「メイド喫茶……といいたけど、流石に使い古されいると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

透はその通りに入力する。

「次は、横田君」

「ゴスロリ喫茶なんてどうですか？」

「ゴスロリ？」

『女は似合うだろうが、男には似合わないだろ?』

『だよな』

これには批判を多く出ているが一応意見なので透に入力させる。

「他にありませんか?はい、須川君」

「俺は中華喫茶を提案する」

須川は立ち上がりながら言うと

「中華喫茶? チャイナドレスでも着せたいの?」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ」

「それもいいね。」

「追加しとくな」

透は須川の意見を普通に『中華喫茶』と入力する。

「……………(スッ)」

「はい、由香里ちゃん!」

「……………絵画展」

「由香里ちゃんらしくていいかも！」

「これも追加だな」

すると、厳つい男が扉を開けて入って来た。

「お前等出し物は決めたか？」

「今の所この5つです」

「兩宮が議事進行役か」

「はい」

「で、入力するのはお前か」

透はニヤリと笑ったのは言うまでもない。

学園長室)

「へ〜。Fクラスが勝ったんだ」

「そうさよ。ま、今はAクラス設備だから、そう反感はこないだろうね」

「だといけどね」

「あんた介入するつもりじゃないだろうね？」

「さあ？」

謎の少女はニンマリと笑って言うと再び画面に視線を戻す。

第18話清涼祭準備1（後書き）

感想と評価お待ちしてます！

所でみなさんに聞きたいのですが。

今上記で述べた中でどれが一番面白いと思いますか？

教えてください

後、謎の少女の名前を募集します

第19話清涼祭準備2（前書き）

まいくさま、 GAUさま、 光闇雪さま、 FOOLさま、
ヒ
ヨウガさま、 Leinnさま、 蒼さま、 秋雨さま

感想とアンケートありがとうございます

出し物は中華にしました。

まだ、ゴスロリのデータが足りないのでできそつもなかったです。
すいません（涙）

第19話清涼祭準備2

「これで決をとるよー！」

「いいと思う方に手をあげるよ？」

つぐみと透は全員に言う。この二人も密かに気が合うのかもしれない。

「まずは写真館」

「これだけか」

手を上げた人数分だけ書き込む

「次はウェディング喫茶！」

写真館よりは多い方だ

「次はゴスロリ喫茶！」

「多いな」

ロリコンが多いのも悩みものだと思ったのはつぐみ達だけではないだろう。

「次は絵画展！」

「…2か」

由香里が落ち込んでおり、心が宥めている様子が見えた。

「次は中華喫茶！」

次々と書いて行く透を見てからつぐみは多数決の結果を見る。

「多数決の結果、中華喫茶に決まりました！全員で協力して頑張ろう！」

接戦だったが、僅かな差で中華喫茶が勝った。

『Yes!! Little princess!!』

何か変な合言葉が出たのは気にしない方がいいのだろうか。

「俺はお茶と飲茶は俺が引き受けるよ」

と、須川が立ちあがると

「……………（スクツ）」

康太も立ちあがった。

「ムツツリーニ、料理なんてできるの？」

「……………紳士の嗜み」

いつから中華料理が紳士の嗜みになったのだろうか。そもそも彼が紳士かどうかも不明だ。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらうよ。厨房班は須川君と土屋君のところ、ホール班はアキくん、お願いね？」

「うん、わかったよ」

「それじゃ、私達はホールに居ますね」

「そうだね、瑞希達女子と木下君はホールで他に男子で料理できそうな人は厨房に行つて、できない人はホールに行つてね」

瑞希の意見に頷いててきばきと指示をする。

「僕は厨房に行きます」

「俺はホールかな」

「わたしと由香里もホールでいいわね」

「……（コクッ）」

「わしもホールにおるぜよ」

「これで決まりだね。みんな、準備頑張るよー！」

つぐみは小さな手をあげて言つと

『おー！！！』

クラスメイトの奴らもテンションをあげる。

第19話清涼祭準備2（後書き）

感想と評価をお待ちしております!!

第20話学園長からの呼び出し（前書き）

光閻雪さま、 レインさま、 秋雨さま、 蒼さま、 海の永帝さま、
ま、朝露さま、 まいくさま、 ヒョウガさま

感想ありがとうございます！

第20話 学園長からの呼び出し

「アキ君、坂本君、ちょっといいかな」

「ん？どうしたの、つぐみ」

「どうした？」

「ちょっと、学園長室に用があるんだけど。付いて来てくれない？」

つぐみは小首を傾げて聞いた。ちなみに二人を見上げている。

「いいけど、何の用？」

「学園長に呼ばれてるんだよ」

「あの、ばばあにか！？」

「いったいなんだろう？」

「わからないけど、行けば分かるんじゃないかな」

つぐみが苦笑いしながら二人に言うと、雄二は何かを考える。

「仕方ないな」

「ありがとう！」

「行くのはいいけど、準備は？」

「それは須川君達に任せているから、大丈夫だよ」

「なら、大丈夫かな」

明久が安心したように言うと

「そろそろ、行こう？」

「だな」

「うん」

三人で学園長室に向かった。

『……商品の……として隠し……』

『……こそ……勝手に……如月ハイランドに……』

つぐみ達が新校舎の一角にある学園長室の前まで来ると、扉の向こうから誰かが言い争っている声が聞こえた。

「どうした、明久？」

「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど」

「中で何か言い争ってる感じだね」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ」

「先客がいるのに入るの!!?」

「失礼しまーす」

学園長室の立派なドアをノックして、明久と雄二が入って行くところ、ぐみは慌てて二人を追いかける。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ」

その室内でつぐみ達を迎えたのは、長い白髪が特徴の藤堂カヲル学園長だ

試験召喚システム開発の中心人物でもある。

研究していた人間だからか、随分規格外な所が多い人らしい。

その隣には金色のポニーテールの少女がいた。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。

これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか?」

「珍客バンライっていつのかにや?これって」

「芳乃博士、貴女という方まで何を言って」

「いいじゃん、世の中は楽しんだもの勝ちだよ?」

にやははと笑って言う少女に学園長はため息を吐く。

それに相對していたのは、鋭い目つきとクールな態度で一部の女子生徒に人気が高い、竹原教頭と

金色のポニーテールの少女で芳乃という名らしい。

教頭はメガネをいじりながら、学園長を睨みつける。

「バカを言わないでおくれ。どうしてこのアタシがそんなせこい手を使わなきゃいけないのさ？」

負い目があると言う訳でもないのに」

「それはどうだか。学園長は隠しごとがお得意の様ですから」

「さつきから言っているように、隠し事なんてないね。あんたの見当違いだよ」

「………そうですか。そこまで否定されるなら、この場はそういう事にしておきましょう」

「この場でなくてそういう事なんだってば」

芳乃が苦手な教頭は困った様子になる。

負い目、隠し事。

教育現場に似つかわしくない単語が次々と出てくる会話を終え、教頭は学園長室を出て行った。

「さて、と」

芳乃はそう言うのと座っていた机から降りて、教頭が見ていた場所に近寄って何か弄っていた。

それが終わると振りかえって学園長にウィンクする。

「さて、そろそろ。本題に入ろうかね」

「いったい何の用なんですか、ばばあ長」

「ちょ！坂本君！？」

「そういう言い方はどうかと思うよ！！？」

明久とつぐみは雄二の態度に慌てながら言う。

「口が悪い男さね……………清涼祭で行われる召喚大会は知ってるかい？」

「はい」

「じゃ、その優勝賞品と準優勝品は知っているかい？」

「それって、優勝賞品が“トロフィー”と“賞状”と“白金の腕輪”
そして優勝賞品の副賞が、如月グランドパークプレオープンペアチケット。
準優勝賞品の黒金の腕輪と如月グランドパークペアチケットのこと
ですか？」

「よく知ってるね　えらいえらい！」

「あたし、そんなに子供じゃないよ！！？」

芳乃に頭を撫でられて慌ててつくみは言う。雄二は如月グランドパークのところまで固まっていた。

「はぁ……。それが何か？」

「話は最後まで聞きな。慌てるナント力は貰いが少ないって言葉を知らないのかい？」

「用はね、白金の腕輪の回収をしてもらいたいんだよ」

「なんでバラすさね!？」

「いいじゃん、この子達の実力は分かってるし」

しれつと言う芳乃に学園長は何か考えてため息を吐く。

「はぁ……。そのガキの言う通りさね、本命は白金の腕輪の方さ」

「なんでそれを回収したいんですか？」

「腕輪の方は新技術なせいかな不安定だね。」

入出力の関係で高得点取得者が使用すると暴走するというわけなんだよ」

「それなら、すぐに回収しないと!」

「落ち着け、雨宮。それができたら、俺達に声がかかってない」

「そこのクソガキの言う通りさね。新技術というのは使ってなんぼのものさね」

「あ、そうですね」

つぐみは困ったように考える。

「わかりました。この話、引き受けます」

「交渉成立だね」

「ただし、こちらからも提案がある。大会はタッグマッチでトーナメント制。

一回戦は数学、二回戦は化学と進めるらしいな」

「それがどうかしたかい？」

「対戦表が決まったら、その科目の指定を俺にやらせてもらいたい」

「それって反則じゃない!？」

「あのね、おちびさん。これは学園全体の問題なんだよ?」

「あたしちっちゃくないよ!？ あ……」

その通りだ、腕輪のお披露目はスポンサーにも見せないといけない。これは、資金援助の為でもあるのだから。

これがもし失敗したりしたら、この学園への資金援助がなくなることになる。

「この文月学園がなくなるのは嫌です。だから、あたしもできるかぎりのことをします!」

「ありがとう。あんたみたいな子を巻き込むのは嫌だけど、頼むよ」

「はい！」

「優勝できたら、ボクが作った腕輪もあげるよ」

「そうさね、これくらいしてもらうんだから、それもいいさね」

学園長はしばらく考えると芳乃を見て言う。

「楽しみにしてるよ」

「絶対勝ちます！」

「僕達に任せてください……！」

明久と雄二とつぐみは学園長に言うのと去って行く。

第20話学園長からの呼び出し（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第21話清涼祭・初日&召喚大会一回戦目（前書き）

ヒヨウガさま、 光闇雪さま、 リザクさま、 秋雨さま！

感想ありがとうございます

第21話 清涼祭・初日&召喚大会一回戦目

「あ、雨宮に坂本に吉井。ようやく帰ってきたな」

「じめんじめん。ちょっと学園長に呼ばれてまして」

つぐみは苦笑いしながら言う。

「そうだったのか。あ、準備はできてるぞ」

須川がつぐみ達に教室の内装を見せて言う

「わあ、凄いね」

「いや、みんなでやったから、できたようなものさ」

「それでも凄いよ!」

つぐみは笑顔で須川を褒めていると

「ところで、三人で何してたのですか?」

「え〜っとね。じつは学園長に召喚大会に出るように言われてね」

「召喚大会に?」

「うん」

「なんで召喚大会に?」

疑問を持った晃希が聞いた。

「え？ああ。優勝賞品の副賞に興味があってね」

「優勝賞品の副賞に…？」

「副賞ってたしか如月グランドパークのプレミアムチケット…ですよね？」

「ねえ、アキ。」

「何、美波」

「誰と行くつもりなの？」

美波の質問に明久が答えようとするすると雄二が肩を持ち

「俺と行っ」

バシッ

「なんでやねん！」

深紅はハリセンを出して雄二をはたいた。

「おや、先を越されてしまいました」

「どこから、ハリセンを！？」

明久がツツコミをいれているが、ツツコムのはそこなのか。

「明久が行く相手はつぐみに決まってるんだろ」

「ええ！！？な、何言ってるの、透くん！！」

つぐみは透の発言に慌てながら言う。

『……………』

「え！？どうして、姫路さんや美波が黒いオーラーをだしてこっちに近寄るの！！」

明久は明久で瑞希と美波の行動に困っていた。

「すまないが、神埼。俺と組んでくれないか？」

「むっ？わっちか？えーよ。」

「ありがとうな」

「気にしなくてええよ」

そんなこんなで大騒動があったが、清涼祭の当日になった。

清涼祭・初日

「装飾はこっちに飾って」

「つぐみ…これ…も？」

「うん、由香里ちゃんだけじゃ、危ないから……中岡君、頼める？」

「わかったぜよ」

由香里と心は装飾を持って二人で歩いて行く。この二人を羨ましくつぐみは眺めていた。

「元々豪華なAクラス設備ですから、更にきらびやかになりましたね」

「あ、晃希君。そうだね」

「残りの準備もほぼ順調だな」

つぐみの所に晃希と透も来て話合っている

「……飲茶も完璧」

「わっ!?!」

いきなり後ろから響く康太の声につぐみは驚いた。

いくら存在を消すのが上手いからといって常日頃からしなくてもいいと思うのだが。

「ムツツリーニ、厨房の方もオーケー？」

「……………味見用」

そういつて康太が差し出したのは木の盆。上には陶器のティーセットと胡麻団子が載っていた。

「わぁ……。美味しそう……」

「土屋、これウチらが食べちゃっていいの？」

「……………（コクリ）」

「では遠慮なく頂こうかの」

瑞希と美波と秀吉とつぐみと由香里の5人が手を伸ばし、作りたてで温かい胡麻団子を勢いよく頬張る。

「お、美味しいです！」

「本当！表面はカリカリで中はモチモチで食感も良いし！」

「甘すぎないところもいいのう」

「美味しい！」

「ほわ〜」

と、大絶賛だった。

予断だが、心が由香里の蕩けた表情になっていたのを見て倒れたのはいうまでもない。

「お茶も美味しいです。幸せ……」

「本当ね……」

瑞希と美波の目がトロンと垂れて、見惚れる人が続出した。

「つぐみ、そろそろ時間だよ」

「あ、もう?」

「勝ってこいよ」

明久がつぐみに声をかけるとつぐみはしまりのない顔から、普通に
戻ると聞いた。

すると、雄二は二人にニツと笑って言う。

「もちろん」

「うん!」

明久とつぐみは教室を後にした。

「えー。それでは、召喚大会一回戦を始めます」

校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

「三回戦までは一般公開もありませんので、リラックスして全力を出してください」

今回立会いを務めるのは数学の木内先生。当然勝負科目は数学となる。

「頑張ろうね、律子」

「うん」

対戦相手の女子二人がうなずき会う。微笑ましい光景だ。

「「^{サモン}試獣召喚っ！」「」

相手の二人が喚び声をあげると、お馴染みの魔方陣が足元に現れて召喚者の姿をデフォルメした形態を持つ試験召喚獣が喚び出された。

【Bクラス 岩下律子 数学 179点 & Bクラス 菊入真由美 数学 163点】

「さて、僕らも召喚しようか」

「そうだね」

「「^{サモン}試獣召喚」「」

現れる明久達の召喚獣。明久の召喚獣は相変わらずの改造制服と木刀を装備している。

つぐみの召喚獣はうさぎの耳と猫の尻尾が生えた姿で容姿はつぐみ

をデフォルメした感じ。
武器はキャロットボタンを装備している。

「行くわよ。珍妙コンビ」

「でも、律子。あっちの子は可愛いよ?」

【Fクラス 吉井明久 数学 63点 & Fクラス 雨宮つぐみ 数学 138点】

遅れて明久達の点数が表示された。

「では、始め!」

「律子!」

「真由美!」

「行くわよ!」

向こうの二人は名前を呼び合って頷きつぐみ達を挟みこむように移動してきた。

「へえ〜。結構息が合っているね」

「そうみただね、あたし達も負けてられないかな?」

明久とつぐみは頷き合う。

明久が相方の相手をするにつぐみの召喚獣がキャロットボタンの取

っ手をひっぱると剣になる。
それでもう片方の召喚獣を攻撃する。

「やあ！」

「くっ！」

相手の召喚獣の攻撃を剣でいなして戦う。
こちらよりも、相手の方が点数が上だが、どちらも召喚獣の操作が
上手いわけではない、
が…多少は勝機があるのだ。

「たあ！」

的確に相手の鎧がないところ攻撃したのが効果あったようだ。
よく、明久のお手伝いをしていたおかげだろうか、相手よりは上手
く操作して勝敗をわけろのだ。
それでも明久と深紅には劣るのだが。

明久は敵が手にしている剣を振りおろしてくる。明久はその動きに
合わせて召喚獣を1歩だけ横に動かした。

「このっ！」

避けられた為に今度は大きく横に薙いで来る。距離をよく測って、
小さく一歩後退する

「はあ！」

「くっ！」

相手の攻撃に疲弊はするが、敵ほどではないようだ。

「つぐみも頑張ってるし。そろそろ……いきますかあ！」

大振りの攻撃を避けざま、木刀を握り締めて明久の分身は攻勢に転じた。

「え？ わっ！ きゃあ！」

明久の場合は敵の鎧の隙間を狙って的確に攻撃を叩きこまないと効果がない。

「とどめだよ！」

つぐみの召喚獣は敵の召喚獣を切り裂いた。明久とは違い点数は高いので効果はあるのだ。

「それじゃ、僕も」

威力が低いとは言え、敵は度重なる攻撃を受けてボロボロなのだ。その相手に渾身の一撃を叩きこむ。

「勝者、吉井・雨宮ペア」

木内先生は勝者の名を告げる。とりあえず一回戦は突破した。

第21話清涼祭・初日&召喚大会一回戦目（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第22話 清涼祭・初日2

「営業妨害？」

「なんでまた」

一回戦を勝ちぬけた、つぐみ達に由香里と心が呼びに来ていた。

「適切なことを言っておるぜよ」

「変な……客」

二人は呆れたような困ったような表情で明久達に伝える。

「でも、学園祭の出店なんか営業妨害って……。メリットなんか無いのに」

「あるとしたら、集中できなくなるくらいだよね」

明久の言葉につぐみはぼつりとつぶやいた。

「いったい誰なのさ」

「うちの学校の三年ぜよ」

「このままだと……評判……落ちる」

由香里が悲しそうに言つとつぐみは明久を見る。

「とりあえず、行こう。止めないといけないし」

「そうだね」

「じつちぜよ」

「……早く」

明久とつぐみを心と由香里は案内する。

教室に近づくと騒ぎ声が聞こえてくる、由香里がおそろおそろと扉に手を伸ばそうとしたら、心が代わりに扉を開けた。

「こんな食べ物食えるわけないだろ！」

「まずいしな！」

今、真ん中で騒いでいるの三年が、由香里達と言った連中だろう。どうしたもんかと考えていると、雄二と深紅が帰ってきた。

「お二人さん、もう終わったんえ？」

「どうした、こんな所でたむろして」

「あ、坂本君。実は」

つぐみは雄二に今起きていることを説明する。

「営業妨害ねえ」

「あちらさんも暇なことしてんやね」

雄二と深紅は完全に呆れていた。

「さっきはあんまり暴れられなかったし、ちょうどいいな」

「わっちもしたいえ」

コキコキと肩をならす雄二に深紅はワクワクしながらスタンガンを持っていた。

この際どこから出したのか聞かないでおこう。

「まったく、責任者はいないのか！ このクラスの代表ゴペツ！」

「私が代表の坂本雄二です。何かご不満な点でも御座いましたか？」

ホテルのウェイターのように恭しく頭を下げる雄二。

「不満も何も、今連れが殴り飛ばされたんだが」

殴られてもいないソフトモヒカンの男が驚いている。

「それは私のモットーの『パンチから始まる交渉術』に対する冒瀆ですか？」

凄い交渉術もあったものだ。

「ふ、ふざけんなよこの野郎………！なにが交渉術ふざきゃあつ！」

「そして『キックでつなく交渉術』です。最後には『プロレス技で締める交渉術』が待ってますので」

「わ、わかった！こちらはこの夏川を交渉に出そう！俺は何もしないから交渉は不要だぞ！」

「ちょ、ちょっとまって常村！お前、俺を売ろうというのか！？」

慌てているのは坊主頭夏川と呼ばれた男。覚えにくいと思うので『夏坊主、常モヒカン』で覚えよう。

「それで、常夏コンビとやら。まだ交渉を続けるか？」

雄二の仮面がはがれた。いつまでもさっきのような態度はとれないようだ。

「いや、もう十分だ！退散させてもらおう」

常村先輩が雄二からの剣呑は雰囲気を感じ取って撤退を選ぶ。
賢明な判断だろう。

「そうか、それなら・・・」

大きくうなずいた後、夏川（坊主）先輩の腰を抱え込む雄二。

「おいつ！俺もう何もしてないよな！？ どうしてそんな大技をげぶるあつ！」

「……………これにて交渉は終了だ」

バックドロップを決めて平然と立ち上がる。
できればあの交渉術は門外不出であってほしいと思うのはなぜだろ
う。

「お、覚えてるよ！」

倒れた相棒を抱えて走り去って行くモヒカン先輩。これで問題は片
付いた。

『この料理は旨いよな』

『ああ、あいつ等の味覚が変なだけだろ』

『だよなー』

『絶品料理なのにな』

あちらこちらで常夏コンビへの批判があがる、これなら大丈夫だろ
うが、念の為に。

「さきほど、騒がしくしてすみません。今ここにいるお客様と並ん
でくれているお客さまに
サービスとして半額にさせていただきますので、なにとぞ、よろし
くお願いします」

つぐみは客の目の前に行きふかぶかとお辞儀して言うと拍手が巻き
起こるのであった。

『ちっこい子は正義だー!!』

『写真撮らせてー！！』

『抱きしめたい！』

ロリコンらしき客もいたのは気の性であってほしいと誰もが思った
とか。

第22話清涼祭・初日2（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第23話召喚大会2回戦目（前書き）

ヒヨウガさま、 まあさま、 蒼さま、 まいくさま、 光闇雪さま、
レインさま、 あづまさま！

感想ありがとうございます！

第23話召喚大会2回戦目

二回戦目

「それでは、二回戦を始めてください」

忙しいクラスを手伝った後は急いで特設ステージに向かい、試合会場にいるわけで。

「あれ？誰かと思えばBクラス代表とCクラス代表じゃん！」

「ちよつ、アキくん」

つぐみは焦って明久の服の裾を掴む。上目遣い&低身長なのでこれは慣れてないとかかなりキツイ。

「よ、吉井に雨宮！！お前等が二回戦目の相手か」

明久達を見て戦慄しているのはBクラスの根本だった。そしてパートナーは

「ちよつと根本君？なにビビッてるのよ？」

小山さんは呆れながら言っている。

「二人は別れたんじゃないの？」

「別れたわよ？でも、召喚大会にどうしても出場して私とのヨリを戻したいみたいなのよ」

どっと疲れたような表情で小山さんは言う。

明久は苦笑いしながら、これから使うことをつぐみには止められるだろうが、この二人だとキツイ。
なのである作戦にでることにした。

それに、今回の立会人は、多少なことには目を瞑ってくれる英語担当の遠藤先生なのが幸いだろう。

「『『『試^{サマシ}獣召喚！』』』」

この場に居る四人の生徒の召喚獣が出現する。

【Bクラス 根本恭二 英語W 199点 & Cクラス 小山友香
英語W 165点】

流石BクラスとCクラスの代表コンビだ。点数も立派なものだ。

【Fクラス 吉井明久 英語W 59点 & Fクラス 雨宮つぐみ 英語W 146点】

明久の点数は低いがつぐみはまあまあ高いようだ。

「つぐみ、卑怯なことするけど、我慢してね？」

「え！？ダメだよ！！」

つぐみは慌てて明久に言う。

「今回だけだから！」

「うっ」

明久の必死の頼みにつぐみは折れそうだが、大切な幼なじみの頼みに根負けしそうな時。

「わたし達の負けでいいわよ」

「え？」

「へ？」

小山さんはあっさりと言う、なぜだろうか。

「気が変わったのよ」

「お、おい！友香！なんで」

小山さんは遠藤先生に近寄って話かけると何かを話してから、こちらに来てつぐみの頭を撫でると去って行くこととする。

「おい！待ってくれよ！！」

慌てて根本は小山を追いかける。

つぐみと明久と遠藤先生は唖然としていたが、ハッと我に返り、

「勝者 Fクラスの吉井&雨宮ペア！」

「つぐみ、なんか。わからないけど、帰ろっ？」

「そ、そうだね」

釈然としないまま二回戦は幕を閉じた。

深紅視点)

「トーナメントを見ると次はCクラスコンビやね」

「点数平気か？」

「大丈夫や」

雄二と深紅は二回戦目のステージに向かったのだ。
そこには・・・遠藤先生がいた。

「二回戦目を始めてください」

「サモン試獣召喚！」「」

おなじみの幾何学模様の魔方陣から召喚獣が姿を現す。

【Cクラス 黒崎トオル 英語W 125点 & Cクラス 野口
一心 英語W 167点】

相手の召喚獣の点数を見て雄二は少し焦っている様子だ。
対して深紅はのほほんとしている。

【Fクラス 坂本雄二 英語W 125点 & Fクラス 神埼深紅
英語W 234点】

「神埼、点数高いな」

「わっち、英語は得意な方なんよ」

「そういえば、そうだったな」

雄二は物理の点数には苦笑いした。

「くらえ！」

敵の召喚獣が雄二に攻撃するが、かわして雄二は自分の召喚獣を動かして相手の召喚獣に叩きこむ。

「やりますなあ」

「よそ見してる場合かよ！」

「おっと、わっちに触れるとやけどしますえ」

赤いドレスをまとった深紅の召喚獣は歪な剣で相手の攻撃をいなして、かわす。

敵は避けられた為に大きく横に薙いでくるが深紅は距離を測って小さく後退する。

「ふははは！！無駄無駄無駄あつ！！！」

雄二は日頃のストレスを発散しているかのように楽しそうに戦っている。

「さて、わっちもはんなり行きますえ？」

「う、うわ!？」

ここで攻撃に転じて相手の点数を削って行く。

「とどめ!」

雄二の召喚獣は拳を敵の召喚獣に叩きこんで終了。

「はあっ!」

深紅の召喚獣は舞うように戦い、相手の召喚獣を剣でとどめの一撃をくらわした。

「しょ、勝者。坂本&神埼ペア!」

「俺達」

「最強や」

二人で笑顔でハイタッチして笑いあうと、会場から去る。

遠藤先生は似た物同士なのだろうか?と考えていたとか。この後、西村先生に呼び出しされたのは言うまでもない。

第23話召喚大会2回戦目（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第24話清涼祭・初日3（前書き）

光闇雪さま、 レインさま、 秋雨さま、 蒼さま、 まいくさま！

感想ありがとうございます

第24話 清涼祭・初日3

「ただいまー……っ、あんまりお客さんがいないなあ……」

「本当だ、どうしたのかな」

喫茶店に戻ると客が少なかった。

「お、戻ってきたようじゃのう」

「お帰りなさいです」

「……お帰り」

「お帰りぜよ」

「お帰りなさいです」

「お疲れ」

客が少ないから、ウェイトレス役の秀吉と智美と由香里とウェイタ
ー役の晃希と透と心も暇そうだ。

「無事勝ってきたよ」

「ちょっと拍子抜けだったけどね」

明久とつぐみは苦笑いしながら言つと

「それは何よりじゃな」

「それより、秀吉、これはどういうこと？お客さんがいないじゃな
いか」

「……むう。ワシ等はずっとここにおるが」

「妙な客はあれ以降来ていないですよ？」

秀吉と智美は明久達は首を傾げて言う。

「ってことは、教室の外で何かが起きているのかな？」

「かも…しれない」

「その可能性が高いぜよ」

つぐみの疑問に由香里と心が答えて考え込んでいると、

『お兄さんにお姉さん、すいませんです』

『いや、気にするな、チビッ子』

『そつやで、使えるもんはなんでも使わんと苦労するえ』

『チビッ子じゃないです。葉月です！』

雄二と深紅と小さな女の子の声が聞こえてきた。

「雄二と神埼が戻ってきたようじゃのう」

「楽勝だったかもしれませんか」

「あ、うん。そうみたいだね」

「葉月？…どこかで聞いたことがあるような気がする」

つぐみと明久は同じように悩みはじめた。

『んで、捜しているのはどんなヤツだ？』

『そうやね、どんな人なん？』

ガラスと音を立てて教室の扉が開き、雄二と深紅の姿が見えた。話し相手はつぐみと同じ小柄なのか、雄二の陰になつて見えない。

『お、坂本か神崎の妹か？』

『可愛い子だな。ねえ、五年後にお兄さんと付き合わない？』

『俺はむしろ、今だからこそ付き合いたいなあ』

三人はあっという間にクラスの連中に囲まれてしまった。だが、新田。おまえまでなぜそちらに居るのだ。

『あ、あの、葉月はお兄ちゃんを捜しているんですっ』

どうやら、女の子は人を捜していて雄二と深紅に声をかけたようだ。なんだかんだで面倒見のよい二人だ。

『お兄ちゃん？ 名前はなんて言うんだ？』

『あう……。わからないです……。』

『？ 家族の兄じゃないひんの？ それなら何か特徴は？』

名前がわからない相手でも捜してあげようという雄二と深紅の温かい気遣いが感じられる。

意外と子供好きなのかもしれない。

『えっと……。バカなお兄ちゃんでした！』

なんとも凄い特徴だった。

『そうか』

雄二が首を巡らせて、該当する人物を捜している姿が人垣の間から見える。

『……沢山いるんやけど？』

否定できない。いくらAクラスに勝ったとしても成績はFクラスのままだからである。

『あ、あの、そうじゃなくて、その』

『うん？ 他に何か特徴があるのか？』

『その……すっごくバカなお兄ちゃんだったです！』

『『吉井だな』』』

「それは酷くない!!?」

つぐみは今言った生徒に言う。明久は庇ってくれる幼なじみに感動していた。

「全く失礼な！ 僕に小さな女の子の知り合いなんてつぐみ以外にいないよ！ 絶対人違い……」

「あたし、そこまでちっこくないよ!!?」

「あつ！ バカなお兄ちゃんだつ！」

つぐみのツツコミが響いてから、小さな女の子が駆けてきて、いきなり明久に抱きついた。

「絶対に人違い、がどうした？」

「……人違いだと、いいなあ……」

「いいなあつて、それ願望ですよね」

「……どこで……知り合った……のかな」

明久を見ながら晃希と雄二は言い、由香里は悩みながら呟いた。

「って、キミは誰？ 見た所小学生だけど、僕にそんな歳の知り合いはつぐみ以外にいないよ？」

「だから、ちつこくないし！ アキくんと同じ年だよ！！」

ひとまず明久は顔を見る為に女の子を引き剥がす。それにつぐみは明久にツツコミをいれている。

「え？ お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

「あ、泣いちゃダメだよ！！」

つぐみは慌てて泣きそうな女の子に話かける。

「バカなお兄ちゃんのバカあつ！

バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』

つて聞きながら来たのに！」

「明久……じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「そこまでバカバカと連呼しないでよ！アキ君をいじめるなら許さないよ！？」

つぐみは不機嫌そうに雄二達に言う。深紅と晃希と智美と透と由香里と心は女の子をあやしている。

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束もしたのに……」

「瑞希！」

「美波ちゃん！」

「「殺^やるわよ！」」

「「ぶあつ!?!」」

「あ、こらー!?!アキ君をいじめるなー!」

つぐみは念動力で瑞希と美波を持ち上げると言う。
サイコキネシス

「「きゃ!?!」」

「姫路に島田か。どうやら勝ったようだな」

雄二は冷静に浮いている美波と瑞希を見て言う。

「あらら、つぐみが怒ってるえ」

「怒るでしょ、大切な幼なじみに手を出されたら。」

「まさに本能ですね」

傍観者の三人も冷静に見て言う。

「あ、雨宮!ウチ等が何したっていうのよ!?!」

「そうです!吉井君が悪いんじゃないですか!」

「分からないの？あたしはね。二人が嫉妬でアキ君に攻撃したことが許せないの！！」

「アキ君が悪い？どうして、そう思うの？」

つぐみは美波と瑞希を空中に浮かせたまま言つと美波と瑞希は黙り込む。

「つぐみ……」

「おい、止めなくていいのか？」

「今はお説教モードだから、大丈夫だよ」

明久は苦笑いしながら雄二に言う。

「あ、お姉ちゃん。遊びに来たよっ！」

女の子は空中に浮いてる美波を見て涙をひっこめる。それを見て明久は何か考えていた。

「ああっ！ あの時のぬいぐるみの子か！」

「ぬいぐるみの子じゃないです。葉月ですっ」

女の子がふうと頬を膨らませる。

「そっか、葉月ちゃんか。久しぶりだね。元気だった？」

「はいですっ！」

「うんうん。それは良かった。それにしても。よく僕の学校が分かったね?」

「お兄ちゃん、この学校の制服着てましたから」

そう言つて明久の制服を引つ張る葉月。

「あれ? 葉月とアキつて知り合いなの?」

つぐみによつて空中からおろしてもらつた美波が首を傾げていた。

「うん。去年ちよつとね。美波こそ葉月ちゃんのこと知ってるの?」

「知ってるも何も、ウチの妹だもの」

「へ?」

「言われてみると元気そうな雰囲気とか、ちよつと勝ち気な目のあたりとか似てるやね」

深紅は葉月をまじまじと見て言う。

「吉井君はズルいです……。どうして美波ちゃんとは家族ぐるみの付き合いなんですか?」

わたしはまだ両親にも会つてもらつてないのに……。もしかして、実はもう『お義兄ちゃん』になつちやてたり……」

「瑞希ちゃん、とりあえず落ち着いてよ」

つぐみは瑞希の壊れぶりに苦笑いしながら言つと地面に下ろす。

「あ、あの時の綺麗なお姉ちゃん！　ぬいぐるみありがとうございますでしたっ！」

「こんにちは、葉月ちゃん。　あの子、可愛がってくれてる？」

「はいですっ！　毎日一緒に寝てます！」

「良かった。　気に入ってくれたんだ」

瑞希は嬉しそうに微笑んで言う。

「ところで、この客の少なさはどういうことだ？」

と、教室内を見回す雄二。　色々あって忘れていた。

「そっいえば葉月、ここに来る途中でいろいろな話を聞いたよ？」

「ん？　どんな話なん？」

深紅が屈みこんで葉月の視線に合わせる。

「えっとね、中華喫茶の料理は不味いから行かない方が良く、って」

「ふむ……例の連中の妨害が続いているんだろ？　探し出してシバき倒すか」

口元に手を当てて、まるで確信しているかのように雄二は断言した。

「例の連中の妨害って、あの常夏コンビ？　まさか、そこまで暇じ

やないでしょ」

「どうだかな。ひとまず様子を見に行く必要があるな」

「そうだね。少なくとも、噂がどこから流れてどこまで広がっているのかを確認しないと」

小学生の葉月が聞いたくらいだから、もしかするとかなりの勢いで広がっているかもしれない。

「お兄ちゃん、葉月と一緒に遊びにいこっ」

「ごめんね、葉月ちゃん。お兄ちゃんはどうしても喫茶店を成功させなきゃいけないから、あんまり一緒に遊べないんだ」

言いながら葉月の頭を撫でる明久。少し羨ましそうなつぐみが見ていたのは内緒。

「む。折角会いに来たのに」

「それなら、そのチビツ子も連れて行けばいい。飲食店をやっている他のクラスを偵察する必要もあるからな」

そこで雄二のフォローが入る。

「ん、そっか。それじゃ、一緒にお昼ご飯でも食べに行く？」

「うんっ」

膨れ顔が一転して満面の笑みに。元気な子だ。

「じゃあ葉月、お姉ちゃんも一緒に行くね」

妹に対してはいつもと口調が違う美波。良い姉をしているのだろう。

「ふむ。ならばつぐみと姫路と雄二と神埼も一緒に行くの良いじやろ。」

召喚大会もあるんじゃないし、早めに昼を済ませてくると良い」

「そうか。悪いな、秀吉」

「いいんですか？ ありがとうございます。木下君」

「ありがとうございます。木下君」

「おおきにな、木下」

これで学園祭を回るのは7人。結構な人数になった。

「それでチビツ子、さっきの話はどの辺で聞いたのか教えてくれるか？」

「えつとですね……短いスカートを穿いた綺麗なお姉さんが一杯いるお店……」

「なんだって！？ 雄二、それはすぐに向かわないと！」

「そうだな明久！ 我がクラスの成功のために、《低いアングルから》綿密に調査しないと！」

聞いた瞬間全力ダッシュ。

「アキ、最低」

「吉井君、酷いです……」

「お兄さんのバカ！」

「あ……アキ君（汗）」

「はあ、なんでこうなるんやろつか」

明久達の行動にため息や罵倒がもれる。

第24話清涼祭・初日3（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第25話清涼祭・初日4（前書き）

光闇雪さま、 ヒョウガさま、 蒼さま、 レインさま、 リザクさま、
秋雨さま

感想ありがとうございます

第25話清涼祭・初日4

「明久、ここはやめよう」

「ここまで来て何言ってるのさ！ 早く中に入るよ！」

「頼む！ ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

明久と雄二の目的の桃源郷は試召戦争で打ち破ったAクラスに

【メイド喫茶 『ご主人様とお呼び！』】という名前で存在していた。

「そっか。ここって坂本の大好きな霧島さんのいるクラスだもんね」

「坂本君、恥ずかしいからって女の子から逃げ回るなんてダメですよ？」

「交際宣言したのに、逃げてたらダメだと思うで」

追いついた深紅と美波と瑞希は雄二に言う

「坂本君…大丈夫？」

つぐみは心配そうに聞いたなら、雄二は苦笑いしてつぐみの頭を撫でる。

「またなのー！！？」

「撫でやすい場所にあるから、いいなー」

「あたし、そんなにちっこくないよ!!!?」

つぐみは雄二の言葉に反論するが聞いていない。

「雄二、これは敵情視察なんだ。決して趣味じゃないんだから……」

「……………!!!(パシャパシャパシャパシャ)」

どこからか音がして音の原因はどこかで見ていると、指が擦り切れんばかりにシャッターを切っている男が一人。

「……………ムツツリーニ?」

「……………人違い」

厨房副責任者のクラスメイトはカメラ片手に否定のポーズを取る。

「どこからどう見ても土屋でしょうが。アンタ何してるの?」

「……………敵情視察」

最近の敵情視察とはローアングルから女の子を撮影することを指すらしい。

「ムツツリーニ、ダメじゃないか。盗撮とか、そんなことしたら撮られてる女の子が可哀想だと……」

「……………一枚百円」

「2ダース貰お……じゃなくて！可哀想だと思わないのかい？」

一瞬買う気だったようだが、諦めた。

「……そろそろ当番だから戻る」

康太は明久が写真を買わなかったことに驚きながらも渋々と教室の方に去って行く。

「そろそろ、入ろうよ？」

つぐみは髪を直してからみんなに提案し

「そうね。それじゃ、入るわよ。お邪魔しまーす」

美波が一番手でドアをくぐる。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

出迎えたのは雄二の幼なじみでそして恋人でもある霧島翔子。

「わあ、綺麗……」

「いいなあ」

瑞希とつぐみが感嘆の声を洩らす。

長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映えて、黒のストッキングが彼女の美脚を更に際立たせている。

同性が羨んでも仕方のない麗しさだ。

「それじゃ、僕等も」

「はい。失礼します」

「お姉さん、きれ〜！」

「失礼しますえ」

明久に続いて瑞希と葉月と深紅も中に入る。
すると、翔子が美波の時と同じように

「……………おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様」

と、出迎えてくれた。

「ほら、あたし達も行くっ？」

「……………チッ」

つぐみに促されて渋々と入店してくる雄二。多少つぐみは翔子にジツと見られた。

「……………おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン。」

と、雄二にはアレンジした感じで出迎える翔子。

「おかえりなさいませ。今宵は楽しみましょう、ハニー」

と、これまたアレンジされた感じでつぐみも出迎えられた。

「え!？」

つぐみを出迎えたのは武藤だった。なぜだろうか、不明だ。

「霧島さんに武藤君、大胆です……!」

「ウチも見習わないとね……」

「見習わないでええよ」

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

4者4様のリアクション。

「お席にご案内いたします」

翔子が歩き出したので、明久達はその後ろ姿についていった。

「……ではメニューをどうぞ」

翔子から少し古めのメニューを渡された。

「ウチは『ふわふわシフォンケーキ』で」

「あ、私もそれがいいです」

「葉月もー!」

「なら、わっちも」

「あたしもそれで」

つぐみ達は仲良くシフォンケーキ。

「僕はメロンソーダとパンケーキで」

「んじゃ、俺は……」

「……ご注文を繰り返します」

雄二のは遮るように言う

「……『ふわふわシフォンケーキ』を5つ、『メロンソーダとパンケーキ』と1つ、

『メイドとの婚姻届』が1つ。以上でよろしいですか？」

「全然よろしくねえぞっ!？」

「落ち着いて坂本君!」

同様している雄二につぐみが慌てながら言う。

「……では食器をご用意致します」

女の子5人の所にはフォークが、明久の前にはフォークとナイフとストローが、雄二の前には実印と朱肉が用意された。

「しよ、翔子! これ本当にうちの実印だぞ! どうやって手に入

れたんだ!？」

「……では、メイドとの新婚生活を想像しながらお待ちください」

翔子は優雅にお辞儀をしてキッチンと思いき方向へと歩いて行った。

「……明久、俺はどうしても召喚大会に優勝しないといけないんだ……!」

「あ、うん。それはもちろん僕もそうだけど」

チーム違うのにやる気だされても困るといっつか複雑な明久だった。

「んで、葉月ちゃん。キミの言っていた場所はここで良かったかな?」

「うんっ。ここで嫌な感じのお兄さん2人がおっきな声でお話してたの!」

葉月が元気よく頷いた。

『おかえりなさいませ、ご主人様』

『おう。2人だ。中央付近の席は空いてるか?』

と、話している途中で新規のお客の声が聞こえてきた。聞き覚えのある声がして、聞こえた方を見てみると

「あ、あの人達だよ。さっき大きな声で『中華喫茶の料理はまずい』って言ったの」

声の主はさつきつぐみ達のクラスにいた妨害工作してきた常夏コンビだった。

『まったく、この和風喫茶は美味くて良いな!』

『全くだ。中華料理屋は不味くてしょうがねえ!』

わざと聞こえるように大声でそんなことを言い始める2人。

悪評を広めたいからといってここでする必要などあるのだろうか。これではこちらのクラスにも営業妨害となりそうだ。

「待て、明久」

連中を殴り倒しに行こうとしたところ雄二に止められた明久。

「雄二、どうして止めるのさ! あの連中を早く止めないと!」

「落ち着け。こんなところで殴り倒せば、悪評は更に広まるだけだ」

雄二の目が鋭く連中を睨みつける。

「けど、だからってこのまま指をくわえて見ているなんて……!」

「いや、やるなら頭を使えということだ……おい、翔子おー!」

「……何?」

雄二に呼ばれた瞬間に翔子登場。

「あの連中がここに来たのは初めてか？」

雄二は顎で例の連中を示す。すると、翔子は小さく首を振った。

「……さっき出て行ってまた入ってきた。話の内容もさっきと変わらない。ずっと同じようなことを言っている」

端正な顔を少し歪めていた。翔子にとっても愉快的な客ではないらしい。

「そうか……よし。とりあえず、メイド服を貸してくれ」

臆面もなく問題発言をする雄二。

「……わかった」

こちらにも迷いもない返事。

「あ、霧島さん。坂本君はメイド服の予備があったら貸してほしい
思っているのです。」

脱がなくていいですよ？」

「……そうなの？」

「はい」

つぐみはどこか不穏な空気に気づいて
とっさに雄二の手を掴んで接触感応をつかったらしい。
サイコメトリ

「……今、持ってくる」

翔子はつぐみの言葉を信じて去る。
しばらくしてメイド服を抱えて翔子が戻ってきた。

「……雄二、これ」

「おう。すまないな」

「……貸し1つ」

「だ、そうだ。明久」

「わかったよ。お礼に今度雄二を一日自由にしていいよ」

「……ありがとう。吉井は良い人」

「ちょっと待て！ どうして俺が！」

雄二の必死の抗議もむなしく、翔子は嬉しそうにその場を離れていった。

「で、これをどうするの？」

「……着るんだ」

「だって姫路さん」

「え？ わ、私が着るんですか？」

「バカを言つな。姫路が着ても攻撃なんてできないだろうが」

「それじゃ、美波？」

「島田でもない。それなら面が割れてしまつたろうが」

「……まさか」

明久は青ざめながら言つ。

「着るのはお前だ」

「違うやろ。着るのは坂本、あんさんや」

深紅は笑顔で言つ。

「は！？なんでだ！！」

「明久いじりもええかげんにせーよ？」

深紅は雄二の肩を持って言つ。

「あたしが行つてもいいよ？」

「いや、雨宮じゃ、身長が足りないし」

「あたしそこまでちっこくないよ！！」

つぐみは拗ねながら言つと明久は苦笑いする。

「てか、雄二に女装とか似合わないんじゃない？」

「そんなことあらひんよ」

「どづいづいとっ」

「今は秘密や」

深紅はそう言うたとスタンガンで雄二を気絶させて武藤に運ばせて更衣室に向かった。

その中で雄二の悲鳴が聞こえたとか。

第25話清涼祭・初日4（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第26話ユウちゃん誕生（笑）とチャイナドレス

「ククッ……ごっつう似合ってるぞ」

「神埼。お前な〜」

「貧乏クジを明久だけに引かせるんはよくないぞ」

「ふん」

「では、ワシは戻るぞい」

深紅が秀吉に連絡して着つけやメイクなどを数分でほどこした。

深紅は雄二を見て笑いながら言うと、

「さて、ユウちゃん。出番やぞ」

「ユウちゃん言うな！」

雄二の髪に合う鬘に体格にあったメイド服を着せて、どこからどうみても綺麗な美女にしか見えない姿になっていた。

深紅に怒鳴ると更衣室から出て、常夏コンビの元へ。

雄二の変わった姿に赤面する生徒続出した。

「お客様」

しずしずと歩き、ここのウェイトレスであるかのように声をかける。

ちなみに雄二の声は特殊な飴を食べて変えている。

「なんだ？ ……へえ。こんな子もいたんだな」

「結構可愛いな」

舐めるような視線で雄二を見る。まわりつく視線に雄二は気持ち悪そうだった。

「お客様、足元を掃除しますので少々よろしいでしょうか？」

「掃除？ さっさと済ませてくれよ？」

二人が席から立ち上がる。

「ありがとうございます。それでは失礼して」

「ん？ なんで俺の腰に抱きつくんだ？ まさか俺に惚れて」

「くたばれええっ！」

「じばああっ！」

バックドロップをきめた。

「こ、この人、今私の胸を触りました！」

「ちょっと待て！ バックドロップする為に当ててきたのはそっちだし、だいたいお前は…ぐぶあっ！」

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

明久は痴漢退治という大義名分を得て登場。

「何を見ていたんだ！？ 明らかに被害者はこっちだろ！」

「黙りいや。あんたがそのウエイトレスの胸をもみしだいていたのはこの周りの客が証人やで」

ケタケタと笑っている深紅は実に楽しそうだった。

「くっ！ 行くぞ夏川！」

「あ、ああ！！畜生、覚えてやがれ！！」

多分忘れていると思うぞ。そのまま常夏コンビは逃げだした。

「逃がすか！ 追っぞユウちゃん！」

「了解！ てか、その呼び方はやめろ！」

二人の後を追って明久と雄二も廊下を飛び出す。

「ところで雄二、ここの会計は？」

「姫路達に任せておけ！」

メイド服姿のまま走る雄二。そしてその写真を取る康太。
キミはいつのまにいたんだい？

『……………お会計は、夏目漱石を一枚か、坂本雄二またはユウちゃん
の一名のどちらかとなります』

『坂本雄二とユウちゃん一名でお願い』

『……………ありがとうございます』

この時雄二は千円で売り飛ばされた。

「二人して行っちゃった」

「わっちらも追いかけてようか」

「そうだね」

つぐみと深紅はお互いのパートナーを追いかけることにした。

迷路風お化け屋敷の前で待ってたら、雄二と明久が困っていたのが
見えた。

どうやら取り逃がして今は係員に何か言われているようだ。

深紅がため息をはいて係員に近寄ってお金を払うと四人で三回戦に
向かった。

「で、三回戦目は不戦勝だったんだよね」

「わっち等のもや」

慌てて会場に向かった三回戦。到着すると、待っていたのは相手の
棄権という拍子抜けの結果だった。

「ならば、済まぬがこっちの立て直しに協力してくれんか？」

「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやる必要があるしうだな」

教室の中は相変わらず空席だらけ。悪評の元は断ったはずだが、流れた噂はどうしようもない。

「ふむ。それで何をするか、じゃが……」

「雄二、つぐみ、何かアイディアはある？」

「あたしはないかな。ごめんね、アキ君」

「任せておけ。中華とこれでは安直過ぎる発想だが、効果は絶大なはずだ」

そう雄二が言うと白と水色のチャイナドレスを取り出した。

「どこから取り出したの！！？」

「ほう。若干裾が短いような気がするが、これならばインパクトはあるじゃろうな。

これを宣伝用に……」

「スルーなの！！？」

「落ち着きいや、つぐみ」

さきほどからツッコミをいれているつぐみを宥める深紅。

「ああ。これを……」

「坂本君が着るのですね」

「それはインパクトがありすぎるんじゃない？」

晃希は雄二を見てからかい半分に言つと透も楽しそうに笑つて言つ。

「勘弁してくれ……！」

「冗談ですよ」

「そうそう、冗談だつて」

この二人は雄二をからかっているようだ。

「そ、そうか良かった。とにかく、これは姫路と島田と久蘭と堂島と雨宮と神崎と秀吉に着てもらおう」

「ワシが着るのは冗談じゃないのかのう……？」

「あたしと智美ちゃんと深紅ちゃんと由香里ちゃんと、か」

「わっちは別にええけど」

「わたしも」

「……嫌……だけど……頑張る」

秀吉はチャイナドレスを持ってため息を吐くとつぐみは困っていたり、
深紅と智美は平然で由香里は嫌そうだったが、頑張ることにきめたらしい。

「たっただいま〜！」

「ただいま戻りました〜」

「ただいまです〜！」

「お、良い所に」

「姫路に島田、クラスの売り上げのために協力して貰うぞ」

「な、なんだか2人とも、目が怖いですよ……………」

「凄く邪悪な気配を感じるんだけど……………」

「やれ、明久！」

「オーケー！ へっへっへ、おとなしくこのチャイナ服に着替え」

「アキ君ダメだよ!？」

つぐみは明久に近寄って言う。これには明久もたじたじのようだ。

「どうしてまた、急にそんなことを言い出すのよ？」

前に須川はチャイナドレスを着たりすることはない、って言ったとおもっけど」

「店の宣伝の為と明久の趣味だ」

「坂本くん!!」

つぐみは雄二を睨んで言う。どうやら機嫌をそこねたようだ。

「し、仕方ないわね。店の売上の為に仕方なく着てあげるわ」

「そ、そうですね！ お店の為ですしね！」

瑞希と美波はそれぞれの服を手取る。

「お兄ちゃん、葉月の分は？」

「え？ 葉月ちゃんも手伝ってくれるの？」

「お手伝い？ あ、うん！ 手伝うから、あの服葉月にもちようだ
い！」

「けど、ごめんね。 気持ちは嬉しいんだけど、葉月ちゃんの分は
数が」

「……………!! (チクチクチクチクチク」

「ム、ムツツリーニ！ どうしてそんなすごい勢いで裁縫を!?
っていつかさっきまでいなかったよね!？」

「……………俺の嗅覚を舐めるな」

セリフだけなら、カツコイイが。凄くカツコ悪い気がする。

「それじゃ、3回戦が終わったら着替えますね」

「いや、今着替えてもらいたい」

「「え？」」

「宣伝のためだ。そのまま召喚大会に出てくれ」

ということとはつぐみもその格好のままでないといけないわけだ。

「坂本君、念の為に聞くけど。それって、あたしと深紅もそうだよ
ね」

「わっちはええよ。着てても」

なんとまあ、深紅らしい一言だ。つぐみは戸惑っているが。
深紅が着るなら覚悟を決めるしかないようだ。

「こ、これを着て出場しろって言うの……？」

「流石に恥ずかしいです……」

「二人ともお願いだ」

明久はそう言うと頭を下げる。

「わかったよ」

「「つぐみ!? (つぐみちゃん!?)」」

「つぐみ、ありがとう!」

「アキくんの為だからね」

つぐみは笑顔で言うと明久は嬉しそうだった。

「仕方ないわね。協力してあげるわ。ね、瑞希?」

「あ。は、はいっ! これくらいお安い御用です!」

快く瑞希も快諾する。

「それならスグに着替えて会場に向かってくれ。

大会では自分たちの所属がFクラスであることを強調するんだぞ」

「オツケー。任せていて。行くわよ瑞希、つぐみに深紅に由香里に智美」

「はいっ」

「うん」

「ほいな」

「……」(「コケン」

「ええ」

瑞希と美波と深紅と由香里と智美はチャイナドレスを抱えて教室を出て女子更衣室に向かった。
つぐみは葉月と秀吉を待っていた。

「……………できた」

「わ、このお兄さん凄いです!」

「あ、葉月ちゃんと木下君もこっちだよ!」

「はあい!」

「納得いかんのじゃ」

葉月は元気に秀吉は渋々といった感じで待っていた。つぐみの所に行き、更衣室に向かった。

第26話ユウちゃん誕生（笑）とチャイナドレス（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第27話チャイナドレスにご注意を！（前書き）

ヒヨウガさま、とーあさま、FOOLさま、レインさま、蒼
さま、光闇雪さま、あづまさま

感想ありがとうございます！

第27話チャイナドレスにご注意を！

「着たけど」

「やっぱり恥ずかしいです」

「つぐみちゃんは葉月とおそろです」

「あはは（苦笑）」

「チャイナドレスなんか着て、本当に効果あるんやろうか」

「知りませんわ」

「……恥ずかしい」

それぞれチャイナドレスを着て戻ってきた。

青色のチャイナドレスが美波で赤色が瑞希と秀吉。

ピンク色のチャイナドレスが葉月ちゃんでおレンジ色がつぐみだ。

つぐみの小柄な体に似合わない胸のボリュームが凄い。

由香里と深紅と智美のチャイナドレスは紫色の奴で少し丈が短い。

「……！！（ブシャアアア！！）」

「……！！（ブシャアアア！！）」

康太は女性陣のチャイナドレスを見て鼻血を噴き出し、

心は由香里のチャイナドレスに鼻血を噴き出して倒れた。

「心！ムツツリー二！！」

明久が倒れた二人に駆け寄る。

「来たばっかで悪いが早速ウェイトレスをやってくれ」

「はい」

「わかったわ」

「ほな、頑張るどす」

「恥ずかしいよ」

「…心…？」

つぐみ達はそれぞれの反応で言うど業務に戻る。

由香里だけは心の心配をしていた。

「ご注文は決まりですかあ？当店は胡麻団子がおススメですよ！」

「そ、それじゃ……」

ゴクッ

男子達は生唾飲んで瑞希の胸を見ながら

「……肉まんを二つ」

そして、美波の方では

「お待たせしました！ゴマ団子2皿とウーロン茶2つになります」

と、美波が言ってもお客は姫路の（胸の）方がばかり見ている。

秀吉もチャイナドレスで注文票を持って歩いている。
こちらにも視線が集まっている。

頑張っている葉月に

「僕らの為ありがとうね、葉月ちゃん」

「ううん。葉月も楽しいもん！それに、お兄ちゃんが愛してるって
言ってくれたし」

ピキッ

「瑞希ちゃん、美波ちゃん！いいかげんにしなさい！」

明久に襲いかかろうとしてる瑞希と美波につぐみが怒って言う。

「つ、つぐみちゃん」

「雨宮、だって」

「だって、じゃない！どうして、二人はいつもいつも。暴力するの
！？」

つぐみは小柄な体にあつたチャイナドレス姿で腰に手を当てて怒つて二人をたしなめながら言う。

「それは、アキが」

「吉井君が」

「いいわけ無用！アキ君にしたことをもし自分達がされたらどうするの？」

つぐみは二人を睨んで言う。二人は沈んだ表情になる。

「「ごめんなさい」「

「謝るのはあたしじゃなくてアキくん！」

「え、いいよ。つぐみ！」

「そつだぞ、雨宮、誤解させるような言い方する方が」

「ゆっぴーになりたいか、坂本」

「……遠慮する」

透は雄二の後ろに現れて言うと雄二は青ざめて黙り込む

「……心……大丈夫？」

「だ、大丈夫ぜよ／＼／」

チャイナドレスの由香里を直視できていない心。

「写真は禁止やで〜」

「お触りもですわ」

最強コンビの深紅と智美が笑顔で言うと写真取るうとしていた輩が土下座していた。

晃希は厨房で料理をしていた。康太の代わりにはいったのだろう。

そして、瑞希と美波が召喚大会に行った後。

「雄二。僕と秀吉と葉月ちゃんをつぐみで回ってくるよ」

「そうか、気をつけていけよ?」

「何かあったら言うぜよ」

「……………駆けつける」

「うん、じゃあね」

明久達に残った雄二達が言うと明久は頷いて歩き出した。

「……………何事もないとええけど」

深紅は一人考え込んで呟いた。長年の直感だろうか、それとも彼女の仕事の感かもしれない。

「たっただいまー」

「ただいま戻りました」

「丁度良かったよ。四人とも疲れているところ悪いけど、ホールに回ってくれる？」

二人がああ騒動を終えて大会に向かった後、チャイナドレスに着替えたとつぐみと秀吉と葉月を連れて明久は校舎内を歩き回った。

最初はあまり効果がないような気がしたが、店にいた客から聞いた情報もあるのか、じよじよにお客さんが増えて行き、瑞希達の勝負が終わったと思われる時間ぐらいから、大分席が埋まり始めた。今の所は順調だと言えるだろう。

第27話チャイナドレスにご注意を！（後書き）

つぐみ「感想と評価をお待ちしております！」

今回はバニーガールつぐみであとがきに登場です

深紅「似合いすぎてゐるわ」

次回もお楽しみに！

第28話チャイナドレスで順調かな？（前書き）

光闇雪さま、 F O O Lさま、 レインさま、 まいくさま、
ヒヨウガさま

感想ありがとうございます！！

第28話チャイナドレスで順調かな？

「良かった。段々持ち直してきたのね」

「良かったです」

「女性客も増えているみたいだね」

「きつと味についての噂がもっと広まっているんだろうね」

「これなら、安心だね」

飲茶とゴマ団子の味は絶品で段々チャイナドレス目的の人物は少なくなっているはずだ。

活気を取り戻した教室を見回して少し安心する。

「それじゃ、2人ともウエイトレスをやってくれる？」

「はいっ」

「オッケー」

チャイナドレスの裾を翻して2人は注文票やペンを取りに行った。

「君。注文してもいいかな？」

「あ、はい。どうぞ」

つぐみは相手に失礼のないように注文票を構える。

「本格ウーロン茶と、胡麻団子を」

「かしこまりました。本格ウーロン茶と胡麻団子ですね？」

メモを取り、注文内容の確認の為にお客さんに顔を向けると教頭だった。

「ありがとうございます。後で後ほどお持ちしますので、少々お待ちください」

「それと聞きたいことがあるんだが、いいかね？」

「はい。なんでしょうか」

決まり文句を言って厨房に向かおうとすると足を止めて振り向く。

「このクラスに吉井明久という生徒がいると聞いたのだが、どの子かな？」

教頭が何を考えているのかつぐみは少し精神感応してみることにした。

「吉井明久君ですか？すぐにお呼びしますね」

「ああ、頼むよ（ガキの癖に大人びた振りしてるな）」

心の声を聞いて少し後悔した。とてつもない陰気なオーラーが凄いからだ。

精神感応テレパスを止めると明久に近寄って教頭が明久に用があると伝えて
厨房に向かった。

明久は教頭の方に向かい、話を聞きに行く。

「えっと、僕が吉井明久ですけど」

「ああ、そうかい。君が吉井君（笑）か」

「教頭先生。人の名前に（笑）はおかしいかと思えます」

「ああ。すまない。だが、私はどうしても教え子である君の事を吉井君（馬）とは呼べなくてね」

「あの、僕は職員室ではなんて呼ばれているんですか……？」

つぐみは康太に頼まれたことを言いに行く。

「アキ君、厨房の土屋君から伝言。茶葉がなくなったから持ってきて欲しい、だって」

「ん、わかったよ。先生、ちょっと行ってきてもいいですか？」

「構わんよ。特に用があったわけではないのでね」

「？ そうだったんですか」

明久は不思議そうに言うと考えていた。

「アキ君、土屋君が急いで欲しいって言ってたよ？」

「あ、うん。行ってくるよ」

明久がそう言うのと教室から出る。

それを見送るとつぐみは教頭の前に注文した物を置くと、『じゅっく
り』と言って去って行く。

「あれ、坂本君どうしたの？」

「茶葉の他に餡子も急いで持ってくるように言われたんで行ってくる」

「そっか、気をつけてね？」

「？ ああ」

雄二はそう言うのと出て行く。

それから、数分後、茶葉と餡子を抱え、喫茶店へと戻ってきたの明久と雄二に近寄る。

「酷い目にあつた気がする」

「しっかし、あいつらなにがしたかったのやら」

「お疲れ様」

「なあ、もしかして」

「少しだけ、読んだから、わかつたんだけどね」

雄二の問いは言われなくてもわかってる。つぐみは頷いて答える。その後、再び業務に戻って作業していたら、四回戦目の時間となった。

「つぐみ、そろそろ。行くうか」

「あ、うん」

「あれ？アキ達もそろそろなの？」

「そうなんですか？ 私達もそろそろ出番なんですよ」

瑞希と美波のトレイを置いている。

「お兄ちゃん、葉月を置いてどこか行っちゃうの？」

そう言って明久のズボンの裾を握って言う。

「チビッ子。バカなお兄ちゃんは今から大切な用事があるんだ。だから大人しく待っていないとダメだ」

雄二が葉月の頭をグシグシと撫でる。

ここは上手に説得するのか。

「う〜。でも……」

不満げに頬を膨らませる葉月。

「その代わり、良い子にしていたら……」

そんな彼女を元気づけるように、雄二は小さく微笑んで、

「バカなお兄ちゃんがオトナのデートを教えてくれるからな？」

「坂本君、何言ってるの！！」

「なんでだ、これの方が効果的だろ？」

「それでも、アキ君に被害が及ぶことはダメ！」

「は？被害って」

「葉月お手伝いしてくるですっ！」

「ち、違うんだよ。葉月ちゃん！ 僕には君が期待するような財力はないんだ！

ねえ、聞いている！？」

凄い勢いで去っていく葉月に声をかけるが、もう厨房に消えていた。

「アキ、ちょっと校舎裏まで来て？」

「美波ちゃん、ちょっと待ってください」

「そっだよ、待ってよ！！」

「次の対戦相手は吉井君達のようなのですから。召喚獣でお仕置きした方が遠慮なくできますよ？」

「それって死刑宣告だから！二人とも本当にアキ君が好きなの！？」
つぐみは二人の態度に呆れながら言う。

「な、何言ってるのよ！！それは」

「そ、そうですよ！好きとか…その」

「好きならなんでも暴力とかは止めてよ」

瑞希と美波は赤面して慌てながら言う。つぐみは沈痛な面持ちでそう言った。

「雨宮……悪い」

「そう思うなら、アキ君いじるの止めて」

自分が爆弾発言したせいで不穏な空気になると謝る雄二につぐみはまっすぐ見つめて返す。

いつも何かを押さえて姫路と美波のやり方を止めるつぐみ。本人の気持ちはまだわかってない。

そんな騒動があつた中で召喚大会に向かった。

第28話チャイナドレスで順調かな？（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第29話召喚大会四回戦（前書き）

蒼さま、 光闇雪さま、 ヒョウガさま、 FOOLさま、 秋雨さま、
レインさま、 リザクさま、 あづまさま、 まいくさま！

感想ありがとうございます！！

第29話 召喚大会 四回戦

『それでは、四回戦目を始めたいと思います。出場者は前へ』

マイクを持った審判の先生に呼ばれて、つぐみ達四人はステージへと上がる。

外部からの来訪客の為に作られた見学者用の席。

それらはほぼ満席といった状態でつぐみ達の四回戦が始まる。

「なるほど、これなら宣伝効果も抜群だね」

「うう」

「つぐみ……恥ずかしいの？」

「そうだよ。だって似合わないし」

つぐみは服の裾を押さえながら言う。チャイナドレス姿が異様に似合うつぐみ。

これでファンがまた増えるのだろうか。

「そうかな」

「そうだよ」

「つぐみちゃんのお持ちわかります。やっぱり恥ずかしいですよ」

「そ、そうよ。ウチ等だけじゃ、不公平よ。アキもメイド服着てきなさいよ」

いや、不公平と思うのは美波だけだと思われる。というか、どこからいたつたら明久の女装に向かうのかぜひ知りたい。

この会場に訪れている男の視線を瑞希と美波とつぐみの三人が集めている。

「僕がメイド服なんか着たらFクラスの評判が下がっちゃうよ。もし姫路さんのお父さんが見に来たりしていたら困るじゃないか」

「え？ お父さんは決勝戦になったら見に来るとは言っていましたけど……。」
「どうして吉井君がそのことを？」

「あ、ほら。瑞希ちゃんが活躍するなら、家族の人はきっと見に来るんじゃないかと思っただけだよ！」

「そうそうー！」

慌ててつぐみがフォローする。

『四人とも、そろそろいいですか？』

先生がマイクを片手に苦笑いをしていた。

「あ、はい。それじゃあ……。」

大きく息を吸い、召喚獣を呼び出す。

「……試獣召喚！」サモン」

つぐみら四人の声が綺麗に揃い、それぞれの足元に魔方陣が現れた。この様子だけで観客席から小さな歓声があがる。この試合から見始めた人に見れば、

これだけでも十分に物珍しい光景なのだろう。

そして、本命の召喚獣が姿を現す。相変わらずのデフォルメサイズで、見た目は愛嬌たっぷりだ。

『では四回戦を……』

審判の向井先生が開始宣言をしようとして、

「ちょっと待ってください」

「……はい？ 何かありますか？」

氣勢をそがれた形になり、先生は若干不満そうな顔していたが、明久はおかまいなしに続ける。

「すいませんが、少しマイクを貸してください」

「かまいませんよ」

「ありがとうございます」

明久はマイクを受け取ると

『清涼祭にご来場の皆様。こんにちは』

と、突然挨拶を始めた。それにつぐみは気づくと

(瑞希ちゃん、美波ちゃん。　こっちに並んで。アキ君が宣伝するつもりみたい)

(え？　あ、はい)

小声で二人を呼び、お客さんに向かい合うように整列する。

『ここにいる。僕等四人は、本格飲茶を提供する2・Fの中華喫茶で働いています。』

このように可愛い女子も一生懸命頑張っていますので、よろしければどうぞ。

お立ち寄りください』

明久が丁寧にお辞儀をする。その動きに合わせてつぐみ達も大きくお辞儀をした。

「……よろしくお願いします!」「」「」

ついでに召喚獣もぺこり、と動きを揃えさせる。

「先生、マイクをお返しします」

軽く頭を下げて先生にマイクを手渡す明久。

『……ということだそうです。ご見学の皆様、お時間に余裕がありましたら、出場選手たちの

いる。2・Fに立ち寄ってみてください』

先生が苦笑いしながらもつぐみ達の宣伝に協力してくれる。

『さて、それではCMも終わりましたし、いよいよ召喚大会の始まりです。Fクラスの四人とも、良い試合をお願いします』

そう告げると向井先生はつぐみ達から少しだけ距離を取った。

「アキにつぐみ。ここまでよく勝ち残ってきたわね。でも、ウチらも勝てるとはさすがに思っていないでしょう?」

「甘いね、美波。確かに美波達は優勝候補だけど、それ故に勝ちあがってくることは簡単に予想できた

。それなら、対策はいくらでも打てるというものだよ」

明久はそう言うのと大型ディスプレイを指さし、自信満々に応えた。

『Fクラス 姫路瑞希 古典 399点 & Fクラス 島田美波
古典 6点』

「こ、古典!? 四回戦目は数学じゃなかったの!？」

狼狽する美波。ドイツ帰りの彼女に古典は鬼門なのだ。

「美波達に渡した対戦表だけど」

「実はアレ坂本君の手作りなんだよ(汗)」

明久の点数ではかなり難しいと認識した雄二は使用科目にはちよっ

と手を加えた対戦表を渡したのだ。

「ごめんね、止めたんだけど。」

「つぐみ、知ってたなら教えてくれても」

「あー、その、ね。教えてもらうの遅かったの」

つぐみは苦笑いしながら美波の謝る。

その様子をよそに、ディスプレイに明久達の点数も表示される。

『Fクラス 吉井明久 古典 110点 & Fクラス 雨宮つぐみ 古典 230点』

「……アキ君」

「こ、これでもつぐみの作った奴で勉強したんだよ？」

「……頑張りは認めるよ」

「……ありがとう」

すぐくいたたまれない雰囲気満ちた。

「アキ君は美波ちゃんの相手をしてね」

「え、つぐみは姫路さんの相手をするの？」

「そっだよ？」

「僕がするよ？操作性がある方がなんとかできると思っし」

「大丈夫だよ」

「……無理しないでね？」

「うん」

つぐみは明久を安心させる笑顔で言うと召喚獣を動かす。

「羨ましいです」

「そうよね、アキに心配してもらえるなんて」

「二人がお仕置きしなければ、アキ君が心配してくれると思っけど？」

「う（汗）」

事実なのだから、なんともいえない二人であった。

二人の後ろにある阿修羅が沈んでいくのが目に見える。

「とりあえず、行きます！」

瑞希の召喚獣が一撃で間合いに迫る。流石学年次席、今までのどの相手よりも動きが早い。

「おっととー！」

本当にギリギリの所で攻撃を避ける。200点あるからといっても彼女の方が点は高い。

「アキ！卑怯よ！」

「ごめんね！あんまり長引かせたくないんだ！」

明久の方では美波が一撃でやられていた。

「美波ちゃん、早いです！？」

「よそ見はダメだよ？瑞希ちゃん」

「あ、しまっ」

「卑怯だけど、ごめんね！ てやつ！」

つぐみの召喚獣のキャラットボタンで剣を弾かれて、剣は床にささる。

そこを見逃さずに瑞希の剣を明久の召喚獣が持って瑞希の召喚獣を切り裂いた。

追い打ちで瑞希の召喚獣をつぐみの召喚獣のボタンで弾き飛ばされた。防御もしていなかったので戦闘不能になった。

『あ〜……え〜と……』

形容しがたい展開に向井先生が困っている。

『と、とりあえず。吉井&雨宮ペアの勝利です』

これで四回戦目が無事に終わった。

「ひきょうもの」

「二人とも酷いです」

「ごめんね。でも、勝負だし」

明久は苦笑いしながら二人を宥める。

「（美波ちゃん達は喫茶店で専念してくれないかな。優勝はあたし達がするし）」

「（そりゃ、アキ達が優勝した方が瑞希のお父さんの印象はいいだろうけど...）」

瑞希に聞こえないように美波の手を掴んで接触感応と精神感応で会話を話す。

一方明久の方では

「あの、絶対に優勝してくださいね………?」

「もちろんだよ。絶対優勝する。全部うまくやってみせるさ!」

どこか親密な空気が満ちていたとか。

そんなこんなで数十分して教室にたどり着いたのだった。

第29話召喚大会四回戦（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第30話チャイナドレスは魅了効果？（前書き）

F O O Lさま、 吹き抜ける風さま、 光闇雪さま、 祐介さま、
蒼さま、 レインさま！

感想ありがとうございます！

第30話チャイナドレスは魅了効果？

途中で雄二達と合流して、Aクラス設備のFクラスの教室に向かった。

「あ、なかなか盛況だね」

「そうだね。結構いい感じだね」

「良かった。宣伝効果があったみたいですね」

「そうでなきゃ、こんな恥ずかしい格好で大会に出た意味がないものね」

「わっちは楽しかったえ」

「神埼だけだろ（汗）」

我等がFクラスには結構な数のお客さんが入っていた。

「ただいま」

「あつ、バカなお兄ちゃん！ お客さんがいっぱい来てくれたんだよっ。」

葉月が明久達の姿を認めて、店の中からトトトツと駆け寄ってきた。

「…………身長…高い」

「つぐみもおつきくなれるって！」

「そうですね！！」

落ち込んでいるつぐみを励ます瑞希と美波だった。

「そうですね。葉月ちゃん、お手伝いどうもありがとうね」

「んこゃ〜……」

明久が葉月の頭を撫でると葉月は気持ちよさそうに目を細めている。本当に猫みたいでかわいい。

『お、あの子たちだ！』

『近くで見ると一層可愛いな！』

『手伝いの小さな子も可愛いし、レベルが高いな！』

『グラマラスな子も可愛いな！』

『ロリっ娘も可愛いぞ！』

と、お客のなかからそんな声があがる。チャイナドレスは男を惑わす効果があるようだ。

「明久。戻ってきたようじゃな。どちらが勝ったのじゃ？」

秀吉がトレイを片手に寄ってくる。

「明久君達です」

「そうね、アキ達の勝ちね」

「なんだろう、二人からの視線が怖い（汗）」

「何かあったか聞かない方がいいようじゃのう」

秀吉は瑞希と美波のオーラーに苦笑いしながら言う。

「そんなことよりも、数少ないウェイトレスが固まっていたら客が落胆するぞ。今は喫茶店に専念してくれ」

お客さん達の視線がこつちに随分と集中している。ところどころで由香里と智美を見ている客がいるが、由香里に関しては心が完全防備していた。

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね」

「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りますか！」

「はいっ。葉月も頑張りますっ！」

「あたしも頑張るよっ！」

「適当に頑張るえ」

「……………ワシは一応男なのじゃが……………」

「秀吉。絶対に性別をバラしちゃダメだからね？」

「頑張ってください。木下」

「俺等も頑張るしな」

楽しそうに晃希と透は笑って秀吉に言っていると、新規のお客さんが入ってきた。

「やれやれ、癪じゃが。仕方ないのう…。あ、いらっしやいませー
！中華喫茶へ、ようこそー！」

新規のお客に秀吉は演劇魂で相手をしていた。

「さて、俺達も突っ立ってないで手伝うか」

「ん、そうだね」

「そうですね」

「おう！」

明久と雄二と晃希と透も喫茶店を手伝う為に用意されたエプロンを身につけた。

心もすでに手伝っているが、由香里が気になる様子だった。

「それじゃ、準決勝に行つて来るね」

「はい。頑張ってくださいね」

「アキ、負けたら承知しないからね！」

「わかってるって」

喫茶店の中で動き回ることに1時間。いよいよ、準決勝の時間となった。

「わっち等の相手は木下の姉と霧島のコンビやね」

「神埼。この試合は絶対負けられないからね」

雄二の目の色が今までとは比べ物にならないほどマジだ。

「あたし達の相手は三年生の先輩だったよね」

「難しいかもしれないけど、頑張ろうよ」

「うん」

四人で準決勝の会場に向かう。

第30話チャイナドレスは魅了効果？（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第31話準決勝（前書き）

あづまさま、 蒼さま、 ヒョウガさま、 光闇雪さま、 レイン
さま！

感想ありがとうございます！

第31話準決勝

深紅視点)

『お待たせいたしました！ これより準決勝を開始したいと思います！』

深紅等が到着すると、審判を務める先生のアナウンスが流れた。

どうやら、ギリギリだったようだ。

明久達の方もちゃんとたどり着いただろうか？

『出場選手の入場です！』

まるで格闘技の入場みたいやねと思いつつながら深紅達はお客さん達の前に立つ。

その向かいからは霧島と木下がやってきた。

「……雄二。邪魔しないで」

「そうはいくか。俺にはまだやりたいことが沢山あるんだ！」

「……雄二、そんなに私と行くのが嫌？」

霧島の上目遣い、普段クールな女の子がやると威力は無敵大らしい。

「ああ、無理やりな結婚は嫌だ」

「……無理やりじゃなければいい？」

「まあ、な。だが、付き合い始めたばかりなんだから、ゆっくりいけばいいだろ」

「なんや、ちゃんと考えてんやね」

「意外ね」

坂本の言葉に深紅と優子は笑って言うとなぜか、深紅は霧島に睨まれた。

「わっちは霧島から坂本を取る気はないから、安心」

「神崎さん。今の代表は聞いてないわ（汗）」

深紅は優子の言葉に苦笑いする。もの凄い敵意を感じているらしいがそろそろ準決勝が始まる。

「頼むぞ秀吉っ！」

「……ふふっ」

「ああ、そういうことやね。坂本、作戦は失敗してるで」

「は!?!」

驚いた雄二にステージ脇の一角を指す。

ポロポロにされた拳句手足を縛られた秀吉の姿があった。

「ば、バカな！」

坂本が目を大きく見開いて叫ぶ。この作戦は失敗のようだ。

「……………雄二の考えていることくらい、私にはお見通し」

霧島が坂本を見て笑みを浮かべた。

「ま、匿名の情報提供もあつたけどね」

木下の妙な言葉に深紅は目を細めた。自分達をマークしていないと情報はわからないはずだからだ。

「く……………すまぬ、雄二。ドジを踏んだ……………」

倒れていた秀吉が起き上がり、申し訳なさそうに唇を噛んでいる。

「……………！！（パシャパシャパシャパシャ！）」

「土屋、いつの間にかいたんや？」

カメラを構えた土屋が坂本の傍に出現していた。その様子を呆れながら深紅は思ったとか。

「とうるか、撮影なんかしてる暇ないやろ。秀吉の縄をほどいてやらひんか」

「……………了解」

小さく頷くと、土屋は素早く秀吉に駆け寄ってその縄を解いていた。

「大人しくギブアップしてくれると嬉しいな。弱いものいじめは好きじゃないし」

「くうっ…！」

木下の降伏勧告に坂本が顔を歪める。その様子に深紅はため息を吐くと秀吉にアイコンタクトする

「霧島、ちよつとええか」

「……何？」

深紅が話かけると警戒したように霧島は聞いてきた。

「坂本がな、大事な話があるんやて」

「な！神崎、てめー！！」

「煩いえ」

「くへっ！？」

スタンガンで坂本を気絶させると、倒れないようにささえて

「ふう、これでええな。聞いてくれるえ？」

「……わかった」

霧島がそう言つと秀吉に合図をする

「翔子、俺の話を聞いてくれ」

秀吉は頷くと坂本の声でしゃべる

「お前の気持ちは嬉しいが、俺には俺の考えがあるんだ」

「……雄二の考え？」

「俺は自分の力でペアチケットを手に入れたい。

そして、胸を張ってお前と幸せになりたいんだ！」

「……雄二」

霧島はうつつとした状態で坂本を見ている。

「だからここは譲ってくれ。そして、優勝したら結婚しよう。愛してる、翔子」

「……雄二。私も愛してる……」

「ま、待て……、俺は愛してなど……こぺっ!？」

素直になれない坂本に再びスタンガンを当てて気絶させる

「さて、後は木下だけやね」

「ひ、卑怯な……!」

「なんとも言えばいい」

深紅は心底楽しそうに笑う。霧島は坂本の亡骸に抱きついて、胸元に顔をうずめている。

「でも、アタシ一人でも神埼さんには負けないはずっ！ 行くよ…
…試獣^{サモシ}召喚っ！」

「ふふっ。それはどうかえ？ この勝負の科目はわっちにとっては
苦手科目やないんやから」

坂本が元から考えていた通りなのでそのまま実行する。

「いくでっ！ 試獣^{サモシ}召喚っ！」

「アタシより、上!?!」

『Aクラス 木下優子 保健体育 321点 & Aクラス 霧島
翔子 保健体育 UNKNOWN』

『Fクラス 神埼深紅 保健体育 400点 & Fクラス 坂本
雄二 保健体育 UNKNOWN』

「今回はええ点いけたんよ」

「これも作戦なわけ!?!」

「そうなるえ ほな、さいなら」

赤いドレスをまとった深紅の召喚獣が木下の召喚獣を切り裂いた。

「わっちらの勝ちやえ」

笑顔で深紅が言うと

『えーと、若干卑怯な気がしましたが。坂本&神埼ペアの勝利です』

これでも歓声があがるのだから、不思議だ。

深紅は秀吉と土屋を連れて教室に引き返すことにした。

「神埼。なかなかの機転であつたな」

「……作戦勝ち」

「二人のサポートのおかげや」

深紅が明るい笑みでニカツと笑うと頬を赤らめて二人は視線をそらす。

「と、ところで、雄二をあのままにしておいて良いのか？」

「え？ 別にいいんじゃない？」

「そうか。神埼がそう言うのであれば良いのじゃが」

「坂本も素直になればええんよ」

「霧島が雄二に一服盛って持ち帰ろうとしておったので心配になったの」

「き、霧島！ 坂本は決勝もあるから薬は許してあげてーな！」

引き返した先に見たものは虚ろな目をしてタキシードに着替えている坂本の姿があった。

所変わって

「つぐみ、頑張ろうね」

「うん、フォローは任せて！」

二人で頬笑みあって試合会場に入った。

「やっぱり、常夏コンビだね」

「あはは（汗）」

「お前等がここまで上り詰めるとはな」

「あたし達にはしないといけないことがあるんです。だから、勝ちます！」

でも、その前に聞きたいことがあります。」

「なんだ？」

「どうして営業妨害などするんですか？」

つぐみはまっすぐ先輩を見つめて聞いた。

「てめえはバカか？」

お前等みたいなお屑クラスがAクラスに勝ったとはいえ、屑なのは代わりないんだよ」

「それにまぐれだろ？」

「まぐれじゃないです！実力です！！！」

「うるせえっ！」

「もういいよ。つぐみ」

「でも」

「このわからずやには僕等の実力を見せてやればいいよ」

明久はつぐみの頭を撫でて言うつつぐみは小さく頷いた。

そして、試合開始の合図に明久達は召喚する。

「「「「^{サモン}試獣召喚！」「」「」」」

『3年Aクラス 常村勇作 保健体育 210点 & 夏川俊平
保健体育 193点』

V S

『2年Fクラス 吉井明久 保健体育 89点 & 兩宮つぐみ
保健体育 189点』

「さすが、三年だね。成績もいい」

「でも、負けられないよね」

明久の召喚獣は木刀を構えて、つぐみの召喚獣はキャロットバトン
を構える。

夏川が動くとき明久が動き相手の召喚獣を翻弄する。

「ほいさ！」

「くっ！あたらねー！！」

なんだろうマトリクスのように避けているように見えます。

「嬢ちゃんに恨みはねーが、ここで消えろ！」

「嫌です！」

つぐみは召喚獣を動かして相手の攻撃をなんとか避けて、相手の召
喚獣の胴体をキャロットバトンを剣に組み替えると切り裂いた。
当然相手の召喚獣は戦闘不能に。

隣を見ると

「つぐみにどなったこと後悔しろー！！」

「ぐっ！素早い！！」

明久の召喚獣は素早い動きで常村の召喚獣の喉を突きいれて勝敗がつく。

「勝者、吉井&雨宮ペア！」

「やったね！」

「うん！」

二人でハイタッチする。こちらでは凄い拍手の嵐が巻き起こる。この後つぐみ達は教室に引き返した。

第31話準決勝（後書き）

感想と評価をお待ちしております!!

第32話誘拐事件〜深紅と心の暴れモード（前書き）

ヒヨウガさま、 光闇雪さま、 レインさま、 蒼さま、 FO
OLさま！

感想ありがとうございます

第32話誘拐事件〜深紅と心の暴れモード

つぐみが明久と別れて、喫茶店に戻ると、瑞希達を連れていこうと
してる不良を発見する。

「瑞希ちゃんにみんな!？」

「ちっ」

ゴスッ

「あっっ!」

この事態につぐみは戻ろうとするともう一人の不良に腹部を殴られ
て気絶し、

深紅視点)

「神埼。今日という今日はお前をコロス」

「あはは、あんたにできるかえ?」

わっちはクスクスと笑って言うと明久は苦笑いする。

そして深紅達が喫茶店に戻ると、ドアの前に居たムツツリー二が近
寄ってきた。

「……ウェイトレスが連れて行かれた」

「ええ！？ 姫路さん達が！？」

「いけすかない連中やね」

この時、

わっちが不良共に恐ろしい目にあってもらおうと考えていたのは内緒や。

「わしは助けに行くぜよ」

「もしかして、久蘭さんも連れていかれたの！？」

「中岡が席をはずしている隙をねらったようです」

「とんでもない事するな」

堂島と狩谷も不機嫌そうに話します。

「……………行き先はわかる」

と、土屋が取り出したのは何かの機械。

「何かのラジオみたいに見えるけど」

「……………盗聴の受信機」

「これで居場所がわかるんやな」

「なら、わしと神埼とで先に行つとくぜよ」

心が突然そう言うと深紅は不敵に笑って雄二達の声も気にせず走って行く。

カラオケボックスに着くと、盗聴器の声を拾う。

『さてどうする？ 坂本とー！吉井だっただか？』

そいつら、この人質を盾にして呼び出すか？』

『待て。吉井つてのは知らないが、坂本は下手に手を出すとマズい。今はあんまり聞かないが、中学時代は相当鳴らしていたらしいからな。』

『坂本つて、あの坂本か？』

『ああ、できれば事を構えたくないんだが……』

『気持ちは分かるが、そうもいかないだろ？ 依頼はその2人を動けなくすることなんだから』

深紅達が受信機から聞いていると明久と雄二と康太と晃希と透も来た。

『お、お姉ちゃん……』

『アンタたち！ いい加減葉月を放しなさいよ！』

『お姉ちゃん、だつてさ！ かつわいいー！』

『ギャはははー！』

吐き気すら覚える外道の声は7人分つてところだろう。

『……………灰皿をお取替えします』

『助かる。で、その人質はどうするんだ？』

『おう。で、このオネーチャンたちどうする？やっちゃっていいの？』

『だったら俺はコツチの巨乳チャンがいいなー！』

『あつ！ズリー！それなら俺一番ね！』

パーティールームの中から下品な笑い声が響き渡る。

『瑞希ちゃんに触らないで！』

『……………葉月ちゃんも……………離して』

と、つぐみと由香里の声が聞こえる。

パリーンー！

「由香里ちゃん達は返してもらっせよ」

「お前等ゲス共には恐怖を体験してもらっせよ」

心が先に突入すると深紅も入り笑顔で言う。

「か、かまわない！やっちまえ！」

「わしに叶うと思ってるのか？」

「ぎゃああああ！！！！！」

襲いかかる外道の攻撃を避けて心は相手をボコボコにしていく。彼は喧嘩に強いのでこの程度の雑魚にまけることはないのだ。

「ほいつ」

バチバチッ！

「ぎゃあああ！！！！？」

かなりの電力があるスタンガンを使い深紅も倒していく。

その間に明久と雄二は入りこんで葉月を救出する。

「お、お姉ちゃん！ お姉ちゃん！」

「葉月っ！ よかった……怖かったよね……？」

こちらは感動の姉妹シーンが起こっている。

「吉井君っ！」

「姫路さんっ！」

瑞希が腕を広げて明久の元に駆け寄る。つぐみの方は少し悲しげに瑞希と明久を見ていたが

「吉井い！ ヤスオをよくも！」

それに備え、明久が腕を広げて構えた所に来たのは、チンピラのパンチだった。

「な、何だこいつ？ 血の涙流してるぞ……？」

鬼気迫る雰囲気で、そのチンピラをしばき始める明久。

「姫路さん、ちょっと待ってて！ こいつをシバき倒した後でもう一度……」

「島田に姫路、雨宮と久蘭を連れて先に戻っている！」

「雄二！ キサマまで僕の邪魔をするのか！？」

「明久、今はこいつらの相手が先ぜよ」

「クスクス……生きてきたことを後悔させてあげますよ」

「久しぶりの喧嘩だね」

「わっちもはんなりいきますえ」

心が明久を宥めて、晃希がカードをなげて相手を動けなくし、透は楽しそうに相手を殴っていた。
いいのか、空手が趣味なお前が。

深紅はナイフを不良の頬すれすれに投げて冷たい笑みを浮かべてい

た。

「少し、頭冷やそうか」

レイジングハートを構えた少女もなぜかいたが、ここは気にしないでおう。

「くはははは！それにしても丁度いいストレス発散の相手が出来たな！

生まれてきたことを後悔させてやるぜええっ！」

「こ、これが坂本か……！」

「悪鬼羅刹の噂は本当だったか……！」

そんな雄二に怯える不良だが、一番恐怖を覚えたのは深紅のナイフなげ、ゲームだ。

これは彼女が満足するまで続けられるという恐ろしいものだった。トラウマを残すことになるだろうなと思いつつ、晃希もナイフで楽しんでいたし、幻覚が見える薬もつかって相手の精神を壊そうとしていたとか。

第32話誘拐事件〜深紅と心の暴れモード（後書き）

あんまり、心が活躍させてない（泣）

うう、文才がないって辛い！！

つぐみ「じ、次回に頑張ればいいじゃん！」

深紅「そうやって、次回のバネにするんや！」

頑張る！

第33話盛大な告白！と学園長へ報告（前書き）

蒼さま、 GAUさま、 光闇雪さま、 ヒョウガさま、 FOO
Lさま、 リザクさま、 秋雨さま、 レインさま、 あづまさま、
まいくさま！

感想ありがとうございます！

第33話盛大な告白！と学園長へ報告

「心…君…話って…なに？」

「わ、ワシと付き合ってほしいぜよー！」

教室ないで盛大な告白をする心。

「わたし…で…いいの？」

「もちろんぜよー！」

「…嬉しい」

「と、言う事は」

「わたしから…しようと思っ…たのに…先越された」

「やったー！！」

心は喜んで由香里を抱きしめると由香里は赤面していた。この様子を見ていたFFF団が立ちあがり、

「諸君、ここはどこだ？」

「」「最後の審判を下す法廷だ！」「」

「異端者には？」

「「「死の鉄槌を！」」」

「男とは？」

「「「愛を捨て、哀に生きる者！」」」

「宜しい。これより………2・F異端審問会を始める」

「逃げるぜよ！」

「きゃっ！」

心はその様子を見てやばいと感じて由香里を姫抱きして逃げる。

「逃がすな！追え！！」

『『『『おー！！！！』』』』

逃げる心に追いかけるFFF団。

たまたまFFF団が攻撃して心に返り討ちにあつFFF団が学園内で見かけたとか。

ここに一組のカップルが誕生した。

末長くお幸せに

誘拐騒ぎが解決して、喫茶店一日目も終了したFクラス教室。

そこは貸し切り状態となっていた。

「もうそろそろ来る頃だ」

「？ 来るって、誰が？」

「ババアだ」

「学園長がわざわざここに来るの？」

「そう言えばさっき、坂本が何か話してやね？ あれはその事かえ
？」

「話ねえ……ダメだよ雄二、一応相手は目上の人なんだから、用事
があるならこつちから行かないと」

「用事もくそも……この一連の妨害の原因は、あのババアにある筈
だ。」

事情を説明させないと、気がすまん」

「ババアに原因が……えええっ！」

「アキ君、学園長にその態度はないよ！！」

「あ、あのババア！ 僕等に何か隠してたのか！」

「人の話を聞いてよ！！」

「……やれやれ、態々来てやったのに、随分と御挨拶だねえ、ガキ
共が」

「あっ、がっ学園長！」

つぐみは学園長に礼をする。

「来たかババア」

「出たな、諸悪の根源め！」

「おやおや、いつの間にかアタシが黒幕扱いされてないかい？」

呆れたように言う学園長につぐみはどうしようかと考えていた。

「確かに黒幕ではないだろうが、俺達に話すべき事を話してないのは十分な裏切りだと思うが？」

「ふむ……やれやれ、賢しい奴だとは思っていたけど、まさかアタシの考えに気がつくとは思わなかったよ」

「最初に言わなかったあんたが悪いだろ。ここまで起きたことを話すからな」

その話の後、いままで起こったことを報告した。

「学園祭の喫茶店ごときで営業妨害が出たり、明久と秀吉を狙ってチンピラが襲いかかったり、優子達に情報を流した密告者が居たのは、俺達が勝ち上がったては困る奴がいるってこと？」

「ああ。それに何より、俺達の邪魔をしてくる連中が姫路たちを連れだしたのが決定的だった。

ただの嫌がらせなら、ここまでではない」

つぐみは雄二の言葉に少し考えていた。

「そうかい。向こうはそこまで手段を選ばなかったかい……すまなかつたね」

そう学園長は言って謝った。

優勝者には、テストの点数を二分して2体の召喚獣を同時の呼びだせる腕輪。

そして教師なしで立会人になり、科目指定をした上での召喚用フィールドを形成できるのと

もう一つは相手に自分の点数を渡すのと2体の召喚獣のうち1体を動かせることができる腕輪。

その2種類の“白金の腕輪”

準優勝者には、“黄金の腕輪”。

ゲートを開いて相手に複数の武器をぶち当てるのと強化と変化。

そして、教師なしで立会人になる事ができ、“白金”より機能が劣る腕輪。

「白金の腕輪には確か」

「そうさ、あの時に言ったように欠陥があるんだ」

「たとえば、どんな？」

「入出力が一定水準を超えると、暴走を引き起こすんだよ。だからアンタ達が使うなら、暴走は起らずに済む」

「成程な。だから得点の高い優勝候補を使わず、俺達みたいな

“優勝の可能性を持つ低得点者”がババアにとっては一番理想的だ

「たったってことか」

「つまり、白金は平均が低い方がいいという事だよな」

「明久にはピッタリだが、雨宮の場合は」

「その子はCクラスくらいだろ？そっちのジャリも同じくらいと聞く。それくらいなら耐えられるさね」

「それと2種類の召喚フィールド作成用の方はある程度まで耐えられるんだけどねえ」

「……もう片方の同時召喚用は吉井にもう一つの点数を相手に渡すのと同じ召喚の1体进行操作できる方は雨宮に」

「あたし達の妨害をしてきた連中は、学園長の失脚を狙う他校の経営者、

またはその内通者というわけですね？」

「ご名答。恐らく手引きしているのは教頭の竹原だね。」

「近隣の私立校に出入りしてたなんて話も聞くし、ほぼ決定的だ」

「まあ、なんで常夏コンビや例のチンピラが協力してるかは分かんがな」

「とにかく、僕達四人のどちらかが優勝しないと暴走してしまうから。なんとかしないとね」

改めて決勝戦での戦いを頑張ろうと決意する明久。

「それじゃ、聞きたい事は聞けたし、もう帰ろうで」

「そうだな。家に帰ってやる事もあるし……それに明日も早いしな」

「それじゃアタシは学園長室に戻るとするかね」

学園長が静かに椅子から立ち上がる。

この後、教頭についてはなんとかするからと言われて、教室から去り、自宅に向かった。

「アキ君」

「何？」

「あの時は助けてくれてありがとうね」

「つぐみは大切な幼なじみだから、当然だよ！」

明久の笑顔につぐみは微笑んでいた。

今の自分の感情は言えないが、明久の幸せを願いつづけようと、思った。

この関係がいつまでもつづくようにと願いながら。

第34話学園祭二日目！（前書き）

あづまさま、 レインさま、 吹き抜ける風さま、 光闇雪さ
ま、 FLOORさま、 蒼さま、 秋雨さま！

感想ありがとうございます！

第34話学園祭二日目！

「アキにつぐみ。おはよ〜」

「おはようございます。吉井君につぐみちゃん」

「おはよう、二人とも」

「おはようございます」

学園祭二日目の朝。瑞希と美波が揃って登校してきた。

「あゝ、その……昨夜はぐっすり眠れた？」

「え？ はい、ぐっすりでしたけど」

「そう。それじゃ……朝ご飯はきちんと食べて来た？」

「はい。きちんと食べてきました」

「えっと、それじゃ変な夢とかは」

「アキ君、気を使いすぎだよ」

つぐみはそんな明久に苦笑いしながら伝える。

「そうですね、大丈夫です。大変でしたけど、不思議なくらい落ち着いてますから」

「え？ そうなの？」

「はい、結局みんな無事でしたし……それに、きつとまた吉井君が助けてくれますから」

そう言つて、無理のない自然な笑みを浮かべる瑞希。
やっぱり、瑞希にはアキ君がいいのかな。

「アキというよりは、坂本と土屋と狩谷と鴉取かもしれないけどね」

「美波ちゃん！」

「つぐみ、いいから（汗）」

明久はつぐみを宥めてから

「とりあえず、元気そうで良かったよ。今朝は特に問題は？」

「……………異常なし」

「不審な連中はおらんかったぞ」

「特になにもなかったですよ」

「というか、できるわけないだろうけどな」

「そっか、ありがとう」

秀吉と康太と晃希と透も一緒に登校してきた。

「これくらい当然じゃ。特にワシは昨日役に立てなかったしのう」

「それは仕方ないと思いますよ」

「だよな、縛られてたし」

「お、今日は無事だったか二人とも」

「つぐみの場合は明久がいるんや、無事でなによりやで」

「由香里は中岡がいるから大丈夫だしね」

「…呼んだ？」

「こつちも異常なしぜよ」

奥からは雄二が頭を掻きながら現れて、深紅と智美は仲良くできて、

心と由香里はいつもよりラブラブな感じで登場した。

「あれ？ 坂本ももう来てたの？」

「吉井君も坂本君もつぐみちゃんも深紅ちゃんも早いですね」

「朝一番でテストを受けてたからね。ふわあ……………」

「確かに、決勝が総合科目なのはきついな……………」

決勝だからと、一番盛り上がる総合科目による対戦。

トーナメントで消費した点数を確保する為、4人は朝一番からテストを受けていたんだけど、

大丈夫かな。

「もうっつ、4人とも大丈夫なの？ そんなんで試合なんかして」

「そんな心配している暇あるなら、喫茶店の準備でもしてくれ。ふわぁ……………」

「これじゃ、集中力がもたない気がするんやけど」

「なんだか、他人事ね。喫茶店の手伝いはしないの？」

「ごめんね、美波ちゃん。寝かせてもらえないかな？」

「そつだよね、ここのところあんまり寝てない上に昨日は徹夜したから眠くて」

いくらなんでもこれでは集中力がもたないし、つぐみの体力は少ないので休憩は必要だ。

「そつだったんですか。それなら、ゆっくり休んでください」

「そつじゃな。喫茶店の方はワシらに任せるといい」

「……………（コクコク）」

「とりあえず、眠ってきてはどうですか？」

「俺らもいるから大丈夫だしな」

「後は任せるぜよ」

「……ゆっくり休んで」

「決勝戦楽しみにしてますわ」

「仕方ないわね。起きられそうになかったら、起こしてあげるけど？」

「ありがとう。それじゃ、11時までには起きてこなかったら、起こして貰える？」

「11時？ 試合は1時からじゃなかった？」

「1番込み合う昼時くらいは働くよ。」

今からなら、3時間は寝れる計算になる。

深紅はそのくらいでもちゃんとした体力は回復できるし、つぐみにもちゃんと休憩させてあげなくては。

「んじゃ、明久達と一緒に俺も起こしてくれ。屋上で寝ているからほわぁ……」

「それなら、僕も屋上にいるからよろしくね」

口元に手を当てながら雄二はドアに手をかけると、つぐみと深紅と明久もそれに続く。

「やっぱり、4人一緒に寝るんでしょうか？」

「間違いないわ。きっと坂本の腕枕で……てか、つぐみと神埼が羨

ましい」

「どんな想像しているんですか」

「お前等の想像の方が恐ろしい」

つぐみ達の去り際に聞こえた会話は忘れた方がいいような感じだった。

そして、時間は過ぎて……

「さてと、行こうか。つぐみ」

「うん！頑張ろうね！」

「俺達の勝ち揺るがないぜ」

「おてやわらかにな」

明久とつぐみと深紅と雄二は頷き合つ。

「島田、俺達は抜けるが大丈夫か？」

「大丈夫じゃなくても行かないとダメでしょうが。決勝戦なんだからね？」

「後で私達も応援に来ますね？ ……吉井君の応援ですが」

「……………どっちも頑張れ」

そう皆で言つと雄二達は苦笑しつつも頷いて、会場へと向かい歩きだした。

さて、頑張らないと!!

第34話学園祭二日目！（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第35話決勝戦！！（前書き）

蒼様、FOOL様、光闇雪様、ヒョウガ様、レイン様、まいく様

感想ありがとうございます

第35話 決勝戦！！

「ほほう。随分と観客が多いな」

「なんかわくわくしてきたわ」

「流石は決勝戦だね」

「緊張してきた（汗）」

会場を前にドクン、と少しだけ脈は速くなり、つぐみは明久の手を握る。

「吉井君と雨宮さんと坂本君と神埼さん。入場がはじまりますので急いでください」

つぐみ達を見つけた係の先生は手招きする。

『さて皆様。長らくお待ち致しました！』

『これより試験召喚システムによる召喚大会の決勝戦を行います！』

聞こえてくるアナウンスは今まで聞いたことのない声だった。

『出場選手の入場です！』

「さ、入場してください」

先生に背中をポンと叩かれる。

つぐみと明久は頷きあつて、観客席の前に歩み出て行つた。

『2年Fクラス所属・吉井明久君と、同じくFクラス所属・雨宮つぐみさんです！』

皆様拍手でお迎えください！』

盛大な拍手が雨のように降ってくる。客はかなり多いだろう。

『なんと、最高成績のAクラスを抑えて決勝に進んだのは、2年生の最下級であるFクラスの生徒コンビです！これはFクラスが最下級であるという認識を、改める必要があるかもしれませぬ！』

(あの司会、嬉しいこと言ってくれるね)

(だね。姫路さんのお父さんに好印象になるね)

ここで2人を持ちあげておけば“試験召喚システムのおかげで、最下級の生徒もやる気を出して勉学に励んでいる”と言つPRにもなる。

学園的にも、この展開は望ましい事だろう。

『対するは、こちらもFクラス所属・坂本雄二君と、同じくFクラス所属・神崎深紅さんです！』

こちらも拍手でお迎えください！』

こちらも拍手をつけて現れる。

『なんと、あの最高成績のAクラスをおさえて、ここまで来たことに驚きました！』

こちらは吉井明久君と雨宮つぐみさんのクラスメイトのFクラスコンビです！

Fクラス一色でのバトル、これは見逃せませんね！』

こっちの最下位の生徒だから、アピールも怠らない。

『それでは、ルールを簡単に説明します。試験召喚獣とは……』

アナウンスで説明がはいるが、明久達は知っているので無視となる。

「ここまで来たからには手加減は無用だぜ、明久？」

「もちろん、絶対勝ってみせる！」

「深紅ちゃん、いい勝負しようね？」

「そやね。お互い頑張ろうや」

四人で会話していると説明が済んだのか、アナウンスの声が響く。

『それでは試合に入りましょう！ 選手の皆さん、どうぞ！』

「では、始めてください！」

立ち会いの先生が立ち、明久達は召喚する。

「「「「「サモン
試獣召喚！」」」」」

メリケンサックに白い学ランの雄二の召喚獣。
赤いドレスをまとった歪な剣を持った深紅の召喚獣。

そして、学ランに木刀の明久の召喚獣。
うさみみが生えており、キャロットバトンを持っているつぐみの召喚獣。

『2-Fクラス 坂本雄二 総合科目 1556点 & 神埼深紅
総合科目 2345点』

VS

『2-Fクラス 吉井明久総合科目 1034点 & 雨宮つぐみ
総合科目 1245点』

「へえ、明久もなかなかやるな」

「つぐみに日本史を教えてもらいながら頑張ったからね」

「ええな、こついつの！わっちは楽しそうが好きやわ」

「あはは、でも。負けないよ？」

四人はそれぞれ晴れ晴れとした表情で言い合う。

「神埼は明久を俺は雨宮をやる」

「了解や」

雄二と深紅が作戦を立てると二人の召喚獣が動く。

赤いドレスをまとった深紅の召喚獣は明久の方へ行き、雄二の改造
白学ランをまとったのはつぐみへ

「くらってーな」

「やられるか！」

明久と深紅の武器がぶつかり合う。

「楽しもうぜ」

「あはは、お手柔らかにね」

メリケンサックをつぐみの召喚獣に振り下ろす、つぐみはキャロットバトンで防いで、一旦離れる。

どちらも均衡しそうな戦いが繰り広げられる。

「てや！」

「そんなあたらないぜ」

「くっ！」

メリケンサックでつぐみの攻撃が防がれてすぐさま、斬り伏せるが、間一髪でかわす。

「まだまだ！！」

「こっちもだ！！」

雄二の召喚獣はメリケンサックで殴りかかり、つぐみは召喚獣の背

をかがめてスライディングすると

雄二の召喚獣の背中を斬ると雄二の召喚獣は倒れた。

「負けたか」

「あたしの勝ちだよ？」

今までの攻防戦で互いの点数はへっており、それでもなんとか勝てたようなものだった。

つぐみは雄二に笑顔で言うと雄二は苦笑いし。

「そうみたいだな」

「でも、きつかったな」

「均衡してたからな」

そう会話していると明久は深紅の攻撃に必死にかわしていた。

「キツイな」

「同じ観察処分者やからね」

『Fクラス 吉井明久 総合科目 540点』

VS

『Fクラス 神埼深紅 総合科目 550点』

こっちもお互い傷が召喚獣にできており、フィードバックで辛そう

にしている。

「けど、負けへんで？」

「僕だつて！」

歪な剣を振りおろし、明久の召喚獣はそれを防ぎ、押し返す。

「やるやん」

「そつちもね」

「でも、そんなじゃ。わっちは勝てへんで！」

「それはどうかな？」

深紅の召喚獣が明久の召喚獣にツッコムが、それをかわして明久の召喚獣の木刀の胴突きが決まった。

『Fクラス 神埼深紅 総合科目 0点』

VS

『Fクラス 吉井明久 総合科目 1点』

「いったー(汗)」

「ごめんね、勝負だから」

フィードバックの痛みに耐えながら深紅が言うと明久は苦笑いしながら謝っていた。

『勝者、Fクラス。吉井&雨宮ペア!』

歓声があがる。

「よっしやあああ!!!!」

「やったね!アキ君!」

明久の全身は痛み、今なお吐き気が催してきてはいる。だが今明久の中では、最高の気分が満ち溢れていた。つぐみは明久に勢い余って抱きついた。

「うん!」

「これで、なんとかなっただよ」

つぐみと明久は笑顔で笑いあっていた。

ちなみに無意識な行動で明久に抱きついている為つぐみは大胆な行動に気づいてません。

第35話決勝戦！！（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第36話腕輪公開！&常夏コンビの悪だくみ！（前書き）

光闇雪さま、蒼さま、あづまさま、FOOLさま、レインさま、
吹き抜ける風さま、リザクさま、ヒョウガさま！

感想ありがとうございます！

第36話腕輪公開！&常夏コンビの悪だくみ！

授与式が終わると芳乃博士が小柄な体で走ってきて明久達に話しかける。

「しっくるしさま」

「あ、芳乃博士」

「どづしたんですか？」

「どづした？じゃないよ。キミ達にはデモストしてもらったからね？」

「」「なに！？」

金色のロングヘアの美少女は笑顔で明久達に言っと二つの腕輪を渡す。

「まずは、アキ君からだね」

「うん、つぐみ。頼むよ」

「うん！、科目は日本史でいいかな」

「そっだね」

「行くよ、アウェイクン！」

つぐみが腕輪をはめて科目を設定し、起動させるとフィールドが広がる。

ちなみに回復試験は受けており、科目は日本史だ。

「わ〜！」

「じゃあ、するね！試験召喚サモン！」

ぽんっ

『吉井明久 日本史 143点』

「日本史は得意だもんね」

「うん、次はダブル！」

明久は笑顔でつぐみと話すと次のキーワードを言う。すると明久のもう一体の召喚獣である副獣が現れる。

「うわ、二体だよ」

「ここで教えたキーワードを言って」

「はい、えーと……マリオネット操作！」

つぐみもキーワードを言うと明久が出した副獣が反応し、明久の方からつぐみの方に移る。

そして同時につぐみの日本史の点数が表示される。

「ふむ……試しに動かしてみて」

「はい!……こうかな」

つぐみが手を動かしてみると明久の副獣も腕を動かす。

どうやら、召喚フィールド形成もでき、同時に操作というキーワードも使えることがわかった。

そして、Cクラスくらいの成績でなら、起動にも異常はないようだ。

「物とかはどう?」

「えーと」

つぐみは近くにある段ボールを操った副獣で持ち上げる。

それを見て芳乃朋はレポート用紙に書いていく。

「フィードバックも結構くるよ〜(汗)」

「操作を使うと副獣は召喚者から離れて操作をした相手に移るわけだね。」

それと、観察処分者特有のフィードバックも同時にくるわけか」

朋は楽しそうにレポート用紙にメモしていく。

「次は俺等の番だな」

「楽しみやね〜」

紅金の腕輪を使う二人の出番だ。

「アウエイクン！」

雄二のキーワードに起動して、こちらもフィールドが形成される。
使用方法は同じで教科も選べる。

「行くでえ サモン 試獣召喚！」

ぼんっ

『神埼深紅 日本史 132点』

深紅の召喚獣が召喚されて日本史の点数が表示される。

「お次はウエボンフォーゼ武装変化！」

深紅がキーワードを言うと歪な剣が一本の槍に変化した。
某熱血武将が思い浮かぶ武器だ。

「ほう、これもなかなか」

「面白いえ」

「データーが沢山入るね」

雄二と深紅は楽しそうに笑いあうが背後から黒いオーラーが出ているのを忘れていないだろうか。
朋も楽しそうにレポートをまとめると

「ご協力ありがとうね。」

と、言うと学園長に話に行く。ちいさな身長で子供ばいのにどこか大人びている彼女は不思議だ。

こうして、デモストレーションは終了した。

教室に戻る途中で美波達と合流し

「お兄ちゃん！ すつつつごい格好よかったよ！」

「ぐふっ！ は、葉月ちゃん……今日も来てくれたんだ。ありがとう」

終わった帰り、すぐに葉月が明久に抱きついて腹に顔を埋める。

というか、身長差で葉月の頭が鳩尾に直撃していたのはいうまでもない。

「4人とも、お疲れ様。凄かったわね」

「あはは。そうでもないよ」

「でも、アキ君は凄かったよ！」

「そうです！お兄ちゃんは凄いです！」

「葉月ってば、アキが困ってるわよ？」

美波が明久にグリグリと頭を押しつけている葉月を見て苦笑いをする。

本日二度目の鳩尾に直撃ぽかった。

そして、これ以上鳩尾を圧迫されると致命傷になりかねないのでやんわりと葉月を離れさす。

「あの、吉井君！」

「あ、姫路さん。僕の活躍、見てくれた？」

「はいっ！ とっても素敵でした！ 今度土屋君に、ビデオをコピーして貰おうと思うっ位！」

「……………（プイっ）」

瑞希の目がキラキラと輝いている。それに明久は嬉しそうにしてから、つぐみは土屋を見る。

「ビデオ……………。土屋くん、撮影なんかしてたの？」

「はい。ずっと熱心に撮っていましたよ。ね？」

「……………（プイッ）」

それに視線をそらす康太。この状態を見て、すべて理解した。試合そっちのけでミニスカートや観客を撮影していたのだろう。

「……………おめでとう」

「おめでとうぜよー！」

「これも努力のたまものですかね」

「紙一重ぼかったみたいだけどな」

由香里と心も微笑んで祝福し、晃希と透も嬉しそうに笑っていた。

「まあまあ、頑張ったじゃないですか?」

「あはは、素直やないな」

深紅は智美と楽しそうに会話し。

「そ、それで、ですね……」

「ん? ああ、なにかな?」

瑞希が体の前で指をもじもじと動かしている。
つぐみはそれを見て自分の気持ちを素直にするべきだろうかと悩んでいた。

「後夜祭の時、お話があるので駐輪場まで来てください!」

トマトのように顔を真っ赤にしてそう告げると、瑞希はダッシュでウェイトレス業務に戻っていった。

「告白の前セリフみたいですね」

「みたいじゃなくて現にそうなんだろ」

「というか、実行が早いやね」

「な、なんでみんな揃ってあたしを見るの!??」

瑞希の行動を見ていた晃希達はそう言うつつぐみを見たのだ。
このままでいいのか？という問もまぜて。

「話こんでいるところ悪いのじゃが、喫茶店を手伝ってくれんかの
う？」

お主らの優勝のおかげで客が増えて大変なんじゃ」

「あ、そういえばそうだったわね。ほらアキにつぐみ！
もう大会ないんだから、きっちり手伝ってもらうからね！」

「うん。今まであまり手伝えなかった分、頑張るよ！」

「やれやれ。かつたるいな」

「そんなこといわにで頑張ろうよ！」

「そうやで、最後まで清涼祭はもりあげなあかん」

こうしてメインである四人は接客業務に戻る。

『ただ今の時刻をもって、清涼祭の一般公開は終了しました。各生
徒は速やかに撤収作業を行ってください』

「疲れた〜」

「お、おわった……」

「大変やったけど、楽しかったで」

「さすがに疲れたのう……」

「……………（コクコク）」

放送を聞いた途端、足から力が抜けて行く。

「そう言えば、姫路さんのお父さんはどうしたんだらう？」

「ん？お義父^{じゆふ}さんが気になるのか？」

「なっ！？べ、べつにそういうわけじゃなくて！」

「後夜祭の後に話をしに行くと言っておったのう。結論はそのとき
じゃな」

みんなで頑張ったから大丈夫ではあるう。

「じゃ、ウチらは着替えてくるわ」

「ええっ！？どうして！！？」

「どうして、って言われても…恥ずかしいからに決まってるでしょ
？」

「すみません。すぐ戻りますので」

「待つて！2人共考え直すんだ！カムバアーク！」

明久の説得も虚しく、瑞希と美波は着替えの為に去って行く。

「……私達……も……着替えに……いい？」

「せやね」

「そうですね」

「うん！」

と、言っつてつぐみ達も去るつとすると

「待って！つぐみ達まで着替えに行ったら！！」

「秀吉がいるやろ」

「そうですね（汗）」

深紅のきつぱりとした態度にうなづく明久。

「それじゃあね」

「すぐに戻るから、学園長室に行ってきたらどうやっ？」

「では」

「……また」

つぐみ達は着替えに向かった。

そして、着替えたら、深紅と一緒に学園長室に向かった。

「そろそろやるな」

「え、何が？」

「こっちの話や」

向かっている途中で常夏コンビを見つけた。何やら恐怖で青ざめていた。

そしてそれを追いかける西村先生がいた。何事？
それを眺めている朋に深紅が話かける。

「朋、何してるんや？」

「んにや？……ああ、盗聴に細工して嘘の情報を流したら、まんまと騙されてね。」

教頭と会話している所を録音してあげてバラしてあげたのさ」

「んで、その後どないしたんや？」

「教頭室での会話は録音してるから、一緒に来ていた西つちに任せ
たんだよ」

「それで、あの状態だということ？」

「うん」

朋はつぐみの質問に笑顔でうなずいた。

「わっちは教頭に話があるから、ここだな」

「え？ちよっ」

「いいからいいから！ぼく達は西っちを追いかけよう」

朋はつぐみの手を引いて走る。傍からみたら仲むつまじい姉妹のようだ。

結局西村先生に常夏コンビは捕まったそうだ。

その頃、深紅は……。

教頭室)

「さて、悪夢の時間やで？」

「お、お前は本当にただの生徒か！？」

「そんなん、あんさんに教えるわけないやろ」

教頭は深紅の黒い笑顔で怯えていた。一般人のものと気配が違う彼女に気迫はすごかった。

この後、教頭室で悲鳴と断末魔が響いたとか？

第36話腕輪公開！&常夏コンビの悪だくみ！（後書き）

感想と評価とお待ちしております！

第37話祝杯だよ！（前書き）

ヒヨウガさま、光闇雪さま、蒼さま、秋雨さま、リザクさま、
インさま、あづまさま

感想ありがとうございます

第37話祝杯だよ！

「む。来たようじゃな」

「……先に始めておいた」

公園に行くときみんながもうすでに宴会をはじめていた。

「学園長との話合いはすんだの？」

「うん」

「あれ、神崎さんは？」

「ここに来る途中、用事があるからって、どこかに行っちゃったよ」

「忙しい奴だな」

「そうだね」

それぞれ明久達は会話するとシートに座る。

そしたら、美波がジュースを持ってきて渡してきた。

「ありがとう」

「智美ちゃんと由香里ちゃんは飲まないの？」

「わたしは遠慮しますわ」

「……うん」

智美と由香里はつぐみの質問に答えて持参したものを飲み始める。

「なんだか達成感があるな」

「みんなでやりとげたことだからね」

「そうだね」

明久からジュースを受け取り、つぐみはそれを飲む。
む………苦い？

「そういえば、お店の売り上げてどうだったの？」

「結構な額になったと思うよ」

つぐみは実行委員なのでそれを書いたノートを見せる。

「へえ、凄いな」

「Aクラスの設備だからかな？」

わいわいとそのノートを見て話合う。これも、日頃の努力のおかげ
なのだろうか。

と、その時。

「またか！」

「心く〜ん」

「追えー！！奴を逃がすな！」

心は酒で酔った由香里を抱き上げて逃走激を繰り返していた。

「由香里ちゃん……大胆だなあ」

「つぐみも大胆になったらどないや？」

「そうですね」

「でも」

深紅と智美につぐみは諭されてはいるが、ふんぎりがつかないようだ。

ちらつと明久の方を見ると明久には瑞希がギュッと抱きついており、美波は不機嫌そうに傍にいた。

「…………グビッ」

「あ！それはお酒や！」

「あちゃー（汗）」

「ふえ？……なんかふわふわしてるよ〜」

「あ！つぐみも飲んだ！？」

「すんまへん」

「でも、これなら本音で話すんじゃない？」

「え？なんの話!？」

明久は深紅と智美の話についていけてなかった。

「おや、おや。吉井君は大変ですね」

「うめ〜」

なぜか酒が平気な二人がその様子を微笑ましそうに見ていた。

「アキ君、いつも傍にいてくれてありがとう」

「へ？何、いきなり!？」

「アキ君がいたから、あたしはあたしで居られたんだよ」

「……つぐみ」

つぐみは明久に抱きついて酒でうるんだ瞳で見つめて言うと明久は緊張していた。

「この力を持ってても、嫌わなideいでてくれた」

「つぐみの個性でもあるからね」

「あはは。本当にアキ君は優しいね……だから、あたしは」

「つぐみ？」

「すすすう」

明久に凭れてつぐみは眠っていた。

「つぐみちゃんだけ、ずるいねす！」

「アキもデレデレしてるんじゃないわよ！」

瑞希と美波は嫉妬のオーラーを出していた。

「はいはい、二人とも落ち着きい」

「はう！」

深紅が瞬時に二人の後ろに周り、瑞希と美波を気絶させていた。

「おや、素早いですね」

「二人は俺等が運ぶぜ」

「あんさん等もわっち同様に酒に強いんやね。それはともかく、任せたで」

「おう／＼はい」

晃希と透は瑞希と美波をお姫様抱っこして運ぶ。

そんなこんながあつて祝杯は終了し、後片付けを深紅と晃希と透と
智美がして。
この宴会みたいな祝杯は終了した。

第38話如月グランドパーク(前書き)

レインさま、FOOLさま、ヒョウガさま、光閻雪さま、あづま
さま、リザクさま、蒼さま、まいくさま！

感想ありがとうございます

第38話 如月グランドパーク

「明久」

「ん？ なに、雄二」

「そういえば、例のチケットはどうした？」

「例のチケットって……如月グランドパークのプレミアムチケットのこと？」

「ああ。確か今週末のプレオープンの日のはずだが、姫路達を誘って行ってみたりはしないのか？」

「な、何を言ってるのさ。雄二！だって、あのチケットを使って入場したら、

神埼さんの情報では如月グループの力で結婚を強要されちゃうんでしょ？」

「そんなの姫路さん達が可哀想じゃないか！」

「瑞希ちゃんと美波ちゃんは嬉しがると思うけど」

「雨宮はどうなんだ？」

「え！？あたし！！？あたしは……別に」

「今はそれはいいでしょ。あのチケットなら、心にあげたよ。」

「もう片方は深紅が面白いこと考えたからって、持って行ったよ」

「そうか、なら。俺に被害はないんだな」

「被害って、坂本君があたしに言うことじゃないよね」

「霧島さんに行けばいいのに」

「そっだよな、せっかく恋人同士なんだから」

「俺のことはどうでもいいだろ」

雄二は言うのと去って行く。

そして時はすぎて週末……

ドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドドド！ ガチャッ！

「おふくる！ どういう事だっ!？」

「あら雄二、おはよう」

とある場所にある坂本家。

そのキッチンにおいて、にこやかにあいさつする若々しい女性と、寝起きとは思えない程荒々しく駆けこんできた少年、坂本雄二。女性は雄二の態度に構う事なく、のほほんと流して洗い物をしている。

「おはようじゃねえっ！ どうして翔子が俺の部屋にいるんだ！ おかげで俺は警察のオッサンに二次元と三次元の区別が出来ない妄想野郎と思われちゃっただろうが！」

目を覚ましたら、そこに幼馴染である霧島翔子が近くにいた。約束の類が思い当たらず、不法侵入であると辺りを付けて警察に電話してしまい、

その時の警察の反応は雄二の心に深い傷を残したのである。

「……………え？ 翔子ちゃんか？」

その当人の雄二の母親は、大きな瞳を瞬かせ困ったような顔をする。それを見て雄二は、翔子の単独行動かと思い、少々浅慮だったかもしれないと思い謝る事に。

「ああいや、怒鳴って悪かった。俺はてっきりおふくろがアイツを勝手に俺の部屋に……………」

「もう、翔子ちゃんってば奥手ねえ。

折角お膳立てしてあげたのに何もしないでいるなんてもったいな……………あら雄二、どうしてお母さんの頭を鷲掴みにするのかしら？」

「やっぱりあんたの所為か！」

雄二は母親の頭に手をかけ、自身が翔子にやられているアイアンクローに処する事に。

そこへ現れた翔子が、雄二の腕をつかんで邪魔をする。

「……………雄二、お義母さんを虐めちゃダメ」

「止めるな翔子、俺は息子としてこの母親の再教育をしないとけないんだ！」

それと今、“お母さん”の発音が普通と違う気がしたんだが？」

「……間違っていない、“お義母さん”であっている。それよりも、言う事を聞かないとこの本をお義母さんと一緒に読む」

と言つて撮りだしたのは、A4サイズの冊子。

しかも表紙は……

「ま、待てっ！ それは女子供が読むものじゃない！ 早くこつちに寄越すんだ！」

「あら翔子ちゃん。それは雄二が世界史の資料集の表紙をかぶせて机の三番目の引き出しの二重底の下に隠している、秘密の本じゃない？」

自身の至高の一冊が見つかった事だけでも最悪の事態なのに、更に母親に既に知られていた事。

この時雄二は、明久の一人暮らしをこの上なく羨ましいと思った。

「わ、わかった。おふくろは解放しよう」

「……そう。それなら、この本は燃やすだけで許してあげる」

「待て翔子、それは許した時の処分じゃない！」

「……じゃあ、燃やしても許さない」

「燃やさないと言う選択肢はないのか！？」

結局その本は処分され、雄二は断末魔を上げる事に。

その少し後、朝食を食べて翔子にふと気になる事を聞いてみる事に。

「んで、どうして翔子が来てるんだ？」

「……これ」

上着のポケットから、ある一枚の小さな紙切れを取り出す。
その様相から言って、チケットである。

「あら、如月グランドパークのプレミアムチケット？
すごいわ翔子ちゃん、良くこんな物手に入ったわね？」

「……優しい人達がくれた」

それを聞くなり、雄二は携帯を取り出し番号通知をOFFに。
そして深紅の番号をだして呼び出しをかける。数秒のコールの後声
が聞こえる。

『ハイもしもし？ どちら様や？』

「……………キサマヲコロス」

『なんや、坂本か。そんなんでわっちは騙せへんで？』

「くっ」

『んで、なんの用や？』

悔しそうな声をだした後、何か音が聞こえる。
ゲームでもしているんだろうか

「翔子にチケットを渡したのは神埼だろ!？」

『ちよつとしたサービスやん』

「嫌なサービスだな!！」

『そないに嬉しがらんでもええやん』

電話越しなのに彼女が笑顔で言っているような気がした。

「嬉しくねー!！」

「雄二、浮気は許さない」

「いだだだ!?!？」

と、叫んだ瞬間に翔子にアイアンクローをうけていた。

その間に深紅は携帯をきっていたのはお仕置きが済んだ後で知った雄二だった。

「……雄二、行くところ？」

「嫌だ!」

雄二はチケットの意味を知っている為、頑なに拒否をした。

これは後で知ったのだが、深紅の情報によると如月グループが結婚を強要するという事らしい。

それを知っている雄二は拒否する。

「……じゃあ、選んで」

拒否の姿勢を崩さない雄二に、翔子はある物を取り出した。

「……すまん、話の流れがさっぱり分からない」

「約束を破れば、即拳式つて誓ってくれた」

「誓ってない！ 婚姻届に判というのは覚えがあるが、拳式は覚えがない！！」

ちなみに婚姻届の方は既に判が押されており、翔子の手により保管されていた。

「お母さんは、ハワイとかの海外が良いな」

「おふくろ、アンタはどうしてそんなにマイペース何だ？」

「あつ、ヨーロッパも良いわね。雄二、どこがいいかしらね？」

と、一緒になって結婚式場のパンフを眺める翔子と雄二の母。それに対し、雄二がとった手段とは……

「……俺は……無力だ」

所変わって、如月グランドパークの前。

「……やっとなつた」

「よし、それじゃ翔子」

「……うん」

「帰ろう」

「ミシッ！」

「……ダメ、絶対に入る」

と、ひじ関節を極めて、往生際の悪い雄二を止める翔子。

「はっはっは、翔子、俺のひじ関節はそっち側には曲がらないぞ?」

「……恋人同士は皆こうしている」

「待て翔子！ お前は仲睦まじいと言う意味の腕を組む行為と、腕を壊すというサブミッションを同様に考えていないか!？」

で、結局は、入場ゲートに連行されてしまう雄二。

「いらっしやいませ！ 如月グランドパークへようこそ!」

グランドパーク入場ゲートにて。

受付のアジア系の係員が、わざとらしい片言な日本語でを出迎えた。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか?」

「……はい」

「拝見しマース」

係員は翔子のチケットを取り出したチケットを受け取り、2人の顔を見ると笑顔のまま一瞬固まる。

「……そのチケット、使えないの？」

「イエイエ、そんなコトはないデスよ？ デスが、ちょっとお待ちください」

係員は携帯を取り出し、雄二から背を向けて電話し始める。

「……私だ、例の連中が来た。ウエディングシフトの用意を始めろ、確実に仕留める」

「おいコラ、なんだその不穏当な会話は？」

「……ウエディングシフト？」

如月グループの企みを知らない翔子は、首を傾げていた。

「気にしないでください。コッチの話デース」

「アンタ、さっき電話で流暢に日本語を話していなかったか？」

「オーウ。ニホンゴむつかしくてワカリませーン」

雄二は内心、この係員に腹を立てていた。

「ところで、そのウエディングシフトとやらは必要ないぞ？ 入場だけさせてくれたら後は放っておいてくれていい」

雄二は潔いネーミングで、如月グループの企みをよく理解した。しかし彼は乗る気は一切なく、いかにこの場を切り抜けるかを模索し始めていた。

「そんなコト言わず二、お世話させてくだサイ。トツテモ豪華なおもてナシさせていただきマース」

「不要だ」

「そこをナントカお願いしマース」

「ダメだ」

「この通りデース」

「却下だ」

「断ればアナタノ実家に腐ったザリガニを送りマース」

「やめろっ！ そんな事をされたら、我が家は食中毒で大変な事になっってしまうっ！」

彼の母は、それを間違いなく伊勢海老と勘違いし、食卓に上げる危険な女性であった。

第38話如月グランドパーク（後書き）

少々変更しました！

感想と評価をお待ちしております！

IFコラボ問題 双子とロリ娘（前書き）

今回はIFでいきたいと思います！

まうさまとのコラボです。

登場キャラは葵と楓ちゃんです！

つぐみがいる世界にもし葵達がいたら？という設定です！

まう様に怒られないか心配です（泣）

IFコラボ問題 双子とロリ娘

「はあはあ、もう！遅刻したら、アキくんの所為だからね！」

「ごめんってば！」

二人でこうして走っているのは訳があるのです。

いつまでたっても降りてこない、明久を心配して部屋に入ると、玲さんのお古のセーラー服を取り出そうとしてる明久を見て、慌てて止めに入ったからなのだ。

その後、慌てて家を飛び出して今に至る。

「だ、だいたいさ。なんで玲さんのお古が今、家にあるの!？」

「知らないよ!?!?姉さんが全部持って帰ったと思ってたのに!」

二人は走りながら言いあうが、体力は大丈夫なのだろうか？

ふと、前を見ると見覚えのある二人の影が

「葵ちゃん、楓ちゃん!」

「ん?あ、つぐみちゃんにアキくん」

「二人も遅刻？」

「あはは、実はそうなんです」

「何か知らないけど目覚ましのアラームが止まっちゃってさ。気

が付いたらこんな時間になってて

「あ、僕もそういつ時あるよー!」

葵の答えにアキ君も反応して言うと

「ある意味で似てるのかな」

「そうかも」

楓とつぐみは顔を見合せて苦笑いする。

「まったく、世の中には不可思議な事もあるもんだ」

「現代を代表する怪奇現象だね」

「いや、それ単に寝ぼけて止めただけじゃない?」

明久と葵の言葉に鋭いツツコミをする楓とつぐみがいたとか

「「っ!?!?!」」

「いま、ものすごく気づいた顔だよね!」

二人のあまりの仲の良さの反応につぐみは迷わずツツコミをいれる。

「じゃあ毎朝起きる度に目覚ましに所々キズやらへコミやらが増えていってるのは?」

「…………お姉ちゃんがアラームが鳴る度に殴り飛ばして止めてるか

らだよ」

「あはは、相変わらずなんだね」

「あはは…、葵の寝起きの悪さは相変わらずなんだ。それで寝坊しちゃって楓もわざわざ付き合っただの？」

「それもあるけど…、お姉ちゃん昨日遅くまでゲームしてたから…」

「ああ、また？」

「だ、だって！フオ カ様とアル イス義兄様の宿命にして最後の対決のシナリオだったんだよ！？
クリアしなきゃ気になって眠れなくなっちゃっよ！」

「因みにそれ何回目？」

「まだ8週目」

「……………『まだ』？」

「まだ」

「……………へえ……………」

「そ、そうなんだ」

「お姉ちゃん、ハマったらとことん一直線だから……………」

葵の答えに苦笑いするつぐみに呆れる楓と明久。

「あ、それより、体力大丈夫？」

「も、もう無理だよ。三人は先に行ってくれるかな？」

「」「ダメ！」「」

「ふえ！？」

明久の問いに答えてつぐみは三人に先に行くように勧めるが即却下された。

「どうせ、遅刻するんだし。ゆっくり行こう」

「でも、楓ちゃんと葵ちゃんまで巻き込むわけには」

「私のことはいいから！」

「そうだよ、つぐみちゃんはちっちゃいんだから」

「あたしちっこくないよ！？それでも同じ年だよ！！」

小柄な体で低身長な彼女はこれでも同じ年だとアピールする。

「まあまあ……とにかく、つぐみを一人にできるわけないだろ？」

「うー、心配してくれるのはありがたいけど」

「否定はさせないよ？」

「お姉ちゃんのいう通りだよ！また、何かあったらどうするの？」

「……あう、わかったよ」

「わかればよし！」

明久と葵の声がかぶってつぐみに言う。

葵は楓ほどとはいわないがつぐみに過保護になっていたりする。

そんなこんなで玄関についた時。

「吉井、雨宮、光國姉妹、遅刻だぞ！」

玄関の前で呼びとめられた。

浅黒い肌、スーツ姿だが、その内に詰め込まれた、針金の束ねたかような筋肉質の肉体は隠しきれない。

「おはようございます。鉄じ……じゃなくて、西村先生」

「おはようございます！西村先生」

「おはようございます、西村先生」

「おはようございます、鉄 アイアンマン先生」

文月学園が誇る、鋼鉄の生活指導担当教師、西村教諭である。

趣味はトライアスロンというのがあり、生徒の間で鉄人と渾名で呼ばれている。

真冬で半そでというのも理由の一つ。

「待て。光國妹と雨宮は良いとして吉井、今『鉄人』と呼ぼうとしただろ？」

それと光國姉、わざわざ横文字にしても誤魔化せてないからな？」

「はっはっは、気のせいですよに・し・む・ら・せ・ん・せ・い」

「細かい事気にしてたらキリがないですよに・し・む・ら・せ・ん・せ・い」

「……お前達、間違はなく俺をバカにしてるだろ？」

「「気のせいですってば！」「」

「……すみませんx2」

「……ごめんなさいx2」

楓とつぐみはふかぶかと頭を下げている。

「ところでお前達、こんな時間に来ておいて普通に『おはようございます』じゃないだろ」

「あ、遅刻してすみません」

「あたしも遅刻してすみません」

「同じく遅刻してすみません」

「私も遅刻してすみません」

明久、つぐみ、葵、楓が遅刻の謝罪をすると

「よろしい、ほら。受け取れ」

西村先生はこちらに4つの封筒を渡す。

「あつ、お姉ちゃん、アキくん、つぐみちゃん。私Aクラスだったよ」

「おお、良かったじゃない楓」

「おめでとう楓」

「良かったね、楓ちゃん」

「えへへ…」

顔を赤らめて嬉しそうにはかむ楓。

「光園姉と吉井はよく頑張ったな」

「楓とつぐみちゃんのおかげですよ」

「そうじゃなきゃ、難しいしね」

「そこまで褒められる照れるんだけど」

「お姉ちゃんもアキくんも褒めすぎだよ」

明久と葵の褒め言葉に照れ気味な楓とつぐみ。

そして明久と葵とつぐみは封筒の中身を見る

光園葵……………Cクラス

吉井明久……………Cクラス

雨宮つぐみ……………Cクラス

こうしてCクラスでの学園生活をするようになった。

IFコラボ問題 双子とロリ娘（後書き）

レインさま、秋雨さま、FOOLさま、祐介さま、ヒョウガさま、
光闇雪さま！

感想ありがとうございます！

感想と評価をお待ちしております！

IFコラボ問題 歌姫とちっさい美女(前書き)

蒼様、光闇雪様、レイン様、あづま様

感想ありがとうございます！

今回はレイン様のバカと歌姫と召喚獣の桜木恋ちゃんがつぐみ達の世界にいたら？という物語です！

IFコラボ問題 歌姫とちっさい美女

「つぐみちゃん！迎えに来ました！」

「あ、ありがとうね。恋ちゃん」

「なんだか、毎度思うんだけど。僕、この光景に慣れすぎてる!?!」

明久はつぐみを抱きしめてる恋を見て叫んだ。

叫ぶのはいいが、時間は大丈夫なのだろうか？

「あ、早く学校に行かないと!?!」

「そうですね、急ぎましょう!」

「どうしてあたしは抱っこされてるの!?!」

明久が走り出すと恋はつぐみを抱っこしたまま走る。

つぐみは今の状況にツッコミをいれているが、聞こえていないようだ。

しばらくすると校門が見えてきて玄関に向かう途中で

「吉井、雨宮、桜木、遅刻だぞ!」

玄関の前で呼びとめられた。

浅黒い肌、スーツ姿だが、その内に詰め込まれた、針金の束ねたかような筋肉質の肉体は隠しきれない。

「おはようございます。鉄じ……じゃなくて、西村先生」

「おはようございます！西村先生」

「お、おはようございます、西村先生」

文月学園が誇る、鋼鉄の生活指導担当教師、西村教諭である。趣味はトライアスロンというのがあり、生徒の間で鉄人と渾名で呼ばれている。

真冬で半そでというのも理由の一つ。

「今、鉄人って言わなかったか？」

「ははっ。気のせいですよ」

「ん、そうか？」

明久の言葉にごまかされている西村先生。

「ところで、桜木。どうして雨宮を抱っこしているんだ？」

「つぐみちゃんが可愛くて！」

「それ理由になってないよね！？」「」

と西村先生が聞くとキリッとした表情で恋が言つと明久とつぐみはツッコミをいれた。

「あー、コホン……それにしても、普通に『おはようございます』じゃないだろう」

「あ、遅刻してすみません」

「あたしも遅刻してすみません」

二人が遅刻の謝罪をすると

「よろしい、ほら。受け取れ」

西村先生はこちらに3つの封筒を渡す。

「」「」「ありがとうございます」「」

宛名には明久達の名前が書かれている封筒を受け取る。

「桜木と雨宮のおかげだろうが、よくここまで成長したな。吉井」

「いえ、二人が親身になって教えてくれたからですよ」

「そんなことないです。アキ君はやればできる人なんですから」

「ふふっ……そう言われると嬉しいですね」

明久を褒める西村先生に明久は謙遜しながら言うつづぐみと恋は嬉しそくに笑って言った。

封筒の中身を見ると

吉井明久……Aクラス

雨宮つぐみ…… Aクラス

桜木恋…… Aクラス

三人での勉強が成功したおかげだろう。

IFコラボ問題 歌姫とちっさい美女(後書き)

感想と評価お待ちしております！

第39話如月グランドパーク？（前書き）

レイン さま、FOOLさま、リザクさま！

感想ありがとうございます！

第39話如月グランドパーク?

「では、マズ最初に記念写真を撮りますヨ?」

「……………記念写真?」

「ハイ。サイコーにお似合いのお2人の愛のメモリーを残しマース」

「……………雄二とお似合い……………(ポツ)

翔子はその言葉に、仄かに頬を赤らめた。

「お待たせしました。カメラです」

そこへ2人の帽子とサンバイザーを目深にかぶったスタッフが、片方カメラを片手に現れた。

「アナタ達が持ってきてくれたのデスか? わざわざありがとうございマス。助かりマース」

「では、撮影をしますので、こちらへどうぞ」

カメラを持ったスタッフが係員にカメラを渡し、もう片方が雄二達をある方向へと誘導し始める。

係員が礼を言いながらカメラを受け取るのを見て、雄二はある物を感じた。

こういった場所のスタッフが、客の前で同僚に丁寧な礼を言う事に對しての違和感を。

「悪いが、ちょっと電話をさせてくれ」

「わかりまシタ」

電話を取り出して、番号非通知で明久に電話をかける雄二

P r r r r r r r r r r P r r r r r r r r r r

『はい、もしもし?』

電話に明久が出たが。今いるスタッフには反応がない。
携帯を取り出す仕草も見当たらない。

「明久……お前。今はどこにいるんだ?」

『どこって、つぐみと商店街でショッピングしてるんだけど?』

『アキ君、どうしたの?』

『あ、今。雄二が電話してきてさ。』

「わかった。邪魔したな」

『?うん』

ぴつと電話を切ると次の行動にでる。

「翔子、すまんがちょっと我慢してくれ!」

「……………??？」

キョトンとしている翔子のスカートを掴み、軽くまくりあげる雄二。見えるか見えないかのギリギリの高さまで持ち上がる。

「……………っ！！（ギラッ）」

その瞬間、懐に手を伸ばした人影……………というか、狐のきぐるみ。

「……………やはり、ムツツリーニも来ていたか」

その動きから、きぐるみの正体を悟った雄二は、他の可能性も考え始める。

この3人が居るなら、秀吉と瑞希の存在も……………と、神童ならではの頭脳の回転。

「……………雄二、えっち」

翔子が少し怒ったような顔で、雄二を見つめる。

「なっ！？ ちっ違っぞ翔子！ 俺はお前の下着になんか微塵も興味がないっ！」

「……………それはそれで困る」

「ぐあああああっ！ 理不尽だああっ！！」

翔子はアイアンクローをかまし、その握力で頭蓋がきしむ音が響く。

「で八、写真を撮りマース。はい、チーズ」

その間フラッシュが焚かれ、ピピツという電子音と共に撮影終了。

「スグに印刷しマース。そのまま待っていてください」

「……わかった。このまま待つてる」

「ぐああああつ！ このままだと俺の頭蓋がつ！」

律儀にも、アイアンクローを解くどころか、そのままの握力を緩める事なくキープ。

その間で、雄二は翔子の気持ちに思いつきり疑いを持っていた。

「はい、どごん」

「……ありがとう」

程なくして、係員が写真を持ってきた。

それと同時に解放される雄二が咳き込み、翔子が嬉しそうに写真を受け取る。

「……雄二、見て。私達の思い出」

「……なんだ、この写真は？」

「サービスで加工も入れておきまシタ」

写っているのは、翔子の後頭部と折檻に悶える雄二。

そしてその2人を囲う様なハートマークと、“私達、結婚します”という文字。

アイアンクローをかます女性とそれに苦しむ男性の周りを、未来を祝福する様に天使が飛び廻る図。

傍から見れば、どういいう経緯で結婚に至ったかが気になる所であり、幸せは訪れるかと聞かれれば疑問だろう。

「どう見たってこれで幸せが訪れるわけないやん」

「だよな」

「霧島さんは嬉しそうだけどね」

「坂本君ですから、問題ないですよ」

「それには同感だな」

監視カメラでその様子を見ていた深紅達が言う。
ちなみにつぐみと明久もそこにいたりする。

「コレをパークの写真館に飾っても良いデスか？」

「キサマ正気か！？ コレを飾る事で何のメリットがあると言っんだ！？」

100人いれば100人がさあ？ というだろう。

「ああっ！ 写真撮影してる！ アタシらも撮ってもらおうよ！」

「オレたちの結婚の記念に、か？ おい係員、オレたちも映ってやんよ！」

そこへ偉そうな態度で、チャライカップルがやってきた。

「すみません。こちらは特別企画ですので……」

「ああっ!? いいじゃねーか! オレたちやオキヤクサマだぞコルア!」

「きゃーっ。リユータかつこいーっ!」

その間雄二と翔子は逃げ出した。

雄二にしてみれば、あの手の連中は下手に相手にすると執拗に絡んで来ることが多く、面倒でしかない。

「ああっ!? グダグダ抜かすとマスコミにここの態度について当初すっぞゴルアっ!」

「そーよっ! アタシたち、オキヤクサマなんだからねっ!」

宣伝のためのイベントでこういう客が来るなんて、如月グランドパ
ークも縁がないな。

と思いつつ、逃亡していく雄二だった。

第39話如月グランドパーク？（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第40話如月グランドパーク？（前書き）

蒼さま、光閻雪さま、レインさま、FOOLさま、秋雨さま、あづ
まさま、祐介さま

感想ありがとうございます

第40話如月グランドパーク？

「さて。それじゃ、テキトーに回って帰るか」

「……楽しみ」

園内には前評判通りの最新アトラクションが沢山あった。

3Dの体感アトラクションから絶叫マシン、コーヒーカップやメリーゴーランドなど、

知っているアトラクションはすべて揃っているようだ。

中には見た目だけだけでは想像もつかないようなものまである。

「映画館でもあれば楽しんだがな」

「……折角一緒にいるんだから、そんなのはダメ」

と、翔子に却下されたので、仕方なく面倒が少なくて妙な雰囲気にならないようなアトラクションを捜す。

すると、そんな雄二達にひょこひょここと着ぐるみが近寄ってきた。

さっきのキツネの着ぐるみに似ているが服装が違う。さっきのキツネの着ぐるみと違って

大きなリボンをしているところを見ると、こいつはメスなのだろう。ただ、どこからともなく妖狐をバカにしているのか、という不機嫌そうな声が響いた。

聞こえていない振りでもしておこうと雄二は考えたとか。

『お兄さん達、フィーが面白いアトラクションを紹介してあげるよ？』

着ぐるみから聞こえてくるのは若い女の声だが、ボイスチェンジャーが搭載されているのか
誰の声なのか分からないが、大方予想がつく。
なぜなら、着ぐるみから若い女の声の持ち主のピンクの髪が出ているからだ。

「……さっき、明久がバイトの女子大生にデートに誘われてたな」

『ええっ、あつ、明久君が!? そっそれ、どこで見たんですか!』

と、反応する。明久と姫路はあまりにも似すぎている。

これを知っていたから、自分から雨宮は行動しないのかもしれないとふと、雄二は思った。

「……アルバイトか姫路?」

『あ……っ! ち、違いますっ! 私……じゃなくてフィーは姫路なんて人じゃないよ?』

見ての通りキツネの女の子だよっ ♪

それでも取り繕うとする姫路は真面目だと思っ。

「じゃあフィーとやら、お前のおススメを教えてくださいませんか?」

『あ、う、うんっ。フィーのおススメはね、向こうに見えるお化け屋敷だよ』

姫路……ではなくて、フィーの手が噴水を挟んだ向こう側に見える建物を示す。

あれは廃病院を改造したとかいう例の奴だ。

ちゃんとお被いしたのだろうが、本物がいたらどうするのだろう。

「そうか。ありがとう」

『いえいえっ。楽しんできてねっ』

「よし翔子お化け屋敷”以外”のアトラクションに行くぞ」

雄二が翔子の背中を押して歩き出す。姫路はそれに慌てると雄二の腕を掴んだ。

『ままま待つてください！ どうしておススメ以外の所に行くんですか！？』

「どうしてもクソもあるか！ お前の口ぶりから察するにお前らの手で余計な仕掛けを施されてる事は明白だろう。わざわざそんな所に行く気はない」

いくら成績優秀といえど、姫路は騙し合いはさっぱりのようだ。

『そ、そんなの困りますっ！ お願いですからお化け屋敷に行ってください！』

「断る！」

そのお願いとやらに残りの人生を捧げる気はないようだ。

断固として拒否し、恋人同士の時間を謳歌する。

『お願いですっ！ お化け屋敷はきつと楽しいですからっ！』

「い・や・だ！」

ずるずると姫路が引きずられるようについてくる。
邪魔なので振り払ってしまおうかと雄二が考えていると

『そこまでだ雄二！ ……じゃなくて、その不細工な男っ！
フィーをいじめると、このノインが許さないぞ！』

「その頭の悪そうな言い方…明久かつ！」

颯爽と登場したのは、先ほども見た雄キツネの着ぐるみだった。
この可愛らしいマスコットはノインだ。
だが、ボイスチェンジャーが落ちている為に声がバレバレだ。

『失礼なっ！ 僕……じゃなくてノインのどこが頭が悪いって言うんだ！』

「ボイスチェンジャーを顎の下から垂れてたらそう思っただろ！」

頭部と思われる顎のしたからプラインとボイスチェンジャーが垂れていた。

あるいみシユールな光景だ。

「……雄二。ノイちゃんはすっかりさんだから」

「すっかりさんで済ましていい光景ではないだろ！？」

ごもつともです。

この光景を監視カメラで眺めている晃希と透とつぐみと美波と深紅

は苦笑いしながら頷いた。

「ハイ。すいまセーン。お待たせしまシタ」

そこへ現れたのは、先程の係員。

若干汗がでていているように見えたのは気の性だろうか

「坂本雄二サン、お化け屋敷に行つて下サイ」

「だからイヤだと言つてるだろうが！」

「断れば、アナタの実家にプチプチの梱包材を大量に送りマース」

「やめろっ！ そんな事をされたら我が家の家事が全て滞つてしま
う！」

彼の母親の趣味は、梱包材を潰す事だった。

それも、その目の前にある全てのを潰し終えるまで、時間すらも忘
れるほどに。

『ところで明久君。さっき女子大生の声を掛けられていたって聞き
ましたけど？』

まさか、大事な作戦の最中に他の女の人と……』

『え？ 何の事？ さっきまでつぐみと……あの、どうして携帯電
話を取り出すの？
誰かを呼ぶ気？』

『美波ちゃんが今すぐ来てくれるそうです。お話、ゆっくり聞かせ
てくださいね？』

「だ、ダメだよっ！ オープン初日で刃傷沙汰なんてここの評判に……ひいっ！
なんだかすごい勢いで誰かが走って来てるみたいんだけど！？
待つて！ 何も無い事はつぐみが証明してくれるから、本気で待つて！！」

その離れた場所では、ファンシーなキツネの痴話喧嘩という、珍しい光景が展開されていた。

そして、遠くの方で土煙りが見える。その土煙りの正体は小柄な体で低身長、だが巨乳な少女がピコピコハンマーを携えての登場だった。

どうやら標的は美波と瑞希のようだ。
それに気づいた美波と瑞希は走って逃げる。

「坂本翔子さん、お化け屋敷は彼氏に抱きつき放題デスよ？」

「……雄二。お化け屋敷に行きたい」

「汚いぞキサマ！ 翔子を使って畏にハメようなんて！
そとと、勝手に翔子を入籍させるな！ そいつの名字はまだ、霧島だ！」

「……大丈夫、すぐに変わるから」

油断している隙をつかれて翔子に手を握られた。
今、思えばきちんとデートはしただろうかと思いきや抵抗をやめる。

「では、こちらにサインして下サーイ」

似非野郎が取り出したのは何かの書類とボールペン。不思議そうにそれを見ていると

「ただの誓約書デース」

契約書が必要なお化け屋敷ってどんなお化け屋敷だよ。

「だがまあ、面白そうではあるな」

と、雄二は少し楽しそうにボールペンを受け取って書類に手をかける。

【誓約書】

1. 私、坂本雄二は霧島翔子を妻として生涯愛し、苦楽を共にすることを誓います。
2. 婚礼の式場には如月グランドパークを利用することを誓います。
3. どのような事態になろうとも、離縁しないことを誓います。

「……はい雄二、実印」

「朱肉はこちらデース」

「俺だけか！？ 俺だけがこの状況をおかしいと思っているのか！？」

と、喚きだす雄二。

まあ、正気の沙汰じゃないからそう思うだろう。

冗談です。誓約書は良いので中に入って下サイ」

「……うん。冗談」

「カーボン紙を入れて写しまで用意している癖に冗談と言い張るのか？」

色々と言ってやりたいが、この連中に常識をもとめる方がどうかしていると思ったのか
言うのを止めた。

「それデハ、その大きな鞆は邪魔になりそうですので、お預かりし
マース」

「……お願い」

翔子が似非野郎にバッグを渡す。

「零れちゃうから、横にしないでほしい」

「この鞆をデスカ？ わかりませタ。気を付けマース」

鞆を見て翔子は頷いた。おそらくお弁当が入ってるのかもしれない。

「デハ、行ってらっシャイマセ」

「……雄二、行くっ」

「お、おう」

翔子に再び手を握られてお化け屋敷の扉の前に立つ。
演出なのか、その扉は横開きの自動ドアでありながら電気が入っていないようで手動で開けるようになっていた。

「私だ、お化け屋敷にターゲットが入った。吉井さん考案の作戦を実行しろ」

扉が閉まる寸前、似非野郎のそんな声が聞こえた。

第40話如月グランドパーク？（後書き）

感想と評価をお待ちしております

これからもちっちゃなロリ娘をよろしくお願いしますー！！

第41話如月グランドパーク？（前書き）

あづま様、 祐介様、 まあ様、 FOOL様、 光闇雪様、 レイン様、 ヒ
ヨウガ様、 秋雨様、 蒼様、 リザク様

感想ありがとうございます

第41話如月グランドパーク？

薄暗い廊下を翔子と二人で歩く。カツンカツンとノリウムの廊下は足音を必要以上に大きく鳴らしているような気がした。

「流石廃病院を改造しただけのことはあるな。雰囲気満点だ」

「……ちょっと怖い」

「こつこつものにあんまりビビらないお前が怖がるなんて、珍しいな」

「……そうかも」

雄二達は時折貼られている順路というポスターに従って進んで行く。一階ではなにも起こらず、二階にあがり、少し進んだ先で演出が始まる。

【……じの方が……よりも……】

冷たい風に乗って幽かに聞こえる声。

「……この声、雄二……？」

「ん？そうなのか？」

この声は秀吉がしているようだ。

なんでこんなこともできるのか疑問がよぎるが、次の言葉で愕然とした恐怖がよぎる

【姫路の方が翔子よりも好みだな。胸も大きいし。】

「……雄二。覚悟できてる……?」

「怖えっ！翔子が般若のような形相に！確かにこれはスリル満点な演出だ！」

と、いう声が響いたのだった。

そして、バンツ！と何かの仕掛けが作動する音がした。

音のした方に雄二が向くと、そこにはさっきまでなかったはずなのに、あるものがあつた。

「……気が利いてる」

と言うと釘バットを翔子が掴んだ。

「畜生っ！よりもよって処刑道具まで用意してくるとは！全く趣旨が違うが最強に恐ろしいお化け屋敷だっ！」

「……雄二。逃がさない」

雄二が逃げようとするとかかを踏んでこける。

「痛いっ！何するんですか」

「あ、すまん。ここに俺等以外がいるとは思わなくて……」

雄二は慌てて謝る為に声の方を見ると狐耳と4本の狐の尻尾を生や

した少女がいた。

少女はふまれた尻尾を撫でながら雄二を見る。

「狐？」

「見たら分かるではないですか？」

「……幻覚だ。俺は疲れてるんだ」

「……雄二。大丈夫？」

柱に額を押しつけているのを見て翔子はさすがに心配している。

「貧血なら、外に出た方がいいですよ？」

「そうする」

「……行こう、雄二」

少女が言つと雄二を支えて翔子は出口に向かい、外にでた。

「お疲れサマでシタ。どうでシタカ？ 結婚したくなりまシタか？」

「あれと結婚を結びつけて考える事が出来るのは、お前と明久ぐら
いだろうな……」

「オカしいデスね？ 危機的状况に陥つタ2人の男女ハ、強い絆デ
結ばれるという話なのデスが……」

「まあ、襲い来る危機が結ばれるべき相手自身でなければそうなる

かもしれないが……」

「……そろそろお昼」

翔子が噴水の上の方に見える多時計を見て、そう呟いた。

「では、鞆をお返します」

「……ありがとう」

「食べ終わるまで待ちますので」

似非野郎の隣に来たスタッフが翔子に鞆を返すと翔子は嬉しそうに受け取って言うとスタッフを待たせて噴水の近くにあるベンチに座る。

「翔子？」

「……お弁当作ってきた。一緒に食べよう？」

「お、おう」

ベンチに二人で座ると翔子を作った弁当を食べてお昼を過ごした。この時の雄二と翔子は凄く楽しそうに思えたスタッフは内緒で写真を撮ったらしい。

食べ終えて弁当を片付けるとスタッフに雄二と翔子は近寄った。

「では、行きましようか」

「……うん」

「おう」

スタッフの後を雄二と翔子がついて行くと

「コチラでしばらくお待ちください」

スタッフが案内したのはパーティー会場のような広間だった。そこら中に丸テーブルが設置されており、前方にはステージとテーブルが用意されている。

「……クイズ会場？」

そう、翔子が言うようにそこはクイズ会場の様な雰囲気だった。

「いらっしやいませ、坂本雄二様、翔子さま」

「では、こちらへどうぞ」

そこにボーイとウエイトレスが、それぞれの案内をスタッフから任される。

「秀吉に神埼。ボーイとウエイトレスの真似事か？」

「秀吉？ 何のことでしょうか？」

「神埼？ 何のことでしょうかね？」

顔色一つ変えずに秀吉と深紅は切り返す。

「違つといつなら確認させてもらつぞ」

雄二がそう言うと携帯を取り出してアドレスから『木下秀吉』を呼びだそうとすると

「他のお客様のご迷惑になりますので回収させてもらいます」

と深紅が笑顔で言い、雄二の携帯を奪い取った。

「な!?!」

「パーティが終わり次第お返ししますのでご安心を」

秀吉も笑顔で雄二に言うとお北したような表情になった。

「では、お席にご案内いたします」

そう言うと秀吉と深紅が雄二と翔子を席へと案内する。

『皆様、本日は如月グランドパークのプレオープンイベントにご参加頂き、誠にありがとうございます!』

司会服を着た透がアナウンスをした。

その声が会場に響く。

『何と本日ですが、この会場に結婚を前提としてお付き合いを始めようとしている高校生のカップルが、いらっしゃるのです!』

その言葉に、雄二は水を吹き出す。

『そこで、当如月グループとしてはそんなお二人を応援する為の催しを企画させていただきました！ 題して、【如月グランドパーク ウエディング体験】プレゼントクイズ〜！』

そこで、出入り口を封鎖する音が響く。

この辺りは、行動パターンを熟知している明久の手回しである。

『本企画の内容は至ってシンプル。こちらの出題するクイズに答えて頂き、見事5問正解したら弊社が提供する最高級のウエディングプランを体験していただけるというものです！

もちろん、ご本人の希望によってはそのまま入籍という事でも問題ありませんが』

この時雄二は大問題だと思っていた。

『それでは坂本雄二さん&霧島翔子さん！ 前方のステージへとお進みください！』

司会が2人の席を示し、観客の視線が一斉にそっちに向いた。

「…………ウエディング体験…………頑張る…………！！」

「落ちて着け翔子。そう言った物はだな、きちんと双方の合意の元で」

「…………体験だけだから」

「…………わかったよ」

翔子にお願いされて雄二は渋々と壇上に上がると

「では、こちらです」

「てめ、狩谷か」

「体験だけなんだから、そう意固地にならなくてもいいと思いますよ」

と、言われて雄二はため息を吐いてクイズ解答席に案内されて、そこに雄二と翔子が座る。

『それでは【如月グランドパークウエディング体験】プレゼントクイズを始めます!』

雄二と翔子の間に大きなボタンが1つ設置されている。これで問題に答えるということだろう。

『では第一問! 坂本雄二さんと霧島翔子さんの結婚記念日はいつでしょうか?』

……ピンポーン!

雄二がおかしい、問題の意味がわからないと考えていると翔子がボタンを押していた。

『はいっ! 答えをどうぞっ!』

「……毎日が記念日」

「やめてくれ翔子! 恥ずかしさのあまり死んでしまいそうだ!」

『お見事！ 正解です！』

睨みつける雄二に対し、司会は観客に見えない角度で片目を瞑って返した。

これは出来レースだと雄二は気づいた。

『では第二問！ お二人の結婚式はどちらで挙げられるのでしょうか？』

……ピンポーン！

今度は雄二が先手を取り、ボタンを押した。

『はいっ！ 答えをどうぞっ！』

「んなもん知るか！」

『正解ですっ！』

「なにいつ！？」

『お2人の挙式は当園にある如月グランドホテル・鳳凰の間、別名【んなもん知るか！】で行われる予定です！』

つぐみはこれを見て思った。無理やりすぎないだろうか。

「待ていつ！ 絶対その別名はこの場で命名したたる！ 強引にも程があるぞ！」

<では第三問！ お二人の出会いはどこでしょうか！>

……ピンポン！

『はいっ！ 答えをどうぞっ！』

「……小学校」

『正解です！ お二人は小学校からの長い付き合いで今日の結婚にまで至ると言う、何とも仲睦まじい幼馴染なのです！』

本当に仲睦まじいのだろうかと透は苦笑いしながら見ていた。

『では第四問まいります！』

……ピンポン！

問題を読む前に、雄二が先手を打ってきた。

「……わかり」

『正解です！ それでは、最終問題です！』

いよいよ最終問題にしようとしたら

「ちょっとおかしくな〜い？ アタシらも結婚する予定なのに、どうしてそんなコーコーサーだけがトクベツ扱いなワケ〜？」

そこへ、不愉快な声が会場に響いた。

先程雄二達に絡んできた、チンピラカップルである。

「あの、お客様。イベントの最中ですので、どうか……」

「ああっ！？ グダグダとうるせーんだよ！ オレたちやオキヤクサマだぞコルアー！！」

「アタシらもウエディング体験ってヤツ、やってみたいんだけど？」

「でっですから、これは……」

司会者はなんとか宥めようとするが、聞く耳をもたないチンピラ達。そろそろ深紅のリミットもキレそうな状態まできている。だが、ここで争いを起こすわけにもいかない。

慌てるスタッフを余所に、そのバカップルはズカズカと壇上に上がる。

設置してあるマイクを1つひったくり、いざ問題を出す。

(どうするの？アキ君)

(霧島さんに任せるしか)

(……そうやね)

(深紅、落ち着いてください)

クイズ席にいる雄二と翔子を見る明久とつぐみ。

深紅を宥める晃希。

「じゃあ問題だ！」

チンピラが出すのをその場全員が問題を待つ

「ヨーロッパの首都はどこだか答えろっ！」

「……………」

この問題に全員が言葉を失った。

「オラ、答えろよ！ わかんねえのか？」

（首都ね〜）

（深紅、調べた方がいいんじゃない？）

（いや、そんなことせんでもええと思う）

（なんで？）

（あんな小物に知られる組織なんてありえひんから）

深紅がうすら笑いをして小声で言うと透と晃希は苦笑いした。

『……………坂本雄二さん、翔子さん。』

おめでとうございます、【如月グランドパークウエディング体験】
をプレゼントいたします。』

「おい待てよ！ こいつら答えられなかっただろ！？ オレたちの勝ちじゃねえかコルア！」

「マジありえなくない！？ この司会、バカなんじゃないの！？」

そのバカップルがぎゃあぎゃあ騒ぎ立てる中、ステージに幕が下りて来る。

第42話如月グランドパーク？（前書き）

今回はFOOL様の紅葉さんをゲストとして参加させてます

FOOLさんに怒られないかどうか不安です（苦笑）

次は不良カップルは酷い目に合うかもしれません！

第42話如月グランドパーク？

「おメデとうございマス。ウエディング体験が当たるなんて、ラッキーでスね」

「……すごく嬉しい」

「喜んでいただけて光栄です。お2人にとって忘れられない、そんな1日にさせて頂きます」

広間から出ると、似非野郎がヒョコヒョコと近寄ってきた。

「ではウエディング体験の準備がありますので、こちらのスタッフについて行ってもらえますか？」

水色の髪でポニーテールをしたスタッフがニコニコ笑顔で言う。

そのスタッフの後ろから、30前後の女性スタッフが歩み出て頭を下げる。

いかにも業界人といった風貌の人だ。

「はじめまして、あなたのドレスのコーディネートを担当させていただきます。

一生の思い出になる様なイベントにする為、お手伝いをさせてください」

そう言ってスタッフは翔子に笑顔を向けた。

如月グランドパークの狙いはアトラクションではなくて最初からこのウエディング体験だということだ。

「ってことは、俺は長い時間待たされるのか？」

「ご安心ください。坂本雄二さんについての対応は吉井さんから聞いて……」

ではなくて、ワタシどもが考えてありマース」

「もう今更隠す必要もないだろ、明久か神崎の指示だろ？」

「ハイ。坂本雄二さんにはコレを使うように、ト」

そう言っつて、係員とスタッフが取り出したのはスタンガン（20万ボルト）だった。

「絶対逃亡を考えるでしょうから、これで気絶させてから着替えさせます」

「か、神崎てめーっ!!」

「少しガマンして下サーイ」

雄二の首の後ろにスタンガンを押しつけるとバチンと音を立てて雄二は気絶した。

この後雄二の服を着替えさせたのはいうまでもない。

そして、会場にて。

『それではいよいよ本日のメインイベント、ウェディング体験です！
皆様、まずは新郎の入場を拍手でお迎えください！』

晃希が司会になるとアナウンスにより、園内全てに響くかという位拍手が響き渡った。

「坂本雄二サン、お願いしマス」

舞台袖で似非野郎が雄二に耳打ちした。

雄二はぶちのめしてやるうかと思いつながら睨んだ。

「抵抗すれば、海胆とタワシの活け造りをアナタノ実家に送りマース」

「やれやれ……まあ、あくまでもタダの体験だしな。適当に付き合つて、さっさと終わらせるか」

油断を誘う為になわざと大きな声で雄二は言う。

内心では逃げることを考えていた、キスとか指輪の交換までは。

まだ早いと認識しているので仮病で逃げようと考えていた。

「さあ、どづづ」

「あいよ」

トントンと小さな階段を上り、雄二はそこから見える光景に一瞬眩暈がおきた。

おいおい……なんだよ、このセット」

数え切れないほどのスポットライトに、ライブステージの様な観客席。

スモークやバルーン、花火に至るまで設備が整っているように見え
ており、そこから見える電飾に幾らかかっているかすらも雄二には
想像できない。

『それでは、新郎である坂本雄二さんのプロフィールの紹介を……
省略します』

「おい、手え抜き過ぎだろ！」

これにはつぐみと深紅は苦笑いを浮かべる。

「ま、紹介なんていらねえよな」

「興味ナシ」

「ここがオレたちの結婚式に使えるかどうか問題だからな」

「だよな」

最前列に座っている連中からそんな声が聞こえてきた。

声の主は……さきほどクイズ会場で騒いでいたチンピラもだった。
これには深紅が顔をしかめる。

『……他のお客様のご迷惑になりますので、大声での私語はご遠慮
頂けるようお願いします』

「これ、アタシらのことってんの？」

「違えだろ。俺らはなんたってオキヤクサマだぜ？」

「だよねぇっ」

「ま、俺達の事だとしても気にすんなよ。要は俺達の気分が良いか悪いかってのが問題だろ？
な、コレ重要じゃない？」

「うんうん！ リュータ、イイコト言うね！」

調子に乗って下卑た笑い声が一層大きく響き渡る。

主催側もイベントの邪魔になる要因は排除したいだろうが、ここままで騒がられると迂闊に手を出すことはできない。

「……あいつ等」

「あはは……どうしてやるのかな？」

「ふ、二人とも落ち着いて」

「神崎さんと紅葉君が凄い黒いオーラーが出てるよ」

「……これは、ヤバイ」

「これは、荒れるな」

「どっつするのじゃ？」

「今は見守るしかないよ」

「……精神を壊してあげたいですわ」

ゲスト参戦した紅葉と計画した深紅はその声に不機嫌になって行く。つぐみはその二人の様子にだんだん焦ってきていた。明久は深紅と紅葉の様子に困っていた。

康太と透もその様子に先行きが不安になってバカップルの命は風前の灯かもしれないと思った。

智美はナイフを出して不機嫌そうに言う。

『……………それでは、いよいよ新婦のご登場です』

気を取り直した晃希が言うとなんしかな音量の上がったBGMとアナウンスが流れ、同時に会場の電気が全て消えた。

スモークが足元から放出され、雰囲気が高まってく。

『本イベントの主演、霧島翔子さんです！』

アナウンスと同時に行く筋ものスポットライトが、壇上の一点に集まり、純白のドレスに身を包んだ翔子がそこにいた。誰もが息を飲むほど綺麗な姿だった。

「……………綺麗」

誰ともわからないセリフが漏れ、静かな会場に響き渡る。

ゆっくりと翔子が雄二のもとに歩み寄るのを、静かに会場中が注目する。

中央を翔子が歩いてくる間、一度も床に触れることはなかった。

「……………雄二」

ヴェールの下に素顔を隠し、シルクの衣装に身を包む翔子がどこか

不安げに雄二を見上げていた。
胸元に掲げている小さなブーケが所在投げに揺れた。

「翔子、か？」

「……………うん」

雄二の頭の中は真っ白のようで、言わずもがな質問が口をついて出た。

あまりの変わりように、確認せずにいらなかったようだ。
その動揺する雄二に恥ずかしげに翔子は問いかける。

「……………どう……………？ 私、お嫁さんに、見えるかな……………？」

翔子が見知らぬ少女に見えたせいも、会場の雰囲気にも飲まれたのか、それとも他の雰囲気か。

雄二は考えを巡らせることもなく勢いで返事をしていった。

「……………ああ、大丈夫だ。少なくとも、婿には見えない」

雄二としては、最初考えていた“似合わなきゃ興ざめだな”という言葉等、既に消し飛んでいた。

だからこそ、その婿には見えないという言葉が出ただけでも上出来だろう。

「……………雄二」

翔子は小さな声で雄二の名を呼び、ブーケを抱え直した。

そしてその場で動きを止める。

「お、おい。翔子……?」

その様子に雄二は戸惑っていた。

駆け寄るべきか、一瞬迷う。すると、雄二が迷っている間に、翔子は再び言葉を紡いだ。

「……………嬉しい……………」

雄二の目の前で翔子が俯き、ブーケに顔を伏せる。

そして、それ以上言葉を発することなく静かに震えだした。

『ど、どうしたのでしょうか？ 花嫁が泣いているように見えますか?』

晃希は仕事を思い出したようにアナウンスが入っていた。

言われてみて初めて気がつく、俯いて肩を震わせて……………翔子は静かに泣いていた。

「お、おい。どうした……………?」

ヴェールとブーケが邪魔で表情が見えない。

会場から静寂が消え、観客の間に少しづつざわめきが生まれ出す。

そんな中、彼女は小さな、しかしはっきりと聞き取れる声で呟いた。

「……………ずっと……………夢だったから……………」

涙まじりのかすれた声が聞こえる。

『夢、ですか?』

「……小さなころからずっと……夢だった……私と雄二、二人で結婚式を挙げる事……」

私が雄二のお嫁さんになること……私一人だけじゃ、絶対かなわない、小さなころからの私の夢……」

口数の少ない女性が、ぼつぼつと懸命に紡ぐ言葉は雄二に形容しがたい何かの感情が喚起していた。

それに込められた感情は雄二は知っているが、ある事件がきっかけで自分への気持ちに至ったかを知っているだけに、尚更に雄二の中では大きな疑問がわき上がる。

何故、そこまで強い気持ちを持つことができるのか、と。

「……だから……本当に嬉しい……他の誰でもなく、雄二と一緒にこうしていられることが……」

そこまで言って、後は言葉にすることができずに翔子はまた静かに泣いた。

会場からはもらい泣きをしたような音が聞こえ始め、それに雄二は呆れていた。

『どうやら、嬉し泣きのようですね。花嫁は本当に一途な方のようです……』

さて、花婿である坂本雄二さん。お応えをどうぞ』

雄二の返答を待つために、会場が固唾をのんで見守り始める。

「翔子、俺は……」

『あーあ、つまんなーい!』

雄二が何か言いかけた所で観客席から大きな声があがる。
これにまた、深紅と紅葉に怒りが燃え上がる。

『マジつまんないこのイベントお〜。』

人のノロケなんてどうでもいいからあ、早く演出とか見せてくれな
〜い?』

『だよな〜。お前らの事なんかどうでもいいっての!』

会場が鎮まりかえっていたおかげで声を出したのは誰か分かった。

「ってか、お嫁さんが夢ですつ、って。オマエいくつだよ?

なに? キャラ作り? ここのスタッフの脚本? バカみてえ。ぶ
つちゃけキモいんだよ!」

「純愛ごっこでもやってんの? そんなもん観るために貴重な時間
割いてるんじゃないんだケドお〜。あのオンナ、マジでアタマおか
しいんじゃない? ギャグにしか思えないんだケドお〜!」

『そつか! コレってコントじゃね? あんなキモイ夢、ずっと待
ってるヤツなんて
いねえもんない!』

『え〜っ!?!? コレってコントなのお? だとしたら超ウケるんだ
ケドお〜!』

口々に文句を言い、翔子を指さして笑い始める二人組。すると

【あんたら、もういっぺん言ってみなはれ】

【ちよっ！深紅落ち着いて！！】

そんな放送が入り、舞台裏の方から誰かが暴れるような音が聞こえてきた。

あのクールな女性なキレていることに雄二は驚いていた。
どこで暴れているのか見ようとしていると

【は、花嫁さん？ 花嫁さんはどちらに行かれたのですかっ？】

翔子は壇上から消えていた。

さっきまで立っていた場所にブーケとヴェールを残して

「……………はあ。やれやれ」

なんとなく雄二はヴェールを拾い上げる。

それは羽根のようなはずなのに、涙で湿って少し重くなっていた。

『霧島さん！？ 霧島翔子さーん！ みなさん、花嫁を探してくださいー！！』

スタッフがバタバタと駆けだし始める。

ここまで大がかりな準備してきたのに失敗とは、経営側はお偉い方はきつと真っ青になっていることだろう。

「坂本雄二さん！ 霧島さんを一緒に探してください！」

スタッフが1人、雄二に駆け寄って説得し始めるが

「悪いがパスだ。面倒だし、便所にも行きたいしな」

「え？ ちょ、ちょっと。坂本さん……！」

背を向けて歩き出す雄二にスタッフが話しかける。

が、無視の姿勢を崩さないでいると諦めたように去っていた。

『いや、マジでさっきのウケたな！』

『うんうん！ 私……結婚が夢なんです……どう？ 似てる？ 可愛い？』

『ああ、似てる！ けど……キモいに決まってる！』

『だよね〜！』

雄二は用事を済ませようとバカップルに歩み寄ると深紅と紅葉が来ていた。

二人の背後には黒い漆黒のオーラーが満ちていて気配に飲まれると気絶するくらいだ。

それに雄二は気づくと笑って二人に目で合図する。

「なあ、アンタら」

「ちょっと用事があるんやけど」

「ここじゃなんだから別の場所に行こうか」

『ああ？ なんだよ？』

二人組が真っ茶色な顔をこちらに向けてくが、紅葉と深紅を見て青ざめてきた。

第42話如月グランドパーク？（後書き）

ヒヨウガ様、FOOL様、祐介様、蒼様、あづま様

感想ありがとうございます

第43バカツプル制裁編（前書き）

蒼様、ヒヨウガ様、光闇雪様、秋雨様、レイン様、リザク様、暁
巧様、暮灘雪夜様、あづま様、FOOL様

感想ありがとうございます

第43 バカップル制裁編

こちら、暗いお化け屋敷の一角にある誰も通らない場所。

「カタカタ」

『4体の骸骨がー!!?』

バカップルの後ろから出現するワイトが出るとバカなカップルは怯えた。

「君達に言いたい事がある。

ひとつ。ボクはこの遊園地に来た君達になにもしなかった。

そのせいで翔子ちゃん《友達》がキズついた。

ふたつ。友達をキズつけた君達を許さなかったから余計な干渉をした。

みつつ。人の傲慢さで君達を罰する。」

『『は？ 思うこと言っただろ？（でしょう？）』』

「そう、わからない？ボクはボクが犯した、これから犯す罪を数えたよ。今度は君達の番だよ。」

『『な、なんのこと？』』

「さあ、お前達の罪を数えろ！」

紅葉を見ると怒っていた。

それもそうだろう、彼らの自分勝手さにはこちらも呆れるし、霧島を傷つけたのだから。遠慮も無意味だろう。

「紅葉のひいおばあちゃんの手作り和菓子をめしあがりーや」

『『むぐっ!?!?』』

無理やりバカなカップルの口に紅葉が持ってきた和菓子をいれて食べさせた。

『『ぐはあ!?!』』

泡を吹いて倒れるバカップルを冷めた目で深紅は見ると雄二を見て…。

「男の方は坂本。頼むで?」

「ボク達はこの女性を担当するね」

「あ、ああ。任せる」

女の足を掴んで引きずって紅葉と深紅は歩き出した。

「……………あれはマジギレだな。」

雄二は苦笑いを浮かべて言うと男の方を見て殴り飛ばす。

「がはっ!」

「おいおい、それだけで簡単にくたばるなよ？」

「ぐ…あ」

男を見て雄二は楽しそうに笑って言う。

この後、散々この男を殴った後、雄二は翔子を捜しに向かった。ちなみにこの男には花嫁衣装を着せられた状態で放置された

如月グランドパーク内での隠された場所に、深紅と紅葉が女を投げ入れた。

「さーて、楽しい粛清タイムや」

「思う存分に怖がってね」

「ひっ」

紅葉と深紅の黒いオーラーを感じて怯える女。

「安心しい。カップルみたら失禁するほどになるだけやから」

「それってもう恋人できなくなるね」

「屑にはこれがお似合いや。さて、ここからはゲームのはじまりや」

「ルールは？」

「この屑女がわっちらから逃げきれたら、見逃して捕まったら…そ

「うやね」

「ワイトの遊び相手になってもらうとか？」

「それもええけど、悪夢を見せたる。めっちゃキツイホラーを」

楽しそうに笑い合う二人に女は恐怖を覚えた。

逃げないと自分が死ぬ！、そう思って女は走りだした。

「お、やる気十分やね」

「じゃあ、追いかけてようか」

狩られる側を狩る側の最高のゲームが幕を開けた。

女は必死に逃げるが深紅と紅葉はすぐに距離をつめてナイフを投げる。

もちろん、ギリギリを狙ってやっている為に女の恐怖が止まらない。

「逃がさないよ〜」

「そうやで。人の恋路を邪魔するヤツは馬に蹴られて鳴き叫べや」

追いつめられる恐怖で女が精神が壊れつつある。

途中で待ち伏せて女の腹を蹴り、苦しませてから。また手を離すと女は必死に逃げる。

こういうやりとりをしているうちに女の精神が崩壊してとある暗示をしてから病院に搬送された。

暗示は『これからカップルを見ると恐怖を覚えて失禁するだろう』
という特殊な暗示だった。

「ん？終わったのですか？」

「終了や」

「毎度のことながらえげつないな」

「うわ、凄い格好だね」

「そつやね、少しいじつておくで」

深紅は笑顔で言うつと花嫁衣装来た男にメイクして見栄えは普通の女
みたいな感じになった。

「まんま女だね」

「確かに」

「目が覚めたら女装癖に目覚めたりして」

「ありえるな」

さんざん男をいじつた後深紅は携帯で連絡してとある隔離病院に搬
送された。

絶海の孤島へと連れていかれたカップルの運命はないでしょう。

第43バカッフル制裁編（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

僕とちっさい幼なじみのIFをただいま書き中です！

第44話翔子と雄二の帰り道とえぴろーぐ(前書き)

光闇雪様、ヒョウガ様、あづま様、レイン様、暮灘雪夜様、蒼様、
FOOL様

感想ありがとうございます！

第44話 翔子と雄二の帰り道とえびろーぐ

翔子が歩いている中、一人の男性が壁によりかかっていた。

「よっ。随分と待たせてくれたな」

「……雄二」

「さて。それじゃ、帰るとすつか」

雄二は翔子に鞆を担ぎなおして駅に向かってあるき出す。

夕暮れの中、黙々と駅に続く道を歩く。

どれくらいそうしていただろうか、翔子が聞き取れるかどうかくらいのギリギリの小さな声で呟いた。

「……雄二」

「……なんだ？」

「私の夢、変なの……？」

例のバカカップルに笑われたことを翔子が気にしているのが分かる。

翔子が足を止めたので雄二も足を止める。

翔子は俯いているが長い付き合いだから、どんな顔しているかなんてわかる。

「まあ、あんまり一般的ではないかもしれないな」

「……」

雄二の言葉にまた翔子が俯いた。
だが、偽りの慰めで翔子が喜ぶわけでもない。そのことにはがゆい
気持ちで仕方ない。

「この際だから、言うておく。お前のその気持ちは、過去の話に對
する責任感を勘違いしたものだ」

「……ゆう、じ……」

翔子は息をのむが、すぐさま否定する。

「……けれども、俺はお前の夢を笑わない。」

お前の夢は、大きく胸を張れる、誰にも負けない立派なものだ。」

会場で拾った物を翔子に被せた。それは、翔子が落とした物だ。

「但し、相手を間違えていなければ、だけどな？」

「……これ……さっきの……ヴェール……」

花嫁衣装の一つである白い薄布を翔子は手で押さえて驚いたように
顔を上げた。

「さて。さっさと帰るぞ。遅くなると色々誤解されるからな」

雄二はそう言って歩き出した瞬間にホワイト達が飛び出てきた。

「カタカタ！」

「うおっ!?!」

「?」

雄二は驚くが翔子は不思議そうにしている。
しばし無言の時間が流れる。

ワイト達もこれには困っていたのは内緒です。
しばらくしてワイト達の行動に気づいた翔子は行動する。

「きゃあ、怖い」

「嘘つけ!全然怖がってないじゃないか!」

「……失敗した」

今更すぎだとワイト達は思っていた。これには深紅と紅葉も頷いていたのは言うまでもないだろう。

「お二人さん、邪魔して悪かったな」

「回収するから、ごゆっくり」

「あ、ああ」

「……ありがとう」

とりあえず、気まずいのでワイト達を深紅と紅葉で連れて帰ったのだった。

この後、深紅が作った時空転移のバスに乗って紅葉とワイト達は元の世界に戻っていった。

「おい、明久に神埼」

「あれ、どうしたの？雄二」

「どないしたんや？」

「如月グランドパークでは、随分と色々とやってくれたな？」

「あははっ、何を言ってるのさ？ 僕はつぐみと買い物に行ってたんだよ？」

如月グランドパークに行けるわけじゃないじゃないか」

「わっちはアルバイトやで？」

「……そうか。お前らがシラを切ると言うならそれでもいいだろう」

「な、何を言ってるのさ。変な奴だなあ」

「せやね」

「ところで、お前たちにプレゼントがある」

「え？ なになに？」

「なんや？」

「今話題の恋愛映画のチケットだ。気になる相手がいれば、一緒に
行くと良い」

「うーん、じゃあ。つぐみと行くのかな」

「わっちは由香里に渡しておくで」

「お前……無難な方を選んだな。そういえば、神崎にお相手いなかったんだっけ」

「わっちにおるわけないやろ」

「そうかよ」

「あはは(汗)」

雄二は渡してから、気づいた。

明久には幼なじみや島田と瑞希がいるが、無難なヤツを選びそうだということも忘れていた。

深紅には気になる相手すらもないことにも。

「あれ、アキ君。どうしたの？」

「あ、つぐみは恋愛映画苦手じゃないよね？」

「うん、それがどうかしたの？」

「今チケットもらったから、一緒に行くこつよ」

「え！？あ、あたしと！！？」

「嫌？嫌なら別の人に渡すけど」

「別に嫌というわけじゃ」

「あ、アキっ！ そう言えばウチ、週末に映画を見たいと思っ
たんだけど！」

「あ、明久君！ 私も調度見たい映画があつたんですけど！」

「ほえ？ 何々？ どうして2人してそんなに殺気立ってるの!？」

「瑞希ちゃんに美波ちゃん。正座！」

つぐみは巨大ぴこぴこはんまーで瑞希と美波を叩いた。

「どうして、二人はがつつくような行動するかな？」

「「だ、だって」」

「だってもしかしてもないよ！」

つぐみは大変ごりっぷくのように延々と瑞希と美波に説教をして
いた。

「雨宮は……自分の気持ちに素直になんてなれないんだ？」

「わっちはしらひんよ」

そんな様子を雄二と深紅は眺めていた。

第44話翔子と雄二の帰り道とえびろーぐ（後書き）

次回はプール編に行きます！

その殺戮料理、消し飛ばす

第45話 **プールと水難事故？（前書き）**

光闇雪様、FOOL様、暮灘雪夜様、蒼様、あづま様、秋雨
様、リザク様

感想ありがとうございます！

第45話プールと水難事故？

「あのさ、皆でプールしない？」

「いきなりだね」

「あはは……実は昨日ね。西村先生の手伝いしてたら、お礼に学校のプールを使ってもいいって言われたの」

「鉄人が！？」

「うん。ただ、ちゃんと掃除するならという条件もあったよ」

「そっか。めんどうだな」

明久はつぐみが言った条件に悩んでいた。

「でも、使ってもいいって許可をもらってるのに使わないままというのもダメだろ」

「そやで、こんなチャンスめったにないと思うぞ？」

「どつする、アキ君」

「最近暑いし。借りようか、雄二」

「そつだな。雨宮がもらった礼を使わないのも心ぐるしいしな」

しばらく考えた後結論を出して、学校のプールを借りることになっ

た。

「じゃあ、姫路さん達も誘うね」

「ワシも参加してもいいじゃろうか？」

「いいと思うよ」

「……俺も参加する」

瑞希達が参加すると知って土屋君もくわわった。木下君は元から参加するようだったみたいだね。

「晃希君と透君は？」

「僕達は止めときます」

「俺もちよつと用事があるからな」

「そっか」

つぐみは少し残念そうに言うと晃希と透は苦笑いする。

「中岡君と由香里ちゃんは？」

「参加するぜよ」

「私…も」

「良かった」

「智美と朋は参加しいひんやるうな」

「なんで分かるの？」

「勘や」

深紅の笑顔で言う発言になぜか納得してしまいそうになるつぐみ。苦笑いしていると瑞希と美波が秀吉に何か言ってるようだ。

「ひ、卑怯よ木下！ 自分は自信があるからって！」

「そ、そうですねっ！ 木下君はズルいです！」

「????? お主らは何を言っておるのじゃ？」

突然非難される事に困惑する秀吉。

「いきなりどうしたの？」

「あ、つぐみちゃんも参加するんですか？」

「聞いておきたいわ！」

「え、えっと。うん」

美波と瑞希の勢いに押されながらつぐみは頷いた。

「で、どうするんだ2人とも？」

「い、行くわ！ その、イロイロと準備をして……」

「そ、そうですね。準備は大事ですよね」

複雑そうな顔をしつつ、2人は一応肯定の意を示した。

「あ、そうだ雄二。霧島さんにもきちんと声をかけておいてね」

「……言われなくてもそのつもりだ」

雄二は無然とした表情で意外な返事をする。

「うんうん。雄二も大人になったね」

「いや、そういう問題じゃない」

「???? それじゃ、どういう問題さ」

「いいか、想像してみる明久。俺の立場で、
後々になってからこの事が翔子に知られるという状況を。」

そう言われると明久はふと考え込んだ。

「樹海の奥……いや、湖の底……」

「深海魚の餌……いや、溶岩の不純物……」

「俺の死体の処理方法とその末路まで想像する必要はないが、まあそんなところだ」

なんだか、坂本君は大変そうだね。

「とにかく、全員オツケーなようだな。んじゃ、土曜の朝10時に校門前で待ち合わせだ、水着とタオルを忘れるなよ」

雄二のシメの台詞と同時に、鉄人が教室のドアを開ける音が響いた。

そして週末……

「おはよー。絶好のプール日和だね」

「楽しもうね」

雲一つない快晴の青空の下、明久とつぐみは校門に立つ秀吉と瑞希と深紅に挨拶する。

「おはようじゃ明久に雨宮、良い天気じゃな」

「おはようございます明久君につぐみちゃん、今日は良い1日になりそうですね」

「おはようさん。良い天気良かったやね」

三人は笑顔で返事する。

そして……ある人影を見て。

「ムッツリーニ、おは……」

「……………！！（カチャカチャカチャ）」

鬼気迫る表情で、カメラの手入れをしているムッツリーニ。彼にしてみれば、ここは絶好の撮影チャンスでもある。

明久に構う暇などないと言わんばかりに、カメラに集中していた。

「あ、あの、土屋君」

「……………今忙しい」

「ムッツリーニ準備はいいけど、無駄になると思うよ」

「……………なぜ？」

「いや。だってムッツリーニはどうせ鼻血で倒れるだろうし」

「そうだよな。チャイナドレスどころか、葉月ちゃんの着替えですら鼻血の海に沈む位だもん」

という明久の言葉に、ムッツリーニは肩をすくめて見せた。そして大きなスポーツバッグを手に取り、2人の前に突きつける。

「……………甘く見て貰っちゃ困る」

と言いながら、そのスポーツバッグを開けて2人に見せる。

「……………輸血の準備は万全」

「うん、最初から鼻血の予防を諦めてる当たりが男らしいよね」

「最初から諦めてるよー!!?」

鞆いっぱいに入っていた携行用の血液パックをみて、とりあえず救急車は必要ないなと明久は思い。

つぐみは思わずツツコミをいれていた。

「準備と言えば、秀吉は新品の水着を買うとか言ってたよね？ 忘れずに買って来た？」

「うむ。無論じゃ」

「ちなみに買って来た水着じゃが……」

「……………!!(くわっ!)」

秀吉の言葉にムツツリーニが目をむく。

当然明久も表にこそ出さないが、興味津々。

「……………トランクスタイルじゃ」

「「バカなああああっ!!」」

「わつちが店員に頼んで男物を持ってきたんよ」

「神埼には助かったのじゃ」

「……………はあ」

つぐみは落ち込む明久と土屋にため息がもれる。

……タタタタッ！

「バカなお兄ちゃん、おはようですっ！」

「わわっ!？」

「もう葉月ってば、アキがビックリしてるでしょ？」

明久の背中に、葉月が飛び付いたのを見て二人がたしなめる。
天真爛漫を体現するように笑う少女、島田葉月。

「バカなお兄ちゃんは冷たいですっ。酷いですっ。どうして葉月は呼んでくれないんですか？」

「あ、うん。ごめんね葉月ちゃん」

「……呼んだら呼んだで、明久がどこぞのある人物に八つ裂きにされそうや」

「ごめん、それは否定できる要素がないよ。現実味がかなりあるんだけど。」

「家を出る準備をしていたら葉月に見つかっちゃって。」

「どうしてもついてくるって駄々こねて聞かないもんだから……」

「別にいいと思うよ？ 飛び入りがあって困る理由もないし」

「それもそうだけど……あれ？ 坂本達はまだ来てないの？ ウチが最後だと思ったのに」

「いえ、もう来てますよ？ 今職員室にかぎを借りに行つて……あ、丁度戻つてきたみたいですよ」

瑞希の説明の最中に、校舎の方から雄二と翔子が歩いてきた。

「おはよう雄二、霧島さん」

「おう。きちんと遅れずに来たようだな」

「……おはよう」

「お兄さん、おはようです」

雄二の粗野な外見に物怖じもせず、元気よく挨拶をする葉月ちゃん。

「ん？ ちびっ子も来たのか？」

「ちびっ子じゃないですっ、葉月ですっ！」

「ああ、悪い悪い。よく来たな葉月」

「はいっ」

楽しそうに葉月ちゃんの頭にぼんぼんと手を置く坂本君。
子供好きなんだね。

「んじゃ、早速着替えるとするか。女子更衣室のカギは翔子に預けてあるからついて行ってくれ。
着替えたらプールサイドに集合だ」

雄二の言葉に従い、一旦メンバーは男女に分かれる。

あたしと深紅ちゃんと瑞希と美波は霧島さんに。

明久とムッツリー二と秀吉と葉月は坂本君に……ってあれ？

「……ん？ ころころ、葉月ちゃんと秀吉は向こうでしょ？ 霧島さんについて行かないとダメだよ」

「えへへ。冗談ですっ」

「ワシは冗談じゃないのじゃが……？」

完全に女として認識されてる事に、改めて実感した秀吉だった。なんか可哀想に思えてきたよ。

「と、とりあえず。着替えない？時間がもったいないよ」

「そっやね」

「そっだな」

秀吉は秀吉専用更衣室に入り、あたし達は女子更衣室に入った。

第46話ブルー編！（前書き）

レイン様、FOOL様、暮灘雪夜様、リザク様、あづま様

感想ありがとうございます

第46話プール編！

「あ、もう来てるよ」

「本当やね」

「みんな…早い」

つぐみと深紅と由香里は水着に着替えて更衣室から出てプールサイドに来ると言っていると美波の声と明久の声が聞こえてきた。

「ん？ 今美波が返しなさいって言っていたのは、葉月ちゃんが付けている胸パツ……」

「この一撃に、ウチの全てを賭けるわ……!!」

「あ！こらー！！アキ君に何しようとしてるの！」

つぐみはそれに気づいてどこからかとりだした巨大ピコハンで美波を叩いた。

「あつっ」

「どーしていつもいつも、手が出るの!?!」

「だ、だって」

「だってもしかشもないよ!?!」

美波をガミガミと叱っているつぐみ。

つぐみの格好はピンクのリボンがついたワンピースの水着でパーカーを着ている。

「心……」

「あ、由香里ちゃ………！！（ブシャー！！）」

由香里が心に近寄ると心は鼻血を噴き出して倒れた。

ちなみに由香里の格好は桃色のビキニで水着用のミニスカートを着ている。

「……心？」

「か……可愛い……ぜよ」

倒れた心を膝枕して不思議そうにしている由香里に心は咳くように言う。

「うう……折角用意して来たのに……。葉月のバカ……」

つぐみの説教から解放された美波は哀しげに呟いていた。

美波の格好はスポーツタイプのセパレートである。

「アキ君、励ましてあげて」

「へ？あ、うん」

「な、何よ。やっぱりこの格好、どこか変なの……？」

「い、いや。そんなことないよ！ そのすっごく似合ってるよ！」

「え……？ アキ。それ、本当……？」

「う、うん……。手も脚も胸もバストもほっそりしていて、凄く綺麗だと」

美波が明久の足を踏もうとしたらつぐみに巨大ピコハンで叩かれていた。

「美波ちゃん！」

「……う。だ、だって、二回も」

「だからって、手を出すのはよくないよ！！」

つぐみの本日二度目の説教が美波にされる

「なんや、賑やかな光景やね」

深紅は楽しそうに笑って言う。彼女の格好は黒のビキニでパレオを腰にまいている。

スタイルのいい彼女にあつた姿だ。

ちなみに康太は鼻血を出しながら写真を撮っていた。

「島田、そう怒るな。明久は口ではああ言ってるが、明らかにお前の水着を意識しているぞ」

「ゆ、雄二！ 何を言ってるのさ！ 僕は別に動揺してなんか……」

「あ。そ、そうなの……？もう、アキってば。素直に言えばいいのに……バカ」

「……良かったね」

「ええ」

「美波のむ」

「アキ君……それを言うから攻撃を受けるんだよ？（汗）」

「……そういわれてみるとそうだね（汗）」

明久の死に直結しそうな言葉をつぐみが押しとどめた。

更衣室の方から、霧島さんが現れた。

長い黒髪を翻しながら、まるでモデルのように優雅に歩いてくる。つぐみはその様子を憧れるように眺めていた。

「……雄二。他の子を見ないように」

「うお！？いきなりなんだ！！？」

霧島さんは雄二の目を手でふさいだ。

「ふえ……。お姉さん、とっても綺麗です……」

「うん、羨ましいね」

霧島が着ているのは少し大人しめの白いビキニで水着用のミニスカ
ートを組み合わせたものだ。

「……そう言われると、嬉しい」

「坂本君も何か言うべきことは？」

「翔子」

「……うん」

「手を離してくれないとわからない」

「……あ、すっかりしてた」

このやりとりにつぐみと明久はこけた。

「土屋、どないしたん？」

「……すまない、明久」

「え？ なに？」

「……先に逝く」

そう土屋が言うとその場に倒れた。

「む、ムツツリーニ！！？ムツツリーニ！！」

「すみません！ 背中
の紐を結ぶのに、時間がかかっ
ちゃって……」

「！」

駆け足でこちらに来る瑞希の姿があった。
いまの彼女は生物兵器そのものだ。

そして……美波が錯乱した

「Worauf für einem Standard hat
Gott jene unterschieden, die
hadden, und jene. Die nicht hab
en!? Was war für mich ungenüge
nd! (神様は何を基準に、持つ人と持たざる人を区別しているの
!?) ウチに何が足りないっていうのよ!）」

「み、美波ちゃん!?!?」

「ドイツ語やね」

「なんで分かるの!?!?」

しれっと答える深紅につぐみはツッコミをいれていた。

「後は誰が来てないのかな?」

「あー、秀吉だよ」

「あ、そっか」

「遅れてすまぬ。着替えはさほど手間取らんかったのじゃが、いか
んせん校舎からプールまでが遠くての」

と、パーカーを着てちゃんと男物のトランクスを着た秀吉が現れた。
なぜか、明久と土屋はがっかりしていた。

そんなこんなで騒動が収まり、みんなプールで遊んでいる。

つぐみは浮き輪を持ってプールで浮いている。

「……はあ」

「なんや、お疲れモードやね」

「浮き輪じゃないとプールで泳げないなんて、悲しくて」

「身長が身長やしな」

深紅はつぐみに苦笑いを浮かべて言う。

美波ちゃんはみいちゃんとか話してるけど、どうしたのかな？

『……雄二。ちなみに私はCクラス』

『何を言っているんだお前は？』

離れた場所では坂本君と霧島さんが不思議な会話をしていた。

「おい、霧島さん！」

「……………何？」

「雄二と水中鬼って遊びをやって見せてほしいんだ。

ルールは簡単で、雄二を水中に引きずり込んで、溺れさせた後で人工呼吸をしたら霧島さんの勝ち」

「それ、確実に危ないよね!？」

深紅に連れて行ってもらったつぐみはすかさずツッコミをいれていた。

霧島さんは魚雷のように静かに、そして速く坂本君に水中から接近していく

深紅と明久は合掌していた、なんで？

「お？ 何だ？ いきなり足が……………おわあっ!？ だ、誰だ!？
誰が俺を水中に（ガボガボガボ）」

「……………雄二、早くおぼれて」

「ぶはあっ! しょ、翔子!？何をトチ狂って……………!（ガボガボガボ）」

止めさせたいけど、深紅が掴んでるし。どうしよう（汗）

「ね？ 危ないでしょ?？」

「はいです……………。葉月、水中鬼は諦めるです……………」

諦めてくれたのは嬉しいけど、坂本君は大丈夫なの？

「明久、神埼！ てめえらの差し金だな！？」

「うわっ！ダメだよ霧島さん！きちんと捕まえておいてくれないと！」

「そつやで！つぐみも巻き込んでしまつやん！」

「……ごめん」

「わっ。お兄ちゃん達とお姉ちゃん、泳ぐのとっても速いですっ」

アキ君と深紅と坂本君と霧島さんの四人で水中鬼がスタートした。でも、あたしは参加できず……はあ

なんとか逃げ出した坂本君がこっちに来て、つぐみはプールサイドに載せられてから、明久と深紅は一緒に逃げた。

「……浮き輪がないと泳げないのは哀しすぎるよ」

沈んだ気持ちで呟いていると聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「あれ？ プールを使っているのは誰かと思ったら、代表達だったの？」

「……愛子？」

霧島さんが動きを止めて、声のした方に向く。

4人も一旦死闘を中止して、同じ方向を見るとそこにはAクラスの工藤愛子がいた。

「あれ？ 確かAクラスの工藤？ どうしてここに？」

「あつ、中岡君じゃない。ボク、水泳部だから」

「え？ 今日水泳部は休みの筈ぜよ」

「うん、すっかり忘れていて学校に来てやっと思い出したんだけど……
人の声がしたから寄ってみたんだ。ねえ吉井君、良かったらボクも混ぜて貰って良い？」

「何で僕に聞くかわからないけど、別に構わないよ？」

「そうだな、既に一人誰か増えてるみたいだしな」

ふと見ると、そこにはある珍客が既にいた。

「お姉さまっ！ どうしてプールに行くのなら美春に声をかけてくれないのですか!？」

「美春!? アンタどうしてここにいるのよ!

プールで遊ぶなんて誰にも言わなかった筈なんだけど!？」

「美春にはお姉さまを害虫から護る為のトクベツな情報網がありま
すから!」

そこには、何かと襲撃してくる清水美春がいた。

「じゃあボクも水着に着替えて来るね？」

スポーツバッグを掲げて、女子更衣室へと向かう愛子。

すると途中で振り向いて……。

「覗くなら、バレないようにね」

と、言い残していった。

あ、アキ君達が動こうとしてみいちゃんに何か言われてるし。
なんか複雑だな。

第46話プール編！（後書き）

「つぐみん」

「ひゃわ!？」

「つぐみんの浮き輪になりきたよ!」

「来たって、ここはあとがきだよ!!？」

「そんなことは気にしない」

「気にしようよ!!」

「さ、行くっ!」

「どっへ!?!？」

そのままプールに連れていかれたつぐみと楽しそうな優羽がいた。

第47話楽しいプール？（前書き）

レイン様、光闇雪様、ヒヨウガ様、まあ様、暮灘雪夜様、FOOL
様、リザク様、秋雨様、あづま様

感想ありがとうございます！

第47話楽しいプール？

しばらく遊んで、休憩の為に明久と雄二と心とつぐみと深紅と由香里はプールサイドのベンチに腰をかけて皆の姿をなんとなく眺める。

「あのさ、雄二に心につぐみに神埼さん」

「なんだ？」

「なんぜよ？」

「何、アキ君？」

「なんや？」

バシツと水面にビーチボールが叩きつけられる音が響く。

「僕の気のせいかもしれないんだけど」

「「ああ」」

「「うんうん」」

ズバン、と勢いよくサーブを打つ音が鳴る。

「あの二人、ヤケに険悪な雰囲気在水中バレーをやってない？」

「大丈夫だ。俺達にも険悪な雰囲気に見える」

「これが気のせいだったら、もっと良かったぜよ」

「……同感」

「そうだね。」

「あの険悪な雰囲気は凄い気がするで」

険悪な雰囲気をかもしだしてる二人をつぐみ達は眺める。

『美波ちゃん！ 絶対に譲りませんからね！』

『上等よ瑞希！ スポーツでウチに勝とうなんて思わないことね！』

ボールよ割れると言わんばかりに全力で打ち合う瑞希と美波。最初は仲良くやっていたのに、いつのまにかあんなことになっていった。

「ときに明久に神埼」

「ん？ なに、雄二？」

「なんや？」

「この前俺がお前等にやった映画のチケットはどうした？」

「あれなら、アキ君が瑞希ちゃんと美波ちゃんにあげたよ。」

「わっちは心に渡したで」

「映画は楽しかったぜよ」

「幸せ……だった」

「そうか……間違いない。それが原因だ」

「へ？ 何が？」

「ああ、納得いったわ」

明久だけがわからないままでつぐみと心と由香里と深紅と雄二は納得いった。

『負けた方が諦めるって約束、忘れてないわよね！』

『もちろんです！ 美波ちゃんこそ負けても約束を破らないでくださいね！』

『そつちこそ！』

二人は映画のチケットを賭けて戦っているようだ。

「ほう………。姫路と島田の勝負は面白いのう。どちらが優勢なのじや？」

疲れたのか秀吉はプールサイドに上がってつぐみ達が座っているベンチにやってきた。

「今のところは瑞希ちゃんが優勢だよ」

「んむ？ つぐみは参加せんくてよいのか？」

「あ、うん」

「そうか。にしても……意外じゃ。球技ともなれば、島田の方が軍配が上がりそうなものじゃが」

「姫路と島田の1対1なら、そうかもしれへんけど」

そう言つて深紅はそれぞれの陣地を見て

瑞希の隣には霧島がおり、美波の傍には清水がいる。

「なるほどのう。霧島は運動神経も良いようじゃな。島田と互角とは、なかなかやるではないか」

瑞希と美波では力の差は歴然だけど、それだけでは勝負は決まらない。

瑞希には幸いなことにパートナーの霧島はスポーツもできるみたいで、彼女は巧みにボールを美波のいない所に落として得点を挙げていた。

「それにしても、島田の相方は動きが不自然じゃな。」

「そうやね、あれは故意に手を抜いているかもしれへんで」

「あ、秀吉と神埼さんもやっぱりそう思う？」

一方美波のパートナーはさっきからミスばかりしている。

サーブは全部外しているし、ボールが飛んできたら落とすか場外へと飛ばしてしまう。

構えや動きを見ているかぎりだと結構上手いような気がするのに。

『美春。アンタ、絶対手を抜いているでしょ……!』

『そんなことありませんお姉さま！ 美春はお姉さまの為に全力で（手を抜いています）す!』

『これにはウチの大切な物がかかっているんだから本気でやりなさい!』

『はい！ 美春もお姉さまの為に本気で（手を抜いています）す! あんなのとデートなんて、お姉さまの為になりませんから!』

『アンタ、さてはウチを負けさせる為にこっちに来たわね……!』

『ほらお姉さま！ ボールが来ましたよ!』

『あつ!? もう、早く言いなさいよっ!』

美波達が何かを言い争っているうちに、瑞希が打ったサーブが二人の陣地に静かに落ちた。

「はい。これで15点。1セット目は代表&姫路さんチームの勝ちだよ」

審判をやっている工藤が手を挙げて、最初の勝負の終了を告げる。

「1セット目?」

「大方3セットマッチだろ。5セットもやるとは思えないからな」

「確かにそうぜよ」

「でも、遊びの割には随分本格的にやってるなあ」

「遊びじゃないんかもしれひんな」

「見てたらわかる気がする」

コートチェンジもやっている様子をつぐみ達は眺める。

「お姉ちゃん、ファイトですっ!」

無邪気に応援している葉月。彼女は両チームの間に流れる険悪な空気に気づいていないのだろう。

「続いて2セット目いくよ。サーブは島田さんチームだったよね?」

美波がいる方にボールが投げ込まれる。

美波はそれを拾ってパートナーの清水にボールを渡した。

「それじゃ 2セット目っ!」

「ああっ! 手が滑ってしまいましたあっ!」

工藤の合図と同時に宙に舞ったビーチボールは、なぜかサーバーの真後ろへと飛んでいった。

「はい0対1だよ」

壁に当たって戻ってきたボールを再び工藤が美波のコートに投げ入れる。

「パートナーがあのだまじゃ、島田に勝利はないな」

その様子を見て、雄二が勝負の行く末をそう評した。

「そうだね。いくら美波ちゃんが上手くても、1人じゃ勝ち目はないよね」

「もはや勝負は見えたも同然じゃな」

「そっちな」

「あのパートナーの子がどうにかできれば、勝利があがるかもしれないぜよ」

「どうにか……できる……かな」

同意する秀吉と明久とつぐみと深紅が言う心がぼつりとつばやいて由香里は小首をかしげて言う。

『……美春。もう一度言うけど、次のサーブからは本気を出しなさい』

『ひ、酷いですお姉さまっ！ 美春はお姉さまの為に一生懸命頑張っているというのに、その頑張りを疑うなんて！』

『下手な演技はいらわないわ。よく聞きなさい美春。これが最後の警告よ』

『お姉さま信じてくださいっ！ 美春はお姉さまに嘘なんてつきません！』

『いい？ 一こまで言っても本気を出さないと言っつのなら……』

『ですから、美春は本気を出してますと何度も』

『ウチは明日から美春ことを、「清水さん」って呼ぶことにするわ』

『……………』

「ねえ、今のサーブ見た!？」

「見たよ!! 垂直に変化してたよ!!!？」

「どうやればビーチボールであんな芸当ができるのじゃ!？」

「わっちならとれるけど、めんどいからしたくないわ」

「……………どうでもいい」

「あの威力は半端じゃないぜよ」

「流石の翔子もアレは取れないな……………!」

『お姉さまごめんなさい！ 美春は嘘をついていました！』

『いいのよ美春！ これからも友達でいましょうね！』

ひしつと抱き合う二人。

妙な寸劇を繰り広げているみたいだ。

「でも、こうなると形成は一気に逆転だね」

「そうじゃな。姫路には可哀想だけど、お世辞に巧者とは言えんから」

「あ、またサーブが決まったよ！」

美波のパートナーの動きがさっきまでとは格段に違う。なにより表情に鬼気迫るものがある。

「やれやれ。姫路も可哀想にな。折角のデートのチャンスが奪われるとは」

「しゃーないやろ、相手が相手やし」

隣で雄二と深紅は頬杖をつきながら呟いていた。

パアンツ！

そんな時、大きな破裂音がプールに響き渡った。

「……凄い威力」

「そうぜよ。まさか、ビーチボールを割るほどとは」

「え？ 今の、ボールが割れる音なの？」

「そうやで、島田の相方がサーブを打った瞬間に破裂したみたいやで」

プールに視線を移すと、確かに水面にはビーチボールだったと思われる破片が浮いていた。

「あの子、どこまで強い力でボールを打っているんだろう」

つぐみは苦笑いしながら言う。

「あ……！ ごめんなさい。美春、ちょっと力をいれすぎてしまいました。代わりのボールを捜して

くるのでお姉さま達は休憩しててください」

そう告げると清水はプールを出て行く。

「……ちょっと疲れた」

「そうですね。ボールが見つかるまではお言葉に甘えて休みましようか」

休憩の為にビーチバレーをしていた皆がプールから上がる。

「お疲れ様。皆凄く気合いが入っていて、観ていて面白いよ」

「いろんな意味で面白いのは確かやね」

「……………深紅ちゃん（汗）」

「あ、はい。ありがとうございます。私も皆と一緒に遊べて嬉しいです」

「良かった…ね」

由香里は笑顔で瑞希に言う。

「ところで、どうしてプールを借りることができたんですか？」

「あたしと深紅ちゃんが西村先生の手伝いしていたら、日頃のお礼にっ」

「そうでしたか」

つぐみは瑞希には説明してないことに気づいたのか答える。

「あ、ちょっと失敗して人数分用意できなかったんですが……………」

にこやかに笑う瑞希に嫌な予感がよぎる。

「実は今朝作ったワッフルが3つ」

「瑞希ちゃん……………味見した？」

「え？……………してませんよ？だって太りますし」

「味見くらいしーや!ー!」

「そつだよ!約束破るの!ー?」

「はづ!ー!……でもでも」

「でもじゃない!ー!」

つぐみの巨大ピコハンで瑞希は叩かれている。

この後ワツフルはうやむやになって時間いっぱいまで遊んで掃除をして帰ったのだった。

第47話楽しいプール？（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

IFコラボ問題 過激派と観察処分者（前書き）

バカとテストと召喚獣 試験召喚のすすめの久遠光一君とのコラボ
です！

秋雨さんに怒れたり、そのファンの人に怒られないか不安ですが、
頑張ります！！

IFコラボ問題 過激派と観察処分者

「なー、久遠君」

「なんだ、深紅？」

「今日、闘技大会なるものしいひん？」

「いきなり、なんだよ」

「朋がおもしろいもん作ったから、試しに起動したいんやて」

「芳乃が？」

「そうやで、んでな。わっちらに協力してほしいんやて」

「俺等に？ なんでもた」

「わっちらはライバルやけど、最近戦えてひんやる？
それで今回作った物に参加してぜひ戦って欲しいみたいなんや」

「へー、いいぜ。科目は物理でいいか？」

「そうやね、それがええやろ」

二人は笑い合って言うと言いつと歩いて学園長室に向かった。

「来たね」

「来てやったぞ、妖怪ババア」

「久遠君、それじゃ。妖怪に失礼やで？」

「アタシに失礼だとか思わないのかい！！？」

「当たり前やん」

学園長のツツコミに深紅はしれつと答える。
その瞬間頭を抱えて学園長は後悔したとか。

「あ、いらっしやーい」

「芳乃。何を作ったんだ？」

「なんでも、本体同士が戦える代物らしいで」

「へー、それは面白そうだな」

深紅の説明を聞いて光一は楽しそうに笑った。

「じゃあ、こっちだよ」

「行くで」

「おう」

朋の後を二人はついて行くと体育館に入るとなんらかの機械が置かれていた。
どれも需要そうだ。

「本格的だな」

「せやね」

「参加するのは久遠君と深紅だけなんだけどね」

「俺等だけ？」

「清水やら根本やらが参加したらややこしいもの」

「それは同意見やね」

「俺もだ」

朋の言葉に深紅と光一は頷いていた。

「ステージはあそこだよ」

「ほな、はんなり行きまひよ」

「手加減は無だぜ？」

「当たり前やろ」

「じゃあ、頑張つてね」

二人はそれぞれの階段を上ってステージに上がると

「準備はいい？」

「ええよ」

「俺もだ」

「じゃ、ミッションスタート！」

朋の一言をキーワードに丸い円形みたいなバリアーが二人を包む。

「試獣召喚サモンや！」

「試獣召喚サモン！」

二人が召喚獣を召喚すると科目が表示されるのだが、今回は実験なのでそれはでないのだろう。そして、どこか違和感が二人に起こる。

『なんや視点が低いで』

『俺もだ』

「おおー、成功だね」

朋は笑顔で言うと一緒に深紅と光一の召喚獣は朋を見る。

『どづいことや？』

『何がなんだかわからないんだが』

「このシステムはね。意識が召喚獣に移るといふものなのさ」

「つまり、想いのままに召喚獣を自分の意志で動かせることができるというわけだよ」

学園長と朋は得意げに言う。

特待生という者にのみ送る代物らしいが、まだ実験段階なのだそうだ。

『観察処分者みたいなもんか？』

「そうだよ」

『なんや、えろう凄い物開発したんやね』

光一の質問に朋は答えて深紅は感慨深げに呟いた。

「さて、そろそろ。戦っていいよ」

「ちなみにここは全校舎に中継されてるからね」

『なんてことしてくれんだ、クソババア！！』

『まあまあ、今は新たな設定で戦えることを楽しみに思っただらばええやん』

『……そうだな』

二人はステージの上で武器を構えて、まるで自分の身体のように動かす。

『はっ！』

『そう簡単に詰めらせないぜ』

光一の召喚獣がライフルの弾を放ち、深紅の召喚獣はそれを剣でしのいで。

『次はこっちや！喝采は万雷の如く《パリテーヌ・ブラウセルン》』

『くっ！爆発！』
エクスプロージョン

チュドーン！！

深紅が剣を振り上げて何度も切り裂こうとすると光一が銃弾を放ちキワードを叫ぶと周りにあり弾が爆発し深紅は爆発になんとか耐えて後ろに下がり、光一もダメージを負う。

『つつ。いきなり爆発をするとはやるやん』

『あの技を食らったらヤバいからな』

『せっかく隙をつけたと思うたのに。あんさんは凄いえ』

『深紅もな』

二人は本当に楽しげに笑いながら戦う。

お互いをライバルだと認め合っているからこそ、楽しいのだろう。

『さて、そろそろ。決着をつけようか』

『せやね』

再び武器を構えるところか時間が止まったような感覚が起きる。そしてお互いの召喚獣は走り出して。

『あー……また引き分けかいな』

『ま、いいんじゃない？そうそう決着がついても面白くないだろ』

『そつやね』

『おつ』

光一の召喚獣は深紅の召喚獣の頭に獣を突き付けて、深紅の召喚獣は光一の召喚獣の首もとに剣をつきつけている。

「ステージ解除」

朋が言うとシステムが反応して展開された物が全て消える。

「お疲れさま」

「ええよ、結構楽しめたし」

「今回はだけは感謝するか」

「また、したかったら行ってね」

朋は学園長と一緒に体育館を去ると

「俺等も行くか」

「せやね」

光一と深紅も体育館から出て行く。

この後Fクラスの皆に囲まれたのはいうまでもない。

第48話強化合宿準備期間！（前書き）

ヒヨウガ様、光閨雪様、あづま様、FOOL様、祐介様、秋雨様、
リザク様

感想ありがとうございます！

第48話強化合宿準備期間！

「翔子」

「……隠し事なんてしていない」

「まだ何も言っていないぞ？」

「……誘導尋問は卑怯」

「今度誘導尋問の意味を辞書で調べて来い。んで、今背中に隠した物はなんだ？」

「……別に何も」

「翔子、手をつなごう」

「うん」

「よっと ふむ、MP3プレーヤーか」

「……雄二、酷い……」

「機械オンチのお前がどうしてこんなものを……。何が入ってるんだ？」

「……普通の音楽」

ピッ 『優勝したら結婚しよう。愛している。翔子』

「……………」

「……普通の音楽」

「これは削除して明日返すからな」

「……まだお父さんに聞かせてないのに酷い……。手もつないでくれないし……………」

「お父さんってキサマ　これをネタに俺を脅迫する気か？」

「……そうじゃない。お父さんに聞かせて結婚の話を進めてもらうだけ」

「翔子、病院に行こう。今ならまだ2、3発シバいてもらえば治るかもしれない」

「……子供はまだできてないと思う」

「行くのは精神科だ！　ん？ポケットにも何か隠してないか？」

「……これは大したものじゃない」

「え、なにになに！『私と雄二の子供の名前リスト』か。…………ちよつと待てやコラ」

「……お勧めは、最後に書いてある私たちの名前を組み合わせたやつ」

「『しょうご』と『ゆうじ』で『しょうゆ』か。……なぜそこを組み合わせるんだ」

「……きつと味のある子に育つと思つ」

「俺には捻くれ者に育つ未来しか見えない」

「……ちなみに、男の子だったら『こしょう』が良い」

「『しょうゆ』って女の名前だったのか……」

新学年になって二カ月が経過し、日没の時刻にはつきりとした変化を感じ始めるこの時刻。
程よい気温でよく眠れた明久と一緒にいつもより少し早い時間に登校していた。

「む？ 今朝は早いのが明久に雨宮」

教室に足を踏み入れると秀吉君が出迎える。

「おはよう秀吉。なんか早く目が覚めちゃってね」

「おはよう、木下君。今日はアキ君が早く目が覚めたからこれたんだよ？」

「おはようじゃ。そうなのか、いつも大変じゃのう」

「でも、あたしができることはこれくらいだから」

つぐみは苦笑いを浮かべて秀吉に言う。

「兩宮は優しいのう。ところで明久は強化合宿に浮かれておるじゃろっつ?」

「あはは。そうかもしれないね」

「学力強化が目的とはいえ、皆で泊りがけなのじゃ。楽しみになるのは仕方ないじゃろっつな。」

無論ワシとして心が躍っておるしの」

「あたしもわからなくはないかな」

三人でいつもの日常的なことをして明久と一緒に鞆の中身をロッカーに移す。

「でも、確かに四泊五日なんて修学旅行みたいだから楽しみでー」

「あれ?」

と、その時。カサツ、と手の先に何かが触れる感触がした。

「ん? なんだろう」

「どうしたの?」

疑問に思っ中を覗き込んで見ると、空っぽであるはずのロッカーに見覚えのない封筒がはいつていた。

「つぐみのは何?」

「手紙…みたいなんだけど」

つぐみは手紙を見て浮かない表情をしている。

明久は覗きこむとつぐみの分はラブレターのようにだった。

「どっにするの?」

「……断るよ。だって…」

「つぐみ?」

「な、なんでもない!」

つぐみは心配そうな明久に笑顔で言うと手紙をポケットにしまう。

「つぐみ…屋上に行く?」

「え、でも」

「内容くらいはみないとわからないし、ね?」

「……うん」

「む?どうしたのじゃ、明久に雨宮」

「あ、秀吉。つぐみのロッカーにラブレターがあつてさ」

「ふむ……何も聞かなくておくから、二人で屋上に行つてくるといいのじゃ」

「ありがとう、秀吉！」

「え、わわ！？アキ君！！」

秀吉はつぐみの様子に気づいて明久に言うと明久はつぐみの手を握って急いで教室を出て屋上に向かった。

「よいしょっと・・・っと」

「青空が綺麗」

屋上へと続く重い扉を押し開くと、その向こうには澄み渡る青空が広がっていた。

「良かった、誰もいないよ。つぐみ」

「う、うん」

強い日差しから逃れるように涼しげな日陰に二人で腰を下ろし、明久はつぐみがポケットから取り出すのを待つ。

「それ、誰がくれたのかな……？」

「えっと…あたし達と同じ年の人からみたい」

「……大丈夫？接触感応が辛いなら、僕があけるけど」

「いい、大丈夫だから」

「……うん」

明久が呟くとつぐみは苦笑いを浮かべて言い、それが妙に僥倖に見えて思わず明久が代わりに開けようかと申し出るが断られた。

つぐみは自分の意志で動くことと決めたら止められないのだから、明久は諦めるしかないのだが、内心納得がいかないうえに心配だった。

つぐみはしばらく目を閉じて気持ちを落ち着けてから、ゆっくりと手紙の封筒に手をかける。

緊張しているせいか手が震えて中身を取り出すのに少しだけ手間取った。

『あなたのことが好きです。お付き合いしてください
返事は強化合宿が終わってからでいいです』

つぐみへのラブレターがちゃんと書かれてはいるがつぐみは沈んだ表情をしている。

「大丈夫？」

「う、うん。平気」

「何かあったら、かならず僕に言ってね？」

「！……ありがとう、アキ君」

手紙をしまうと明久に笑顔で言うつぐみ。

手紙に触れていると接触感覚が無意識に発動して辛いのが彼女の悩みであり、思い出したくもない過去の映像が浮かんでしまうのだ。

この件について知ってるのは明久と深紅だけだ。

他の皆に知られて心配をかけるのは心苦しいからとつぐみに言われて明久も深紅も誰にも教えていない。

「さて、教室に戻ろう?」

「うん」

つぐみは明久の手を握って屋上から出て教室に戻る。

「明久に雨宮。おかえりなのじゃ」

「うん」

「ただいま」

「明久、ちょっといいかのう」

「え? いいよ。つぐみはここにいるんだよ」

「え、うん」

秀吉はつぐみの様子を見てから明久に声をかけて教室を出る。

「おはよう、つぐみ」

「おはようさん、つぐみ」

「あ、美波ちゃんに深紅ちゃん。おはよう」

美波と深紅に声をかけられたつぐみはホッと安心しながら笑顔で答

える。

「アキはどうしたのよ」

「なんか、木下君が話があったみたいなの」

「ま、まさか。木下はアキに告白するき……ごめんなさい。だから、睨まないで深紅」

「あ、あはは（汗）」

つぐみは平謝りしてる美波と深紅を眺めて苦笑いする。

「深紅ちゃん、つぐみちゃん、美波ちゃん。おはようございます」

「あ、おはよう。瑞希」

「おはよう、瑞希ちゃん」

「おはようさん、姫路」

後ろから声が聞こえたので振りかえるとつぐみ達は微笑んで言う。

「あの、明久君はどこに」

「アキなら、木下と話中よ」

「そっなんですか……告白じゃ……」

「瑞希ちゃん、いい加減にしなさい……」

「あつう……そうですよ。なにかも飛躍しすぎですよね」

瑞希も勘違いしそうになるつぐみは軽くピコハンで叩いて言つとしゅんとしながら瑞希は言う。

本当に理解しているのか不明ではあるが。

「あれ？坂本君、何しているの？」

「あ？ああ、雨宮か。実はな、脅迫状が届いてな」

「なんや、ラブレターやないんか」

「神埼、てめーが俺を女装なんかさせるから！！」

「八つ当たりは勘弁や〜」

「……………それと、雄二の結婚が近いらしい」

「はい？」

「まさにダブルパンチやね」

「そつだよ」

落ち込んでいる雄二につぐみはどうしたらいいのか悩んでいた。

「で、脅迫状以外にもなにかあつたやろ」

「ああ、実はな今朝。翔子がMP3プレーヤーを隠しもっていたん

だ

「MP3プレーヤーやて？……確か霧島は機械は苦手やったんちゃうん？」

「どこで入手したんだ。その情報は…ま、いいが。神埼の言う通り、結構な機械オンチだから

、そんなん持ってくるなんて不自然だ」

「それで？」

「そこで怪しく思って没収してみたんだが、そこには何故か捏造された俺のプロポーズが録音されていたんだ」

「……………」

一瞬深紅の脳内で霧島との戦いでのことがよぎる。

「き、霧島さんは可愛いね！そんな台詞を記念にとっておきたいなんて……」

「いや、婚約の証拠として父親に聞かせるつもりだようだ」

「そ、それは…また…なんとも言えないね」

つぐみが苦笑いしながら言うと

「MP3プレーヤーは没収したが、中身はおそらくコピーだろうし、オリジナルを消さないことには……」

そうやって取りだしたのは再生専用のプレーヤーだった。

「そんなわけで、ムツツリー二にはその台詞を録音した犯人を突き止めてもらいたい

さつきも言ったようにアイツは機械オンチだからな。」

「そんな子が密かに集音機をしかけるなんてできないもんね」

「できるとしたら、それは盗聴に長けた人でしょうね」

晃希は会話に割り込んで言うと深紅も頷いた。

するとガラガラと教室の扉が開く音が響いた。どうやら、担任の先生がやってきたみたいだ。

「遅くなってすまないな。強化合宿のしおりのおかげで手間取ってしまった。」

HRを始めるから席についてくれ」

そう告げる西村先生は手に大きな箱を抱えていた。

きつと今言ってた、強化合宿のしおりだろう。

「……とにかく調べておく」

「すまん。報酬に今度お前の気に入るような本を持ってくる」

「……必ず調べあげておく」

土屋君が快く引き受けてくれたおかげか、素早く席につくことができた。

明久と秀吉も慌てて戻ってきて席に座る

「さて、明日から始まる『学力強化合宿』だが、だいたいのことは今配っている強化合宿のしおりに書いてあるので確認しておくように。」

まあ旅行に行くわけではないので、勉強道具と着替えさえ用意してあれば特に問題はないはずだが」

前の席から順番に冊子が回されてきたので、つぐみも一冊取って明久に回す。

「集合の時間と場所だけは、くれぐれも間違えないように」

西村先生のドスの聞いた声が響き渡る。

それを聞いて本を開いて中身を見る。

今回強化合宿で行く所は卯月高原という避暑地で、この街から車で約四時間、電車とバスの乗り継ぎで行くと約五時間かかる場所らしい。

「特に他のクラスの集合場所と間違えるなよ。クラスごとでそれぞれ違うからな」

AクラスやBクラスはきつとリムジンバスだろうけど、設備が入れ替わったのだから

「我々Fクラスは芳乃博士のはからいで用意されたバスで行くぞ」

「Aクラスはリムジンバスなんですか？」

「いや、そちらも芳乃博士のはからいで用意されたバスで行くそう
だ」

2台も用意できる芳乃博士っていったい。

こうして、つぐみ達の強化合宿が幕をあけた。

第48話強化合宿準備期間！（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

後、つぐみと深紅のゲストキャラ参戦などを許可いたしますので使いたい方は、感想覧で書いてくださいね。

第49話強化合宿？（前書き）

GAU様、光闇雪様、吹き抜ける風様、レイン様、FOOL様、あづま様、秋雨様

感想ありがとうございます

第49話強化合宿？

「それにしても芳乃博士は凄いな」

「そうだね、こんなバスまで用意できるんだもん」

「燃料もかからないのいいけど、今エコ車だということに驚いたけどだね」

走るリムジンバスの中で明久達は芳乃のことを話していた。

彼女はスポンサーだから、できないことはないだと深紅から聞いていたのだが、これはさすがに凄いというレベルを超えている。

運転してくれているのは芳乃さんの知り合いの方らしく、深紅とも知り合いなのだそうだ。

性別は男性で名前はレオンさん、というらしい。本名なのかと聞いたら苦笑いを浮かべていたのをつぐみは覚えていた。

「美波、何を読んでいるの？」

「ん、これ？ これは心理テストの本。」

100円均一で売ってたから買ってみたんだけど、意外と面白いの

「へえ〜。面白そうだね。美波、僕にも問題出してよ」

「うん。いいわよ」

美波はそう答えて、適当にページを捲る。

「それじゃいくわよ。『次の色でイメージする異性を挙げてくださ

い
」

「『？黒？オレンジ？緑？青？白』それぞれ似合つと思
う人の名前を言ってもらえる？」

「えーつと……つて美波。そんな怖い顔で睨みつけられてると答
えにくいんだけど」

「べ、別にそんなわけじゃ……！いいから早く答えなさい！」

「ん……順番に黒は神埼さんでオレンジは朋ちゃん、緑は美波で
青は姫路さんで白はつぐみかな」

パサッ

「あれ、どうしたの？美波」

「う、ウチが緑で瑞希は青でつぐみは白……」

「美波ちゃん？」

美波は顔を赤らめたり落ち込んだりして忙しそうだった。

つぐみは心配そうに声をかける。

「どれどれ？」

つぐみ達が悩んでいると雄二が美波の本を覗き込んだ。

「黒は『憧れ』オレンジは『元気の源』緑と青と白は……なるほどな
」

雄二はつぐみと明久と美波を交互に見て嫌な笑みを浮かべる。

「さ、坂本、返しなさいよ！」

「悪い、悪い。面白そうだったもんで、つい借りちまった」

そう言っつて謝る雄二を美波はむくくとふくれっ面で睨んでいた。

「そう思っつんなら雄二も参加したら？」

「そうだな。島田、俺もちよいと混ぜてもらえるか？」

「それはいいけど………そ、それより、さっきの問題に深い意味はないんだからね！」

「ああ。分かってるって」

一体あの本に何が書いてあつたんだろう。

「ワシも参加していいかの？」

その様子を見て秀吉がやつてきた

ムツツリー二と二人で通路を挟んで美波の横に座っていたけど、やっぱり退屈だつたのだろう

「別にいいけど」

まだ、どこか顔が赤い美波。一体どうしたのだろうか。

「ところでムッツリーニは参加しないの？」

「どうやら眠っておるようなのじゃ。色々と調べものをしておったとか」

背もたれから身を乗り出して目をやると、ムッツリーニがコクコクと舟を漕いでいる姿が見えた

「そつとしておいた方が良さそうだね」

「うむ」

眠っているのに起こすのは可哀想だから。

どうやら、晃希と透と智美も眠っているようだ、疲れているのだろう。

「あの、私もいいですか？」

「ええ、いいわよ」

「ところで美波ちゃん。さっきの問題の『青で連想する異性』って……」

「………教えない、絶対に」

「そ、そんなぁ………」

「あ、あたしもいいかな？」

「いいわよ」

つぐみも参加することにしたのか美波と会話する。

「ところで、明久。雨宮はなんで白なのじゃ？」

「あー、それはね。小さい頃から白系の服を着ていたからだよ」

「なるほどのう」

秀吉は疑問を明久に聞いていた。

「懂れか〜、わっちは照れるで。あ、わっちも参加するで」

「ええ、いいわよ」

美波は深紅を見て楽しそうに言う。

「心と……私も参加する」

「了解」

由香里と心も美波に近寄って言う。

「第2問いくわよ。」

美波は本を開いてページをめくって次の部分を読む。

「『1から10の数字で、今あなたが思い浮かべた数字を順番に2つ挙げて下さい』だって。どう?」

「俺は5・6だな」と雄二。

「ワシは2・7じゃな」と秀吉。

「僕は1・4かな」と明久。

「私は3・9です」と瑞希。

「あたしは6・4かな」とつぐみ。

「わしは4・9ぜよ」と心。

「私…は10・7」と由香里。

「わっちは7・8やで」と深紅。

それぞれの答えを聞いた後、美波はゆっくりとページを捲くつた

「えっと、『最初に思い浮かべた数字はいつもまわりに見せている
あなたの顔を表します』だって。それぞれ…」

美波が順番に指を差しながら

「クールでシニカル」 雄二

「落ち着いた常識人」 秀吉

「……天然たらし」 明久

「温厚で慎重」 瑞希

「健気で頑張り屋」 つぐみ

「人情深い」 心

「内気で優しい」 由香里

「ミステリアス」 深紅

と告げたのだった。

「ふむ。なるほどな」

「常識人とは嬉しいのう」

「僕は天然たらしなの!？」

「温厚で慎重ですか」

「健気で頑張りや……か」

「人情深いぜよか」

「内気で……優しい……」

「本当にそう書かれておるんか不思議やわ」

皆はそれぞれ、口々に感想を述べていた。

「それで。『次に思い浮かべた数字はあなたがあまり見せない本当の顔』だって。それぞれ…」

さっきと同じように美波が順番に指を差して

「公平で優しい人」 雄二

「色香の強い人」 秀吉

「……無謀な人」 明久

「意志の強い人」 瑞希

「自信を持ってない人」 つぐみ

「一途な人」 心

「天然な人」 由香里

「姉御肌な人」 深紅

と、告げた

「秀吉は色っぽいのか」

「姫路は意志が強いそうじゃな」

「ねえ、無謀ってどういふこと!？」

「自信……」

「一途なのはあってるぜよ」

「天然？」

「姉御肌って……どうなっておるんや」

「坂本君は優しいそうです」

心理テストをネタにわいわいと盛り上がる会話。
そんな感じでその後も美波の心理テストを難問かやってみる。
そうこうしていると、

「……………(トントン)」

不意に肩を叩かれた

「あ、ムツツリーニ。おはよう」

「目が覚めたようじゃな」

「……………空腹で起きた」

「あれ？ もうそんな時間？」

携帯電話を取り出して現在時刻を確認する

今は1時15分

いつもならとっくに昼食を済ませている時間だ

「確かに良い頃合いじゃの。そろそろ昼にせんか？」

「そうだね。あまり遅くなると夕飯が入らないし」

「はい、アキ君」

「ありがとう、つぐみ」

明久はつぐみから弁当を受け取ると明久はFFF団に囲まれた。

『『『羨ましいすぎるぞ、吉井ー!!!』』』』

「あんさんら、よかったです。わたちの作った弁当でもたべひん？」

『『『ありがとうございます!』』』』

深紅がお重の弁当箱を取り出して笑顔で言うとFFF団は静まった。皆美味しそうにお弁当を食べている、深紅は一人暮らしをしているので料理は明久並にできるのだ。

第50話強化合宿？（前書き）

注意！！

小山と清水の性格が変化しています！

原作と違う設定ですが、作者的はこれが一番被害が少ないと思って書きました。

それでもいいという方は読んでください。

第50話強化合宿？

「おや、ここは」

「えっと……どこだっけかな」

「……合宿所」

「は？贅沢だな」

「透が言つと違和感があるのは僕だけですか？」

「晃希は間違っていないよ」

僕の問いに明久君は苦笑いしながら言いました。

ああ、彼も透の家に遊びに行ったことがあるんですね。

坂本君と土屋君と秀吉も同じ表情をしていますし。

「にしてもよく寝てたな」

「だよな、そんなに疲れてたの？」

「ええ、僕も坂本君が脅迫されていると聞いたので調べてみようかと」

「狩谷……サンキューな」

「……いえ」

「無理するな、晃希。今一瞬お前誰だよ！みたいに思っただろ」

「な！？」

あー、透にはバレたようですね。

明久と土屋は騙せたようですが、秀吉にはバレバレのようですし。どうでしょうか？

「ところで、情報がつかめたのか？」

「……ああ」

「ええ」

坂本君は落ち込んでいましたが僕と土屋君に聞いてきました。

「脅迫状はおそらく同じ2年と断定してもいいでしょう。」

「なんでだ？」

「3年の方があまり接点がないですからね」

「……神崎にも情報をもたらったから間違いない」

そう僕と土屋君が言うと坂本君は腕を組んで考え込みました。

「それと霧島さんの方ですが」

「……昨日、犯人が使ったと思われる道具の痕跡を見つけた」

「さすが、ムツツリー二!!」

僕もしているのですがね。
無視ですか？

「ですが、脅迫状の犯人は不明です」

「……神崎はBかCかAにいる男子ではないかと言っていたが」

「情報が少ないから断定ができないんですよね」

僕はため息をはいて言う。

「そっか……でも、神崎さんに協力してもらってるなら大丈夫だよ
ね」

「はい」

それに関しては大丈夫だと思います。清水さんにはある写真で動いてもらっていますし。

「……校内に網を張った」

「盗聴の犯人はたやすくわかりましたがね」

そう告げながら土屋君が取り出したのは小さな機械です。

「……小型録音機。昨日学校中に盗聴器を仕掛けた」

「……ピッ……らっしゃい」

スイッチを押しますと、内臓されている音源からノイズ混じりの声が部屋に響きました。

「随分と音が悪いね」

「そうですね」

「校内全てを網羅したのなら仕方ないだろう。音質や精度に拘る余裕はないからな」

かろうじて女子の声だと分かるけど、人物の特定はできない。

……雄二のプロポーズを、もう1つお願い

対するは女子の声ですね。でも独特の話し方と台詞の内容から特定はできますね。

「しょ、翔子……！ アイツ、もう動いていたのか……！」

「よっぽど早く手に入れたんだね」

「らしいな」

透と明久の考えは分かりやすいですね。

霧島さんは坂本のどこがいいのかと思っているようだ。

毎度。二度目だから安くするよ

……値段はどうでもいいから、早く

流石はお嬢様。太っ腹だね。それじゃあ明日……と言いたいところだけど、明日からは強化合宿だから、引き渡しは来週の月曜で

……わかった。我慢する

「あ、危ねえ……。強化合宿があつて助かった……」

「タイムリミットが来週の月曜まで延びたな」

「だね、と言っても土日はほとんど行動できないだろうから、実質は」

「あと、四日ですね」

僕が言うと坂本はどうしたもんかと悩んでいました。

「脅迫状のヤツとは違つが、霧島と坂本の結婚への秒読みの犯人は女子のようだな」

「でも……聞いたことがあるような声ですね」

「あ、晃希も思つたか」

「……どういふこと」

「この声は清水さんではないかと言つことですよ」

黒い手帳を出して僕が笑顔で言つと明久と坂本と透は若干青ざめて

いた。
生き残る手段を友達の為につかっているだけですがね。
深紅には負けますが。

「つまり、翔子が持っていたあれは清水が盗聴して入れたという
とか」

「そういうことになりますね」

「でも、脅迫状の犯人はわからないね」

「確かに、坂本。手紙に写真とか入っていたのか？」

「写真か？……入っていたな」

「どんな感じで？」

「……俺の女装写真だった」

「一瞬沈黙がよぎりました。」

あの時の写真ですか、多分…土屋と深紅が撮ったのでしょね。

さっきの以降に商談がいくつか続いていました。

「……わかったのはこれだけ」

「あの盗聴の犯人はわかったけど、脅迫状がな」

「誰なのかわからないんだよな」

うーんと三人で悩んでいますと

「あ、そういえば。秀吉の風呂はどうなっているんでしょうか？」

「栞をみたところ、こんな感じなのじゃ」

〈合宿所での入浴について〉

・男子ABCクラス	20	00	21	00	大浴場(男)
・男子DEFクラス	21	00	22	00	大浴場(男)
・女子ABCクラス	20	00	21	00	大浴場(女)
・女子DEFクラス	21	00	22	00	大浴場(女)
・Fクラス木下秀吉	20	00	21	00	個室風呂?
それか、	22	00	23	00	大浴場(男)

「これは…」

「なんとも言えないね」

プールの時に西村先生に深紅が交渉していまの状況になったら幸いですね。

どこまで秀吉を女扱いすれば気が済むのでしょうか。

「一応先生に聞いたら、雄二と明久と晃希と透と心との同伴は可能らしいのう」

「それは何よりぜよ」

「でも、女装を断らないから女扱いされるのではないですか？」

「ぐぬ……それを言われるとなんとも言えんのじゃ」

「異端審問会は俺が抑えておく」

「深紅を怒らせるのは得策ではないですからね」

「坂本にならないが、吉井に手を出したら……お菓子が無くなるかもしれないかな」

須川が黄昏るように言う辺りが実感こもってますね。

秀吉と入ることを許可された理由は僕と透と心と坂本は秀吉を男としてみているからです。

明久は微妙な感じなんですがね。

ーードバン！

「全員手を頭の後ろに組んで伏せなさい！」

凄いい勢いで僕等の部屋も扉が開け放たれ、女子がぞろぞろと中に入ってきました。

「な、なにごとじゃ!?!」

「木下と中岡と狩谷はこっちへ！ そのバカ4人は抵抗をやめなさい……」

先頭に立つ島田さんが、とっさに窓から脱出しようとした透達の機先を制しました。

「なぜお主らは咄嗟の行動で窓に向かえるのじゃ……?」

「僕も知りたいです」

「俺も同意見ぜよ」

「仰々しくぞろぞろと、一体何の真似だ？」

「告白なら大歓迎だけど？」

窓を閉めながら透と坂本は女子勢に向き合います。

明久と土屋は貴重品の入った鞆を下ろして向き直っています。

「よくもまあ、そんなシラが切れるものね。」

あなた達が犯人だつてことくらいすぐにわかるといふのに」

島田さんの後ろから出てきた高圧的に言い放ったのはEクラス代表の中林さんです。

後ろで並んでいる大勢の女子も腕を組んでうんうんと頷いている。

「犯人？ 犯人ってなんのことさ」

「コレのことよ」

小山さんが僕等に何かをつきつけてきました。

「……CCDカメラと小型集音マイク」

その手の者には圧倒的な知識をもつ土屋が代わりに答えてくれました。

「女子風呂の脱衣所に設置されていたの」

「それって盗撮じゃないか。一体だれがそんな事を」

「とぼけないで。あなた達以外に誰がこんなことするっていうの？」
「言いがかりですね。」

「僕等はそんなことしていませんよ。」

「そうじゃ、覗きや盗撮なんてそんな真似はしておらん！」

「そうぜよ！無実の罪ぜよ！」

僕と秀吉と心は明久達を庇うように言います。

だって、あまりには哀しいじゃないですか、こういう言いがかりは。

「アキ……。信じていたのに、どうしてこんなことを……」

「美波。信じていたなら拷問器具は用意してこないよね？」

明久、僕もそれに関しては同意見ですよ。

「姫路さん。違うんだ！ 本当に僕等は！」

「もう怒りました！ よりによってお夕飯を欲張って食べちゃった時に覗きなんて……！」

い、いつもはもう少しその、スリムなんですからね！？」

怒るべきはその点なんですか？

「皆、やっておしまい！」

中林さんの号令で囲まれるとボコ殴りの状況に、僕等が止めようとして聞いてはくれませんね。
そしたら、冷たくて凍えるような声が部屋に響きました。

晃希視点終了)

「あんさんら、覚悟はええんやね？」

「ひっ！」

「なんでここにいるって」

「清水に聞いたんや」

深紅は冷めた目で女子勢を見ていた。

「島田に姫路……今までは両方応援してやるうかとわっちは思ってたんやけど」

撤回するで、明久にはつぐみが一番や」

「「え!!?」「」

「どうしてって顔しとるけど、あんさんらの行動は褒められたものやない。」

それにつぐみも二人の行動に悲しんでいるんやで？」

深紅は淡々と言うと女子勢は段々と頭が冷えていき、後ずさると深

紅の後ろから小柄な身体のつぐみが出てきた。

「瑞希ちゃんに美波ちゃん……あたしは哀しいよ。」

「つぐみちゃん」

「つぐみ」

「二人のことずっと応援しようと思ってたんだよ？でも……こんなじゃ応援する意味……ないじゃない」

つぐみは瑞希と美波を見て哀しそうに辛そうに言つと瑞希と美波は黙り込む。

「ねえ、ずっと応援しようと思ったあたしの考えって間違えていたのかな？」

「それは」

「だって、アキが悪いのよ！？覗きなんてするから！」

「証拠は？」

「だから、あのカメラが」

「あのカメラが証拠やて？」

「神崎さん、調べたけど。指紋は土屋君のじゃなかったわ」

「こつちもですわ」

小山と清水が入ってきてこの現状に、内心バカなことするなと思っただのは彼女等だけの秘密だ。

彼女らが協力するのは一度制裁されているからだ、心をいれかえて平和な日常を歩みたいがゆえの。

「こいつ等が犯人じゃないなら、誰が」

「そんなん、わっちが知るかいな。ま、すくなくともFクラスのメンバーは無実やと思うで？」

「アリバイが」

「西村先生が一度だけ、ここに来ておるんやで？」

そう深紅が言うと女子勢が黙り込んだ。

「ほな、話合いにいこか」

『え、説教だけで済むんじゃ』

「そんなんでわっちはゆるすと思うてんの？」

『ひっ！！』

深紅は瑞希と美波と小山と美春を残して女子勢をつれて去っていく。悲鳴が聞こえたが気にしないでいたほうがいと誰もがもった

「アキ君、大丈夫？」

「あ、つぐみ。ちょっと痛いけど」

「心…は？」

「わしはなんともないぜよ」

由香里は心につぐみは明久に近寄って聞いていた。

「姫路と島田には説教だけですんで良かったですわね」

「美春達が頼みましたから」

「そうね、あの時は疲れたけど。でも一番の功労者は霧島さんと雨宮さんね」

美春と小山は熱心に深紅に頼んだのだろうが、つぐみと翔子を見て小山が言うつと、まだ用事があると言い、この部屋から出ていった。

「……雄二、平気？」

「あ、ああ」

翔子は雄二に近寄って聞いていた。

「あの、つぐみちゃん」

「つぐみ」

「……何？」

「「じゅめ」」

「謝るだけですんだら、アキ君はこんなに怪我してないよ」

つぐみは明久の手当てをしながら二人の謝罪を遮るように瑞希と美波に言う。

秀吉と土屋と晃希と透はその光景を心配そうに見ていた。

「どうして、そこまで信頼できるんですか？」

「幼なじみであたしの能力を嫌わなくてくれるから、信頼してるんだよ」

「ウチらは力なんかないから、そう思えることなんて」

「美波と瑞希ちゃんはそうだけど。でも二人は想いがあるでしょ？用は相手の信頼できる想いが重要なんだよ、それが二人には欠けているんだよ」

つぐみはまっすぐ二人を見つめて言うと明久の手当てを終えると「あたしはそう考えているんだよ」とと呟いた。

明久はこの状況にどうしたらいいのか迷っていた。

第50話強化合宿？（後書き）

光闇雪様、FOOL様、吹き抜ける風様、ヒョウガ様、レイン様、秋雨様

感想ありがとうございます！

ちなみにここでは何アンチとかはないです。

原作フラグ折りを目指していますので！！

第51話強化合宿？（前書き）

今回は少ないかもしれない（汗）

光闇雪様、まあ様、吹き抜ける風様、レイン様、ヒヨウガ様、秋雨様、FOOL様、橘天龍様

感想ありがとうございます！！

第51話強化合宿？

男子部屋

「なんか、今日はつぐみと神埼さんのおかげでなんとかなったね」

「あいつ等に翔子が教えたらしいぞ」

「霧島がか？」

「それだけ、雄二を信じていたからの行動かもしれんろう」

「そうですね、そうじゃないと姫路さん達と一緒に加わっていたか
もしれませんし」

つぐみと翔子に手当てしてもらった雄二と明久達は呑気にだべっていたが、ふと明久は気になり

「それより、ビデオカメラと雄二への脅迫状は誰がしたんだろう？」

「……神埼が調べているそうだが、こっちもそれとなく調べてくれると助かるといわれた」

「深紅がですか」

「なんとか調べていくしかないみたいだな」

「めんどいけど、仕方ないよな」

こつちもこつちで雄二への脅迫状とビデオカメラの件の犯人を調べることにしたのだった。

女子部屋)

「で、犯人は分かった？」

「それが全然わからないの」

「ビデオカメラの件も美春は知らないのですわ」

「けど、DとCの男子が犯人なのは断定やろうね」

清水と小山の調査を聞いて深紅は考えながら言つと。

「まだ、調査してみるわ」

「美春もですわ！」

「おおきに、でも、二人は被害がいかない程度でええからな」

「被害なんかこないと思うけど」

「でも、気をつけますわ」

深紅に礼をして小山と清水は部屋から出て行くと入れ違いで美波と瑞希が入ってきた。

「あの」

「ウチら深紅に話があるのよ」

「わっちに？」

深紅は瑞希と美波を見て

「こんなバカなことしたから、見切りをつけられましたけど」

「それまではウチ等のことを応援してくれてたのよね」

「せやね。今は応援したくないけど」

「」「うっ」

深紅の笑顔で言われて落ち込む美波と瑞希。

「今度はそうならないようにしますから！」

「だから、せめてチャンスを！！」

「チャンス？」

「」「コクコク」「」

美波と瑞希は必死に深紅を見て頼みこむように言い

「今は答えはでーひんけど。考えたるわ」

「本当ですか！？」

「本当!？」

「ほんまや」

「「ありがとう!！」」

瑞希と美波は嬉しそうに笑って礼を言っていると

「深紅…いい…の？」

「本人がチャンスもろって自分の態度を直すと言ってるから、ええんよ」

「でも……」

「大丈夫やて」

話しを聞いていた由香里は心配そうに聞くが深紅には考えがあるのか笑顔で安心させるように言う。

この後、女子達は風呂場に行く時間となり大浴場に向かった。

第三者視点)

「ちっ……お仕置きされなかったか」

「どうすんだよ？」

「まあ、待て。まだ俺達が犯人だと気づかれたわけじゃない」

「けど」

「大丈夫だつて」

Dクラスの男子が二人の男子が部屋で作戦を練っていた。

「俺はあのロリ少女が欲しいんだよ、だから力貸してくれよ」

「わかってるけど、なんで幼なじみの吉井じゃないんだ？」

「遠回しに牽制する為さ。吉井は覚えてるかわからないがな」

「うわ、あくどいな。佐々木」

「中条ほどじゃねーよ」

クツクツと楽しそうに笑い合ってたあたりが気味悪いように思える。
この光景を誰かが見ているとは二人は知らなかったのだ。

大浴場で

「どうして、深紅ちゃんとかつぐみちゃんと由香里ちゃんのスタイルがそんなにいいんですか!!!？」

「そうよ、ウチにその胸をよこしなさい!!!」

「そ、そんなこと言われたって」

瑞希と美波に言われてつぐみは戸惑っていた。

それもそうだろう、水着ではわからないが裸なら一目瞭然でスタイルの良さがわかってしまうのだから。

「女は胸やないと思うんやけど」

「あんにウチのせつなさがわかる!!?!?」

「わからへん」

「キツパリ言われたー!!!」

深紅にキツパリ言われると脱衣所で美波は落ち込んでいた。

「神埼……少しいい?」

「?ええけど」

「……失礼」

翔子は深紅に言うと腰に触る。

「……細い」

「敵です!深紅ちゃんは」

「なんでそこで敵認定なんや」

深紅は瑞希の言葉に呆れていた。

「もう、いいから。お風呂にはいる?」

「……はい」

「……そうね」

つぐみは苦笑いしながら言う。瑞希と美波は落ち込みながら歩き出した。

頭や身体を洗って湯船につかるときにつぐみは困っていた。

「……うう」

「つぐみが湯船に浸かるのも大変やなんて」

「なにかしら、つぐみに同情したくなってきたわ」

「美波ちゃん、私も同意見です」

落ち込んでいるつぐみを見て深紅は苦笑いし、美波と瑞希は同情したい気分になりたくなっていたとか。

しばらくしてお風呂から上がった後に、何故か布施先生と西村先生がため息をついていたのが見えた。

「何かあったんですか？」

「いや、雨宮達は気にしなくていい」

「？そうですか」

「ところで吉井達は部屋か？」

「え？そのはずですけど」

「そうか、早く部屋に戻れよ」

西村先生はつぐみに明久の所在を聞くと歩き出した。

「どないんしたん？」

「あ、ううん。なんでもないよ」

つぐみは嫌な予感を消して先に歩き出した深紅達を追いかけていた。後に知ることになるが、覗きをしようとした男子達を西村先生と布施先生と大島先生が止めて、反省文を書かせていたことがあった。うだ。

第51話強化合宿？（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第52話強化合宿二日目！（前書き）

ヒヨウガ様、レイン様、光闇雪様、リザク様、吹き抜ける風様、あづま様、マロ様、秋雨様

感想ありがとうございます！

第52話強化合宿二日目！

「……雄二。一緒に勉強できて嬉しい」

「待て翔子、当然のように俺の膝に座ろうとするな。クラスの連中が靴を脱いで俺を狙っている」

強化合宿二日目。今日の予定はAクラスとの合同合宿となっていた。合宿内容は基本的に自由。質問があれば周囲や教師に聞いてもOK。要するに自習みたいな感じなのだ。その為、机の並びも生徒同士が向かい合うような形になっている。

「でも、なんで自習なんだろう？ 授業はやらないのかな？」

「授業？それはしないとと思うよ」

明久の隣に座っているつぐみは答える。

「しない？ どうして？」

「明久。お前はAクラスと同じ授業を受けて内容が理解できるのか？」

それに便乗して雄二は明久とつぐみがいるテーブルに来て言う。

「むっ。失礼な。雄二にはそうかもしれないけど、僕にとってはFクラスもAクラスも大差ないよ」

「……この学園の趣旨は、モチベーションの向上だから」

雄二を追って翔子も明久とつぐみがいるテーブルに来た。ポジションは雄二の隣ときっちりキープしていた。さすがに膝の上は諦めたらしい。

「つまりですね。AクラスはFクラスを見て『今度は負けないように努力するぞ』というのとFクラスは『この設備をキープできるようにするぞ』と思わせるようにするんですよ」

いつまにか晃希がこちらのテーブルに来ていた。

「そんでメンタル面の強化が目的だというわけだから、授業はさして問題ではないということぜよ」

心と由香里も明久とつぐみがいるテーブルに来て晃希の説明の続きを言う。

いつも仲良しな二人を見てつぐみは少し羨ましそうに見ていた。

「あ、代表ここにいたんだ。それなら僕もここにしようかな？」

いきなり、聞きなれた声が聞こえてきた。いそいそと勉強道具を広げる彼女は

「工藤さん、だっけ？」

「そうだよ。キミは吉井君だったよね？ 久しぶり。
ところで、そののちっこい子は吉井君の彼女でしょ？」

「な、な！！？何言ってるの！！？」

ニツと歯を見せて笑う工藤に顔を赤らめて言う。
つぐみの反応は見ていて初々しいことだ。

「それじゃ、改めて自己紹介させてもらうね。Aクラスの工藤愛子です。」

趣味は水泳と音楽鑑賞で、スリーサイズは上から78・56・79、好きな食べ物はシュークリームで特技はパンチラだよ。なんなら、ここで披露してみせよっか？」

最後の方の台詞と特技がパンチラというのはどうかと思うとこの場にいた晃希は思っていたとか。

「ん？ どうしたの吉井君？」

「いや、別に工藤さんの特技を疑っているわけじゃないんだ。ただ、その……」

「あ、さては疑ってるね？ なんなら、ここで披露してみせよっか？」

工藤はそう言う短いスカートと裾を掴まんでいる。

「披露しないでいいからね！？ それと特技とはいえないからー！」

「あはは 冗談だよ」

「もう、冗談にしているものとしてはいけないものがあるよ」

「まったくやね」

深紅は同意するように言うとその隣で明久と康太が会話していた。

「……………明久。工藤愛子に騙されないように」

「あれ？ ムツツリーニ、随分と冷静だね。

僕ですらこんなにドキドキしているんだから、てっきり鼻血の海に沈んでいると思ったのに」

「……………ヤツは、スパッツを穿いている…………！」

「そ、そんな！？ 工藤さん、僕を騙したね！？」

「あはは、バレちゃったか。さすがムツツリーニ君だね。

まあ、特技つてわけじゃないけど、最近凝っているのはこれかな？」

笑いながら取りだしたのは小さな機械だった。

それを見た深紅が

「それは小型録音機やね」

「知ってるの！！？」

と、答えてつぐみは思わずツッコミをいれていた。

「コレ、凄く面白いんだ。例えば」

小さな機械をカチカチと弄る工藤。

少し間を置いて、内臓されているスピーカーから声が聞こえてきた。

ピッ 工藤さん 僕 こんなにドキドキしているんだ

やらない？

「わああああつ！ 僕はこんなこと言っていないよ！？ 変なものを再生しないでよ！」

「ね？ 面白いでしょ？」

悪戯ばい笑みを浮かべる工藤。その笑みは何故か明久の背後に向いていた。

「……………ええ。最つつ高に面白いわ」

「……………本当に、面白い台詞ですね」

明久が振り向くとそこには氷の微笑をたたえた美波と瑞希がいた。

「瑞希。ちょっとアレを取りに行くのを手伝ってもらえる？」

「わかりました。アレですね？ 喜んでお手伝いします」

机に勉強道具を置いて、学習室から出ていこうとする美波と瑞希。彼女達は最後のチャンスを目を潰した。

「ちよつ、瑞希ちゃん！美波ちゃん！！」

「あーあー、チャンスはなかったことになったな」

「……………自業自得……………かと」

「バカですね」

つぐみは二人に向かい、透は冷静に深紅の様子を見て言うと由香里は心の膝の上で無表情に言った。
晃希は呆れながら言う。

「ゲームオーバーや、お二人さん」

「「え？」」

瑞希と美波の背後には冷たい眼差しをした深紅がいた。

「と、止めなくていいの？」

「無理だよ。一度決めたことを彼女は覆さない」

つぐみは聞くと透は淡々とした表情で言う。

それでも、つぐみは哀しそうに

「でも、あれじゃ」

「すくなくとも怪我はしない。けど……」

「深紅は完全に瑞希ちゃんと美波ちゃんの恋を応援する気はなくなつた……ということ？」

「はい」

晃希の答えにつぐみは俯いた。

信じられなかった二人が悪いのはわかるけど、それでも応援くらいはしてあげてもいいのではと思っていた。

「げ、ゲームオーバーってどういう」

「そのまんまや」

「どうしてですか!?!?」

「わっちは言うたで? あんさんらのこれからの行動で応援するか、計画を立てるか考えてやるゆーて。それが、なんやこれは。反省してひんうえに、またお仕置きか。ええ加減にしーよ?」

「「……っ」「」

深紅の次々と痛いことを言われて俯く美波と瑞希。

そして、深紅は振り向いて

「土屋と工藤も、こいつら煽るんはやめてくれへん?」

「う、うん。そうするよ! 神埼さんだっけ? 貴女を敵に回すのはヤバイみたいだし」

「……コクコク」

深紅の覇気に押されて工藤と康太は頷いていた。

「わかればええんよ」

深紅は満足そうに微笑んで言うと席につく。

この後、学習室内がかなり静かだったことに入ってきた先生は驚いていたとか。

第53話覗きはダメだぞ！（前書き）

今回は海の永帝さんの要望通りに書いてみました。

怒られないといいな（苦笑）

次回に続きます！！

レイン様、吹き抜ける風様、FOOL様、闇介様、秋雨様、龍夜M
k2様、海の永帝様、名無しの騎士様、仮面ライダー様、ま
いく様 感想ありがとうございます！

第53話覗きはダメだぞ！

明久視点)

そんなこんなで地獄のような勉強時間や天国のような夕食タイムも終わって、いよいよ入浴時間となった。

明久達は割り当てられた部屋で話合いをしていた。

「のう、明久」

「秀吉も気づいた？雄二と心とムツツリー二がいないことに」

「これは、やばいんじゃないですかね」

「俺もそう思うな」

今、僕等はここにいるけど……雄二達は覗きの疑いがどうしても許せなかったみたいで。

覗きに向かったようなんだよね。

てか、心はなんで参加してるんだろう？

由香里ちゃんが悲しみそうだな。

「アキ君！！」

「吉井！」

この声はつぐみと神埼さん？

まさか……！！

「何かあったの!?!?」

「さつき、瑞希ちゃんがこっちに来て中岡君と坂本君と土屋君が覗きの総動員していたって」

「そしたら、由香里ちゃんが涙目になって急いで走っていったんよ」

「姫路と美波に由香里を説得するように言ったけど自信がなさそうだったわ」

やや呆れ気味の神埼さん達が僕に言った。

「ワシらも援護に向かった方がいいかのう」

「それは止めた方がいいで」

「まだ、疑われてるしね」

秀吉が言つと深紅とつぐみが苦笑いしながら言った。

確かに心配だけど、ここは先生達に任せるしかないかな。

由香里視点)

「心…」

「ゆ、由香里ちゃ…(汗)」

嘘だと思い、来てみたら坂本君と一緒に本当に居たことに凄く哀しくなった。

姫路さんと島田さんが何か言っているけど…今は絶望しかない。

「姫路に島田、久蘭を使うとは卑怯だぞ…！」

「どつちがですか！！何をどういったかは知りませんが。

由香里ちゃんの彼氏さんを巻き込む方がどうかしてます…！」

「そつよ！大体、覗きたいなら霧島さんに頼んだらどうなのよ！」

女性陣は呆然と眺めていたけど、私は布施先生に頼んで科目を選ぶと召喚獣を召喚した。

「サモン試獣召喚」

由香里の召喚獣はベレー帽をかぶった感じで芸術科みたいな格好をしていたデフォルメした由香里だ。

心の召喚獣は突撃銃で名高いAK-47が装備されている。背中には日本刀があり、しかも胸には手榴弾がある小さい心だ。

「攻撃しろ、中岡！」

「できないぜよ…！由香里ちゃんに攻撃なんて！」

「こつち…から…行く」

由香里が召喚獣を動かして空中に絵書くと光輝く蝶が飛んできて心の召喚獣を貫通した。

遅れて召喚獣の点数が表示される。

< Fクラス 久蘭由香里 特別科目 美術 400点 VS Fクラス 中岡心 特別科目 美術 30点 >

勝敗は一瞬だった。私は勝つと黙って召喚フィールドを取り消してもらつと心の頬を叩いて涙を耐えながら走つていった。

「由香里ちゃん！」

「ちよ、由香里！」

姫路さんと島田さんが慌てて追いかけてきた。

私は振り切つて急いで部屋に入つて布団に籠ると静かに涙を流した

雄二視点)

俺は後味が悪い思いをしている。

中岡がここまで落ち込んだのは初めてみたからな。

そりゃ、好きな人にコテンパンにされた上に頬を叩かれて、話すこともできなかつたもんな。

あー、俺の所為だよな。

どうしたもんか。

「中岡：補習に行つてこい」

「わしはズタボロぜよ」

と、言った心を見てあまりにも哀れに思えたので覗きはやめて中岡

を連れて歩き出す。

女子達も今回は見逃してくれたらしい。

あそこまでの修羅場を見せられたら戦闘どころじゃないよな。

中岡を連れて部屋に入ると明久達が驚いてこっちを見た。

明久視点)

「し、心!!?」

僕が見た心は凄く頼りなさそうな感じだった。
見ていてなんか心が痛くなるよ。

「坂本君!ちよつとこつちきて!」

つぐみは気を聞かせて雄二を連れて部屋を出ていった。
それを見計らって僕は心を見た。

「心…大丈夫?」

「明久…わし。由香里ちゃんに嫌われたぜよ」

「だ、大丈夫だよ!これから、なんとかすれば!!」

よわよわしい心をこれはかなりの大打撃だったんだろうな。

秀吉と晃希と透もどう言葉を出したらいいか迷ってるよ。

「わっちが説得するから、大丈夫や!坂本に関わったんはなんか理

由があるんやろ？」

深紅が辛気くさい空気を吹き飛ばすように言うと聞いたら心は頷いた。

「なら、なんとかするで！わっちに任せてや」

と言っけど心は黙ったまま落ち込んだ状態のまま口を開かない。

「僕からも頼むよ。神埼さん」

「安心しい、元から頼まれなくてもするつもりや」

笑顔で深紅は言つと部屋から出ていった。

第54話強化合宿 3日目(前書き)

GAU様、光闇雪様、リザク様、FOOL様、闇介様、ヒョウガ様、
吹き抜ける風様、まあ様、レイン様、秋雨様、あづま様

感想ありがとうございます！

第54話強化合宿 3日目

心SIDE)

翌朝

気分が重いまま朝が来たぜよ。
わしがぼんやりしてると

「殴る！ コイツの耳からドス黒い血が出るまで殴り続ける！」

「お、落ち着くぜよ！明久！」

呆然としていたが慌てて明久を押さえることにしたら、狩谷達もこちらに来た。

「いったい吉井君に何があつたんですか？」

「ご乱心でござる、みたいな状態だな」

ほのぼのとしてる場合じゃないぜよ！！！！

「おいお前ら！ 起床時間だ ぞ………？」

「死ね雄二！ 死んで詫びるんだ！ あるいは法廷に出頭するんだ
！」

「なんだ！？ 朝からいきなり明久がキレまくっているぞ！？ 持

病か!？」

「ええい落ち着くのじゃ明久! 西村先生、済まぬがこやつを取り押さえるのを手伝って頂きたい!」

「……………! (コクコク)」

「……………お前等は朝から何をやっているんだ?」

西村先生、それはわしにはわからんぜよ。

この後明久をみんなで取り押さえたぜよ。大変だったのじゃ。

心SIDR END)

寝起きのドタバタを終えての朝食中にアキ君は前に座っている坂本君を見て聞いた。

「雄二。ところでさ、心になんて言っただ協力させたの?」

「あゝ、このままだと無理やり結婚させられる。

いくら好きな人でも無理やりは嫌だろ?」

「なるほどね」

「そしたら、ああなつてな」

苦笑いしながら坂本君は理由を話してくれた。

「わっちからも誤解だと言ってるんやけど、本人からやないと効き

目がないんかもしれへんな」

「神埼でもキツイか」

「大丈夫ぜよ、なんとか誤解をといて見せるぜよ」

無理やりな笑みをしている中岡君は少しか辛そうに見えた。あだし達がなんとかできないかな？

「ところで覗きは、もうしませんよね？」

「それは……」

狩谷君の質問に口ごもる辺りは、まだ企んでいるみたいだね。

「で、何か進展はあったん？」

「……………工藤が“脱衣所にまだ見つからないカメラが1台残っている”と言っていた」

「何だと？」

忙しなく動いていた坂本君の箸の動きが止まった。

「それ、怪しくない？ そんな事知ってるなんて」

「いや、そうとも限らんじやる。それならわざわざ怪しまれる様な事を言つとは思えん」

「それも、そうだよな」

「それなら隠しカメラを捜して犯人を捜すだけだ」

「……………隠し場所なら、5秒で見つける自信がある」

自信満々に言う台詞じゃないよね!!？

「というか、今はそんなことしてる場合じゃないでしょ!」

「中岡と久蘭の仲を修復せな、あかんもんな」

あたしが言つと深紅は苦笑いしながら言う。

「それでも、わしは坂本の手伝いをするぜよ」

「でも、心」

「そうですね、更に溝が深まったらどうするんですか?」

中岡君を心配するアキ君と狩谷君。

「二人の言う通りだ、中岡だって。このままは嫌だろうが」

「また、戦うことになるかもしれひんに」

深紅と透君中岡君を説得するように言うけど。

「友の頼みは絶対守るんが信条ぜよ!」

そう叫ぶ、中岡君を見て坂本君はどうしたもんかと思っているのは

見ていてわかる。

これから、どうなるのかな？

朝食が終わって自習時間になると、中岡君は由香里ちゃんを捜しに行った。

坂本君は仲間を増やしに向かったみたい。
懲りて欲しいんだけど。

第55話もう一人の幼なじみ（前書き）

ヒヨウガ様、光闇雪様、まあ様、FOOL様、レイン様、秋雨様、
あづま様、レイン様

感想ありがとうございます

第55話もう一人の幼なじみ

「ねえ、アキ君、瑞希ちゃん。ちょっといいかな？」

「はい？」

「どうしたの？」

あたしはアキ君と瑞希ちゃんに近寄って言うと二人は不思議そうにこちらを見ている。

ま、不思議に思うよね。

「響ちゃんを知らない？」

「え！？響ちゃん、いないんですか？」

「一緒に居たんじゃないの？」

あたしの質問に瑞希ちゃんとアキ君は驚いて聞いてきた。さっきまでは一緒だったんだけど。

「あの……もしかして、この方では？」

声が聞こえて振りかえると狩谷君が響ちゃんを担いでいた。まさか、ここでも迷子になっていたのだろうか？

「うっん……はっ！」

あたしが呆然としていると響ちゃんは起きて辺りを見回す。

そして、あたし達に気づくとアキ君に抱きついた。

「ダーリン」

「おぶっ！！」

「ひ、響ちゃん！！ それじゃ、アキ君窒息しちゃっよー！」

「そ、そうです！離してあげてください」

響ちゃんに抱きつかれたアキ君は苦しそうだけど若干嬉しそうだった。

あたしと瑞希ちゃんは気づいていなかったんだ。今はアキ君を救出しないとイケないから。

「あーつぐちゃん、みいちゃん」

「「しまっ！！」

むぎゅー

うん、わかってたけどね。

今の状況を説明すると瑞希ちゃんとあたしは響ちゃんにアキ君共々抱きしめられているということなんだよ。

あう、意識が遠のきそうだよー。

「ちよ、ちよっと！吉井君達の顔が土気色になってますよ！！？」

「ふえ？あれー、なんでだろ？」

狩谷君に言われて響ちゃんからやっとなんか解放されたあたし達は息も絶え絶えな状態になってたよ。

ところで、FFF団と美波ちゃんが動かないのはなんでだろ？不思議に思っていると深紅がこちらに来た。

「あいつ等なら、仲良くおねんね中やで」

あ、そうなんだ。瑞希ちゃんもさすがに苦笑いを浮かべているね。気持ちはわからなくもないけど。

「ところで、彼女は誰なんですか？吉井達とは知り合いのようですが」

「あ、忘れてた。彼女は久条院響とって、僕達の幼なじみなんだ」

「どうも、ボクが久条院響だよ」

狩谷君の質問にアキ君が紹介すると響ちゃんは笑顔で言った。

「で、その…久条院がどうしてこんな所で倒れとったん？」

「あの、実は響ちゃんは迷子になりやすいんですよ」

深紅の質問に瑞希ちゃんは苦笑いしながら言うと狩谷君はだからかと、納得していた。

「極端な方向音痴でね、いつも…ハラハラが止まらないんだよ」

「大変そうですね」

あたしがふつとため息をついて言うと狩谷君が同情の目でこちらを見ている。

「なあ……この人。もしかして、なんやけど」

「うん…僕達より年上なんだよ」

『なんだって〜!!?!?』

深紅がアキ君を見て言うとアキ君は頷いて苦笑いしながら言った。すると、気絶していたFFF団が叫んだ。

響ちゃんの見た目からして同い年にしか見えないもの。

それから、一緒に勉強部屋に向かったんだけど。

迷子にならないように響ちゃんの手を掴んで行かないといけないことを忘れてたから、瑞希ちゃんと一緒に、また探しまわることになった。

次に見つけた時は西村先生と仲良く会話していたんだよ!!

これには瑞希ちゃんとあたしも驚いたね。

結局勉強はできたけど、くたくたになったのはいうまでもなかったり。

「ね、瑞希ちゃん。響ちゃんと一緒にお風呂行かない？」

「いいですね!」

同じく疲れている瑞希ちゃんに声をかけると美波ちゃん達も一緒にお風呂に向かうコトになったの。

「あ、なら!ウチも!」

「私…も」

「わっちもええかな？」

「わたくしも」

でも、何かを忘れているような気がするんだよね。
思い出せないまま、あたしは皆とお風呂に向かったよ。

第55話もう一人の幼なじみ（後書き）

今回はFOOL様が投稿されたオリキャラを登場させました。

想像していたキャラと違ったらすみません！！

次回もお楽しみに

第56話ちよこつと休憩？（前書き）

ヒヨウガ様、まあ様、龍夜Mk2様、光闇雪様、あづま様、レイン様、FOOL様、秋雨様、暁 巧様

感想ありがとうございます

第56話ちよこつと休憩？

「ついた〜」

「なんか…どつと疲れたわね」

「美波ちゃんもわかってくれますか」

「どうも、つぐみです。」

「なんでこんな疲れているかというところ響ちゃんがふらふらとどこかに行ってしまうからなんです。」

「だから、翔子ちゃん、愛子ちゃん、優子ちゃん、美波ちゃんと由香里ちゃん、深紅ちゃんとあたしと瑞希ちゃんは風呂場までくるのに苦労したわけです。」

「とりあえず、中に入りましょう。早く汗を流したいわ」

「そだね〜」

「はい、そうしましょう」

「優子ちゃんを先頭にあたし達は風呂場の脱衣所に入って行く。もちろん、響ちゃんの手はあたしが握っているよ？」

「〜脱衣所でみんなで服を脱いでる最中です〜」

「……ウチになにが足りないというの」

「美波ちゃん、落ち着いてください!」

「そんな……こんな凶悪なバストが存在するなんて」

「僕としては羨ましいよ」

錯乱？している美波ちゃんを宥める瑞希ちゃんに落ち込んでいる優子ちゃんに遠い目をしてる愛子ちゃん。

これは凄い光景だと誰もが思うだろうね。

翔子ちゃんは響ちゃんの腰を掴んで悔しそうにしていたのが見えただけど…大丈夫かな

「なにしとるんよ。さっさと風呂はいろうで」

「……さき、行く」

「あ、待ってよー!」

「響ちゃん、そっちは風呂場じゃないよ!」

深紅ちゃんと由香里ちゃんは先に風呂場に入り、響ちゃんも行くところとするが進行方向が逆なのであたしが手を引いて風呂場に入った。

「じゃぶじゃぶ」

「ふう」

頭を洗ってから体を洗って、それから湯船につかっております。

ただ、この身長だから……湯船の淵につかまってないとダメということが哀しいよ。

多少改善されたみたいだけど、ね

「つぐみちゃん……大丈夫ですか？」

「う、うん……瑞希ちゃんのおかげだよ」

「いえいえ……つぐみちゃんには迷惑かけてますからこれくらいはしないと！」

心配してくれる瑞希ちゃんに笑顔で答えると苦笑いしながら答えてくれた。

瑞希ちゃん……本当にいいこなのにな。

「ええ気持ちや〜」

「……うん」

「なんや、中岡が気になるんか？」

「そついつ……わけじゃ」

深紅ちゃんの方では中岡君と由香里ちゃんを仲直りさせようと会話しているところだった。

元はと言えば坂本君が誘うからああなっただよな。

今では反省してるけど、他の皆は何を考えてるのかな。

第三者視点)

『おい、ターゲットはお風呂に入ったそつだ』

『なら、覗くチャンスだな!』

『でも、気付かれないようにしないとな』

『このチャンス無駄にしない!』

こいつらのテンションはかなり高い様子。

あんまり騒ぐと周りに気づかれるのでコソコソと女子風呂場に向かう。

『うあー、緊張してきた!』

『桃源郷がここに!』

『生きてて良かった!』

だから、煩いつて!!バレルだろうが!

俺は仲間を引き連れて女子風呂場の前まで順調に来たわけだが、こいつらがさつきから騒がしい。

このままじゃ、見つかるだろうが。と、考えていた時!!

「おい、お前等!何してる!」

『げっ!鉄人だ!』

『に、逃げろ!』

野太い声が聞こえてきたのだ。後ろを見ると西村教諭がこちらに向かって来ていた。

やばい！！逃げないと！
俺達は全力で逃げた。

第三者視点・終わり)

「あれ？」

「どづかしたの〜？」

「あ、うん……なんか外が騒がしかったような気がして」

「気の所為ですよ、つぐみちゃん」

「そづかな？」

「そづよー！」

みんなでのんびり湯船につかりながらふと騒がしい声が聞こえた気がして呟くと瑞希ちゃんと美波は気の所為だという。
本当にそづなのかな、あのラブレターの主なのではと考えてしまう
あたしはどこか変なのかもしれない。

「つぐちゃん、大丈夫だよ！ダーリンがいるんだから、ね？」

「響ちゃん……うん、ありがとうね」

不安そうな表情が見えたのか響ちゃんに抱きしめてもらったあたしは少しだけ安心できた気がする。

幼なじみだからかな？ ううん、それだけじゃない。こんな力があっても大切にしてくれるみんながいるからかもしれないね。

第56話ちよこつと休憩？（後書き）

感想と評価を楽しみに待ってます！！

どちらも小説更新のはげみになっています

第57話 由香里、心の布団に侵入の巻き！（前書き）

龍夜Mk2様、光闇雪様、ヒョウガ様、レイン様、秋雨様、FOO
L様、あづま様、暁 巧様、夜叉龍様

感想ありがとうございます！！

第57話 由香里、心の布団に侵入の巻き！

明久side

どうも、吉井明久です。

今、僕は心苦しいことをしようと思うんだ。

どんなことかと言うと、心の携帯をつかって久蘭さんに連絡するんだ。

カチカチとメールの文章を作成して、と。

【ちょっと話があるんだけど、今晚わしら部屋に来てもらっていいじゃろうか？】

pipipi

送信ボタンを押して数分もしないうちに返信がきた。

久蘭さん、本当に心が好きなんだね。

僕は応援しかできないけど、仲直りをしてほしい。

おっと、返事は

【わかった……すぐに……いく】

よし、つぐみにも送るべきかな？

響がいるから、大丈夫だとは思うけど……心配だなあ。

「明久、おまえ……おせつかいだな」

「元はといえば、雄二が巻き込んだのがいけないんだよ」

その様子を見ていた雄二が僕に言うので、原因をつくった雄二と
げとげしく言っただけだ。

「それを言われると、否定できん」

「これで、仲直りできたら……いいんですけどね」

雄二は苦虫をつぶしたような表情をして言い、晃希は僕を見て苦笑
いしながら言う。

晃希も心の中が心配だから、なんとかしたいと思ってくれてるん
だよ。

「できるだろ、明久が頑張ってるんだし」

「そうじゃ、自信を持つのじゃ！」

透と秀吉は僕を励ますように言う。

僕は良い友達にも巡り合えたみたいだ、ありがとう。

女子部屋

「由香里ちゃん、一人で大丈夫？」

「ん……平気」

昼間、由香里ちゃんのケータイに中岡君からメールが来て、夜中の

時間に行くことになったんだよね。

多分、アキ君がそういうメールをしたんだろうけど。

あたしもこのままはいけないと思うし。響ちゃんと瑞希に手伝ってもらいながら説得したの。

「誰かに襲われたら、すぐに中岡君を呼ぶんですよ！」

「う、うん」

瑞希ちゃんも由香里ちゃんと中岡君の仲を元に戻したいから、必死だよ。

こうやって、誰かに振り回されていなければ、深紅も許してくれるよ。

「つぐちゃん、ゆかちゃんもう行ったよ？」

「そっか、後はあっち次第だね」

響ちゃんに声をかけられてあたしは笑顔で呟いた。

瑞希ちゃんは携帯を眺めてから、扉を見る。

なんだろ、子供を心配するお母さんばく見えるよ。

心side

誰かに体を揺さぶられてわしは目を覚ました。

明久かと思つて目をあけると、腕の中に由香里ちゃんがいたぜよ！

「ゆっ」

「（しー）」

声を上げそうになったわしの口元に指を当てて言う由香里ちゃ。見てていろっぽいと思ってしまったぜよ。

服装は薄着でキャラクターがはいった服装だったぜよ。でも、どうしてここにいるんじゃないか？

「（……話つて…なに？）」

「なんのことぜよ？」

いきなり本題を切り出されてわしは混乱しとったぜよ。でも、これはチャンスかもしれないぜよ。

「（でも、メールで）」

「今の、その…ド忘れぜよ」

困惑したように言う由香里ちゃ。ああ、いつ見ても可愛いぜよ。と、とりあえずこのチャンスを逃さないように訂正してみた。

「（ド忘れ？……心らしく…ない）」

苦笑だったけど、また由香里ちゃの笑みが見えたことでわしは我慢できなかったぜよ。

「んっ!？」

気づいたら、由香里ちゃの桜色の唇に自分の口を重ねて口づけをしていたぜよ。

かなり、驚いていたぜよ。

そして、口を離して言いたいことを言っただぜよ

「わしは由香里ちゃ、だけしか興味ないぜよ！」

「うそ、だよ……なら、なんで。覗きに手を貸した…の？」

まっすぐ見つめて言うと由香里ちゃは戸惑いながら口をひらいて言った。

「雄二が困っていたからぜよ」

「困って、た？」

わしは正直に理由を話すことにしたぜよ。

今はそれが一番いいと判断したから

「脅迫状の犯人探しの為の行動でもあつただぜよ」

「そう、だったんだ。ごめんね、誤解…して」

由香里ちゃを見て言うと俯いたままの由香里ちゃがすまなそうに言う。

誤解が解けたとみていいんじゃないだろうか？

第58話 改(前書き)

吹き抜ける風様、ヒヨウガ様、
光闇雪様、リザク様、夜叉龍様、
F
OOL様、秋雨様、蒼様

感想ありがとうございます！

第58話 改

早朝

夜中に由香里が忍びこんで心と由香里の仲が元に戻ると知るとFクルス全員が祝福したとか。

明久が心に勝手に携帯を使ってごめんと謝っていた光景もあったが、それは必須事項だったと思うコトにしよう。

ただ、主犯格の出所を深紅が入手したことから、大きく展開していかうだろう。

面白おかしく?…多分違いかもしれない。

では、物語が始まります。

強化合宿4日目

「それで、犯人がわかったんだって?」

「せやで、明久の知り合いやろ」

明久達の部屋で深紅達は集まって会話していた。

雄二が聞くと深紅は頷いて写真を取りだして見せた。

「あ、この人って」

「知り合いか、明久」

その写真を見た明久が呟くと透が問いかけた。

「うん、小学校時代に知り合ったんだよ。」

「雨宮さんの件の犯人は間違いなくこの方でしょうね」

明久が頷いて言うと晃希は写真に写った青年を見てため息をはいて言う。

「なんで、そう思うんだ？」

「そんなこともわからひんの？本当ゴリラやな」

雄二は不思議そうに言うと深紅が呆れながら言った。

「同じ小学校、それも…明久の知り合いとなるとわけありに決まってるんだろ」

「……情報によると、一度ふられているらしい」

透は雄二を見て言い、康太はノートを出して情報を提示する。

「なんや、逆恨みかいな」

深紅は心底呆れたように言うと明久は苦笑いを浮かべる。

「た、大変ですわ！」

襖を勢いよく開いたのでそちらを見ると美春が居た。
いったいどうしたのだろうか

「Fクラスの豚共とB、C、D、E連合が動き出したのですわ」

「なんやて？」

美春の連絡を聞くと深紅の表情が無表情になった。

辺りに絶対零度が巻き起こるような感じになってきた。

「ちよ、深紅。清水さんにその怒りをぶつけないの」

「あ、すまへん。にしても、小山の指示無しに動くバカがいるんやね」

怯えてる美春を見て一緒に来ていた小山は深紅に言う「と深紅は黒いオーラをしまつて言った。」

「代表として謝るわ。ごめんなさい」

「ええよ。苦労してるみたいやし」

申し訳なさそうに小山が謝ると苦笑いして深紅は言った。

「それより、どうするんですの？」

「鎮静するしかないだろう」

美春の台詞に雄二は淡々と言った。

信頼してくれてる女子達の為にもこの戦は負けることはできないと思っからの考えだろう。

「でも、今からでも間に合うかな」

「やらないよりはマシですよ」

明久が悩みながら言うとき、晃希はニッコリと笑って言う。

イケメンが笑うとき、さまになるなと思ったのはここに居た全員が思ったことだとか。

「明久、雨宮にも連絡しておけよ」

「あ、うん！」

雄二は明久を見て言うとき、すぐに出て行った。

おそらく心を捜すためだろう。

明久はその間につぐみに連絡していた。

深紅と小山と美春は作戦の話合いをして、秀吉と康太もそれを聞きながら意見をしようにしていた。

それから、つぐみと瑞希と美波と由香里達が明久達の部屋に集まると作戦会議を始めた。

第58話 改（後書き）

はい、シリアス—直線かも？な展開です。

ネタがほしい。

第59話(前書き)

ヒヨウガ様、リザク様、光闇雪様、FOOL様、龍夜Mk2様、夜
叉龍様、秋雨様、糖分摂取魔様、あづま様

第59話

明久side

「君たち、ちょっと良いかな？」

「あ、久保君」

「ん？ どうしたんだ、久保？」

みんなで勉強していると久保君が声をかけてきた。

「…………… ちょっと霧島さん達には聞かせられない事なんだ。少し席をはずしてもらえないだろうか？」

「…………… 分かった」

「分かったわ」

「分かったよ」

「え？ え？」

「瑞希ちゃん、行くっつ？」

「あ、はい」

久保君の言葉でつぐみ達が席を外す。

「……………それで話とは何だ？」

「ああ、ちよつとね。 実は」

雄二が話を切り出すと久保君が話をし始めた。 久保君の言う事はCクラスの本願寺君と北河君が覗きの勧誘に来たという事だ

「それで、何故かAクラスの男子達が乗り気でね」

「そうか……………それで何故俺たちに？」

「いや、Fクラスはどうするのか気になってね」

「そうか……………」

「「おい、お前ら」」

久保君の言葉を聞いて何かを考えている時、横から横田君と福村君が近づいてきた

「ん？ 何だ、横田と福村？」

「ああ。 今、Cクラスの本願寺と北河が覗きの勧誘に来てな」

横田

「どうやら、こっちにも二人が来たらしい」

「それでどうしたんだ？」

「いや、これは須川達の意見を聞いて置こうと思ってな。俺らの判断で保留にして後で返事をすると言っておいた」 福村

「そうか。それで坂本どうする？」

「勿論、却下だ……と言いたいところだが、ここは敢えて乗ってみよう」

雄二は何かを思いついたらしく、笑顔でそう言う

「だが、坂本よ。そんなのが神崎さんにバレたら……」

「ああ、俺達の命はないな」

「雄二、冗談でも笑えないよ」

「だから、俺達は参加するふりをして覗きを阻止するんだ」

僕らはずぐみを裏切る行為はしないと決めているから覗きをするなんてもつてのほかだ。だが、それに敢えて参加するのは中から阻

止をするということらしい

「では、僕も参加させていただこう」

「ああ、久保がいれば安心だ」

「横田、我々FFF団は女子を守るために男子達を肅正すると伝え
といてくれ」

「了解！」

「福村、本願寺達に俺達は参加すると伝えといてくれ」

「了解だ」

須川君の命令で動き出す福村君と横田君。 統率力はすごいなFFF
F団

「ところで雄二よ。 何故、北村達は覗きの勧誘をしているのじゃ
？」

「ああ、それはな。 あいつらの保身のためだ」

「身を守る？ 誰から？」

「いいか？ 覗きは立派な犯罪なのは分かるな？」

「う、うん」

覗きは立派な犯罪なのは分かる。神埼さんなんかすごく怒っていたしね。

あの絶対零度には僕もだけど、他の皆が驚いていたよ。

「あいつらは人数を増やして覗きによる処分を逃れようとしているんだ」

「ん？ 何でだ？」 須川

「人数を増やせば相手の特定は難しくなる。もし、鉄人達にバレても全員の顔を覚えるのは難しいだろうからな」

それはそうだ。鉄人たちは必ず全員捕まえようとする。それで動き回りながら周囲に気を配っておくなんて、そう簡単にできる事じゃない

「神埼には言った方がいいな」

「だね。でも……先導しないかな？」

「いや、そこまでしないだろう。いくら怒っているからって」

雄二が言つとふと気になったので言つと雄二は苦笑いしながら言った。

そう、だよな。いくら神埼さんでも男を先導したりしない、よな。
本願寺視点)

『いたわ！主犯格三人組よ！』

『長谷川先生！向こうの三人をやります！』

部屋を出てすぐのところに長谷川先生率いる女子部隊が展開されていた

どうやら覗きがばれたらしい

「バレてたか。だが、すぐに諦める俺ではない！試^{サモン}獣召喚！」

先行してきた女子二名に対して川村が召喚獣を展開する。
見たところ、Eクラスの女子のようだ。

川村の召喚獣は忍者の服で武器はクナイだ。

【数学 Eクラス・古河あゆみ&源涼香 83点&77点 VS
Dクラス・川村隆二 225点】

「勉強してから出直しやがれっ！」

『きゃああーっ！』『』

川村の召喚獣が素早い動きでEクラスの女子の召喚獣を切り裂いた。
ただの一撃で決着はついた。

「川村くん！ 待ちなさい！」

倒された女子二名に遅れてこのグループの頭の長谷川先生が縋ってきた

でも、その動きが一瞬遅い！

「長谷川先生。残念ながらここは通しませんよ」

長谷川先生と俺らの間割って入ったのはFクラスの須川達だった。

「川村、本願寺、羽村！ ここは任せて先に行け！ 試獣召喚つ（サモン）！」

『『『試獣召喚つ（サモン）！』『』『』』

壁を作るように須川達が召喚獣を並べる。

「頼むぞ、須川！」

「任せろ！ それより、きちんと鉄人を倒しておけよ！ そっじゃないとここを片づけた後で覗きに行けないからな！」

「わかってる。 女子風呂でまた会おう！」

須川達に背を向けて廊下を俺達は走る。

後ろからは教師を前にして一步も引かない勇士達の怒号が響いてきた。

『翔子たん！ 翔子たん！ はあはあはああっ！』

『島田のべったんこおー！』

『姫路さん結婚しましょー！』

『つぐみさんの裸体！』

『深紅の姉御、お仕置きしてくれ！』

『響たん、ロリフェイス萌え！』

こいつら、欲望に忠実だな

第60話最強の真紅の破壊者降臨？（前書き）

ちよろつと深紅と妖怪っ子達をだしてみました

第60話最強の真紅の破壊者降臨？

二階を須川達に任せた俺たちは一階へと向かった。
そこには教師女子生徒連合軍に押されているBクラス男子の姿があった

【Aクラス 霧島翔子&姫路瑞希 総合科目 4762点&442
2点 VS Bクラス 加西真一 総合科目 1692点】

圧倒的な戦力差に為すすべも無く仲間が倒れていく

「……………悪戯はそこまで」

「ここは通しません！」

「くっ、霧島と姫路か……………」

地下へと続く階段の手前。そこには霧島と姫路の姿があった。
既に彼女たちの周りには打ち倒された召喚獣が死屍累々と転がっている

「Aクラスがないな……………」

周囲を観察して北村が悔しそうに告げた。
見回してみるとここの総合科目戦闘でも、離れたところの物理科目
戦闘でも、Aクラスの生徒らしき姿は見当たらない。

「おまけに随分と用心深い布陣だな…」

階段前の向こうの配置を見て本願寺が吐き捨てる。

階段の真ん前に木下がいた。

その周囲に姫路と霧島、他にもAクラスの女子が何人か立っている。

（仕方ないここは俺がなんとかするから、お前らは先に行け）

（わかった…無理はするなよ）

北村が俺達にそういうと霧島の前に立つ。

「……お仕置き」

「何の！ 根本バリアーっ！」

「き、北村っ！！ 折角の協力者にその扱いはあんまりじゃないか
!？」

【Aクラス 霧島翔子 総合科目 4762点 VS Bクラス
根本恭二 総合科目 1931点】

残りのBクラスの連中を盾にしながら隙を作っていく。
二人はわずかなその隙について地下へと向かった。

そして二人が地下へと向かったのを確認すると北村もBクラスの連中を壁にして地下へと向かった

なんなくここまで最終ステージまで来るとあの神埼がいた。周りには黒いローブをきた人物もいるが、誰だろう。

「ここまで来たご褒美をあげるで」

神埼はニツコリと笑って俺達に言うと言喚獣を召喚した。

ただ、召喚獣の姿が変わっているのだ。

真紅のドレスではなく、真っ黒なドレスに黒い大剣。顔には仮面があり、肩には軽い甲冑のがついていた。そして背中には真っ黒い翼があった。

「な、なんで姿が変わってるんだよ!?!?」

北村が驚いたように叫ぶ。

普段は真紅のドレスの召喚獣があそこまで変化されていたら誰しも同じことを言うだろう。

「そんなのわたしがいじつたのに決まってるじゃん」

黒いローブを脱ぎすてた少女が笑って言う。

だが、普通の少女とは違うことがわかる。

なにせ、少女には黒い猫の耳が頭の上であり、尻には猫の尻尾が生えているのだから。

「このシステムはちよろいよね」

もう一人の人物は笑いながら言うとローブを脱ぐ。

この人物も少女だけど、普通の少女とは違う姿だった。頭の上には狐の耳と尻には狐の尻尾が生えているのだ。

「よ、妖怪!？」

そんな、実在したというのか。

確かにこの学園にはオカルトやらいろんなものをつぎ込んでいるらしいけど。

まさか、本物が出てくるなんて。

「さて、懺悔はすんだかえ？」

神埼はニヤリと笑って俺達に問いかける。

これは絶対絶命であり、ゲームオーバーでしかない。今の俺達に戦うすべはないのだから。

こうして、強化合宿での覗き騒動は幕をとじた。

第60話最強の真紅の破壊者降臨？（後書き）

今回は番外編を書いてこの小説を完結させようかなと思っております。

ここまで読んでくれた皆様、本当にありがとうございます！

番外編 暴走と召喚獣補完計画

タッタッタッタッタッ！

1人の男が、サーバールームを目指し駆け出していた。

「さて、パスワードは……」

嚴重な電子ロックが解除され、サーバールームの扉が開く。

そしてその中に入り……

「くそっ、手間をかけさせてくれるじゃないか」

中枢の端末を操作し始めるが、そこでパスワード認証画面が。

「っ！ またセキュリティか。パスワードは……」

軽快な手さばきで入力するが、次の瞬間エラー画面が。

ソレを受けて警報が鳴り響き、その男はその場を走り去ろうと……。

パキンッ！

した所で、ケーブルに足を引っ掛けてしまい、それが外れてしまう。

男はそれに構わず、その場を立ち去ると同時にサーバールームの扉が閉まる。

「はあはあ」

男子生徒は壁に手を当てて息を整えていると
そこで、召喚フィールドが学園全体を覆い尽くし、幾何学的な模様
が出てきて中から召喚獣が出てきた。

「う、うわあああ！！！」

その叫び声とともに学校から召喚獣の大群が漏れ出していく。

学園長室では

「学園長！召喚システムに問題が発生したもようです！」

高橋先生が入ってきて言った。

「これはどうにかした方がいいね」

それを聞いた学園長は呟いた。

「じゃあさ、僕も手伝うよ」

芳乃は笑顔で言った。

学園長はそれを見て少し困った顔をするが背にはかえられないので
承諾する。

一方教室で

「吉井、お前。また何かしたのか？」

「先生、それはいくらなんでもひどいです。アキ君はそう何度もやらかすなんてことしません！」

西村先生が明久を見つめて聞いてきた。

つぐみは西村先生を見て明久の庇護をするように言った。

先生の鼻から召喚獣が飛び出ているけど笑いはこらえよう。

「いや、だがな。雨宮」

「強化合宿の時だって、してなかったのに勘違いされて」

西村先生は戸惑いながら言うつつぐみは悲しそうにしながら伝える。これには何も言えない西村先生。

「まあまあ、それより。この状態のことで学園長に問いただす方が先やる？」

「あ、そうだよね！」

深紅は間に入るとつぐみは顔をあげて言った。

「なら、僕も行くよ。つぐみだけじゃ心配だし」

「俺も行くこう」

「わしもじゃ！」

「……俺も」

明久は立ち上がると言い、雄二と秀吉と康太も立ち上がる。

「わしもぜよ」

「……心が、行くなら」

「なら、わっちも」

心が立ち上がると由香里も立ち上がると言った。
そして深紅は笑顔で参加する

「わ、私も！」

「う、ウチも！」

瑞希と美波も一緒に行くと言宣言する。

「鴉取君達は？」

「俺達は芳乃に呼ばれているから」

つぐみが聞くと鴉取達は教室を出ていく。

芳乃博士に呼ばれている理由はわからないけど、今の人数で向かうことにした。

学園長室に入ると

「ちょうど良いところにきたね」

「？」

学園長が明久と深紅を見て呟いた。

明久は不思議そうにして、深紅は不機嫌そうな様子になった。

「僕達が修理を？」

「観察処分者のベース召喚獣はシステムの別領域で走ってるから、他の生徒と違って暴走の影響を受けないんだよ」

「じゃあ、現状で唯一召喚獣を使えるわっちらに召喚システムの修理をやってことやね？」

学園長は明久と深紅を見てそう言った。

「その通りさ。操作の腕輪を使えばアンタの召喚獣も物理干渉能力を持つ事が出来る。」

そして、不具合のある教師フィールドじゃまともに召喚は出来ないから……」

「自前の腕輪の出番というわけですね？」

学園長は頷いて言うつつぐみはまっすぐ見つめて言った。

「つまり、俺と雨宮の出番なわけだ」

雄二は腕を組んでそう呟いた。

「後、僕の作った指輪をつかえば、召喚獣になれることもできるんだよね」

得意そうに芳乃博士は笑顔で言った。

それに学園長は苦笑いを浮かべていた。

「でも、その指輪は誰が使うの？」

「つぐみちゃんに任せたいんだけど、ダメかな？」

つぐみは不思議そうに聞くと芳乃博士は苦笑いしながら言った。

点数は平均点でも大丈夫な指輪らしいのでつぐみが使う方が的確なそうだ。

どうしてそんなの作ったのか聞くとなんとなく作りたかったらしい。

「つぐみが危ないんじゃない？」

「吉井君が守ればいいと思うんだけど。」

それに、人数は多い方がいいんだよ？」

明久は不安そうに言うとなんか芳乃はきよとんしたように言うとなんか真面目な声で明久を見て伝える。

「でも」

「アキ君。わたしはこの学校が好きだから、わたしでもできることならしたいの」

明久は不服そうだったけど、つぐみは頑張ると宣言したので明久も渋々と了解した。

深紅がそれを見てにっこりとほほえましそうに見ていた。
瑞希と美波はうらやましそうにつぐみと明久を眺めていたは後にて
わかった。

作戦実行！

「それじゃ、さっそく」

「その前に腕輪の調整をさせてくれないかい？」

明久が意気込んで行こうとしてると学園長に止められて腕輪を渡すことになった。

しばらくして調整が終わった腕輪を返却されたのでそれをはめてサーバールームに向かった。

進路の指示は雄二達がすることになっている。

サーバールーム前にて。

つぐみ、明久、深紅の三人が並ぶ。

「さて、行きまひよか」

「うん、アウェイクン！そして、サモン試獣召喚！」

深紅は笑顔で言うと明久が腕輪を発動させて先に召喚した。

「！そして、サモン試獣召喚や！」

「あたしも！アウェイクン！サモン試獣召喚！」

【Fクラス 吉井明久 物理 56点】

【Fクラス 神埼深紅 物理 540点】

【Fクラス 雨宮つぐみ 数学 340点】

明久に続いて深紅とつぐみも召喚した。
召喚獣の上に点数が表示される。

「あれ？」

「どないしたん？」

ふと、自分の召喚獣に違和感を感じたのかつぐみは不思議そうな声をした。

それに気づいた深紅が聞くと

「うーん、なんか違和感があつて」

「え、大丈夫なの？」

つぐみは苦笑いしながら言つと明久が心配そうに聞く。

「暴走の類じゃないと思うから大丈夫だよ」

「それならいいけど、異変があつたら吉井に言つんやで？」

つぐみが笑顔で言つと深紅はニヤリと笑つて言つた。
それを聞いて二人は赤面する。

「あ、あたしとアキ君はそんなじゃ！」

「そ、そくだよ！！」

あわあわと慌てながら言っていると

『お前ら、遊んでる暇あるのか』

雄二の呆れた声が聞こえた。

美波と瑞希は小さくうらやましいと呟いていた。

その美波と瑞希の背後に黒いオーラがでてたのを見た秀吉はため息をついていた。

「はいはい。ほな、はんなりいきまひよか」

「うん、うん」

深紅は言うつと召喚獣に小型のカメラをつけて通気口に侵入させる。

「坂本君、ちゃんとナビしてね？」

「吉井だけ、トラップにはめたら霧島と結婚させるからそのつもりでな」

『わ、わかった』

つぐみは雄二に言うつと自分の召喚獣を侵入させる。

その次に深紅が忠告させると明久が自分の召喚獣を侵入させた。

召喚獣システム対策本部にて

「召喚獣、通気口に侵入しました」

瑞希はカメラの映像を見て全員に伝える。

「進路クリア」

「そのまま直進だ。明久、神埼、雨宮」

『『『了解』』』

美波がカメラを見ながら言うつと雄二はカメラを見て進路方向を指示する。

その指示に明久とつぐみと深紅が返事する。

「大丈夫ですか？彼は観察処分者、問題児ですよ？一方は誰も逆らえない存在ですし。」

たとえAクラスをやぶったといえども」

その様子を見ていた学園長に不安そうに高橋先生が問いかける。

「任せるしかないさね。今のところ、あの腕輪はあの三人しか、使えないからね」

腕を組んで学園長はため息をもらして高橋先生に言う。

「3メートル先を左に曲がって、次の進路を右じゃ」

秀吉は軽快にキーボードを入力しながら明久達に伝える。

「まるで迷路みたいだな」

「そうだね、道を間違わないようにしないと」

「こつも道が多いと厄介やね」

明久は操作しながら言うつつぐみは苦笑いしながら言い、深紅はけらけらと笑って言う。

若干楽しそうに見えるのは気のせいだろうか？

「なんでこつも複雑なの？」

『セキュリティーの一種だよ』

明久が愚痴を呟くと学園長は質問に答えた。

三人の召喚獣が道を通っていると赤く点滅した
どうやら毒の沼地のようだ。

「だああ！！しびれる〜！」

「坂本、絶対わざとやる！！？」

「あつう〜」

明久と深紅にフィードバックがきて倒れているとつぐみも倒れてい
る。

どうやらつぐみにもフィードバックがきたようだ。

「て、点数が減ってるよ！？何、これ！」

「よ、よくあるトラップやろ」

「め、めまいがするよ…って、あれ？」

明久がしびれながら言う。深紅は耐えながら言う。
つぐみは咳くと段ボールの接近に気付いて固まる。

「なんでこんなのがあるんだよ！」

『セキュリティの一種さ』

「どれもこれもセキュリティの一種でごまかしてるやないやろっ
な!?!」

明久が通信機で言うと学園長からの返答が返り、深紅が叫んでいた。
やはり、毒のしびれはきついらしい。

「危険地帯を迂回する。次の角を右だ」

雄二の指示に従い、三人は召喚獣を動かす。
しばらく歩くと明かりが見えた

「あ、明かりが見えたよ」

「もうすぐだね」

「やっと外に出れるんやね」

明久が言う。つぐみは笑顔で言い、深紅は遠くを見て言った。

『そのまままっすぐ』

雄二がそう言いかけると何か異変があった。

「あれ、なんだろう?」

「召喚?」

「しかもFクラスのマークやで」

明久が不思議そうに呟くとつぐみも小首をかしげて言う。
深紅はどこか嫌な予感を感じながら言った。

そのマークから出てきたのは暴走した康太の召喚獣と雄二の召喚獣だった。

「召喚獣!?!」

「しかも、暴走してるよ!」

「点数が減つてるときにこれかいな」

明久が驚きの声があげるとつぐみは焦りながら言い、深紅は苦笑しながら言った。

一方作戦室では

「暴走召喚獣出現!」

「攻撃、来ます！」

美波が周りに言っていると瑞希も慌てながら言った。

明久達の方では

康太の召喚獣がクナイを投げつけて、雄二の召喚獣が拳で殴りかかる。

それに続いて瑞希と美波の召喚獣と心と由香里の召喚獣も出てきた

「うわ！」

「アキ君！」

「ちょ、これはきついで！」

明久が吹き飛ばすとつぐみは慌てながら言い、深紅はそう言いながらも、異形な形の剣で攻撃するが…

「やめてよ、瑞希ちゃん！美波ちゃん！」

『コントロールがきかないんです！』

『つぐみ、早く逃げて！』

つぐみが頑張つてよけながら言っていると瑞希と美波が悔しそうに言う。点数が減っていることもあり、フィードバックの疲弊でまず、つぐみが0点となった。

「ちょ、雄二！ムッツリーニやめてよ！」

『ダメだ、コントロールが効かない!』

明久が言う。雄二は悔しそうに拳を握って言う。
それを翔子が手を握る。

「心と由香里もやめるんや!」

『それがコントロールがきかんぜよ!』

『深紅ちゃん、ごめん、なさいっ』

深紅も叫ぶ。心と由香里も悔しそうに言う。

二人とも涙を耐えて悔しそうだ。

そして、あっという間に二人の点数が0になった。

フィードバックのせいで気絶した三人はそのまま補習送りになった。

「作戦、失敗ですね」

高橋先生が残念そうにつぶやいた。

作戦実行！（後書き）

作者です！

つぐみ「主人公です」

明久「なにこれ」

深紅「きついなんてももんやないで」

すみません！！

毒の沼地はどうしてもはずせなかったんです！！

つぐみ「それでだいぶ点数減ったもんね」

深紅「あの地形どうかしとるで」

次回も頑張ります！！

回復試験を受けて

つぐみ達が補習から戻ってくると

「大丈夫ですか？吉井くん、つぐみちゃん、神埼さん」

姫路は心配そうに入ってきた三人を見て言う。

「ふっ…地獄を見たぜ」

「あれは地獄やね」

「うう…頭がくらくらするよう」

たそがれたように明久が言い、深紅は遠くを見て呟いてつぐみは頭を押さえて言った。

「どつという補習だったのじゃ」

魂が抜けてる明久を見て呆れながら言う。

深紅とつぐみは明久の魂を戻そうと作業してる。

「作戦を続けます。回復試験を受けて点数を補充してください」

高橋先生は眼鏡に手を当てて明久達を見て言った。

「でも、よほど高得点をとらないと敵と遭遇したらアウトよ」

美波はむうとなりながら言った。

「吉井君、もしよろしかったら私がお勉強をお手伝いしましょうか？」

「姫路やと、逆効果になりそうや」

姫路が明久の近寄ってひざまずいて言うと深紅は即却下した。

「じゃ、じゃあ。どうするんですか？」

「ここはつぐみに任せるのが常識やろ」

落ち込んだ姫路が言うと深紅はニヤリと笑って言った。

「え、ええ!!? 教えるなんて、無理だよ! だって、緊張するし」

「そ、そうだよ! できるなら、神崎さんが教えてくれるとありがたいよー!」

つぐみと明久が慌てながら言う。深紅はため息をついた。
「まだまだ、前途多難のようだ。」

「…すぐに効果がでる方法じゃないと無理」

「それなら良い方法があるぞ」

霧島が憂いの様子で言うと雄二はにやりと笑って答えた。

「回復試験を三人で受けている。」

「なるほどね、アキでも簡単な問題なら解けるもんね」

「ちょっとチートくさいけどな」

美波が言うと雄二は段ボールに座って呟いた。

「おおっ！明久がいままでにないレベルになっていくぞ！」

秀吉がディスプレイに加算されていく点数を見て驚きながら言う。

「凄いです。吉井くん！」

姫路は目をキラキラさせて言った。

「頑張れー、アキ」

美波が笑顔で言う。

「神埼や雨宮の方も順調のようだな」

「うむ、さすが。神埼と雨宮じゃのう」

隣を見て雄二は満足そうに言うと言った。秀吉は笑顔で言った。
こちらの点数もディスプレイに表示されて点数がどんどん増えていく。

しばらくして回復試験を終えると

「これくらいの点数なら敵が現れても大丈夫じゃない？」

「…作戦開始」

美波がディスプレイを見て言い、土屋が無表情で言った。

「よし！行こう、神崎さん。つぐみ！」

「はいな」

「うん！」

明久が立ち上がって言うと深紅とつぐみも頷いてサーバルルーム前に向かった

再び作戦開始！

「「「サモン試獣召喚！」「」」

サーバルーム前の通気口にて明久、つぐみ、深紅は召喚獣を召喚して通気口に侵入させて歩かせる。

「今度こそ、クリアしてみせるぞ！」

「頑張ろうね！」

「何事もなく進めたらええねんけど」

三人は召喚獣を動かしながら会話すると雄二から、連絡がくる。

『よし、その十字路を左だ』

「了解」

「うん」

「了解や」

そう雄二から連絡が来ると三人は召喚獣を動かして十字路を左に向かわず。

すると、またしても毒の沼地にはまった。

『強くなっても痺れるんだな』

「試さないで！」

「これが終わったら覚悟しとき（黒笑）」

「坂本君、酷いよ！」

ぼそつと呟いた雄二に明久が言うのと深紅が黒い笑顔で言い、つぐみは痺れに耐えながら涙目で言う。

そして、再び歩き出すと雄二から通信が来る。

『今度はつきあたりを右だ』

「了解」

「今度はちゃんとした場所やるうな」

「だ、大丈夫だよ。」

雄二がそう言うのと明久がすぐに動かして言う。

それに続いて深紅とつぐみも召喚獣を動かして会話していた。

「あれは何かな」

「あ、見たことあるで。どっかのゲームでこんなキノコがあった気が」

つぐみがキノコを見ると言い、深紅はふと思い出して呟いた。

『気をつける、明久に神埼に雨宮。それに触れると』

「うわぁー！」

『吉井君！？』

『アキ!?!』

雄二が最後まで言う前に明久が触れてしまう。

明久の驚きの声に瑞希と美波は驚いて叫ぶ。

すると明久の召喚獣は大きくなり、土管にはいることができなくなっていた。

「苦しい」

「もう、アキくん!道端のものとか拾ったらダメだよ!」

明久が涙目で言うにつぐみは少し呆れながら言った。

「つぐみ、ツツコムとこはそこやないやろ」

それを見て深紅は苦笑いしながら訂正していた。
まったくもってその通りである。

『だから、気をつけろと言っただろう』

雄二も呆れながら明久に伝える。

「綺麗な花があったから、それを取ろうとして。滑っちゃったんだ

よ」

「え？」

明久が雄二の声にそう言うにつぐみは自分の召喚獣を動かして明久の召喚獣の手を見ると
その手には綺麗な紫色の花が握られていた。

「もしかして、それをつぐみに見せたかったん？」

「あ、うん…ここまで一緒に来させてわけだし。お詫びとして」

深紅がニヤニヤと笑って言うと明久が頬を指でぽりぽりとかきながら答える。

『つぐみちゃんばかり、ずるいです』

『うちらだって、プレゼントもらいたい』

それを聞いていた瑞希と美波はどこか不機嫌そうだった。

この後、元に戻った明久の召喚獣と一緒に土管を抜けて歩き出す。

「！あ、あれは」

「来るみたいやね」

「頑張らないと！」

明久と深紅とつぐみは気づいて立ち止まると幾何学的文様が浮かび、その中から。

秀吉と雄二と康太の召喚獣が現れた。

どちらも暴走しているからか、目が紫色だ。

「よし、今度は負けないぞ！」

「いくでー！」

「行きますー！」

明久がそう言うと深紅とつぐみも召喚獣を動かして戦う。

まずは明久の召喚獣が雄二と秀吉の召喚獣を一瞬で木刀の攻撃で切り裂いていた

なぜか、真つ黒に二体とも焦げていたけど。

「これなら、勝てる。勝てるよ！」

『油断しないでください』

『土屋が来るわよ！』

明久がそう言うのと瑞希と美波が明久に忠告する。

その隣で深紅とつくみは由香里と心の召喚獣と戦っていた。だが、一瞬でケリがついたようだ。

「大丈夫！採点科目は歴史だから」

そう明久が言うのと康太の召喚獣が爆弾つきクナイを投げつけた。

明久の召喚獣はそのクナイを木刀ではじくと康太の召喚獣に突撃すると

「保健体育が使えない、ムッツリー二なんて」

木の葉で隠れて明久の召喚獣の木刀の攻撃を避けると

後ろに回ってカメラを構えてシャッターを押すと紫色のビームが出る。

「今の僕の敵じゃない！」

そう言うとかメラを構えた康太の召喚獣ごと殴り飛ばして、後ろにいる秀吉と雄二の召喚獣と。吹き飛ばされた康太の召喚獣が激突して、毒の沼地に落ちて点数が0点になった。

すると、指令室では西村先生が段ボールを被ったまままで秀吉や雄二と康太に

「戦死者は補習ー！！」

「「「え！？」「」」

そう言ったので、三人は驚いて固まった。

「理不尽じゃ！」

「召喚獣が勝手に戦って負けたんだぞ！！？」

「問答無用」

叫ぶ秀吉と雄二と担いで黙ったままの康太も担いで西村先生は出て行きながら言う。

それを翔子と瑞希と美波は見送りした。

その間に明久達は通気口の出口についてサーバールームに侵入した。

「着いた」

「やっとやね」

「これで、なんとかなるね」

明久が深紅がつぐみが言っていると学園長から通信が入り。

『そこに外れているケーブルがあるはずだよ。それをつないでおくれ』

「了解」

学園長にそう返事を返すと、三人は召喚獣を動かしてケーブルを捜す。

「あ、あった」

「それをつなげば、ええな」

「これで終わりだね」

明久がそう言うのと深紅とつぐみは安心したように言った。
明久は召喚獣を使ってケーブルへと手を伸ばすと、深紅がなにかに気づいて。

「あかん！離れるんや！」

「ふえ？」

「うわ！」

そう叫ぶと、深紅は自分の召喚獣を動かして明久とつぐみの召喚獣を担いでケーブルの傍から離れる。

ガキン！

三人が離れるとその場に剣がささった。
ゆっくりとその剣の持ち主を確かめる為にみるとそこには美波の召喚獣がいた。

『アキ、つぐみ、神埼！』

『三人共、逃げてください！』

美波と瑞希はそれを見て叫んだ。

『早くしないと、私がっ！』

瑞希は慌てながらそう言うと瑞希の召喚獣が現れた。
瑞希の召喚獣は腕を組んでこちらを睨んでいるように見える。

「吉井、この二人はわっちに任しとき」

「でも」

深紅はその様子を見てそう言うと明久は躊躇する。
するとつぐみが明久を見て伝える。

「あ、アキくん！なんか出てきたよ！」

「え？」

つぐみの声に気づいて明久がそちらを見るとでかくとげとげの甲羅を持つ、ゾウ亀のような足をしていて亀みtainな姿のモンスターが何体もこちらに向かってきていた。
まるで、ターゲットは明久とつぐみだけみたいだった。

「す、ストムトータス！！？」

「え、確か。とても甲羅が固くて苦労したっていうあのー！？」

明久が叫ぶとつぐみは驚きながら言う。
どうやら、かなり波乱に満ちた幕開けになりそうだ。

再び作戦開始！（後書き）

次回で最終決戦？ですかね。

モンスターはテイルズオブザワールドレイディアントマイソロジー
から出る敵です

いよいよ、最終決戦！（前書き）

ピンクの腕輪はコスチュームと職業チェンジになる物です。

いよいよ、最終決戦！

「ど、どうやって倒すの？」

「あれには遠距離攻撃か魔法を使わないと無理だよ」

つぐみが明久に尋ねると聞いたなら明久が苦笑いしながら言った。
そう、まさに万事休すな状態なのだ。

作戦司令室では

「学園長、あれもシステムの影響なんですか？」

「そうさね、面白そうだったからね」

高橋先生が尋ねると学園長は遠くを見て言った。
多少、あのモンスターをいれたことを反省しているようだ。

「どじするんですか！？」

「このままじゃ、アキ達が！」

瑞希と美波は焦りながら言った。

「あ、ダーリンとつぐちゃんが危ないよー！」

「響ちゃん参加してくる？」

響がモニターを見て叫ぶと朋が笑顔で言った。
それはどういう意味なのか、周りが反応に困っていた。

「いいの？」

「うん。ただ、この腕輪をつけてね」

響が小首をかしげて聞いたら朋は笑顔で頷いてピンク色の腕輪を差し出す。

「あの、芳乃博士。それは」

「僕が造った腕輪だよ」

瑞希が尋ねると朋は笑顔で答えた。
詳しく聞くとあの腕輪はストムトータスの情報を調べることができたり、その弱点に合った攻撃をできるよつになるらしい。

「いつてきまーす」

響はそう言つとつぐみ達がいる方向に向かった。

「ダーリン、つぐちゃん。深紅ちゃん、応援にきたよ」

「響ちゃん!?!」

「迷子にならないでよくこれたね」

「吉井のツツコミはそっちなん?」

響が笑顔で言つとつぐみは驚いて明久も驚きながら言つと深紅はそれにツツコミをいれていた。

「でも、これで…そっちはなんとかなりそうやね」

「え?...あ、そっか!二人じゃ、難しいだろうけど。三人ならんとかなるもんね!」

深紅が笑顔で言うつつぐみは不思議そうに言うとはっと気づいて笑顔で言った。

「神埼さんは一人で大丈夫？」

「へーきや。わっちもすぐにかたしたらそっちに応援に行くえ」

明久が心配そうに聞くと深紅は笑顔で答えた。

「わかった、でも…無理は禁物だからね！」

「了解や、リーダー」

それを聞いて明久は安心すると言い、深紅はニッと笑って戦闘に集中する。

「よし！頑張るぞ！」

「あ、つぐちゃん。腕輪のスイッチを押してだって」

つぐみのはりきつてると響が笑顔で言う。
不思議に思いながら腕輪のスイッチを押すと

「ふええ！？」

つぐみの召喚獣の姿がRPGばく変わったのだ。
ヒーラーっぽい衣装に杖を装備していた。

「つ、つぐみ！僕のもすごいことに！」

「本当だ！？」

明久の衣装も変化しており、甲冑に剣という装備になっていた。
つぐみも明久の召喚獣を見て驚くと響も召喚獣を召喚する

「よし、試^{サモン}獣召喚」

ぼん！

幾何学的文様がでて響の召喚獣が召喚された。

軽い甲冑に籠手という装備に双剣という武器をもっていた。

そして、響の召喚獣が転移魔方陣の札を使うと一気に明久達の召喚
獣がいる方にワープした。

「さ、クライマックスと行こうや」

「おー」

深紅は響が揃うとニヤリと笑って言う。
どこまでもテンションが高い。

「もう、どっとなってるのかわかんないよ」

「とりあえず、頑張ろうよ」

つぐみが苦笑いしながら言う。明久も苦笑いして言った。

「ほな、行くで！」

深紅は召喚獣を動かして美波の召喚獣を一撃で倒した。
作戦司令室では美波が西村先生に補習室へと連れていかれた。

「よし、次は…はい？」

深紅は瑞希の召喚獣を見たら驚いた。
姿が前と変化しているのだ。
大きな黒い翼に悪魔のような尻尾を生やした姿へと。

「なんの恨みがあって、あんな変化になるんや!」

「恨みなんてありません〜!」

深紅が叫ぶと瑞希も叫んだ。

明久達の方では

「か、固いよ」

「でも、なんとかして勝たないと」

「つぐちゃん、魔法だよ」^{スベル}

明久がストムトータスに苦勞してるとつぐみは杖を握って言い、すると響が笑顔で言った。

「え、でも…できるかな」

「その姿だから、できるよ。後、腕輪の恩恵で」

つぐみが困ったように言うと響は笑顔で答えた。

「う、うん。えっと…アタックをかけて」

つぐみは召喚獣を動かして杖をにかけて詠唱して明久と響の召喚獣の攻撃力をアップさせた。
つづいてアクアスパイクの水魔法を使い、攻撃した。

「効いてるよ」

ストムトータスの動きが鈍くなるとつぐみが驚いて言った。

「これなら、行ける！」

「行くぞ〜」

明久と響は剣を使いストムトータスを連続攻撃してなんとか倒した。
深紅の方は

「ウエボン武器変換！！！！」

深紅は召喚獣を動かして瑞希の剣を壊して吹き飛ばすと武器変換の腕輪を使った。

「これでもまいや！約束された勝利！！」
エクスカリバー

そして、エクスカリバーで瑞希の召喚獣を倒した。

この後、全員で司令室に戻って学園長からねぎらいと朋からは指輪とアンクレットをもらった。

こうして、作戦は無事コンプリートした。

いよいよ、最終決戦！（後書き）

番外編終了です！

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末

とある日曜日に事件が起きた。

タツタツタツ（何かが通路を走る音）

「アキ君、大変だよ！」

「え、どうしたの？」

あたしがゲームをしているアキ君に近寄って言うとアキ君が不思議そうに聞いた。

「実は…残額が」

「え？ええー！！？」

あたしはアキ君の生活費の通帳を見せてアキ君が叫んだ。

「なんで、どういふこと！？」

「今月はいつもより出費が多くて、こっぴつ状態になったの」

それを聞いたアキ君は急いで携帯電話を取り出して電話をしていた。

明久side

『はい、もしもし?』

「あっ！ やつとつながった！ 良かったあ〜」

母さんが電話に出たのでほっと安堵していると

『その声はー明久？ わざわざ国際電話なんて、どつかしたの?』

「どつかしたの、じゃないよ母さん！ つぐみに教えてもらって残額みたら三十九円だなんて、どついうこと!?!? 僕の仕送り忘れてない!?!?」

母さんは僕に気づくと不思議そうに尋ねてきた。僕は感情のままに叫んで伝える。

『あら、うっかり忘れていたわ』

「うっかりにもほどがあるよ!?!」

本当にうっかりという感じの声が聞こえてきたので僕はツッコミをいれていた。

『まあ、その話は置いといて』

「え？ ああ、うん」

母さんは話をそらして言うので僕は頷いた。

『母さんは前に言ったわよね?』

生活費はつぐみちゃんに管理してもらうけど、学校の成績を定期的に報告するのは明久がするようにって

「アンタが二年生になってからまだ、二回しか聞いてないんだけど？」

「あ、忘れてた」

母さんが僕にそう言うのでふっと思い出して呟いていた。

『アンタもすっかりしすぎじゃない。それより、最近の成績はどうなの？』

「……………」

呆れた声が聞こえてから話を戻されて聞かれた。

思わず沈黙してしまったよ。僕の横でつぐみが心配そうに見ていた。

『答えなさい。返答次第では仕送りを考えてあげるから』

「……………え、えっとね。最近の中くらいの成績になりそうかなって感じになつてはいるんだよ」

母さんがそう言うので僕は前置きをせずに答えることにした。

『中くらいいつてどのくらい？』

「そ、それは…その。前よりは多少、よくなって」

そう母さんが聞くので僕は答えるんだけど、電話を切られた。無情な通話音が木霊する。

明久side end

「あ、電話だ。はい、もしもし」

『あ、つぐみ？ 今日ね、従兄弟の天城君がそちらに転入することになったから』

あたしが電話に出るとお母さんがにこにこ笑顔で言った。

「え、なんでまた!？」

『うーん、前の学校との折り合いが悪かったみたいなのよ。それでつぐみがいる学園に行くことになったの。』

『ついでに引越してくると思うから、手伝ってあげてね』

あたしは驚きながら言つとお母さんが苦笑いしながら答えてくれた。フジ君とは親戚同士が集まる場でよくあつて、一緒に遊んでいたから仲良しなんだよ。

名門の進学校に通つてたのに、どうしたんだろう。

「とりあえず、引越してきたら話合つことにするよ」

『そうね、その方がいいかもしれないわ』

あたしは自分の考えを言つとお母さんは笑つて言った。

「それじゃ、また。何かあつたら電話してね」

『ええ、体調には気をつけて無理しないようにするのよ？明久君と仲良くね』

あたしは笑顔で言うとお母さんは笑顔で返事して最後はからかうように言い、電話を切った。

「どうしたの、つぐみ」

「アキ君。明日、フジ君が引っ越してくるんだって」

アキ君が不思議そうに聞くのであたしは笑顔で答えた。
久しぶりに会うから結構楽しみになってる。

「富士也が？」

「そう！アキ君も楽しみでしょ？」

アキ君は首をかしげて言うので笑顔で答えた。

「そっかー。うん！また、一緒に遊べるんだと思うとわくわくするよ」

「そだよね、小さい頃には一緒によく遊んだし」

アキ君はすごく嬉しそうに笑って言うのであたしも嬉しそうに笑って言う。

「ところで、アキ君。何してるの？」

「ん？ ストーカーのようにリダイヤル連打してるのさ」

アキ君が携帯電話を使って何かしているので聞くと笑顔で言われた。
いや、それはダメでしょ。

「そんなことして、着信拒否されてもしらないよ？」

「あ」

あたしが呆れながら言うとアキ君の呆然とした声が響いた。
どうやら、着信拒否をされたらしい。

「今日は転校生を紹介する」

『先生！それは女ですか、男ですか！』

西村先生が教室に入って教卓に立つとそう言った。
クラスメイトの男子が聞くと

「男二人だ」

『ちっ！』

西村先生はそう告げるとクラスメイトの男子が舌打ちした。

「さ、入れ」

西村先生がそう言うと教室の扉が開いて男子生徒二人が入ってきた。

そして、ディスプレイに名前が表示された。

「神薙綾人だ。好きなのは特撮ヒーローともふもふした獣達。」

黒髪のツンツンした青年が自己紹介した。

外見はスパロボのレナンジエスに似てるみたい。

「天城富士也。つぐみとは従兄弟で明久とは幼なじみの間柄だな」

前髪に白銀のメッシュがかかった黒髪のざんばらヘッドに淡い黒のクールな瞳で身長は182cmくらいかな。

大切な従兄弟だから、やっぱり前での高校生活のことが心配だなあ。

ガタガタッ

『殺せ!』

「静かにせんか!」

立ち上がるうすするとFクラスの男子に西村先生がそう言った。

それを聞いたFFF団はしびしびと椅子に座る。

「よし、席は雨宮の隣に天城。吉井の右隣に神薙が座れ」

西村先生は静かになると席を決めた。

「よろしくな、つぐみ」

「うん！こちらこそ」

フジ君が笑顔で言うのであたしも笑顔で答えた。

「よろしくな、吉井」

「こちらこそ、よろしく！」

その隣で神薙君がアキ君と仲良く会話をしていた。席に二人がついた後は西村先生が授業をはじめた。

「…それで、嫌がらせ撃退音を鳴らされた後に着信拒否に設定された、と」

「うん。酷いと思わない？ あの人、きっと僕の母親じゃないと思うんだ」

昼休みの教室でアキ君のおばさまとの会話について坂本君に愚痴を言ってるアキ君を見て
あたしは呆れながら見ていた

「いや、嫌がらせする方もどうかと思うぞ」

「そうか。お前も苦労しているんだな……」

フジ君がアキ君にそう言っていると坂本君が以外な反応を返した。

「ど、どうしたの雄二？ そんなに同情してもらっても気味が悪い

「んだけど」

「アキ君、それは失礼だよ」

「いや、母親についての苦勞は俺もよくわかるからな……」

アキ君が若干ひいたような感じで言うのであたしが言うと坂本君が遠い目で窓の外を眺めていた。

その表情には粗野な外観にそぐわない哀愁が漂っているように見えた。

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末（後書き）

感想と評価をお待ちしております

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末2（前書き）

つぐみにはうさぎのきぐるみやうさぎの寝巻のパジャマが似合いそ
うだと思つのは作者だけでしょうか？

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末2

「して、明久はどうするのじゃ？」

飲み物のパックを片手に秀吉君が問いかけてくる。

飲んでいる物は豆乳…それを飲むから女の子みたいに扱われるんじゃないのかな。

「うーん……。正直、困っているんだよね。」

向こうも意地になってみたくてなかなか繋がらないし、会いに行こうにも海外なんて遠すぎるし……」

そうだよ、そもそもアキ君のおばさんとおじさまがどこにいるかも良く知らないから。

海外企業の経営コンサルタメントみたいなことをやってるらしいし。

「……自分で稼ぐしかない」

土屋君が何かの雑誌を見ながら呟いた。

アキ君の友人なんだけど、ときどきよくわからないんだよね。

「だよ。何か良いアルバイト見つけられないとなあ」

「だね。できれば日払いですぐに働ける所がいいかも」

アキ君は腕を組んで悩むのであたしも同意して言う。

「高校生でもできる日払いのバイトの募集ってあったか？」

フジ君が近寄ってきて呟くと

「それなら、駅前の喫茶店でバイトを募集していたぞ」

坂本君が顎に手を当てながら呟く。

「「駅前の喫茶店？」」

いつのまにか隣にきていた神薙君と響ちゃんが小首を傾げていた。

「『ラ・ペデイス』だったか？ あの何語だかよくわからん名前の店だ」

「へえ〜。あのお店、バイトの募集なんてしていたんだ」

結構美味しい上に値段が手頃で、文月学園生徒御用達の店なんだよ。以前、アキ君が美波ちゃんに行ったお店。

「確か、今週土曜日だけの募集だったな。 11:00〜20:00勤務で

8800程度、未経験者歓迎とか」

坂本君は思いだしながら教えてくれたけど

「日雇いで未経験者歓迎？」

「それは僕にとって都合がいいけどー何かありそうだね」

神薙君が訝しげに言うのとアキ君も悩むように呟いた。

普通なら喫茶店のアルバイトで短期で募集したりはしないし、しかも未経験者歓迎となると、益々もって普通じゃないよねきつと何か事情があるのかもしれない。

「確かに珍しい募集の仕方じゃが、そう訝しむことでもなかるう」

「そうだよ！大方、突然人員が減って急場をしのぐ募集をかけてるんだよ！」

秀吉君が言うつと響ちゃんも同意するように言った。

それは十分に考えられる理由だね。

「もつとも、未経験者でも欲しがっていると、かなり切羽詰まった状況になっっているのかもしれないけどな」

神薙君は情報を整理してからそう言う。

「でも、アキ君。選り好みするほど余裕はないよ？」

「う……。それは確かに……」

あたしがアキ君を見て言うつとアキ君は否定できなかった。

「んじゃ、明久も面接に行くか？」

「え？ 『明久も』 ってことは。雄二もやるの？」

坂本君がアキ君を見て言うとアキ君は驚いて坂本君を見て聞いた。

「そのつもりだ。というか、元々俺がやるうと思っていただいたバイトだからな」

坂本君はアキ君を見てそう言った。

それなら詳しい理由も納得できるかも。

「なんじゃ。雄二も何か入用じゃったのか？」

「ああ。ちょっと自分の部屋に鍵をつけたくてな。とびきり頑丈なやつを」

秀吉君が坂本君に聞くとどこか遠くを見つめて答えた。

自分の部屋に鍵をつけたい、というのはあたい達の世代は誰もが一度は考えることだろうけど。

坂本君も同じ理由なのかな？

「それで、募集って何人くらいだったんだ？」

フジ君は坂本君を見て聞いていた。

「確か、三丁五名ってなっていたぞ。結構広い店みたいだし、それ

なりに人数が必要みたいだな」

坂本君は説明してくれた。

「五人くらいか。それなら、つぐみと秀吉とムッツリー二も一緒にどう？」

アキ君がこちらを見て聞いてきたので。

「うん。アキ君だけじゃ、心配だしね」

「そうじゃな……。演技の幅が広がるかもしれん。何事も経験じゃ」

「……………カメラの購入資金の足しになる」

あたしと秀吉君と土屋君は頷いた。
特に予定もないしね。

「わっち等は様子でも見に行くことにするぞ」

「頑張れよ、明久」

「応援してるよ、ダーリン」

深紅は突然現れると笑顔で言い、神薙君とフジ君と響ちゃんがアキ君を見て言った。

「うん、頑張るよ」

アキ君はそれを聞いて頷いて答えた。

「そうと決まれば、早速今日の帰りに面接に行こうよ」

「募集が終わってたら困るしね」

「そうだな。そうすつか」

「了解じゃ」

「…………（コクリ）」

そんなわけで、あたし等五人は学校帰りに件の喫茶店に寄り、その場で面接を受けて
全員採用ということになったよ。

「ああ……。よく来てくれたね……。今日一日宜しく頼むよ……」

「は、はい。宜しく願います」

そしてアルバイトの土曜日。開店一時間前に集合したあたし達五人を、

店長は今にも倒れそうなほど弱々しい姿で出迎えてくれた。

（ねえ。あの店長さん、本当に大丈夫なのかな？）

(むう……。何かきつかけがあればスグにでも富士の樹海に向かい
そうな
ほどに弱っておるのう)

アキ君が目アイコンタクトして秀吉君に聞くと秀吉君の感想は正
鵠を射ている気がするよ。

こんな人が駅のホームにいたら駅員さんを呼んで飛び込みの警戒を
促しそうだもん。

(目に生気が感じられないよ)

(これは噂なんだが…この店長、どうやら奥さんと娘に逃げられた
らしい)

あたしが苦笑いしながら小声で言うと坂本君が一際声を潜めて言う。

だから、日雇いでバイトを募集していたんだね。

(あれ？ でも、前に来た時はバイトの女の子も何人がいたはずだ
けど……)

(その連中がどうしたのかは知らないな。)

(ここにいないということは何かあったのかな?)

アキ君が周りを見て小声で言うと坂本君は即答するのであたしはあ
くまで想像で呟いた。

「それじゃこれ、君たちの制服……。サイズが合わなかったら言うてね……」

店長さんがあたし達全員に置かれた制服を渡す。

「……サイズが合いません」「」

渡された瞬間にアキ君と坂本君と土屋君の声が綺麗に重なったよ。

「性別が合いません」

「あの、なんで……あたしのはうさぎのきぐるみなんですか？」

こっちは秀吉君がウエトレスの制服を渡された声でその次にあたしのはうさぎのきぐるみだった。

「あれ？ おかしいな、きちんと目測したはずなんだけど……」

店長は首を傾げている。でも、どう見てもアキ君達のサイズが違うのと秀吉君のは性別が違うし

あたしのはコスプレになってるよ！？

「店長。僕は若干小さいだけですが、雄二とムツリーニ……じゃなくて坂本と土屋のサイズどう見てもあってませんよ。後、つぐみのは制服じゃなくてももう別の物じゃないですか……！」

アキ君が店長さんに助言をしている。

できれば、秀吉君の制服のことも助言してあげてよ。

「そうかな。」

でも、坂本君はS、吉井君はM、土屋君はエロ……じゃなくてLに見えたんだけど……」

あ、あの何を目測で図ったんですか!?

「……………エロになど興味はない」

「「なにいつ!?!」」

土屋君がすぐに否定すると坂本君とアキ君の声が八モった。本当に仲良いよね。

「ムツツリーニ。いくらなんでもその嘘はないよ」

「そうだぞ、ムツツリーニ。嘘は人を騙せる範囲でつくものだ」

「……………!!!(ブンブン)」

なんでかアキ君と坂本君が土屋君を問い詰めるようにしてた。嘘って、なんのこと?

「まあ、それは置いといて僕のサイズは多分しだから、ムツツリーニと交換します」

「……………Mならちよつどいい」

そう言ってアキ君と土屋君は制服を交換した。

「店長。俺はきつとLLになるので、交換してもらえますか？」

「店長。わしのもじゃ」

「あ、あたしのも交換してください」

坂本君と秀吉君とあたしは店長さんに制服ときぐるみを手渡した。

「そっか…そうだね……。うっかり制服と性癖を間違えちゃったよ…」

なんて豪快な間違え方してるんですか！！
バイトこんなので大丈夫なのかな？

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末2 (後書き)

感想と評価を楽しみにしております！

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末3 (前書き)

秀吉は大丈夫だろうけど、つぐみは。

また、叫ばれそうな予感です！

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末3

ロッカー室はあまり広くないようなので、まずはアキ君と土屋君の二人が着替えることになった。

「お待たせ、三人とも」

「……………待たせた」

アキ君が土屋君とお揃いの格好で部屋から出て声をかけてきた。二人の格好は黒のズボンにYシャツに同じく黒のベストを重ねた一般的なギャルソンスタイル。ズボンの上に前掛けのような黒のエプロンをかけ、首元に小さなネクタイがついてる。

「ははっ。以外と似合うもんだな。それっぽいじゃないか」

「なかなかの男前じゃぞ、二人共。のう、雨宮」

「うん、すっごく似合ってるよ！」

坂本君と秀吉君はアキ君の姿を見て楽しそうに笑って言った。
本当によく似合ってるよね

「そ、そうかな……………？」

「……………照れ臭い」

学校の制服とも私服とも違う、本物の喫茶店の制服を着た二人はど

こか照れ臭そうだった。

「ではワシらも着替えるとするかの」

「そうだな」

ひとしきり感想を述べた後、今度は坂本君と秀吉君が制服を手に口ツカールームの中に入っていく。

あたしは後でいいから、待つだけだけだね。

「って！？何やってんのバカ雄二！ 秀吉と一緒に着替えようとするなんて！？」

「……………万死に値する……………っ！」

そうアキ君達が叫んでドアを開けようとするけど、鍵がかかっているのかノブが回らない。

どうしてそんなに慌ててるのかな？

ドアを蹴破って突入せんとばかりの二人を見ると、ロッカールームの中から坂本君の

呆れたような声が聞こえてきた。

『お前等は何を言っているんだ。一緒に着替えもなにも』

「秀吉君は男の人だから問題ないよ、アキ君？」

坂本君がそう言うので引き継ぐようにしてアキ君に伝える。

「雄二、つぐみ。それはあくまで戸籍上の話だよ！」

『待つんじゃない、明久！ 事実でもワシは男じゃぞ！？』

アキ君はなおも話を聞かないばかりに言うと秀吉君がアキ君に言う。

『あー、わかつたわかつた。着替えが終わったら話を聞いてやるから、今は落ち着け二人共』

坂本君は面倒くさそうに言う。

「雄二っ！ どうしても考えを改めないなら」

『あん？ 突入はするなよ？ ドアの弁償なんて冗談じゃないからな』

アキ君はそれを聞いて何か考えあるのか言うと坂本君は不思議そうに言う。

「霧島さんにこの状況を包み隠さず暴露する！」

ガチャ

アキ君がそう言うとドアが開いて坂本君が出てきた。

「俺は廊下で着替えよう」

「それはダメだよ！？アキ君達もいいかげんにしなさい！」

急いで出てきた坂本君に言い、アキ君達にあたしは怒る。

「だ、だってつぐみ」

「だって、しかしもないよ！さっさと、店長さんがいる所に行ってくる！」

アキ君はたじたじになりながら言うけどあたしはキツパリと言つと土屋君とアキ君は落ち込みながら店長さんがいるホールに向かった。

「んで、俺はどうしたら」

「秀吉君と着替えたらいいよと言いたいけど。また、すぐに戻ってきそつだからなあ」

坂本君が苦笑いしながら言うのであたしは悩みながら呟くと

「ならば、先に雄二が着替えるとよかろう」

そう言つて秀吉君が出てきた。

後は背中ofファスナーをあげてもらつだけのようだ。

「わかった」

坂本君はすぐにロッカールームに入って着替え始めた。

あたしはため息をついて秀吉君の背中ofファスナーをあげてあげることにした。

ちゃんとしゃがんでくれたので秀吉君の背中にあるファスナーをあげる事ができたよ。

「待たせたな」

「そんなに待ってないのじゃ。おっと、次はわしじゃな」

しばらくして坂本君が出てきたので、入れ替わりに秀吉君がロッカールームに入って着替えた。

秀吉君が出てくるまで坂本君と会話していると秀吉君が着替え終えて出て来た。

次はあたしの番なので制服を手に持ってロッカールームに入って着替えた。

「お待たせ」

「では、行くかの」

「そうだな」

あたしが出てくると秀吉君と坂本君が待っていてくれたのか。笑顔で言い、一緒にホールへと向かった。

「むう……やはり、ワシだけ別の制服というのは……」

「諦める秀吉。これも仕事だ」

「と、とりあえず。頑張ろうよ！ね？」

秀吉君が不服そうに言う。

やっぱり、緑色のワンピースのような上の服に白いエプロンドレスは納得いかないのかな。

坂本君はギャルソンというのが凄くあってる気がする。

あたしは、秀吉君と同じ格好だけど。

なんか気恥しいや。

「あ、三人とも。結構時間がかかって……っ!？」

振り向いたアキ君が固まっていた。

どうかしたのかな？

「すまぬ。この服は存外複雑な作りでう。着付けに難儀しておったのじゃ」

「遅くなってごめんね？」

秀吉君は困ったようにヒラヒラのエプロンドレスの裾を掴まんで言う。

「ひ、秀吉。っ、つぐみ。その……凄く似合って……」

アキ君が何か言おうとしていると

「ディア・マイ・ドウタアアアアズー……ッ……ッ……!」

店長さんがあたし達を見るなり、両手を大きく広げて怪鳥のように飛びかかってきた。

「な、何事じゃ!?!」

「な、なんなの!?!?!」

あたしは怖くて下がって言い、秀吉君はかなり驚いていた。

「て、店長!?!何をトチ狂ってんですか!?!」

「ディア・マイ・ドウタアアアアアズー!ツツ!」

アキ君が言うけど、全然言葉が通じてないみたい。

「くっ、仕方ない!雄二、迎撃行くよ!」

「了かー!?!ダメだ、あたんねえ!なんて動きだ!?!」

アキ君が坂本君に言うけど、動きを捕えることができない

「ならムツツリーニ!店長にスタンガンを!」

「……………目標が絞れないっ!」

次は土屋君に頼んだけど、目標を絞れない様子。

まるで残像でも伴うかのような店長の動きに、坂本君と土屋君も対応できずにいる。

「秀吉っ!つぐみっ!」

「な、なんじゃ!?!」

「な、何。アキ君!？」

突然アキ君に声をかけられたので振り向くと

「店長の動きを止める!」父親に勝手に日記を読まれた思春期の女の子の台詞を

つぐみは「パパに動物園に連れて行ってもらえなかった女の子」の台詞を大声で叫ぶんだ!」

「よ、よくわからんが。了解じゃ!」

「恥ずかしいけど、わかったよ!」

テーマをつけてもらった秀吉君の顔が役者のそれに変わった。

あたしも頑張って叫ぼう。

『……お父さんなんて、大っキライ!!!!!』

『……パパなんか、もう知らないっ!!!!!』

秀吉君はたつぷりと嫌悪や怒りの込められた台詞で言い。

あたしも頑張って叫んだ。

こ、これなら店長も止まるよね?

「そうかつ! それじゃあ今夜はお父さんと一緒にお風呂に入ろうっ!

寝るときはパパの腕枕で眠ろうなっ!」

って、全然効果がないよ!?

というか、会話のキャッチボールおかしいよ!!
もはや、ドッジボールだよ!

「こうなりゃ実力行使だ! つぐみと秀吉は下がって急いで服を着替えるんだ!

雄二、ムツツリーニ! 全力で行くよ!」

「了解っ!!」

「ディア・マイ・ドウタアアアアズーーツツツ!!」

最大出力のスタンガンを四回押しつけて、やっと店長は床に沈んだ
そうだよ。

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末3 (後書き)

感想と評価をお待ちしております！

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末4

「で、どうしようか」

「どうするもクソも、店長がこんなんじゃないだろ。」

「そうだね。『今日は臨時休業』と書いて入口に張っておこうか」

先ほどまで大暴れしていた店長は。白目剥いて倒れている。

幸いにも店内に被害は特になかったけど、あたし達5人だけでこのまま店を開けるのは無理があるよね。

「バイトはまたの機会じゃな」

店長の暴走対策の為、エプロンドレスからギャルソンスタイルに着替えた秀吉君が呟いた。

ちなみにあたしは私服にエプロンをつけてるよ。

「仕方ないな。また他のバイトを捜すとするか」

「……………残念」

坂本君と土屋君は残念そうに呟いた。

「え？ ってことは、バイト代はー」

「アキ君、働いてないからでないよ」

アキ君が驚いてから言うのであたしは苦笑いしながら答えた。

「そ、そっか……、そうだよね……」

アキ君はそういつととても残念そうに言った。

——カランコロン

「いらっしやいませっ」

アキ君は扉が開いた時にとっさにそう言った。

『良かった。やってるみたい。時間潰す場所がなくて困ってたのよね』

『ほんとね、助かったわ』

アキ君の言葉を返事と勘違いして、OL風のお姉さん二人がお店の中に入ってくる。

これじゃ、『本日休業です』なんて言えないよ!?

(おい、明久!お前何勝手に招き入れてるんだ!)

(ご、ごめん!わざとじゃないよ!

頭の中でシミュレーションをしてたらお客さんが来てしまっ……!
!)

なるほど、あまりにもタイミングが良すぎて自然と言葉が出てしま

ったということだね。

(困ったのう。もはや追い返せるには無理そうな雰囲気じゃし……)

(……店長が目覚ますまで頑張るしかない)

秀吉君が困ったように小声で言うと土屋君は淡々したように小声で言う。

(うう……。ごめん……)

アキ君はすまなそうに謝る。

別室に寝かせてある店長がいつ目を覚ますかわからないけど、それまでの間はあたし達が頑張るしかないかな。かなり危険な状況だけど、やるしかない。

(坂本君、起きたことは仕方ないよ。メニューを限定にしたらなんとかかると思うし)

(そうだな、できるだけやってみるか。明久と秀吉と兩宮は接客。ムツツリーニはキッチンを頼む。俺はドリンク関連を担当する)

あたしが坂本君に言うのと頷いて坂本君はみんなに指示をする。

(了解じゃ)

(……わかった)

秀吉君と土屋君が頷くと坂本君はカウンターに入り、土屋君は裏手のキッチンへと姿を消した。

あたし達は接客なのでホールに残る。

「じゃあ、あたしから行くね？」

「うむ、頼むのじゃ」

「気をつけてね、つぐみ」

あたしがアキ君と秀吉君に笑みを見せて言うと頷いた秀吉君と心配そうなアキ君が呟いた。

苦笑いしてからあたしは客の方に向かう。

さ、バイト頑張らないと！

「いらつしゃいませ、二名様で宜しいでしょうか？」

あたしは営業スマイルをしようと途端にお客が固まっていた。あれ、どうかしたのかな？

「「かつ……………」」

か？何かな？

「「可愛い……」 貴女、お手伝いの子？小さいのに偉いね」「

うう、若干予想してたけどどうもこんな反応されると落ち込むよ。てか、そんなにちっこくないやい！

と、とりあえず落ち着くのよ。あたし！あつちはお客様なんだからっ！

「はい、バイトしに来たんですよ」

「バイト？ 貴女みたいな子が？」

にっこりと笑って言うとお客様に聞かれた。

「これでも高校生なのでせっかくだから社会勉強しようと思ったんです」

「そうなの、大変だけど。頑張つてね！お姉さん達応援してるから」

笑顔で言うとお姉さん達も笑顔で応援された。

いや、頭を撫でながら言わないでくれないかな。

そりゃ、小さいし撫でたくなるだろうけど。

「それでは、こちらへどうぞ。」

「はい」

でも、気持をしずめて笑顔で客であるお姉さん達を案内した。

とりあえず、つかみはOKかな？

清涼祭みたくすれば、なんとかなるよね。

「ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

丁寧に頭を下げてカウンターに戻るあたし。

「つぐみ、凄いね。違和感なんか全然なかったよ」

「うむ、これはわし等も負けてられぬのう」

笑顔で秀吉君とアキ君が褒めてくれた。

「えへへ、ありがとう。二人共」

妙に照れ臭いけど笑顔でお礼を言った。

「よしつ。僕も頑張るぞっ」

「その意気だよ、アキ君」

アキ君はやる気だすように言うので笑顔で応援してると。

「……が、あまり気負いすぎるでないぞ。緊張は身体の動きや滑舌に影響を与えるからのう」

秀吉君がアキ君に忠告する。

確かに、緊張すると余計な事をしそうだもんね。

ちなみに秀吉君が言いたいことは緊張していると転んだり台詞を噛んだりすることがあるって

言いたいんだよ。

大事なのは『転ばないこと』、『舌を噛まないこと』が重要というわけだね。

ーカーランコロン

っと、お客様だね。

アキ君大丈夫かな？

「いらっチャッ！」

あ、台詞を囁んだ。

「「「……………っ！」「」」

ああ、入店してきてるお姉さん三人が必死に笑いを堪えて俯いてる。い、一度の失敗で挫けないで、アキ君！！

「————いらっチャ」

ダッ！

あ、アキ君がダツシユして逃げた。

「あつ！ キミ、案内は！？」

「大丈夫だよ！ 私達全然笑ってないから！」

「もう一回だけ頑張ってみて！」

アキ君がお客様に励まされてるのにダツシユで戻ってきたよ！？

「な、なんじゃ明久！？ なにゆえダツシユで戻ってくるのじゃ！？」

秀吉君はかなり驚いたようにアキ君に言った。

「ちょよ、ちょつと！アキ君。ダツシュで戻らずに頑張ってみてよ！」
あたしは戻ってくるアキ君にそう言つとアキ君はすぐにお客様の方
に向かった。

「す、すいません。ちょつと気が動転してしまいました」

お客様の前に戻り、アキ君は頭を下げる。

あ、笑顔でお客様に許してもらえたみたい。
良かった、ほつと一安心だよ。

「それでは、こちらのお席へどうぞ」

アキ君はお客様を窓際のボックス席へと案内する。

その後は、メニューとお冷を出して注文が決まるまで離れて待機す
る為に

こちらにアキ君が戻ってきた。

「あ、そろそろ。注文が決まったみたいだね」

最初に入ってきたお客様の様子を見て、あたしは近づいて行く。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

「エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベットを二つくださ
い」

あたしがメモを持って聞くとお客様はこちらを見て言う。

「畏まりました。エスプレッソとレモンティーと季節のシャーベッ

トをお二つですね。
少々お待ち下さい」

あたしはメモを取って礼をしてカウンターに戻る。

「エスプレッソ1、レモンティー1、シャーベット2だよ」

「あいよ」

「……………（コクリ）」

あたしが注文を告げると、坂本君と土屋君が動きだす。

「明久。向こうの注文が決まったようじゃぞ」

「あ、ホントだ。行ってくるよ」

秀吉君の言う通り、アキ君が案内したお客さんがこちらを見ていた。

「ごちゅっ!」

ブバアッ

アキ君の不意打ちの噛みにお客さんが噴き出した水が、店内に虹のアーチを描いたよ。

「……………ご注文は、お決まりですか……………?」

凄く、いたたまれないよ。

「え、えっと、私はホットココアとチーズケーキ。頑張ってるね」

「私はオレンジジュースとホットケーキで。頑張ってるね」

「わ、私はミルクティーとモンブランを。頑張ってるね」

アキ君、注文と同時に応援されてるよ。

「は、はい。ありがとうございます……」

アキ君はメモを取ると礼をして坂本君と土屋君のいる方向に向かった。

「ホットココア、オレンジジュース、ミルクティー、チーズケーキ、ホットケーキ、

モンブランを一つずつと、頑張ってるを三つ」

「……なんでお前は客に励まされているんだ？」

「………早速何かあった？」

アキ君が注文の伝票を読み上げると坂本君と土屋君が心配そうに聞いてきた。

この後、グラスを用意しながら料理を待ち、出来あがった順に持つて行くアキ君が。

お客さんに「よくできたね」と言われていたのは後で知ることになりました。

そして、少し時間が流れ、

「カーランコロン

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

やってきたお客様に秀吉君が笑顔で対応してる。

あ、次のお客様さんだ。

しかも今度は男の人みたいだね。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

「おう。二人だーって吉井の妻じゃねーか！？　なんでこんな所にいるんだ!？」

やってきたお客様さんはあたしを見て驚いていた。

てか、つ…妻って言われなかった!？」

そんなんじゃないの!?!

あ、あう。どうしよう、落ち着け落ち着け!

あれ、よく見れば常村先輩に夏川先輩だ。

「なんでといわれましても、ここでアルバイトをしてるとしか。」

「ああ、なるほどな」

「それなら納得できるか」

あたしが苦笑いしながら言つとすぐに納得された。
あの…そういつつあたしの頭を撫でないでくれないかな？

「「……幼女もいいよな」「」

「はい!？」

小さく、常村先輩と夏川先輩が呟いた。

思わず聞き返したら視線をそらされたんだけど。
なんでだろう？

「えつと…とりあえず。お席にご案内します」

「「おう」「」

きちんと頭を下げて言つと席に案内した。

そして、一旦戻つてお冷とメニューを出した。

「それでは、ご注文がお決まりになりましたらお呼びください」

会釈して定位置に戻ると、アキ君がなんだか不機嫌そうな表情をしてた。

秀吉君はハンカチをもってきてあたしの頭を撫でていた。

何してるのか聞いたたら、「除菌じゃ」と笑顔で言われた。

心なしか坂本君と土屋君はアキ君と秀吉君を見て怯えてみえたのは
気の性なのかな？

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末4（後書き）

感想と評価お待ちしております!!

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末5

離れていた位置に案内していた秀吉君とアキ君も戻ってきた。

「おい、三人共」

お客さんが注文を決めるまでおしぼりを用意していると、カウンタ―越しに坂本君が話しかけてきた。

「どうしたの雄二？」

「ドリンクなんだが、今日はミルクの搬入が遅れているようで、もう在庫がない。」

注文が入ったら気をつけてくれ」

アキ君が不思議そうに聞くと坂本君はアキ君達を見て答える。そういえば、アキ君が言っていたっけ。このお店は新鮮な牛乳が売りの一つだって。

注文が入ったら気を付けないと。

「了解じゃ。ミルクを使う物には気をつけよう」

「わかったよ。こっちも気をつけるね」

「ああ。宜しく頼む」

言い終えると坂本君はカウンターの奥に戻っていった。

『すいませーん』

お客さんから声がかかったよ。

確か、あっちは秀吉君の担当のお客さんだったね

「はい。只今伺います」

秀吉君がメモを片手に注文を取りに行く。

『お決まりでしょうか?』

『はい。えっと、アイスコーヒーをアイスマルクティーを1つずつ』

秀吉君が聞くとお客さんがメニューを見ながら言う。

『申し訳御座いません。』

只今ミルクを切らしておりまして、アイスマルクティーはアイスティーになってしまつのですが、
宜しいでしょうか?』

『あ、そうなんですか。それじゃ、アイスティーでいいです』

申し訳なさそうに秀吉君が言うとお客さんが納得してメニューを変更したよ。

『畏まりました。アイスコーヒーとアイスティーですね。少々お待ち下さい』

一礼して秀吉君が戻ってくる。

なるほど。ああやってミルクを使う注文に断りをいれたらいいんだ

ね。
覚えておこうと。

『おい、注文いいか？』

「あ、はい。只今伺います」

あたしが案内した常村先輩達の声が聞こえたので、メモを片手に席へを向かう。

「お決まりですか？」

「ああ。俺はアイスコーヒー」

あたしが聞くと若干頬が赤くなった。
なんでだろう？

「俺はアイスマイルクだ」

ミルクは在庫がないからここは注意だね。

「お客様、申し訳ありません。」

「ん？ なんだ？」

申し訳なさそうに言うと思議そうな顔をされた。

「只今ミルクを切らしておりまして、アイスマイルクはブレンドになってしまいますが」

宜しいでしょうか？」

「あ、そうなのか。なら、ブレンドでいい」

小首をかしげて聞くと少し考えてから答えてくれた。

「畏まりました。アイスコーヒーとブレンドですね。少々お待ち下さい」

一礼してカウンターに戻る。

注文を告げると、飲み物だけだったせいかスグにでてきた。溢さないよう気をつけながらトレイに載せて、よし。

「お待たせしました。アイスコーヒーです」

「おう」

アイスコーヒーを常村先輩の前に置いて。

「こちら、ブレンドになります」

「サンキュー」

ブレンドを夏川先輩の前に置いて、一礼してから去る。

しばらくして常村先輩達は帰っていった。ふう、ひと段落したよ。

「カーランコロソ」

「はい、いらっしやいませ！」

今、秀吉君は他の接客に行ってるから、あたしとアキ君だけなんだよね。

だから、あたし達が出迎えたの。すると、そのお客さんがこちらを見るなり明るく微笑んだ。

「こんにちは、明久君、つぐみちゃん。遊びに来ちゃいました」

「え？ 姫路さん？」

「瑞希ちゃん!？」

やってきたのは、クラスメイトの姫路瑞希ちゃん。

今日は休みだから私服姿。

そこらで見かけるような普通のスカートにシャツの組み合わせだけど、瑞希ちゃんが綺麗だからとても似合ってる。

あたしとは大違い、なんだよね。

「やってるわね、アキにつぐみ。へえ〜。結構似合ってるじゃない。でも、なんでつぐみは私服なの？」

「あれ？ 美波まで？」

「えっと、これには深い事情があって」

そしてその隣にいるのは島田美波ちゃん。
あたしとアキ君のクラスメイト。

こっちも普通のジーンズとTシャツの組み合わせ。
やっぱり、スタイルが良い人は何きても似合うな。

「ほらほら、店員さん達。ぼーっとしないで席まで案内してや」

「あ、深紅ちゃんまで」

そのまた隣にいるのはFクラスの中で姉御と呼ばれる美少女。
神埼深紅ちゃん。華の髪飾りもいつもと変更してるみたい。

服装はシンプルな黒のワンピースだった。上にはカーディガンを羽
織ってる。

うう、深紅ちゃんも綺麗すぎるよ

「そう急かさないう方がよくないか？」

「そうだぞ。明久は緊張とかしてそうだしな」

深紅ちゃんの後ろから神薙綾人君とあたしの従兄弟の天城富士也君。
どっちも私服姿で、カッコよくみえちゃった。

二人が着るとなんでも似合うと思うのはなんでかな？

「大丈夫だよ！えっと、何名様ですか？」

友達だけど、今はお客様だから接客しないと！

「7人です」

「え？ 7人？」

瑞希ちゃんが笑顔で答えるとアキ君が不思議そうに言った。それもそうだよ。目の前には美波ちゃんと瑞希ちゃんと深紅ちゃんとフジさんと神薙くんだけだし。

「1人はちよつと遅れてるんだ」

「それと、もう1人は」

フジ君が疑問に答えてくれて、美波ちゃんが指で店の奥を示す。

『……雄二。妻への隠し事は浮気の始まり』

『なんだ！？ いるはずのない翔子の声が聞こえるぞ！？ 呪いか！？』

Aクラス代表の霧島さんがいつの間にか坂本君の後ろに立っていた。

「つぐみちゃん達がバイトしているって教えてくれたの、霧島さんなんですよ」

「そ、そうなんだ」

ここで『霧島さんにも話していないはず』なんて言うのは野暮かな？ フジ君と神薙君と深紅ちゃんには教えてはあるけど。

「とにかく、こちらへどうぞ」

「「「はい」」」

「「おう」」

アキ君が5人をつれて5人席に案内して、お冷をだす。

少し遅れて霧島さんも席にやってきた。

「ご注文はお決まりですか？」

メニューを覗き込んでいる6人に声をかけると

「「つぐみ」」

「？何？」

フジ君と神薙君が手招きしてるので近づいたら

「明久との仲進展したか？」

「俺達としてはつぐみと明久はお似合いだと思っただよ」

「ふ、ふええ！！？な、何言ってるの！！あたしとアキ君は別に幼なじみなだけだし」

ニヤニヤと笑ってフジ君と神薙君が聞くのでしゅぼつと赤面して慌てて言ったら。

つまらなそうな顔になった。

もう！二人は何考えてるんだらう！

カランコロン

「いらっしゃいませって、優子さん!？」

後のことはアキ君に任せて入ってきた、客の方に行くとき、秀吉君の双子のお姉さんの木下優さんがいた。

なぜか、紙袋をもって。

そして、なぜか嫌な予感にかられたのは気の性だろうか

「うむ? どうしたのじゃ。雨宮…って姉上!？」

「いい所にきたわね。秀吉! あんたもこの服に着替えるのよ!」

秀吉君があたしが固まっていることに気づいたのか近づいてきて。優子さんに気づくと驚いた。

優子さんがそう言って紙袋から取り出したのは、猫耳フード付きのジャンパーに

うさぎ耳フード付きのジャンパーだった。

他にはうさにん、ねこにんぽい衣装まであった。

「え、遠慮します〜!」

「同じなのじゃー!」

二人して逃げようとしていると

「き、君たち! お客様の前で何をしているんだ!」

鋭い叱咤が店内に響き渡った。

まさに救いの手だよ！

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末5 (後書き)

感想と評価をお待ちしております！

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末6（前書き）

今回は短いかもです

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末6

「て、店長……?」

「まったく、人が倒れている間に何をしているんだ君達は。店をあけてしまったことはともかく、お客様の前でこんなマネをしているなんて、何を考えているんだ!」

カづよい声に思わず背筋が伸びる。
流石弱つていても店長だね。
他の皆が静かになってるよ。
これで、あたしと秀吉君はコスプレしなくてすむよ。

「お客様、大変失礼致しました。どうぞお気になさらずにごゆっくりお寛ぎください」

店長が頭を下げてお客さんにフォローをいれる。
これで店に平和が戻るね

ーカランコロン

直後、カウベルの音が甲高い音をあげた。
見てみると、母娘と思しき二人が入ってきた所だった。

「どっつ?お父さん。少し反省した?」

店長に告げるのは、ドリルのような髪型をしている見覚えのある女の子。

あ、よく見たら強化合宿で活躍した清水さんだ。
ん？お父さん？ ってことは、清水さんが店長の娘さん？

「み、美春……！？ ディア・マイ・エンジェル……！」

店長の動きが止まる。

今にも泣きださんばかりだね。

目に生気が戻ってるし。

「店長、良かったですね。娘さんと奥さん、帰ってきてくれたじゃないですか」

「吉井君……。ありがとう……！」

アキ君が笑顔で言うと本当に嬉しそうに笑って言う。

「清水さん、もうそろそろ許してあげてもよくない？」

「そつやで、親といられるだけでもあんさんは恵まれとるんやから」

あたしが清水さんに近寄ると言い、深紅ちゃんも苦笑いしながら言った。

「雨宮さんも深紅お姉さまも甘いですわ！油断してると…危ないこと…に？」

雨宮さんと深紅お姉さまが居ると言う事は、美波おねえ様も！？

やばいですわ！二人共早くここら逃げてください！」

清水さんは凄く慌てて言うとおあたしと深紅ちゃんと美波ちゃんの背中を押す。

そんなに慌ててどうしたのかな？

「……………み……………は、る……………？」

「……………て、店長？」「……………」

その様子を見て店長の動きが止まる。

なんだか、凄く黒っぽいオーラが店長の背中に見えた気がした。

「……………キサマが」

地獄の底から響くような、低く、小さい、店長の囁き声。
な、何が起きてるの！？

「キサマが、娘を誑かす女があっ！！！」

そして動きが一気に急加速した。
動きが早いよ！？

「て、店長！落ち着いて下さい！
まずは『娘を誑かす女』っていう言葉は何処かおかしいということ
に気がついてください！！」

アキ君が慌てて言うけど

「ディア・マイ・ドウタアアアアアア……………ッッッ！！！」

アキ君の言葉を聞いても全然止まる気配がないよ！

「おちつけ、おっさん！！！」

「そのまま、抑えとけ！」

もう、ダメかと思っただらフジ君が店長を押さえて神薙君がどこから取り出した銃で店長を撃った。

そしたら、一撃で沈黙した。

えー、あの銃には何が装填されてたの！？

「ただの麻酔銃だ」

「ゾウやライオンにも効く？」

神薙君がしれつと答えた。

いや、そんなのどこから持ってきたのさ。

神薙君は深紅ちゃん以上に謎だよ！？

この後、店長を清水さん達に任せてバイト代を貰うとみんなでも帰った。

ただ、バイト代に店長が迷惑をかけた分の料金も上乘せされていたけどね。

閑話 あたしとアキ君とバイトと危険な週末6（後書き）

感想と評価をお待ちしています！

あたしと優子ちゃんと秀吉君のクラス交換

「……というわけで、Aクラスを使って文月学園のプロモーションムービーを制作しようと思うんだよ。いいかい、高橋先生？」

「はい学園長。私からは反対する理由はありません」

「やれやれ。助かるよ。」

最近どうも、どこぞのバカどものせいでウチの学園の評判が悪いよ
うでねえ……」

「心中、お察しします」

「それで、Aクラスの生徒達のうちの何人かにも出演してもらおう
と思うんだけど、どうだい？
誰を出演させたら良いかねえ？」

「そうですね……。学年主席の霧島翔子さん、次席の久保利光君を中
心に制作するのが。
妥当だと思われませんが、あの二人には残念ながら愛想に欠ける部分
がありますので」

「くくくつ。アンタがそれを言うとはね」

「客観的な意見を述べただけです。私自身も愛想に欠けることは重
々承知の上ですから」

「おや、気分を悪くしたかい？ それはすまなかつたね。話を続け

ておくれ」

「いえ。……そうなると成績優秀で勤勉、且つ明るい性格の生徒と
いうことで……」

木下優子を中心に制作するのが宜しいかと思われます」

「ふむふむ。候補は一人だけかい？ 他にはいないのかい？」

「いないこともありませんが、若干のリスクを伴うかと」

「リスク？」

「はい。例えば、工藤愛子さんという成績優秀で明るい生徒がいる
のですが」

「ふむ」

「彼女を中心にする場合、流れによっては放送禁止用語の検閲やモ
ザイク等の処理が
必要になる可能性があります」

「…………… Aクラスだけは…………… まともだと思ったんだけどねえ……………」

「学園長。今のは私の冗談です」

どこか遠くを見る学園長に高橋教諭が真面目な表情のまま言う。

「アンタの冗談は全く笑えないさね！？」

学園長が高橋教諭に叫ぶ。

「ただ、彼女は少々性に関して奔放なところがありますので、勤勉な学舎をイメージさせるには不適切かと」

高橋教諭はスルーして伝える。

「そうかい。……よし。それじゃ、木下優子って子を中心に作ろうか。」

本人にこの話を伝えておいてもらえるかい？」

「わかりました」

学園長に言われて去ろうとしてると

「ところで、その子は歌も達者かい？」

「と、仰いますと？」

質問されて高橋教諭は不思議そうに聞き返す。

「うちの学校の合唱部は人数が少ないからね。」

校歌斉唱もその子をそのを中心にAクラスの生徒と合唱部でやってもらいたいのだ」

「それはわかりませんが、恐らく彼女であれば問題ないでしょう。双子の木下秀吉君は演劇部でオペラをこなせるほどですので、姉である彼女も素質はあるかと」

「それはまた、なんでもできる素晴らしい生徒さね」

「ええ。彼女ほど、品行方正で見目麗しく、成績優秀且つ社交性に富んだ模範的な生徒は他にいません」

つぐみside

「失礼します」

「あれ、優子ちゃん？」

学園長室から出てきた優子ちゃんを見てあたしは声をかけていた。

「あ、つぐみちゃん。何か学園長室に用事？」

「ううん、そうじゃないけど。それより、どうかしたの？浮かない顔してる」

優子ちゃんがあたしに気づいて笑顔で言う^とあたしは首を横に振って否定する。

そして、優子ちゃんが浮かない表情をしていることに気づいたあたしは尋ねてみた。

「あ、そう見える？」

「うん…後…聞こえるから(汗)」

苦笑いしながら言うのであたしも苦笑いしながら答える。

精神感応テレパスは人の心の声が聞こえる能力。

ま、使わなくても優子ちゃんの場合はわかりやすいんだけどね。

「う〜ん……そうね。つぐみちゃんに聞いて欲しいことがあるの」

「？別にいいけど」

少し悩んだ優子ちゃんが呟くとあたしを真っ直ぐ見つめて言う。

「ありがとうございます、屋上に行きましょー?」

「あ、うん」

優子ちゃんは笑顔で言うのであたしも頷いて二人で屋上に向かった。
数分して屋上にて

「それで聞いてほしいことって?」

「ええ、実はね?」

屋上に着くとあたしは優子ちゃんに聞いた。

優子ちゃんは覚悟を決めたように悩んでいることを教えてくれた。

「そっか、そんなことがあったんだ」

「ええ。だから、すっごく困ってるの」

苦笑いしながらあたしが言うと優子ちゃんも苦笑いして答える

「うん…秀吉君に頼んでみたら？」

「それもそうね。でも…若干不安があるわ」

あたしは秀吉君のことを思い出すと優子ちゃんに聞いた。

それを聞いた優子ちゃんがはっとなり頷くが、若干不安げに呟いた。
「クラスにての事だね。」

「とりあえず、あたしからも秀吉君に頼むし。フォローとかなるべくするから」

「そうね、承諾してしまった物は仕方ないし」

優子ちゃんを見て言うとう優子ちゃんはため息をついて頷いた。
授業が終わると秀吉君を呼んで再び屋上に三人で集まった。
もちろん、事情も説明したよ。

「ふむ。それでワシと姉上が入れ替われればよいのじゃな？」

「うん、お願いできないかな？」

秀吉君が事情を聞いて悩みながら訊くのであたしは頷いて秀吉君を見て言う。

「姉上と雨宮の頼みじゃからな。やってみるぞい」

「ありがとう！」

少し考えた後秀吉君は承諾してくれた。

嬉しかったので笑顔で言ったら秀吉君の頬が赤くなっていた。あれ、なんで？

「それにしても姉上の見栄っ張りも筋根入りじゃのう……」

「木下の血みたいなもんでしょ。アンタは舞台上で役を演じる。アタシは日常で優等生を演じるってね」

「そう考えると秀吉君と優子ちゃんは似てるのかもかもしれないね」

呆れた秀吉君が言っていると優子ちゃんはムツとしたまま言う。

あたしはそれを聞いて笑顔で言う。

「（まあ……好みも一緒にしたいなもんだし）」

なぜか二人はあたしを見ていた。

し、視線がある意味怖いんだけど。

「と、ところで入れ変わりはいつやるの？」

「明日の放課後に、体育用具室あたりで待ち合わせてお互いの服を交換するわ。」

あたしは視線に耐えきれずに聞くと優子ちゃんがすぐに答えてくれた。

「明日の放課後じゃと？ その時間、ワシらのクラスは補習があるじゃないが」

「そういえば、そうだったね」

秀吉君はそれを聞いて困ったように言うとあたしも苦笑いする。

「補習？ それって出ないとまずいの？」

「サボると留年の階段を一段上ってしまうんだよ」

優子ちゃんが不思議そうに聞くので苦笑いしながらあたしが答える。

「まあ、そういうことなら仕方がないわ。

そっちはアタシがアンタの振りをして出席しておいてあげる」

「姉上が？…雨宮。姉上のフォローをよろしく頼むのじゃ！」

優子ちゃんが言うと秀吉君はあたしの手を握って切羽詰まったように言う。

「へ？あ、うん」

「ちょっと、それはどついう意味よ」

思わず頷いてると優子ちゃんが秀吉君に言った。

「姉上が代役できないという意味じゃないのじゃ！
入れ替わっておるときに中身が女だと気づかれたら」

「ああ…翌日から本物の女の子だと言われちゃうんだよね」

遠くを見て言う秀吉君を見てあたしは苦笑いしながら呟いた。

「……アタシと入れ替わってるとは考えないで、アンタが実は女だったって考えるんだ……。」
流石はFクラスね」

「じゃから、接触はくれぐれも気をつけて欲しいのじゃ」

優子ちゃんが呆れたように言うと秀吉君は真っ直ぐ見つめて念を押すように言う。

「わかったわ。そっちもくれぐれもばれないようにね。
うまくいったら今度何かお礼するから」

「任せておくのじゃ」

優子ちゃんが同意すると秀吉君は笑顔で答えた。
それから、三人で下校してアキ君の晩御飯を買いに行った。

そして、次の日の放課後、
周囲の目がないことを確認してから体育用具室に優子ちゃんと秀吉君が入った

『ホント、アンタってアタシそっくりよね』

『双子じゃからな。似ておっても不思議はあるまい』

『二卵性なんだから、ここまで似てなくても良いと思うんだけど』
周囲を警戒していると優子ちゃんと秀吉君が中で会話していた。

「じゃあ、行きましようか。つぐみちゃん」

「うん！」

あたしは優子ちゃんを見て笑顔で答える。

「あ、待って。秀吉、コレを持って行きなさい」

「んむ？ なんじゃコレは」

優子ちゃんは秀吉君を呼びとめると、その手にある物を握らせる。

「盗聴器よ」

「姉上……。一体どこからこんな物を……？」

そう言っつて優子ちゃんが言っつと秀吉君が驚いたまま聞いた。

「つぐみちゃんとアンタのクラスメイトからよ。」

頼んだら喜んで貸してくれたわよ」

だから、あの時土屋君と会話してたんだね。

納得いったよ。

「ムツツリー二じゃな。まったく、あやつは」

「いいから、それを身につけて行動しなさい。」

アタシはそれでアンタの行動をチェックするからね」

ため息をついた秀吉君に優子ちゃんは言う。

あたしと優子ちゃんと秀吉君のクラス交換（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

あたしと優子ちゃんと秀吉君のクラス交換2

「監視なんぞせんでも、きちんと姉上を演じきって見せるっていうのに……」

「アンタの『きちんと』は全然信用できないのよ」

どこか心外だというような表情で秀吉君が言つと優子ちゃんがむつとした表情で言う。

「まあ良いじゃろ。コレを持っているだけで姉上が安心すると言つのであればそうしよう」

秀吉君はそう言つと盗聴器をタイの裏につける。

「あ、秀吉君！優子ちゃんを演じるときは、ちゃんと優等生という部分を理解してね？」

「うむ？わかつたのじゃ。つまり、裏の姉上ではなく、表の優等生の姉上を演じればよいのじゃな？」

あたしが忠告するように言つと少し不思議そうにしながら頷いて言
い、

女子の制服姿で体育用具室を出て行った。

「さて、Fクラスの教室に行きましようか」

「うん、そうだね」

優子ちゃんが笑顔で言うとおたしは頷いて設備交換されたFクラスの教室へと向かった。

Fクラス教室にて。

『しまった！ 須川が窓をつたって隣の教室に逃げたぞ！』

『あのブタ野郎……！』

異端審問会の血の掟に背いて、Dクラスの玉野さんにケータイの番号交換を迫っていたと言う噂は本当だったのか……！
いいか！ 今この時より奴は会長ではなく反逆者だ！ 見つけ出して始末するんだ！』

『『『了解！ 指示を！』』』

『A～E部隊は奴を捕らえ次第異端審問会にかけろ！
携帯電話のメモリー削除を忘れるな！ 番号交換に成功していた可能性もある！』

F～G部隊はあらゆる手段を用いてヤツの悪評を流せ！ 特にDクラスには念入りにだ！』

H部隊は船越先生（46歳 独身）のところへ向かえ！
あの裏切り者に人生の墓場という物を教えてやるんだ！』

『『『了解ッ！』』』

教室の前に立つと怒号の応酬が聞こえてきた。

これにはいつも頭が痛いよ。

「どうしていつもこうなるのかな」

「なんか、つぐみの方が大変そうね」

ため息をついて言うと優子ちゃんが苦笑いしながら言う。
わかってくれるのは優子ちゃんだけだよ。

「とりあえず、入ろうか」

「そ、そうね」

あたしはそう言うと扉を開けて中に優子ちゃんが入る。

すると、中では――覆面をつけた連中が鞭や蠟燭を手に忙しく
駆けまわってた。

まるでどこかの武闘派宗教団体みたいだよ。

「あ、秀吉につぐみ」

あたし達が教室に入ろうとすると物影に隠れていたアキ君が笑顔
でこっちに走ってきた。

「おっ、やっとつぐみ来たみたいやね」

「「用事はすんだのか？」」

深紅と神薙くとフジくんもこっちに近寄って聞いてきた。

「あはは、遅くなってごめんね。うん、用事はすんだよ」

笑顔で言っていると

「……ん？ あれ？ 何だろ？」

「な、なに……」ごとじゃ、明久」

アキくんが優子ちゃんの顔を覗き込むように見始める。

なによ、と言ってしまうそうだったけど辛うじて取り繕ったみたい。

「なんかいつもと違うみたいだけど……」

「え？ そうかな？」

「き、気の所為じゃ！ ワシはいつもこんな感じじゃ」

身内でも区別がつかなくなると聞いたことがあるのに、アキくんはこんな短時間で気づいたのかな？

なんか凄いな。

あ、深紅と神薙くんは気づいたみたい。

後で話しておかないとダメかな。

「そうかな……？」

でも、いつもはもっとこう……なんて言うか、女の子らしくて可愛かったと思うんだけど」

「そうだよ！いつもと変わらないよ……！」

アキくんが余計なことを言うので慌てて言い、ちらっと優子ちゃんを見る。

すると、アキくんの頸動脈をかつ切りたいという心の声が聞こえてきた。

「そ、それより。補習はどうなったのじゃ？ 皆それぞれどころではなさそうじゃが」

「補習なら、さっき鉄人が来て古典のプリントを置いて行ったで。それをやった後で解説授業をするらしいえ」

深紅が笑顔で質問に答えてくれた。

「それで皆が自由に動き回ってるというワケ」

「後で鉄人が来るまでは自習みたいなもんなんだよ」

神薙くとフジくんも説明してくれた。

「それはそうと、雰囲気だけじゃなくて秀吉の声もいつもと違ってちょっと高い気がするんだけど、もしかして風邪でも……」

アキくんがそう言いかけてると

「アキ、クッキーを焼いたから出てきて！」

「毒なんかいれてませんから！」

美波ちゃんと瑞希ちゃんがアキくんを捜していた。それを聞いた異端審問会の人アキくんを見て

「さらばだっ！」

「あ、待て。明久！」

アキくんが脱兎のごとく窓から脱出するとフジくんが追いかける。

「逃がすな！ 予備戦力で追撃隊を組織しろ！ これ以上ヤツの横行を許すな！」

「2人もの女子からクツキーを作ってもらうだと！？ 許すまじ！」

覆面集団が出て行って、坂本君が居眠りしてるのを除けば人気のな
くなったFクラス教室。

Fクラスの9割がFFF団に加入しているためかな？

深紅と神薙くんは、なんか機械をいじってるし。

「ホントこのクラスってバカだらけ」

「でも、静かになったし。ここで秀吉君の様子でも見ない？」

ため息をつく優子ちゃんに聞くと頷いて。

ラジオみたいな機械を取り出し、イヤホンをとりつけてスイッチを
入れる。

片方を受け取ってあたしも聞くことにした。

『……下さん。ありがとう』

『え？ アタシ、久保君に何かお礼を言われる様な事をしたっけ？』

あ。聞こえてきたよ。

これって秀吉君の声でいいのかな？

『ああ。君のおかげで勇気が出て来たよ。
クラスメイトに同士が居ると知る事が出来ただけでも心強い』

『同士？』

さっきの会話から察するに会話の相手は久保くんみたいだけど、一体何の話なのかな？
撮影はまだ始まってないみたいだし。適当な雑談かな

『それにしても、まさか木下さんが同性愛者だったとは驚いたよ』

……………はい？

えっと……………同性愛者って。

思わず優子ちゃんを見ると違う違うと首を振る。
そ、そうだよな。

『良かったら、キミの好きな人の名前を教えてもらえないだろうか？
僕に出来る事なら幾らでも協力しよう』

『え？ あっ、あの……………』

久保君が秀吉くんに聞こうとうとしてると戸惑った声が聞こえる。
これはやばいよ。

優子ちゃんがあたしを抱き上げて走ると深紅と神薙君が苦笑いして
追いかけてくれた。
渡り廊下を全力疾走する優子ちゃんがAクラスの扉を開け放つ。

「あら秀吉……………に、つぐみに神埼さんに神薙くん？ どうかしたの

「？」

久保くんと話をしていて秀吉君は優子ちゃんの演技を続けたまこちらを向いた。

「姉上、ちょっと宜しいかの？ 向こうでつぐみ達と共に話したい事があるのじゃ」

「？ よくわからないけど、いいわよ。それじゃ久保君、ちょっと失礼」

優子ちゃんの殺気に気づくことなく、階段の踊り場まで付いて来てくれた。

ふと、危ない心臓の声に思わずあたしはツツコミをいれていた。

「殺るのはだめだよ！？」

「もろぶっ！？」

深紅が渡してくれたハリセンで優子ちゃんを叩く。

その際に変な声を出して倒れた優子ちゃんを見て神薙君が笑いを堪えていた。

「ところで、秀吉。久保となんの話してたん？」

深紅が頭を押さえてると優子ちゃんの変わりに秀吉君に質問した。

「んむ？ 他愛もない雑談をしておったのじゃが、その際に好みの異性の話になったの」

「うんうん……それで？」

話を聞きながら相槌をうつて話を促す神薙くん。

「姉上の思考を読み、“現実の男に興味がない”というニュアンスを伝えようと思ったのじゃが、

どうも言葉の選択を誤ったようでの。

久保は“異性に興味がない”と言う意味に受け取って同性愛者だと勘違いしたようで……

あ、姉上っ！ ちが……っ！ その関節はそっちにはまがらな……っ！」

それが一番の原因だね。

あ！それより、優子ちゃんを止めないと……！

「二人共落ち着きなさい……！」

「はるぶれっ……！！？」

バシバシ……！

ハリセン二刀流で二人頭を叩いたけど、また奇妙な声で倒れた。

なんでさ……！？

数分後、慌てて優子ちゃんと秀吉君を蘇生させた。

「このバカ！ いつアタシが異性に興味ないって言ったのよ！

ただアタシは乙女小説が好きだけで、現実の男にだって興味はあるんだからね……！？」

誤解を招く様な事は言わないでよ……！」

復歸した優子ちゃんが怒りながら叫ぶ。
これはこれで前途多難かも（汗）

「りよ、了解じゃ！ 次は間違えぬようにしよう！」

「ホント、頼んだからね……っ！」

秀吉君が敬礼して言うと優子ちゃんはいまだに不機嫌そうに言う。

「落ち着くんや、優子」

「そうだぜ、ここで秀吉に怪我とかさせたらダメなんだろう？」

「気づいてたのね」

深紅が苦笑いして言うと神薙君も苦笑いしながら優子ちゃんを宥める。

驚いた表情で優子が言うと二人は頷いた。

「ワシはもう行くのじゃ」

「あ、うん。次は気をつけてね？」

「わかったのじゃ！」

あたしが立ち上がる秀吉くんに言うと秀吉くんはそう言つと走ってAクラスに戻った。

「というわけで、協力してよね」

「おん、了解や」

「俺もだ」

その間に優子ちゃんは深紅と神薙くんに事情を説明したみたい。
この後、四人でFクラスに戻った。

あたしと優子ちゃんと秀吉君のクラス交換2（後書き）

感想と評価をお待ちしております!!

あたしと優子ちゃんと秀吉さんとクラス交換3 (前書き)

メモ帳からこの次話投稿にコピペできないから気分最悪です

パソコン壊れてるんじゃないかとぼやきたくくなります (涙)

あたしと優子ちゃんと秀吉さんとクラス交換3

『…………優子』

『あ、代表。なに？』

教室に戻ってイヤホンをつけると、今度はまた別の人の声が聞こえてきた。

この喋り方だと、多分相手はAクラス代表の霧島翔子さんじゃないかな。

早く撮影始まらないかな、このままだと入れ替わりがばれちゃうかもしれないし。

『…………そこ』

『そこ？なにになに？』

『スカートめくれている』

秀吉くん、またやっちゃったの!?

演技はともかくとして動きが無防備らしい。

深紅ちゃんと神薙君がそう言ってたからそうなんだろうね。

『代表。ありがとう、教えてくれて』

『…………どういたしまして。後スカート…………気を付けた方がいい』

秀吉くんがそう言うとスカートを直す。

すると霧島さんが秀吉くんに注意して去って行ったみたい。

「なんとかあったね」

「ええ、後で注意しないといけないけどね」

あたしが小声で言うと優子ちゃんは頷いてから不機嫌そうに呟いた。

「それは全て終わってからや」

「深紅の言う通りだ。今、注意しに行つて怪我でもさせたら大変だぞ」

深紅は優子ちゃんを見て言うと神薙君も同意するよつに言う。
それに優子ちゃんも静かに頷いた。

『き、木下さんっ!』

『? 何?.....えつと』

『Fクラスの横溝浩二です。実は、えつと、その.....』

話を終えてイヤホンに意識を集中すると誰かの声と秀吉くんの声が聞こえた。

相手は横溝くんだった。

なんだか、緊張してるみたいなお声.....まさか。

『じ、実は僕、木下さんのこと好きなんですっ! 付き合ってくださいっ!』

やっぱり、告白だった!?

でも、よりによって秀吉さんと交代してる時に告白するなんてタイミング悪いよ。

……もしや、秀吉さんと入れ替わっているからこそ魅力的に見えたから告白に踏み切ったんじゃないや。
いやいや、いくらなんでもそんなことないよね。

秀吉くんどう返すんだろう。

なんて思っていると秀吉くんは優子ちゃんの考えをわかっていたよ
うで

丁寧にお断りの文句を告げている。

『あの……気持ちは嬉しいんだけど……』

『そ、そんな……!』

『ごめんなさい』

イヤホン越しに秀吉くんが頭を下げてる様子が伝わってきた。
上手に断ってる辺り、慣れてるのかな？

『それなら、木下さんの好みのタイプを教えてくださいっ！
僕、頑張って木下さんの好みの男になるから、そうしたら……』

尚も食い下がる横溝くん。

ちょっとしつこい気もするけど、そこまで好いてるんだね。

『それでも……ごめんなさい』

『ど、どしどし……?』

『だって、アタシは……十二歳以下の美少年とつぐみちゃんにしか、興味がないから……』

ト、ト、トッ！

「ひゃぐっ！」

「あ、つぐみ！」

「落ち着け！つぐみの襟がしまってる！！」

この声を聞いた瞬間にあたしは優子ちゃんに襟をつかまれて全力疾走された。

後から深紅と神薙くんも走ってきてくれた。

「殺すわよ」

「秀吉くん、お願いだから普通に断ろうよ！」

優子ちゃんが怒りながら言い、あたしは涙目で叫んでいた。

「あんな断り方があるかいな！」

「あ、姉上につぐみに神埼よ。何をいきりたっておるのじゃ。とりあえず落ち着くのじゃ」

「落ち着けと言っほつが無理だろうな」

深紅も怒りながら言っつと秀吉はなだめようとするが神薙くんが秀吉くんの肩を持って言っつ。

同性愛者もしくはシヨタコン、ドジっ子。
優等生から程遠いレベルが張られていつてる。

「ワシなりに、姉上の好みを分析したのじゃが、違ったかの？」

「う……そ、それは、その、全然違うとは言わないけど……。
でもそういうはあくまでフィクションでの好みであって、アタシの
現実では別の好みがあるし」

秀吉君が小首をかしげて言うと優子ちゃんがしどろもどろになりな
がら弁解するように伝える。

「むう……難しいのじゃ……」

「つまり、こういうことやな。優子にとって二次元の好みと三次元
の好みは全く違うんやて」

秀吉くんがうなつっていると深紅がフォローするかのようにつづ。

「そうよ！だいたい、アタシはいつもそういう趣味は表では隠して
いるでしょ!？」

演技をするのならその辺も徹底しなさいよ!」

「む……。言われてみればその通りじゃな。すまぬ姉上。

ワシはつつい家にいる時の姉上のイメージが先行して、そちらば
かりを再現してしまったようじゃ」

優子ちゃんが秀吉君に言うと秀吉君がふと気づいて申し訳なさそつ
に謝っていた。

「……アンタにとって、家にいるアタシってそういうイメージなんだ」

「ど、どんまい！優子ちゃん！」

落ち込んでいる優子ちゃんを励ますようにあたしは言う。

「で、横溝以外に聞かれてやしなかったただらうな？ 12歳以下の美少年って所」

「聞かれてたらやばいえ」

「そうよ！もし聞かれてたら神埼さんと神薙に始末してもらおうしか」

神薙くんが聞くと深紅も頷いて言い、優子ちゃんは我に返って叫んでいた。

いやいや、二人を始末屋みたく使わないでよ。

「目撃者はわからんが、演技の方はもう心配無用じゃ。今からはキチンと外に居る時の姉上の演技を徹底しよう」

「もうかなり色々手遅れな気がするよ」

「同感や」

「俺もだ」

秀吉君は自信満々に言うとおたしと深紅と神薙くんは呟いた。毒を食らわば皿までということかな。

ここまできたら最後まで秀吉くんにさせるしかないよ。

あたしと優子ちゃんと秀吉さんとクラス交換3 (後書き)

感想と評価お待ちします！

あたしと優子ちゃんと秀吉さんとクラス交換4(前書き)

これで番外編は終了です!!!

あたしと優子ちゃんと秀吉さんとクラス交換4

疲れ切った状態でFクラスに戻ると、いつのまにか戻ってきたアキくんがこちらにやってきた。

「あれ？ 秀吉につぐみに綾人に神埼さん、どこかに行ってたの？」

「アキくん。うん、ちょっと頼まれごとをしてたの」

不思議そうに見つめて言うので苦笑いしながらあたしは答えた。

「明久、もう逃げ回らんでよいのか？」

「うん。逃げていると途中で横溝君が木下優子さんに告白したって情報が入ったからね。

今は皆、そっちにかかりつきりだよ」

「情報早すぎやね」

「FFF団恐るべしだな」

優子ちゃんが秀吉君の口調のマネをして聞くとアキくんは頷いて事の詳細を教えてくれた。

秀吉くんになりすましてる優子ちゃんは内心複雑だろうな。

今回の件で優子ちゃんの次に被害者かも。

「横溝君もバカだよな。」

先週抜け駆けして秀吉をデートに誘って肅清されたばかりなのに、ダメだったら今度はお姉さんってどうなんだろ？」

「え、そんなことがあったの!？」

アキくんの台詞にあたしは驚きながら叫ぶとちらつと優子ちゃんを見る。

ものすごい怖い顔になって、横溝君の関節をへし折ろうと考えてるように見える。

「あ、そつだ秀吉。木下さんと言えば」

「あつ、姉上がどうかしたかの?」

「? 何慌ててるのさ?」

ふと思い出したようにアキくんが秀吉くんになりすました優子ちゃんに言う。

それに慌てた優子ちゃんが聞くと思議そつに聞き返された。

「ね、アキくん。優子ちゃんがどうかしたの?」

あたしはそれをフォローするように笑顔で聞いた。

「あ、うん。それで秀吉のお姉さんだけど、学園の宣伝用ビデオに出るんだってね」

あ、なんだ。入れ替わりがバレたわけじゃないんだね。安心したよ。

「折角の自習だし、様子を見に行ってみない?」

「いいね、優子ちゃんが頑張ってるところみたいし。」

「そうじゃな。確かに気になるし、見に行くのも悪くないじゃろう」

「わっちも行くで」

「んじゃ、俺も」

アキくんが笑顔で言うのであたしは頷いて承諾し、優子ちゃんと深紅と神薙くんも賛成した。

怒号が飛び交う教室を後にして、アキくん達と一緒にAクラスの教室を目指して廊下をのんびりと歩いた。

「でも、秀吉のお姉さんってすごいよね」

「？ 何が？」

隣を歩いているアキくんが呟くので聞き返すと

「だって、可愛いし勉強も運動もできるし、今日はカメラの前で合唱だってやるんでしょ？」

「何でも出来て凄いじゃないか」

「そ、そうじゃな」

アキくんの無垢な瞳のせいで一瞬言葉に詰まった優子ちゃん。

「なんだかアキくんを裏切ってるようで罪悪感がわくよ」

「優子ちゃんは音痴でカメラの前で合唱できないみたいなんだよね。」

「？ とうしたのつぐみ。 それに秀吉も珍しく怖い顔なんかして、
なにか考え事？」

考え込んでるあたしを見てアキくんが不思議そうに聞いて、優子ち
やんを見て言う。

「べ、別になんでもないのじゃ！ 気にするでない」

偽りの笑顔で優子ちゃんが答えた。

皆で歩くこと少々。不意に何かの旋律が聞こえてきた。

「コレって校歌かな？ 先に校歌斉唱から撮っているみたいだね」

「うむ。その様じゃな」

「もう、始まつてるんだね」

「みたいやね」

「へえ、綺麗な声だね」

Aクラスにおかれたグランドピアノが伴奏を奏で、

20人程度の歌声がそのメロディーの上に重なっている。

校歌だからアルトやテナーといった区分もなく、あくまで主旋律だ
けの簡単な曲。

けれども揃えられたその歌声は、澄みきった夏の空を彷彿とさせる
ような爽やかさと

そこに浮かぶ入道雲の壮大さを併せ持つような、そんな素晴らしい
もののように思えた。

「合唱部とAクラスの合同だな」

「みたいだね。あ、あそこ、お姉さんが真ん中で歌ってるよ」

更に近づいて優子ちゃんに扮した秀吉くんのポジションは、一番目立つセンター。

その場所で堂々とその歌声を披露していた。

「ね、羨ましい？」

「それは…その良い顔としると思っのじゃ」

「人は誰でも自分が本当にやりたいことを一生懸命やっているときの顔は

不思議な魅力にあふれとるもんやからね」

あたしが聞くと少し俯いたように答えると深紅が笑顔で笑って言う。
いつか、あたしもそういうのができるのかな？

「やっぱり、秀吉のお姉さんもすごく綺麗だね」

「そ、そうじゃろ？」

このアキくんの一言だけで優子ちゃんは救われたみたい。

『やっぱり』って言われるってことは普段の優子ちゃんも綺麗に見えるということだもんね。

「だからその分、残念だよね……」

「え？ 何が？」

「さつきさ、逃げ回っている途中で偶然聞こえたんだけど……」

「ま……まさか」

アキくんが本当に残念そうに言うと深紅が聞いた。

なんだか凄く嫌な予感があるんだけど。

アキくんが思い出すように言うと神薙くんはなにかに気づいたかのように呟いた。

「……秀吉のお姉さんって女の子が小さな男の子とつぐみにしか興味ないって」

ああ、嫌な予感が現実になったよ。

「忘れなさいいいいっ……!」

「あがあっ! なに秀吉!? どうしたの!? どうして突然僕に関節技を!?!」

「あ! 秀吉君、落ち着いて!?!」

アキくんが遅いかかる優子ちゃんの肩を揺らして言う

「良いからすべて忘れなさい! この痛みで全部記憶を書き換えてあげるから!」

「ひ、秀吉! 良くわからないけど胸が! 微かに柔らかい感触が僕の腕にあがあっ!」

「“微か”って何よ！一応あるにはあるんだから！」

「だから、落ち着いてー!!」

「はっ！」

あたしは最終手段でピコハンで優子ちゃんの頭を叩いて気絶させた。

「な、なんだったの？」

倒れた優子ちゃんのごときは深紅に任せてあたしと神薙くんはアキくんを見る。

「あ、アキくん。さっきの噂はデマだから！」

「そつだぞ明久。後その噂を流した奴を教えてくれ！osiooki
するから！」

「え、えー!?二人共どうしたのさー!!?」

あたしは慌てながらフォローをして神薙くんは熱心に言う。

そして時は流れて……

「……姉上よ」

「……なによ、秀吉」

「最近クラスの連中の中で、
どうにもワシの胸が成長しているらしいという噂が流れておるのじ
ゃが……」

「奇遇ね。」

実はアタシもクラスメイトの間で、木下優子は可愛い女子か幼い男
の子を物色してる上に、
雨宮つぐみにメロメロっていう噂が流れてるのよね……」

「……」

「姉上どうしてくれるのじゃ！？　こうなってはワシはもう明久達
と一緒に風呂はおるか
体育の更衣室にも行けぬではないか！？」

「アンタは大して今までと変わらないから良いじゃない！
アタシなんて優等生から一転して三重苦の変態よ！？
責任とりなさいよ！」

「姉上が入れ替わりなぞ言い出すから悪いのじゃ！
その所為で最近は島田までもがワシの胸を親の敵の様に凝視するの
じゃぞ！？」

「自業自得よ！　アンタがおかしな演技ばかりするからじゃない！」

「いいや、姉上が原因じゃ！」

「いいえ、アンタよ」

「 」

「まあ、こうなっては仕方がないから放っておくかの……」

「それもそうね……気にしたって仕方がないし……」

「すこし待てばもっとすごい話題が出て、こんな話は忘れられる
だろうから」

あたしと優子ちゃんと秀吉さんとクラス交換4（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第61話 あたしとアキくんとフジくんと玲さんと期末試験(前書き)

玲さん登場です!!

第61話 あたしとアキくとフジくと玲さんと期末試験

「……あ、玲……姉さん……？」

「玲さん。ど、どうしてここに……？」

「ここに来るといふ情報はなかったんじゃない……」

あたしとアキくとフジ君が買い物から帰ってきた時、
家の前に本来ならここではなく海外にいるべき人がいました

「アキくん、つぐみちゃん、フジくん、待ってましたよ」

その人は、そう言って短めに揃えられた髪をわずかに揺らしながら
静かに微笑みんだ。

何故かバスローブ姿で……

「……何でバスローブ姿なの（なのさ）……」

思わず三人で叫んでしまったくらいだし。

二週間ぶりに会う玲さんの姿に度肝を抜かれたよ。

なんでここににいるのか、帰って来るのなら事前連絡をしてくれな
ったのか

なんていう当たり前の疑問を一瞬で吹き飛ばしてくれるシユールな

姿に眩暈がするよ。

「外から訪問してくる人がソレを身につけているのは明らかにおかしいよね!？」

アキくとフジくんは玲さんにツッコミをいれるように叫んでいた。

「日本は暑いですね、アキくん、つぐみちゃん、フジくん」

「何で僕達のツッコミが聞こえなかったかのように天候の話を始めてるの!？」

きちんと久しぶりに会う弟とコミュニケーションを取ろうよ!」

「あ、頭が」

コミュニケーションをとろうとしない玲さんにあたしとフジくんは頭を押さえる。

「アキくん。

玄関先でそんな大声を出すなんて……姉さんはあなたをそんな常識知らずな子に

育てた覚えはありませんよ?」

玲さんが諭すようにアキくんに言う。

「くうう……っ!」

まさかバスロープで公衆の面前を歩いてくるような人に常識の有無を問われる日がこようとは……っ!」

「明久、とりあえず、落ち着け」

「そうだよ、アキくん。それで、玲さんはどうしてそんな姿なんですか？」

肩を震わすアキくんをフジくんと一緒に宥めるとあたしは玲さんに問いかける。

すると玲さんは「よくぞ聞いてくれました」と言っつて説明してくれた。

「今日はあまりに暑かったので、重い荷物を持って歩いたこともあって、

姉さんはたくさん汗をかいてしまいました」

「「「はい(うん)」「」」

あたしとアキくとフジ君は相槌をうちながら聞く。

「途中までは気にしなかったのですが、電車の窓に映る自分の姿を見て姉さんは思いました。

久しぶりに会う弟に、未来の義妹に、未来の旦那に、最初に見せるのが汗だくの姿というのは、正直姉として女としてどうでしょうか、と」

「「「うんうん」「」」

三人で相槌をうつ中になにか聞いてはいけないことが入っていたよな気がするのあはただけかな？

「いくら会うのが弟や義妹と旦那とは言え、姉さんだって女です。身だしなみには気を遣うべきでしょう」

「そうだね。　気を遣うべきだね」

「まあ、遣うべきだけど…旦那って誰のこと？」

「遣うべきだけど、義妹って誰のことなの？」

アキくんは頷いてあたしとフジくんは疑問をもって呟いた。

「そこで、全身の汗を何とかする為に姉さんはバスローブに着替えました」

「はい、そこおかしいよ」

「そこでなんでバスローブなんだよ!？」

「というか、あたし達の疑問はスルーなの!？」

やりとげた顔で言う玲さんにアキくんはツッコミをいれてフジ君は
びしっと裏手でツッコミをして
あたしは叫んでいた。

「持っている荷物の中で最も吸汗性に優れている服だけあって、
姉さんの汗はみるみるうちに引いていきます」

「どうしてそこで『タオルで汗を拭く』っていう選択肢がでてこ
なかったの？」

あたしは玲さんの話に呆れながら呟いていた。

「そして今、姉さんは無事に姉としての尊厳を保つことのできる清潔な姿で弟と

未来の義妹と未来の旦那と再会できたのです」

「完全にスルーかよ」

「……はあ」

玲さんは話終わったのが良い笑顔でいた。

フジくんは呆れており、あたしも深いため息をついていた。

「あのだ。」

さも自分が偉業を達成したかのように胸を張っているけど、姉さんの意図した事は物凄い勢いで失敗しているからね？」

アキくんの言う通りだよ。

わたしの中でも玲さんの大人の尊厳は完全に失墜しているし。

「何を言うのですか。」

塩化ナトリウムその他にマグネシウムやカリウム、カルシウムなどの不純物を多少は含むものの、

汗の主成分は水です。

このバスローブの素材である線は通気性や吸水性に優れているのですから、

姉さんの意図した通り、汗を吸収しているはずですよ」

「いや……確かに汗は引いてるかもしれないけどさ……」

アキくとフジくんがすっごく呆れてるよ。
汗が引けばどんな格好でもまともに見えるってわけではないよ、玲さん。

「分かってもらえたのなら、とりあえず中に入れて下さい。」

姉さんはアキくん達がどんな生活を送っているかをチェックして母さんやつぐみちゃんとフジくんのご両親に報告する義務がありま
すから」

「あ、そうなの?」

「はじめてきいたよ!??」

「俺もだ」

にこにこ笑顔で玲さんが言うとアキくんは驚いたように言う。
あたしも驚いたし、フジくんも初めて聞いたみたい。

「はい 後、つぐみちゃんは今日からアキくんの家に住んでもら
いますからね

あ、フジくんもですよ?」

アキくんの質問に頷いて笑顔で言われた。

「「えー!?!?」」

あたしとフジくんは思わず大きな声で叫んでいた。
どうしてそうなるのか理由が知りたいよ。

「つぐみちゃんの両親はやはり、お隣はといえ女性の一人暮らしは

危ないだろうということ

アキくんの家に住ませることになったのです。

フジくんは前の学校のこと色々あるだろうからと相談ののってくれということ

アキくん家に住ませることにしたので

玲さんは笑顔で疑問の答えを教えてください。

フジくんの場合は玲さんの欲望も入っているんじゃないだろうか。

「そ、そんなことしたらアキくんが困るんじゃない！」

「そ、そうだよな！明久に迷惑かけるわけにも」

「え？なんで？富士也もつぐみも一緒に住もうよ」

はっと我にかえってあたしとフジくんが言つとアキくんは笑顔で言った。

「家主の許可ももらえたことですし、問題ないですね」

玲さんは勝ち取ったかのような笑みで言う。

うう、緊張して眠れなかったらどうしよう？

「とりあえず、僕の家に入ろうよ」

アキくんは笑顔で言うつと鍵をつかって部屋に入る。

あたしとフジくんは玲さんに腕を掴まれてひきずられるようにアキくん家に入った。

数分後…アキくんは鞆を置いて私服に着替えてくるとリビングに来た。

あたしとフジくんも鞆を置いて私服に着替えてきたけどね。玲さんの許可をもらうのに苦労したけど。

「……リビングは綺麗ですね。

二千冊以上のHな本でリビングを埋め尽くしていると思っていましたのに……」

「そんな本を二千冊なんて買うお金はどこにもないよ……」

玲さん、実の弟をなんだと思っているのかな？

というか、そんなことにお金を使わせないよ!!

「若い男性の腎臓は高く売れそうですね」

「エロ本のために僕は内臓を売るの!？」

姉さんは自分の弟がどれだけスケベだと思っているのさ!」

何か考え込むかのように玲さんが言うとアキくんは叫んでいた。

「ふふっ……冗談ですよ。

つぐみちゃんという妻がいるのにそんなことしたりしないと姉さんは信じていますから」

「ふ、ふえ!？」

「ちょ、ね、姉さん!何を言って」

玲さんはくすくすと笑っているので思わず赤面してしまったよ。
アキくんも心なしか頬が赤いような。

「フジくんは純粹すぎてエロ本は無理そうですね」

「……………」

玲さんがフジくんを見て呟くとフジくんは凶星なのか俯いている。
ま、まあ…アキくんのエロ本は10冊までが限度にしてるかな。
アキくんがすごく涙目だったから妥協したし。

「それでは、生活チェックをさせていただきますね」

「……………うん(はい)……………」

あたしとアキくんとフジくんは玲さんを見て頷いた。
玲さんはソファに座ると手帳を開いた。

「では、アキくん。姉さんはアキくんに三つの条件を出しました
よね。覚えていますか？」

「う、うん」

玲さんはアキくんを見て言うとおアキくんは頷いた。
どこか緊張してるような気がする。

「それでは言うてみて下さい」

「え、えっと……………」

まっすぐアキくんを見て玲さんが言うと腕を組んでアキくんは考え込む。

「まさか忘れたなんて言うつもりじゃないですよね？ それなら…」

「（不穏な空気！）ちゃ、ちゃんと覚えてるから!？」

「そうですか……では、お願いします」

アキくんを見てる玲さんはなにか行動しようとしたらアキくんは咄嗟に答えてた。

すると玲さんはどこか残念そうにして続きを促す。

「えっと、

姉さんとの約束は『ゲームは一日三十分』、『つぐみ以外との不純異性交遊は禁止』だったよね!」

「それにもう一つ『つぐみちゃんを泣かさない』です」

アキくんが言うと玲さんが笑顔で言う。

凄く擁護されてるのは気のせいかな？

第61話 あたしとアキくんとフジくんと玲さんと期末試験（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第62話 あたしとアキくとフジくと期末試験2

「あ、そうだったね」

アキくんは苦笑いしながら言う。

「で、どうなのですか？つぐみちゃんを泣かせてませんか？」

「大丈夫！守れてるよ」

玲さんの問いにあたしは元気良く答える。

「そうですね、それはなによりです」

とても嬉しそうに玲さんが答える。

常識がないけど、あたしにとって玲さんはお姉ちゃんみたいな人だから。

嬉しそうな笑みを見るとほっとするなあ。

「では、つぐみちゃん以外との不純異性交遊はどうですか？」

「それもないよ。つぐみといるし」

他の質問をするとアキくんは苦笑いしながら答える。

「ところで、玲さん。不純異性交遊って何をするとダメなんだ？」

「つぐみちゃん以外の異性と手をつないだ場合、減点200となります」

フジ君が聞くと玲さんはすぐに答える。
高い減点だね

「減点？ なにそれ？」

「アキくんの一人暮らし続行の可否を決定する評価の為の点数です。生活態度や勉強の結果から評価を下し、点数を加えたり減らしたりしていきます。」

最終的にその点数が一定値に満たなかった場合は、アキくん一人暮らしは不敵である
という結論を母さんに報告します」

アキくんが尋ねると玲さんはすぐに説明してくれた。

「えええっ！？ 何それ！？」

それを聞いてアキくんが叫ぶ。

「玲さん。その減点って、何点になるとアウトなんですか？」

「期末テストの点数が明確になった時点での総計が0点以下であった場合です」

あたしが玲さんに聞くとこれまたスグに教えてくれた。

つまり、期末テストの結果が出た時に点数の総計がプラスになってないとアキくんの一人暮らしは
終わりを上げるわけだね。

んと、さっきの減点だと即死だね。

「ちなみに点数をプラスするにはどうしたらいいんだ？」

「規則正しい生活や良好な学習成績などを提示してください。それによって判断します」

フジくんが玲さんに聞くと玲さんは答えてくれた。
生活環境は問題ないかな？

「要は、アキくんの学力がどの程度改善されているのか、ということですよ」

玲さんはアキくんを見つめて穏やかな笑みで言う。

「え？それじゃ、頑張っていたら許してくれるの？」

「はい。前回の定期テスト……振り分け試験でしたか？あの時の成績と、今度の期末試験の成績、その差をそのまま評価の対象として考慮します」

アキくんが玲さんに聞くと笑顔で頷いて玲さんは言う。

「つてことは、振り分け試験の総合が800点くらいだったから、期末試験で820点とればいいんだよね。」

今は全然減点されてないから頑張ればなんとかなるかも

「頑張るぞ！所で、姉さんも人が悪いよね。僕みたいなのがモデルじゃないのに」

「そんなことないよ！アキくんはカッコイイし、優しいし、頼りになるし！」

えっとそれから」

アキくんは自分を卑下にしすぎだよ。
だから、あたしは思わず叫んでいた。

玲さんはにこにここと笑顔でアキくんは赤面してた。

「っ、つぐみ？」

「あ……え、えっと」

アキくんがあたしを見て驚いたままで声をかけてくれた。
その拍子に我に返って俯いてしまったよ。

「はあ……もつと押す必要がありますね」

玲さんはため息をついてから小声で呟いていた。
何を押すの？

「でも、ちょっと心配しすぎじゃないか？手を繋ぐのもダメなんて、
それだつたらフォークダンスに参加もできない」

「ええ。確かにアキくんもフジくんも16歳の立派な男の子ですし、
色々な感情や若い肉体を持って余すという気持ちもわかります」

フジくんアキくんを心配して言うつと玲さんは頷いてあたし達を見て
言う。

「いや、そこまでは言ってないよ？」

思わずツッコミをいれてるあたし。

「なので、姉さんとしても最大限の譲歩をするつもりです」

「え？譲歩？」

ツッコミをスルーして玲さんが言うとアキくんが不思議そうに聞き返す。

「はい。つぐみちゃん以外との不純異性交遊は禁止ですが」

「「うん」

頷いて玲さんが言うとアキくんとフジくんは相槌をうつ。

「代わりに不純な同性との交遊は認めてもいいと思っています」

「何があったの！？ 海外生活で玲さんの価値観に何が起こったの！？」

とんでもな譲歩にあたしは叫んでいた。

昔はもう少しだけまともだったのに！

「さてアキくんにフジくん。

少し話し疲れてきたでしょうし、そろそろお風呂に入ってはどうですか？」

「今明らかに不自然な話の変え方をしたよね。僕が入っている間に家探してもする気なの？」

またもやスルーして話題変更する玲さん。

不自然すぎる話題の変え方だね。

「いえ、そういうわけではありません」

真顔で断言しているけど、油断はできないけど。

あたしがいるからなんとかなるでしょ！

「あのさ、アキくん。今はなにも言わずにお風呂に行った方がいいよ」

「……そうだね。嫌な予感するし」

苦笑いしながらアキくんに言う諦めたのか頷いてくれた。

「けれど。その前に一つだけ言わせて。

絶対っつ対に僕の部屋を荒らしたりとかしないように！」

「勿論です。アキくんの部屋に限らず、フジくんの部屋やつぐみちゃんの部屋にも

姉さんはアキくんがいない間に勝手に入ったり触ったりしません」

アキくんが玲さんを見て言う玲さんは頷いて決意をこめたように宣言した。

「え？ あ、うん。そうしてくれるとありがたいけど……」

予想とは違う反応にアキくんは戸惑っていた。

とりあえず、玲さんの気遣いとみていいのかな？

「それじゃ、ちょっとシャワーを浴びてくるよ」

アキくんはそう言つと脱衣所に向かった。

「あ、アキくん着替えを忘れてる」

「あら、つぐみちゃん。届けにいつてはどうですか？」

アキくんが脱衣所に行つてから気づくと玲さんは笑顔で言った。

「そう、だね。届けてくるよ」

あたしは頷くとアキくんの部屋に行き、着替えを取り出す。

な、なるべく下着は見ないようにしてTシャツとハーパンを選んで脱衣所の籠にいれる。

「よしつと。アキくん着替えをいれといたからね？」

「ありがとう、つぐみ」

あたしはまだシャワーしてるアキくんと言つとアキくんは頷いてお礼を言った。

その後リビングに戻ると玲さんに襲われようとしてるフジくんがいた。

えー、まさか。この為にアキくんに入らせようとしたんじゃないよね？

第62話 あたしとアキくんとフジくんと期末試験2（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第63話 あたしとアキくとフジくと期末試験3

「ふう、酷い目にあつた」

「いつもいつも大変だね、富士也」

「止めなかったらあのまま襲われてたね」

学校に向かいながらあたし達は朝の出来事を思い出して歩く。
フジくんは朝から玲さんに襲われそうだったから、アキくとあたしが巨大ピコハンで気絶させた。

「んむ？明久につぐみに富士也？」

三人で歩いていると秀吉くんが気づいてこちらに向かってきた。

「あ。おはよう秀吉」

「おはよう、秀吉くん」

「おはつす、秀吉」

「おはようじや」

小走りで走りながらあたし達の挨拶に律義に返してくれた。

「今日はずいぶん早いのう」

「あはは、今日は早く目が覚めたんだよ（汗）」

うん、フジくんの助けを求める声によってね。
あのままだったら確実に危なかったね。

「いつもそのくらいに目がさめればよいじゃろつに」

「努力するよ」

秀吉くんが言うとアキくんは苦笑いしながら答える。
そんなたわいものない話をしながら2・Fに向かった。

「おはよ……って何これ」

「どうしたのつぐみって……なにこれ」

「雄二が簞巻きにされとる」

教室に入るとぐるぐる巻きにされて天井につるされた坂本君がいた。

「お、吉井夫妻に天城に秀吉。おはようさん」

「「ち、違つよー!」」

「おう、はよ。神埼」

「「うむ、おはようなのじゃ」

呆然としていると深紅が来てあたしとアキくんをひとまとめにして
言われた。

慌てて否定すると声が揃ってたよ。
フジくんは秀吉君はすぐに笑顔で答える。

「ところで、雄二はどうしてああなっておるのじゃ？」

「ああ……霧島がな。坂本の頬にキスしたんや」

秀吉くんが疑問をくちにすると思紅がすぐに答えた。

「んで、それを目撃したFFF団が雄二を捕えてこんなふうになつたというわけだ」

椅子に座っていた神薙君が笑顔で言う。

なんでそんなに楽しそうなのかな？

「明久、富士也。助けてくれ！」

「黙れ、異端者め！」

坂本君が助けをもとめるとFFF団のリーダーの須川くんが叫ぶ。
そんなんだからダメなんじゃないのかな？

「あのさ、須川も誰かに声をかけられていなかったか？」

するとフジくんがふと思いついたかのように呟いた。

嫉妬の矛先は須川君に向けられた。

その間に秀吉くんが坂本君の縄をほどく。

「……………会長の裏切り者……………！！……………」

「さらばだっ！！（ダッ）」

「……………待て……………！！！！！！」

FFF団が須川君を追いかけると同時に須川君が脱走する。

「天城、さっきのはほんとかの？」

「ああ、プラチナブロンドの少女に声をかけられたな」

秀吉くんが聞き返すとフジくんはすぐに答えた。
そつえば、昨日その話を聞いたような気がする。

「おは…よう」

「おはようぜよ」

教室の扉を開けて由香里ちゃんと中岡くんが入ってきた。
本当に仲良いよね、この二人。

「……………おはよう」

「おはようムツツリー」。どうしたの？随分荷物が多いけど」

由香里ちゃん達と会話をしていると土屋くんが入ってきて。
アキくんが笑顔で挨拶すると荷物を見て言う。
土屋くんの両手には学校の鞆の他に大きな包みやら袋やらを提げていた。

「……………ただの枕カバー」

「枕カバー？ そのわりには包みが大き過ぎない？」

「……………そんなことはない」

ブンブンと首を振って否定する土屋君。

この否定のポーズは大抵何かを隠している時のものだとかアキくんから聞いた。

「ごめんムツツリーニ。 ちょっと中身を見せてね」

「……………あ」

アキくんは大きな荷物のせいで動きの鈍い土屋君から包みを一つ奪い取る。

何が入っているのかな？

「さて。 何が入っているのか……………な……………」

中から出てきたのは……………等身大のあたしがプリントされた白い布（ミニチャイナ服着用）

深紅や由香里ちゃんのもあったことには驚いたけどね。

「……………土屋君……………何、コレ……………？」

「……………ただの抱き枕カバー」

あたしが苦笑いしながら言うと淡々と土屋君が答える。

「ただの!? ただのって何!?」

枕カバーと抱き枕カバーには大きな隔たりがあるんだよ!!
っていうか、どうしてあたしの写真なの!?」

「……………世の中にはマニアというものがいる」

「何を言ってるの!」

あたしの抱き枕カバーなんかを欲しがる人なんてどこにも……………」

あたしが叫んでいると土屋くんがすぐに答えて言う。

そっだよ、大体なんであたしの写真なのさ。

「ムツリーニ。その抱き枕ちょうだい」

「あ、アキくん!?」

なぜか財布を取り出して真剣な様子のアキくんがいた。
幼なじみにいたよ。えー、アキくんどうしちゃったの!??

「わしには由香里ちゃのくれ」

「……………まいどあり」

中岡くんまでー!!!?

由香里ちゃんは赤面してるし。

あ、気づいたらアキくんがすでに購入してるー!!!

コンコン

「失礼。土屋君はいるかな？ 前に頼んでいた枕カバーを」

あ、Aクラスの久保くんだ。

「あれ？珍しいやね久保。土屋になんか用なん？」

「……なんでもない。少々用事を思い出したのでこれで失礼するよ」

したと思ったら、深紅の顔を見るなり赤面してそそくさと去っていった。

なんだったのかな？

「（ムツツリーニ。久保とも取引したのか？）」

「（こくり）……強化合宿以来、お得意様」

深紅、もしかして…狙われてる？

「とにかく、土屋。その抱き枕カバーは後で没収するえ」

深紅はため息をついてから土屋くんに言う。

土屋君がやけに学生に似つかわしくない高価な機材を持っていると思っただら、

こつやって資金を調達していたんだね。

「そろそろチャイムが鳴るよ！ 鉄人が来る前に席につかないと！」

「そうだな」

アキくんが話を打ち切ると同時にチャイムが鳴って須川君達と西村先生が入ってきた。

明久side

「吉井。保健室に行ってください」

この台詞を、午前中の四つの授業で七回も言われた。
そんなに僕が真面目にノートをとっていたらおかしいんだろうか

「まったく、皆失礼だなあ……」

今度の期末試験では最低でも振り分け試験の時よりは良い点を取らないと大変なこと

（あの危険な姉が居座るといふ大惨事）になっってしまう。

そう思っただけでもより頑張っただけ……でも、そこまで驚かなくてもいいのに

先生方のそんな態度を遺憾に思いつつ、四時間目の授業道具をしま
う。

そして、代わりに昼休みの用意をしていると、そこに美波がやって
きた

「アキ、何があったの？ 一時限目から様子が変わりたいけど」

心の底から心配そうに声をかけてくれる

「別に何でもないよ。ちょっと真面目に勉強に取り組んでみよう
と思っただけで」

「アキ、おでこ出しなさい。今熱を測るから」

「ねえ。 つぐみに富士也、どうして皆似たようなりアクションを
取るんだらう……？」

「さあ（苦笑）」

「わからん」

つぐみと富士也に聞くけど苦笑して教えてくれなかった

美波がおでこに手を当てて熱を測る気なのか手を伸ばしてくる。
やれやれ、心配し過ぎだ……

「って、これはダメだっ！」

「ぎゃっ」

僕が突然飛び退いたせいで、美波が小さく悲鳴をあげた

「何よ、そのリアクションは！ 折角、人が心配して熱を測ってあげようとしたのに！」

「ご、ごめん！ 色々と事情があるんだ！」

「……アキくん、オーバーリアクションだよ」

「だ、だって」

美波は妹の葉月ちゃんに接するような感じで他意はなかったのかも
しれないけど、

あの姉さんの観点から言えば今の行動は完全に不純異性交遊に該当
してしまう

点数にすると150点のマイナスってところだろうか

もしも、それが知られてしまったら、僕の気楽な生活は遠ざかって
いく。

どこ誰が見ているのか分からないのだから、危険の芽は全て潰して
おく必要があるだろう

第63話 あたしとアキくんとフジくんと期末試験3（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第64話 あたしとアキくとフジくと期末試験4改

明久side

「事情？なによそれ？」

「えっと、それは…その」

美波がつぐみから聞き出そうとしてる、これはやばい！

「それより、まずはお昼にしようよ！ 昼休みなんて短いんだからさー」

僕はそう言ってお弁当を取り出すと富士也と合図してつぐみを抱き上げて走る。

皆に姉さんのことを知られるわけにはいかないからね。

どこかの部屋に入ると一息をつく。

「アキくん、おろして……恥ずかしいから」

「え？あ、ごめん」

つぐみに言われてつぐみを優しく下ろす。

ぬくもりが離れた時、少し寂しい気分になった。

なんでだろう？

ここは何の部屋だろう？ 何だか見覚えがあるような……。

応接用と思われるソファーにセンターテーブル。
そして、タイトルだけで頭が痛くなりそうな専門書の詰まっている
本棚。

更には……

「何のようだいクソガキども」

「更には奇怪で醜悪な老人のオブジェ」

「出会い頭に罵倒かい！ 本当に礼儀知らずなガキだね！」

「アキくん……その言い方はよくないよ!？」

……訂正、学園長がいた。

「まったく、クソガキどもが……3人揃って無断入室に加えて悪口
とはね。

停学にでもなりたいのかい？」

「す、すみません……」

「あたしは言っていないんですけど」

つい思っていたことが口に出てしまった。
ってあれ？ 5人？

「何だ明久と雨宮と天城じゃないか」

「よ、明久」

「あ、雄二に綾人。こんな所にいたんだ」

脇から聞こえてくる聞きなれた声。

微妙に本棚の陰になっていて気付かなかったけど、

学園長室には昼休みになってFFF団に追いかけられた雄二の姿があった

そういえば、堂島さんと神埼さんとなんか会話してたっけ。

これを見られたから綾人は追いかけられたのかな？

「ここならそう簡単には見つからないからな」

「確かに学園長室に逃げ込むとは考えないだろうね」

僕とつぐみがここに来たのは偶然だけだ。

「何をしているのか知らないがね、ここはそうそう気安く来てもいい場所じゃないよ、クソガキどもが。」

「それに関してはいけません」

学園長が不機嫌そうに言うかつぐみが謝っていた。

いつも通りと言えばいつも通りだけど、学園長は教育者とは思えないような発言をしようとしている。

「雄二に綾人、何か怒らせるようなことでも言った？」

「さあ？そのつもりはなかったんだがな」

「阿呆が。現れるなり学園長を奇怪で醜悪で見るに堪えない汚物呼ばわりした明久と一緒にするな。」

俺は何で学園長室に妖怪がいるのかと驚いただけだ」

「それは失礼だよ雄二。学園長だって好きで妖怪みたいな姿をしているワケじゃないんだから」

「……それでジャリども、アタシに何か話でもあるのかい？
見ての通り、アタシは忙しいんだけどね」

そう言っって手元の書類に目を落としながら言う。僕は特に話なんてないけど……

「ああ。丁度、聞きたい事があったんだ」

雄二には何か話があるみたいだ。何だろう？

「さっき、喚び出した召喚獣が何もしていないのに消えたんだが、何かあったのか？」

ん？

ああ、雄二の持つ紅金の腕輪で召喚フィールドを作って自分の召喚獣でFFF団と戦っつもりだったのか……でも、できなかったと……

試召戦争でそんな事があつたら凄く困る……確認しておくにこしたことはないだろう

「口の効き方を知らないガキだねえ。」

まあ、バカどもに敬語は高度すぎて理解できないだろうから仕方ないけどね」

それを聞いてつぐみと富士也と綾人が不機嫌そうになった。

「そいつは今起きてる不具合の一部さね」

学園長は淡々と答えた。

「不具合ってのは、俺の紅金の腕輪か？」

紅金の腕輪は不具合があるらしい。

けど、芳乃博士がそれを整備したから。

点数は高くても大丈夫になったはずじゃ？

「いいや、試験召喚システムの方さ」

学園長が面倒臭そうに告げた答えはそうじゃなかった。

「そう言えば、最近メンテナンスとか色々やってますよね。大丈夫なんですか？」

「調子は悪いけど心配には及ばないよクソジャリ。」

芳乃博士もいるから、夏休みに入る頃には使えるようになってるさ」

そっか。夏休みに入るには使えるのか……。って、それだと、

「つまり、もうすぐ他のクラスの解禁される予定の試召戦争は」

「一学期まで待ってるってことさね」

雄二が呟くと学園長が答えた。

「あの、なんで試召戦争が禁止に？不具合はすぐに直せるんじゃないんですか？」

つぐみが疑問にもったことを学園長に聞いた。

「決まってるさね。アンタらが試験召喚システムの本質を見失っているからだよ」

「本質は学生の勉学に対するモチベーションの向上が目的に造られたからだろ？」

学園長が言つと綾人がソファアに座つて言う。

「そうさね。あんた頭の回転は速いのになんでFクラスを選んだのやら」

学園長は頷くと綾人を見てため息をついた。

「でも、アキくん達は頑張つて勉強してます。潰れた授業の補習もちゃんと受けてますし！」

つぐみは学園長を見てはつきりと言う。

「事実がどうあるか、じゃないんだよ。」

世間からどういう目で見られているのかが問題なのさ」

学園長が少し疲れた顔をする。

僕らの通う文月学園は試験召喚システムという変わったものを導入しているおかげで

世間の注目を集めている。

それはスポンサーを集めやすい為に学費が安いというメリットもあるけれど、

その分世論に弱いというデメリットを伴う。

内部の人間には効果が見えていても、世の中で認められなければ学園の存続があやぶまれる。

学園長としては悩ましいことだよね。

「だからこそその禁止令さ。別にずっとってワケじゃない。

あと一週間程度で期末試験で、その後は夏休みだろう？ 一学期なんてあつと言っ間さ」

二学期と言われると随分先に思えるけど、学校があるのはあと三週間程度。

確かにそれほど長い時間じゃない

「つまり学園長はこう言いたいのか。

試験召喚システムの不調もあるにはあるが、メンテナンスでの休みは世論に対する隠れ蓑で、

実際は期末試験に集中させるために禁止とする、と」

「相変わらず察しがいいね。その通りさ」

雄二が学園長を見て言う。と学園長は頷いた。

つまり、『試召戦争を禁止にするから、

その間は期末テストに集中して良い結果を出せ』ってことかな？

「とはいっても、

アンタらみたいなのはどうせそれだけじゃまともに勉強なんてしそ
うにないしねえ……」

あごに手を当てて何かを思案する学園長

「成績の向上が見られないようであれば、特別夏期講習でもやろう
かね。」

「それだと吉井君達だけじゃなく他の生徒たちからの反発も想像に
難くないかもだよ?」

学園長が呟くと芳乃朋博士が入ってきて笑顔で言う。

その反発のほとんどは僕達Fクラスからになるだろうけどね。

「そうだね。だから、今回は特別にシステムのリセットをおまけに
してやるよ」

学園長はそれを聞いて頷くとこちらを見て言った。

「システムのリセット？」

富士也が不思議そうに呟いた。

「メンテナンスの件もあるし、一旦システムに蓄積されているデータを白紙に戻してやるって言ってるのさ。」

そうすると、少しはやる気が出てくるんじゃないかい？」

「ほう……それは悪くない話だな」

ああ、そっか。そういうことか。

「つぐみ、ということだ？」

「つまり、期末試験の点数次第ではあたし達の装備がまともになる可能性があるってことだよ」

富士也がつぐみに質問していた。つぐみは苦笑いして教えてた。

「わかりましたっ！ 期末試験、頑張りますっ！」

「どうしたんだ明久？」

「急にそこまでやる気を出して」

「アキくんらしい……かな」

それに、この話は今の僕にとって都合だ。

「よしっ！ やろう雄二！ 綾人！ 富士也！
期末試験でいい点数を取ってAクラスの設備を維持するんだ！」

「「「お、おう。 そうだな」「」」

姉さんを追い返すため。

二期の他のクラスからの試召戦争に負けない為にも！
Aクラス設備をこのまま維持する為にもね。
気合を入れて頑張るぞっ！

「……それじゃ、用がすんだらさっさと出て行きな、ジャリども」

「はいっ。 それじゃ、失礼します！」

「「あ、おいつ！ 明久！？」」

「今、廊下を出て行ったらアイツらが！」

「あ、待ってよ！アキくん！」

雄二と綾人の手を掴んで学園長室を出て行く。
そうと決まれば早速、勉強を……

ガチャッ

「……………ウエルカム」「……………」

……………するには、雄二と綾人はFFF団を何とかしないとイケないみたいだった

「くそ……………っ!! (ダッ)」「……………」

「……………待て……………ッ!!」「……………」

逃げる綾人と雄二。

それを追いかけるFFF団を見送ってから、僕は二人に言い、

「……………行こうか。富士也、つぐみ」

「……………うん」

「……………だな」

そして、三人で教室に戻っていった。

第64話 あたしとアキくんとフジくんと期末試験4改(後書き)

感想と評価をお待ちしております！

第65話 あたしとアキくとフジくと期末試験5

つぐみ side

いつもの終業のチャイムが鳴り響いた。
もう、放課後だね。

「雄二に綾人、ちょっと良い？」

あれ？アキくんが帰り仕度をしてる坂本君と神薙くんに声をかけてる。

どうかしたのかな？

「ん？ どうした明久」

「今日なんだけどさ、雄二や綾人の家に泊めてくれない？
期末試験の出題範囲の勉強を教えてもらいたいんだけど……」

ざわっ

アキくんがそう言った瞬間、教室にざわめきが広がった。

『おい……聞いたか、今の……』

『確かに聞いたぜ。 俄かには信じがたいことだが……』

『まさか、アイツらがな……』

『ああ。まさかあの吉井と坂本が……』

『『期末試験の存在を知っているなんて……』』

と、口ぐちに囁き合っていた。

それってどういう意味かな、酷いよ。

「皆、そんな言い方最低だよ？ アキくと坂本君に謝って」

あたしは不機嫌そうに周りを見て腰に手を当てて言う。

『『え、えっと』』

「つぐみ、気にしてないから（汗）」

「そうだぞ。その気持ちだけでいいからな」

クラスメイトの人が困っているとアキくと神薙くんがあたしを見て苦笑いしながら言った。

でも、それだと悔しいよ。

アキくんだって、頑張ってるのに。

「勉強を教えて欲しいだど？」

「うん」

坂本君がアキくんを見て言うとアキくんは頷いた。

「やれやれ……。お前はまだ七の段が覚えられないのか。雨宮が

落ち込むぞ?」

「待つて! 僕は一度も九九の暗唱に不安があるなんて言った覚えはないよ!？」

分数の掛け算だつてきちんとしてできるからね!？」

坂本くんは呆れたように言うとアキくんが叫んだ。

「ああ、そうか。 三角形の面積の求め方に躓いているところだつたよな」

「(底辺) × (高さ) × 1/2」(三角形の面積)！ いい加減僕をバカ扱いするのはやめなさい!」

やっとわかったような感じで言うとアキくんが叫ぶように言う。

「ちつ……よくできたな、明久」

すると坂本君が舌打ちしていた。

「あの、明久君」

あたしが二人の様子を見てると瑞希ちゃんが鞆を手に抱えてやってきた。

今日は真つ直ぐ家に帰るのかな？

「何、姫路さん？」

「あのですね、九九の覚え方のコツがあるんですけど、」

「言えるからね!?　いくら僕でも九九くらいはきちんと言えるからね!?!」

すっごく心配そうな瑞希ちゃん。

瑞希ちゃん、そこまでアキくんことバカだと思ってるの？

そ、そんなわけないよね? そうだと信じてるよ!!

「しかし、急にどうしたのじゃ?」

明久が勉強なぞ、特別な理由でもない限り考え難いのじゃが」

近くに座っていた秀吉くんが特別な理由というところで瑞希ちゃんに意味深な目線を送る。

「いや、ホラ。

さつき雄二と綾人とつぐみが説明したじゃないか。

『試験召喚システムのデータがリセットされる』とか、

『期末試験の結果が悪いと夏期講習がある』って。

木刀と学ランなんて装備をそろそろ卒業したいし、夏休みも満喫したいし、

頑張ってみようかな、なんて」

「……………明久らしくない」

「そうね。　アキがその程度の理由で積極的に勉強するなんて思えないわね」

アキくんが説明すると土屋君と美波ちゃんがやってきた。

アキくんが勉強するって言っただけで、どうしてそんな反応するの

かな。

あまりにも失礼すぎる気がするけど。

「あの、明久君。私で良かったら……一緒に勉強、しませんか？」

おずおずといった感じで瑞希ちゃんが手を挙げてくれた。
一緒にお勉強というあたりが瑞希ちゃんらしいよね。

でも、そういうわけにもいかないんだよね。
坂本君や神薙くんの家ならともかく、ね

「姫路さんの家に3人が泊めてもらうわけにはいかないしなあ……」

「え？ 明久君、私の家に来たいんですか？」

アキくんがぼつりと呟くと瑞希ちゃんが驚いたように聞いた。

「あ、いや……3人で……」

なんか変な展開になったと気づいたのかアキくんが言うと

「そ、それなら、

家に電話してお父さんにお酒を飲まないように言っておかないと……
その……もし、ですけど、明久君がお父さんに大事なお話があるのなら、

酔っ払っちゃってると困りますし……」

もじもじと瑞希ちゃんが呟いた。
瑞希ちゃん、違う所に論点いきすぎだよ!?

「まさか転校の話!? だとしたら説得に行くけど!」

「転向、ですか? 明久君のお家って、仏教じゃないんですか?」

「ほえ? 何の話?」

「いえ、ですから、お家の宗教が違う事のお話を……」

「?????」

何だか、全然会話が噛み合っていないよ。

天然な二人だから、なのかな。

「たまに姫路の思考回路って明久と同レベルになる時があるよな」

「そうじゃな。朱に交われれば赤くなるといったところじゃろうか」

「……似たもの同士」

「女子力はねーけどな」

「天然だもんな、姫路は」

坂本君と秀吉君と土屋君がぼそぼそと呟いて、

神薙君はやや呆れながら言い、フジくんは苦笑いしてた。

美波ちゃんは知らない単語でも入ってたのか、頭にクエスチョンが

浮かんでたよ。

「それはそうと明久。 どうして俺の家に泊りたいんだ？ 自分の家に何かあったのか？」

「あー、えつと、実は」

「嘘をつくな」

「急に勉強に目覚めて……って、早いよ！ まだ何も言っていないに！」

あはは（汗）嘘だからすぐにわかるみたいだね。

「まあ、次の試召戦争の事もあるし、勉強くらい一緒にやらんでもないが」

「え？ ホント？」

「ただし、お前の家で、だ。」

言った後、坂本君はよそを向いて小さな声で

『我が家にはあの母親がいるからな……』と呟いた

あの母親？ 坂本君のお母さんって会ったことがないけど、どんな人なのかな？

「って、僕の家はダメだよ！ 今日はちょっと、その、都合が悪い

んだ！」

「都合が悪いだと？ 何かあるのか？」

アキくんが慌ててそう言った。

あ、そういえば。あたしとフジ君はアキくんの家に居候してたっけ。これはヤバイよね。

「う、うん。実は今日、家に改装工事の業者が」

「嘘つけ。お前の家の家計は雨宮が握ってるんだろ？ 改装業者が来るはずないだろ」

アキくんがいい訳をしてると次々に言われてた。

はい、家計はあたしが握ってるんだよね。これは事実だから。

「じゃなくて、家の鍵を落としちゃって」

「合鍵くらい雨宮が持つてるだろ、お前が落としても大丈夫だ」

次のことを言うとこれまた正論を言われた。

それもあたしが持つてるからね。

「でもなくて、家が火事になっちゃって」

「火事に会ったくせに学校に来たのか？ お前はどこまで大物なんだよ」

その次のいい訳すると呆れたように坂本君が言う。

「あー、えーっと、他には他には……！」

「いい加減にしろ。お前の嘘は底が浅いんだよ」

「ぐ……っ！」

アキくんが色々考えたけど無理だったみたい。

困ったなあ。荷物のほとんどアキくんの家に移しちゃったし。瑞希ちゃん達にバレるわけにもいかないし。

ましてや、玲さんを知られるわけにも。

「分かったよ。今日は大人しく家に帰るよ……富士也、つぐみ。帰ろう」

「あ、ああ」

「う、うん」

アキくんは自分の鞆を担いで立ち上がる。

すると、背を向けたアキくんの肩を秀吉君がグツと掴んでいた

「待つのじゃ明久。何をそこまで隠しておるのじゃ？」

「うえっ!?! いや、別に何も！」

「何があるのか分からんが、このバカがそこまで隠そうとすることか……面白そうだな」

ニヤニヤといやらしい目で笑う坂本君。
なんか嫌な予感が。

「よし。確認しに行ってみるか」

「ちょ、ちょっと雄二!?! 何言ってるのさ!?!」

「そうね。何かアキの新しい一面が見られるかもしれないし」

「私も興味があります」

「……家宅捜査」

「試験期間で部活もないし、わしも行ってみようかの」

そ、それはやばいよ!

だって、あたしとフジくん。アキくんの家に居候してるし。

ああ、もう! 玲さんってば、なんであんなこと言ったのかな。

「神埼達はどうする?」

「わっち? んー…今日は忙しいから止めとくれ」

坂本君が深紅ちゃんに尋ねると困ってるあたしに気づいて苦笑いしながら言うつと鞆を持って出て行く。

「綾人は?」

「俺は行くことにする」

次に神薙くんに問うと一緒に行くことになった。

「中岡夫婦はどうするんだ？」

「今日是由香里ちゃんの家に行くぜよ。だから遠慮するぜよ」

「……また……ね」

坂本君がからかい気味に聞くと中岡くんと由香里ちゃんはスルーで言い、鞆を持って出る。

「狩谷と鴉取と堂島は？」

「僕はやめときます。人数が多くては大変でしょうしね」

「俺もパス。勉強なら芳乃に教えてもらおうさ」

「わたくしは……行きますわ」

狩谷君と鴉取くんは断り、智美ちゃんは神薙くんをちらっと見てから言う。

若干頬が赤いような？

「ダメだよ！ 今日僕の家はダメなんだ！ その、凄く散らかっているから！」

「あの、それならお手伝いしますけど？」

綺麗にしないと勉強に集中できませんし、

でもつぐみちゃんや富士也くんが散らかってるのを掃除しないなん

ておかしいですね？」

アキくんが焦って言うのと瑞希ちゃんは笑顔で言い、不思議そうに咳いた。

そ、掃除もあたしがしてるって知ってるもんね。

「でも、散らかってるのは二千冊以上のエロ本なんだ！」

「……………任せておけ（グツ）」

あ、アキくん。

それは土屋君を煽ることになってるよ!?

「しまった！ 更にムツツリー二の興味を煽る結果に!？ 物凄い逆効果だ！」

「よし、それじゃ意見もまとまったことだし、明久の家に行くか」

「……………おーっ……………」

アキくんが叫ぶと坂本くんは楽しそうに言い、他の（神薙くと智美ちゃん）以外は楽しそうだった。

第65話 あたしとアキくんとフジくんと期末試験5（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第66話 アキくとあたしとフジくと期末試験6

つぐみside

「何があるんだろつな」

「ムツツリー二と違って明久は滅多に隠し事せんからな。何があるのか楽しみじゃな」

「……隠し事なんて何も無い」

「女性の下着に興味はあるか、ムツツリー二」

「……あるわけがない」

「さすがに隠し事に慣れとるだけあるの。嘘も堂に入ったものじゃ」

「……！（ブンブン）」

上から坂本くん、その次は秀吉くん、そのまた次は土屋くん。土屋くんに話しかけるのは神薙くん。

家に向かう途中。アキくとあたしとフジ君以外の皆は楽しそうに会話をしながら歩いてた。

「でも、なんででしょうね？ 明久君がそこまで隠すものって」

「何かしらね。そこまで詳しくないし」

瑞希ちゃんが考えながら言うと美波ちゃんは考えてから呟いた。

「案外、雨宮との同棲を隠したかったりしてな」

「……っ！？」

坂本君の一言に、他の（智美ちゃんと神薙くん以外）の皆が大きく目を見開いた。

「あ、アキツにつぐみっ！ そんなことないわよね！？」

「っ、つぐみと同棲とは……友人としては祝うべきなのじゃが、なんだか釈然とせんというか。妬ましいというか……」

「……裏切り者……っ！」

「僕、何も言っていないんだけど……」

「おなじく」

というか、坂本くんの考えは当たってはいるんだよね。半分くらいは……うん。

「大丈夫ですよ。明久君が私達に隠れて同棲なんて、そんなことをするはずがありません。

私は明久君とつぐみちゃんを信じています」

瑞希ちゃんにはにこにここと笑って信頼してるように言う。

あの時のお説教で反省したのかな？

なら、よか

「ね、明久君につぐみちゃん？ 私達に隠れてそんなことするなんてありえませんか？」

全然よくないよ！！

まだ、不穏なオーラーだしてるし！！

そうこうしているうちにあたし達が住むマンションに到着。

「ま、中に入れば全部わかるだろ。ほら明久。鍵を出せ」

「ヤだね」

坂本君がそう言つとアキくんは拒否した。

「明久、諦めろ」

「そつだよ、アキくん」

フジ君がそう言つとアキくんの家の合鍵を使って開ける。
あたしは呆れている。

「そつだよね。……それじゃ、あがつてよ」

アキくんは覚悟してから皆を招き入れて、リビングへ続くドアを開け放つ。

そしてその直後、あたし達の視界に飛び込んできた物が…。

「」「」……「」「」

それは室内に干された……ブラジャーという名の女物の下着だった。

「いきなりフオローできない物があーっ!?!?」

フジくんが叫ぶとアキくんが慌てて駆けこんで洗濯物を別室に放り込む。

玲さん、せめて風呂場に干しておいてよ……!

見られた、よね?

皆の反応を確かめるために振りかえると、

「……もう、これ以上ないくらいの証拠ね……」

「そ、そうじゃな……」

「……殺したいほど、妬ましい……!?!」

美波ちゃん達が思い思いの感想を言っていた。

「え、えつと、これはね!」

あたしはフオローしようといういい訳を考えていると、一人落ち着いたままの瑞希ちゃんが笑顔で

歩み寄ってきてアキくんにこう言った。

「ダメじゃないですか、明久君」

「え? 何が?」

「あのブラ、明久君にはサイズが合っていないませんか?」

「……コイツ認めない気だ!」「」

瑞希ちゃんとアキくんの会話を聞いていた、神薙君達が叫んでいた。

「姫路、あれは明久のじゃなくてだな」

「あら? これは……」

アキくんの最悪の誤解に対するフジくんの弁解をしようとするけど、瑞希ちゃんの視線は

リビングの卓上に向かっていた。

こ、今度は何!?

ってアレは多分、玲さんの化粧用のコットンパフだと…

「ハンペンですね」

「……ハンペェン!?!」「」

もしかして、化粧用のコットンパフをわざと誤解してる!?

なんでそうなるの!?!?と知っていると思っていると瑞希ちゃんは更に別の所を見ていた。

その目線の先にあるのは…食卓に置かれた女性向けのヘルシー弁当?

「……」

「み、瑞希ちゃん……?どつしたの……? そのお弁当が何か……?」

おそろおそろと瑞希ちゃんに声をかけると

「しくしく……」

「うええっ!?! どうして急に泣きだすの!?!」

「もう否定し切れません……」

「ちょっと待って! どうして女物の下着や化粧品もセーフなのにお弁当でアウトなの!?!」

アキくんが混乱していると瑞希ちゃんが呟いたのであたしはツッコミをいれていた。

ま、まさか下着や化粧品の方が女性向け弁当よりもあり得ると思っ
ていたの!?!

「はあ……。もうこうなったら仕方がないよね……。正直に言うよ。
実は今、姉さんが帰ってきているんだ……」

ここまで見られたからには仕方がないのでアキくんが正直に白状し
た。

あ、でもあたしの部屋は見られないようにしないと。

そんなアキくんの告白を聞くと、皆ようやく納得のいったような顔
をした。

「そ、そうよね。アキとつぐみが同棲なんてありえないもんね」

「……………早とちりだった」

「ホッとしたぞい」

皆が胸をなでおろしている。

「そうですか。明久君にはお姉さんがいたんですね。良かったです…」

アキさんとフジくんとしては全然良くないけどね。

「待て明久」

「な、なにかな雄二？」

「お前に姉がいるのはわかった。だが、それだけでなぜ家に帰るのを嫌がる？」

「あ、そういえばそうですね」

「確かにおかしいのう」

「……………（じくじく）」

「何かまだ隠してるのかしら」

皆が坂本君の疑問を聞いて同じように疑問を抱き始めていた。

「お前等、詮索しすぎだろ」

「そうですね、人にはそれぞれ触れてほしくないことがあるでしょう?」

それを聞いた神薙くんと智美ちゃんが不機嫌そうに言う。

二人は本当に優しいね。

第66話 アキくとあたしとフジくと期末試験6（後書き）

感想と評価をお待ちしております！

第67話 あたしとアキくとフジくと期末試験7

「アキくん、あたしが言うから」

「でも…つぐみに任せるわけにもいかないから」

あたしがアキくんを見て言うとアキくんは苦笑いして言う。

「実はさ。明久の姉はかなり、その珍妙な人格をしているというか……常識がないというか……。だから、一緒にいると大変で、色々減点されるかも
しれないんだ」

アキくんが言う前にフジくんがみんなに伝えた。

そうだった、アキくんの次の犠牲者はフジくんだったね。

「アキの姉が非常識ってどれだけ……？」

「むう……。恐ろしくはあるが、気になるのう……」

「……是非会ってみたい」

「そうですね。会ってみたいです」

やっぱりこうなるんだ。

どうしてこうも会いたがるのかな。

「あー……、なんだ。お前等、そういう下世話な興味はよくないぞ。誰にだって、隠したい姉とか母親とか、そんなもんがいるもんなん

だから」

坂本君が珍しくアキくんの助け船をだしてくれてた。もしかして、同じ苦勞をしているのかな。

「ゆ、雄二……！ありがとう……」

ガチャ

その時、玄関のドアの開く音が聞こえてきた。

『あら……？ 姉さんが買い物に行ってる間に帰って来ていたのですね。』

アキくん、フジくん、つぐみちゃん』

……え？ なにこのタイミングは！？

「うわわわっ！ か、帰ってきた！ 皆、早く避難を……」

「明久君のお姉さんですか……？ ど、ドキドキします……」

「う、ウチ、きちんと挨拶できるかな……？」

「ダメだ、皆会っ気満々だよ！」

アキくんが皆に言うけど、瑞希ちゃんと美波ちゃんは会っ気満々になっただ。

皆がリビングの扉を見つめて玲さんが姿を現すのを待つ。お願いだから常識的な挨拶をしてね！

緊張の一瞬の後、扉は開かれた。

「あら。お客様ですか。ようこそいらっしやいました。狭い家ですが、ゆっくりして行って下さいね」

そんなごく普通の挨拶をした玲さんは、七分丈のパンツに半袖の力ツターシャツ、

その上に薄手のベストという常識的な格好をしていた。

「……お、お邪魔してます……」

普通の格好に普通の挨拶。ごくごく一般的で普通の玲さんの振る舞いを見て、拍子抜けといったような表情をしている坂本君達。

「失礼しました。自己紹介がまだでしたね。私は吉井玲といいます。皆さん、弟とフジ君とつぐみちゃんと仲良くしてくれて、どうもありがとうございます」

ふかぶかとお辞儀する玲さん。

凄い、普通だよ。

「ああ、どうも。俺は坂本雄二。明久と富士也と雨宮のクラスメイトです」

我に返った坂本くんが慌てて頭を下げる。

「……土屋康太、です」

続いて土屋くん。

「はじめまして。雄二さんに康太くん」

笑顔で返す玲さん。

「（おい明久に富士也。普通の姉じゃないか。これでおかしいと言
うなんて

お前はどれだけ贅沢物なんだ。俺なんか、俺なんか……っ！）」

「（あはは……。ふ、普通でしょ？ だから、もう気が済んだら帰っ
た方がいいと思っつよ？）」

「（僕もそう思っつ）」

坂本くんとアキくんとフジくんが会話をしていると

「ワシは木下秀吉じゃ。よしなに。初対面の者にはよく間違われる
のじゃが、

ワシは女ではなく……」

「ええ。男の子ですよね？ 秀吉くん、ようこそいらっしやいまし
た」

「……………っっ！！」

その言葉を聞いて秀吉くんが驚いたように玲さんの顔を見上げた。

「わ、ワシを一目で男だと分かってくれたのは、つぐみと神崎と主
様だけじゃ……………！」

よかったね。秀吉くん。

「勿論わかりますよ。だって」

微笑みを浮かべながら玲さんは答える。

「だって、うちのバカで甲斐性なしの弟に、

つぐみちゃん以外の女の子が友達になるなんてありえませんか」

な、何いつてるのー!!?」

「ですから、こちらの三人も男の子ですよね？」

などと言った。

「ちょ、ちょっと玲さん！ 出会い頭に失礼なこと言うのさ！三人共きちゃんと女の子だからね!？」

フジ君は玲さんに抗議する。

瑞希ちゃんと美波ちゃんと智美ちゃんを男の子扱いって、何を考えてるの(汗)

するとフジ君の台詞に反応して、玲さんがゆっくりとこちらを向いた。

「……………女の子、ですか……………？」

まさかアキくんは家に女の子を連れてくるようになっていたのですか……………？」

ま、マズイよ。

女の子を家に呼んだってことが気に入らないみたい。

第67話 あたしとアキくんとフジくんと期末試験7（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第68話 あたしとアキくとフジくと期末試験⑧

「あ、あの、姉さん。これには深い深い事情があって」

「…そうですね。女の子でしたか。変な事を言っでごめんなさい」

「実は…って。あれ？」

説明を始めようとするアキくんを無視して、素直に瑞希ちゃんと美波ちゃんに頭を下げる玲さん。
怒ってないのかな？

「どうかしましたが、つぐみちゃん？」

「あ、えっと…玲さん怒ってないの？」

玲さんが不思議そうにあたしを見て言うので聞いてみた。

「何を言ってるんですか？どうして私が怒る必要があるのですか？」

怒らないのが至極当然と言わんばかりに平然としている。

「ところで、アキくん」

「ん？ 何？」

玲さんがアキくんに話しかけてる。
危ない会話じゃないといいけど。

「お客様も大勢いらっしやるようですし、アキくんが楽しみにしていたつぐみちゃんとお医者さんごっことは明日でもいいですよね？」

「な、なななな！何を言ってるんですか！？」

玲さんの突然の発言にあたしは驚きながら巨大ピコハンで玲さんを叩いて叫んだ。

この人、本当にアキくんを大事にしてるの！？

何回も注意してるのに、アキくんいじりをやめないなんて。

「つぐみのいう通りだよ！まるで僕が日常的につぐみとお医者さんごっこを嗜んで

いるかのような物言いはやめてよ！そういうのは富士也と姉さんだけでやってよ！」

「明久、お前こそ、何を言ってるんだよ！！？」

アキくんは玲さんに訴えるように言うとフジくんも叫んでいた。玲さん、本当は怒っていたみたいだね。そうじゃないとこんなことしないし。

「明久くん…そこところ詳しく」

「そうよ、アキ。詳しくきっちり教えなさい」

「二人もアキくんの腕を掴まない！」

あたしが呆れていると瑞希ちゃんと美波ちゃんが怒ってる表情でアキくんの腕を掴んでいた。

それを見たあたしは急いで二人を巨大ピコハンで叩いて鎮静させる。

「痛い」

「痛くしてるんだから当たり前！反省してよ！」

腰に手を当てて瑞希ちゃんと美波ちゃんを正座させてあたしがお説教モードに移ろうとしていると

「玲さん！説教は後で聞くから、さっきの台詞を訂正してくださいよー！」

「何を慌てているのですかフジくん。それより、昨日フジくんに着せようとした、

私のナース服がどこにあるか知りませんか？」

「このタイミングでそんなこと聞かないのー！」

フジくんがアキくんをフォローしようと言つと玲さんがまたとんでもない発言したので

あたしは巨大ピコハンで玲さんを叩いてツッコミをいれる。

「つぐみちゃん、やりますね」

「『やりますね』、じゃない！そうやってアキくんやフジくんをいじるのはやめてください！」

頭を押さえてる玲さんを見てあたしは不機嫌そうに言う。

話を逸らすようにアキくん達の方を見ると呟いた。

「そうそう、不純異性交遊の現行犯として減点を150ほど二人に追加します」

「150!? 多すぎるよ! まだ何もしてないのに!」

玲さんは二人を見つめて減点メモに書き込む。
確かに多い気がするよ

「……『まだ』? ……200点に変更します」

「ふぎやあああつ! 姉さんのバカあーっ!」

「ふぎよおおおつ! 玲さんの鬼ーっ!」

玲さんが二人の言葉を聞いて眉をしかめると減点メモを書きかえる。
それを見た二人は奇妙な雄たけびをあげて叫んでいた。
ごめん、どうすることもできないや。

「……すまん、明久に富士也に雨宮。さっきの言葉は訂正させても
らっ」

「うん……。ありがとう雄二……。」

「僕、生まれて初めて雄二に癒された気がするよ……」

「同感かも(汗)」

坂本君は心底申し訳なさそうにあたし達に謝る。
外見も挨拶も普通だったから油断してたよ。
油断なんてするもんじゃないな。

「ごめんなさい。話が逸れてしまいましたね。」

貴女方三人とそちらの貴方のお名前を伺っても宜しいでしょうか？」

「あ、はい。申し遅れてすいません。私は姫路瑞希といいます。」

明久君とつぐみちゃんと天城君とはクラスメイトです」

「ウチは島田美波です。アキ……いえ、明久君とつぐみちゃんと天城君とは友達です」

「俺は神薙綾人です。明久とつぐみと富士也とは友達です」

「わたしは堂島智美です。吉井君と雨宮さんと天城君とはクラスメイトです」

玲さんの問いかけに瑞希ちゃん、美波ちゃん、神薙君、智美ちゃんの順番で自己紹介をした。

「瑞希さんに美波さんに神薙君に智美さんね。はじめまして」

終始笑顔で応対する玲さん。

こつという所はまともなのに、他が常識がないのか困るよね。

「ところで、玲さんは買い物にでも行つてたんですか？」

「はい、お夕食の買い物に行つてました」

あたしは気になっていることを言うと玲さんは笑顔で手に提げている袋を掲げて答えた。

中にはアサリやベーコンなどの食材見えた。

「あれ？ でも、随分と量が多いね」

4人分にしては随分と量が多い。

一家庭分にしてもまだ余るくらいかな。

「いいえ。その量であってます」

アキくんの指摘に少し不機嫌そうに口をとがらせて反論する玲さん。

「折角お客さんがいらっしやったことですし、お夕食を一緒にいかがでしょうか？」

大したおもてなしはできませんが」

まるで最初からそのつもりだったかのように皆を夕食に誘う玲さん。

「それじゃ、ありがたく好意に甘えさせてもらおうとするかな」

「……」ご馳走になる」

「迷惑でなければワシも是非相伴させて頂きたい」

「うちもご馳走になろうかな」

「じゃ、じゃあ、私も……」

「せっかくだし、そうするか」

「わ、わたしも」

全員が首を縦に振り、今日は大人数での夕食が決定した。

「それは良かったです。では」

「あたしが作るよ」

玲さんが言う前にあたしは立ちあがって言うと

「僕と富士也で作るからつぐみは休んでて」

手を引かれて座りこんでしまうことに。

うう、瑞希ちゃんに美波ちゃん。顔が怖いよ？

「んじゃ、ちよつと早いが先に夕飯の支度から始めるか。明久に富士也、手伝うぞ」

「……………協力する」

「なら、俺も参加するぜ」

「「あ、うん。ありがとう三人共」「」

坂本君が立ちあがって言うのと土屋君も立ちあがって言い、神薙君も立ちあがると言う。

そんなこんなで、結局まずは夕飯を食べて、それから皆でテスト勉強をするということ運びになった。

第69話 あたしとアキくとフジくと期末試験9

富士也 side

「おい明久。何かちょうどいいサイズの鍋はないか？」

「あ、雄二。そっちの棚の奥に、パジエーラが入っているからそれを使って」

雄二が明久に聞いているので明久が振り向いて答えた。

「パジエーラって、パエリア専用の鉄鍋だったか？」

「それはまた珍しい物持つてるな、うちにはないぞ？」

「……うちにもない」

綾人が呟くと雄二と康太も話にくわわった。

「かなり昔に、母さんが貰ってきたんだよ。」

明久が準備しながら質問に答えたので僕も引き継いで言う。

「それで折角だからってパエリアを作ってみたら結構美味しかったよな」

「うん。それ以来、僕と富士也とつくみの好物の一つになったんだ」

僕が笑って言うと明久も笑って頷いた。

「なるほどな」

明久の家ご自慢のシステムキッチンで、僕と明久と雄二と綾人と康太が料理をする。

そもそも明久の家は、最初は家族で暮らす為に買ったものだからそれなりの広さがある。

明久一人で暮らすのは広すぎて寂しいだろうな。

掃除が大変でもあるけど、あまりメリットはないよな。

でも、こうやって男5人が入れるのだから、人数が多い時はありがたいかも。

もっとも、さすがに手狭になるかな？

「しかしまあ、スペイン料理とはな。

お前の姉貴はてつきり日本食を御所望かと思っただが」

「一応、姉さんはなんでもいって言ってたけど」

雄二が呟くと明久が苦笑いしながら言う。

「……………この材料は、明らかにパエリア」

「だな。エビやアサリだけならペスカトーレとかも考えられたが、サフランがあるからな」

「そうだね。サフランを使う料理なんて、他には知らないし……………あれ？」

ホールトマトなんか何に使うんだろ？」

玲さんが買ってきた材料の中には、何故かホールトマトの缶詰が入っていた。

これってパエリアの材料なのかな？

「……………セロリとタマネギとニンニクでトマトソースを作るパエリアもある」

「え？ トマトソース？」

「（こくり）……………イタリア料理でいうソフトリットの事」

「へえ〜。 そうなんだ。」

あ、そう言えばつぐみが作ってくれたパエリアはトマトソースだったっけ」

ホント、康太って妙なことに詳しいなあ。

スペイン料理の店で性的好奇心をかき立てる何かがあったんだろうか？

「何だ明久。 お前らはパエリアなんて面倒なもんを何度も作ってたのか？」

「うん。 好物だからね。 よく作ったし、つぐみと富士也も作ってくれたよ」

前に作ってからもう一年以上経つだろうか。 あっちの学校で色々あったし余裕なかったからなあ。

「何度も作っているのに、買ってきた材料が違った？　それはおかしくないか？」

「そう？　多分、姉さんがつぐみの作ってくれるのと間違っただけじゃないかな？」

「いつもは買い出しも調理も僕とお隣だけど、つぐみの仕事でもあったし」

綾人が聞いてきたので明久がすぐに答えた。

「そうか。　まあ、そうかもしれないな」

「いまいち納得していないような、雄二の形だけの同意。
何か引つかかるのかな？　別にたいしたことじゃないんだろっけど」

「ところで明久。　さっきふと思ったんだが」

「ん？」

雄二が明久を見て尋ねると明久は振り向いた。

「お前、姉貴に本当の生活態度を隠してるだろ」

「……よく分かったね」

雄二が明久に言う少し沈黙した後で明久が呟いた。

「丸分かりだバカ」

エビを手にとって背ワタを取る作業をしながら雄二が言う

「バレると、説教か？」

こっちはムール貝をタワシで洗っている綾人の台詞

「まあ怒られるのは良いんだけど」

明久が俺を見てから苦笑いして言う

そう、僕の唇を奪われるという恐ろしい罰をすることになってしま
う。

もしくはそのまま貞操を奪われるなんてことも。

「怒られる以外に何かあるのか？」

「うん。」

あまりにも生活態度が悪かったり、今度の期末試験である程度の点
数を取れなかったりすると、

姉さんがこっちに居座る事になっちゃうんだよ……」

話しながらもタマネギやパプリカ、

アスパラガスなどの野菜を程よい大きさに切り分けてボウルに移す

「ある程度の点数？」

綾人が聞き返すと

「さっき姉さんが言ってたアレだよ。減点150とか200とか
つて」

「そう言えば言っていたな。さっきはスルーしたが、あれは何の
事なんだ？」

僕が苦笑いしながら言うと雄二に聞き返された。

「あの点数分、
振り分け試験の時よりも今度の期末試験の成績が上がっていないと
ダメなんだよね……」

「そうか。だからあんなに勉強をやる気になっていたのか。よ
うやく合点がいった」

「……………納得」

「大変だな、富士也も明久も」

昨日は減点されなかったのに、もう200点なんて、割りに合わない
いよ。

最近の僕と明久の総合点数は、調子の良い時でだいたい1000点
ちよっとくらいだったから
……………これ以上の減点は避けないと

「だから、余計な事を言わないで欲しいんだ。学校の成績とか、

僕の本当の生活とか」

「なるほどな。まあ、お前の一人暮らしは俺にも都合がいいし、黙ってやるか」

「俺もだ」

「……………協力する」

明久が雄二達に言うと三人は快く頷いてくれた。後はつぐみと明久の同棲がばれないといいんだが。

「ありがとう、三人とも」

明久は嬉しそうに言うを持ち場に戻る。えっと、次の手順は…

「雄二。コンソメを取ってきてくれる？ そろそろスープを作るから」

「ん？ ソフリットとか言うヤツを作らないのか？」

「うーん……………今回は慣れていく方で行くよ」

「そうか。お前がそう言うならそれでもいいが」

タコを一口大に切り分ける手を休めて、コンソメを明久に手渡してくれる雄二。

話をしながらでも作業を進められるとは、つくづく何でもできるヤツだなあ

「ん。ありがとう」

コンソメを受け取って、さつき綾人が火にかけておいてくれた鍋に溶かし込む。

色を充分に出すのに時間のかかるサフランは先に入れてあったので、スープはすぐにできあがった。

準備がいいというか、手際がいいというか…この3人には脱帽だ

それにしても、康太は今更だけど、雄二と綾人がここまで料理に慣れているとは思わなかった。

そんなにいつも作っているんだろうか？

ちよつと気になるな

「あのさ、雄二と綾人は家で毎日夕飯を作ってるの？」

「ああ、いや。毎日ってわけじゃない。一応、うちの母親も作るには作るんだが……」

「いいなあ。そういう母親」

「……放っておくと、ヤツは何を作るか分からんからな……」

何故か雄二は遠い目をしていた。

まるでザリガニとロブスターを間違えて作られた料理を出されたかのような

そんな哀愁の漂う感じで

「綾人は？」

「俺は一人暮らしだから、その恩恵でだな」

僕が尋ねると綾人は作業をしながら答えてくれた。
なるほど、だからか。

「それじゃ、そろそろお米を炊くよ？」

「ああ、そうしてくれ。俺とムッツリーニと綾人はサラダとデザ
ートの用意をする」

「……任せた」

「頼むぞ」

明久が鉄鍋に野菜と生米を入れて火にかける。
これがある程度炒めたらスープの出番かな？

「富士也。スープを入れたら鍋から目を離すなよ。炊きムラが
できるからな」

「大丈夫。分かってるって」

しばらく待つて、ほどよく色が変わってきたところでスープを入れる。

あとはたまに鍋を揺らしながら炊きあがりを待つだけだ

そんなわけで手持無沙汰な待ち時間。

鍋を見ながらブーツとしていると、リビングからは姫路さん達の話が聞こえてきた。

あの面子で何を話しているんだろ？

『さあ、できました』

『あ、玲さん…お願いだからあたしで着せ替えしないでよ』（汗）』

『可愛いです、つぐみちゃん!』

『なんでそんなに似合うのよ!』

い、一体リビングの方では何がされているんだろ?。

そんなこんなで時間が過ぎて…

富士也 side

明久 side

「皆、待たせたな。夕飯ができたぞ」

「ありがとうございます。　お客さまなのにアキくんのお手伝いまでしていただいて」

「いや、気にしないでくれ。　料理は嫌いじゃないからな」

やっと完成した夕食が、テーブルに並ぶ。
テーブルはつぐみのお母さんが拡張式にしているため、何なく並べられた

「あ、ありがとうございます……」

「お、美味しそうね……」

姫路さんと美波は顔を青くしている。　姫路さんは分かるが、何故美波も……？

「では、冷めないうちに食べよう？」

目の前の湯気が出ている料理に視線が移る。
姫路さん達のことには気になるけど、折角作った料理が覚めてしまうのも勿体ない。
つぐみの言う通り、今は夕飯を優先しよう

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

手を合わせて目の前の料理に取りかかる僕たち

「む。これはまた、美味いもんじゃな」

「そうか。口に合ったようで何よりだ」

「そう言ってもらえると作った甲斐があるよ」

「……（じくり）」

秀吉がニコニコとパエリアを頬張っている姿は、額縁に入れて飾っておきたいほどに可愛らしかった。

そして、それとは対照的に砂を噛んだような表情をしている姫路さんと美波

「あれ？ 二人ともパエリアは苦手だった？」

「う……いや、嫌いじゃないし、すごく美味しいんだけど……」

「だからこそ、落ち込むと言いますか……」

よく分からないけど、女の子はいろいろと複雑のようだ

「…やっぱり、もっとたくさん料理を作って練習しないと……！
これに勝つためにも、もっとオリジナル　い、いえ。　な、何で
もないです。　すみませんでした」

「まったく、もう」

そうやってつぐみはピコハンをしまつ。そのしぐさも可愛いと思う
のはなんだろうか

とりあえず、姫路さんの眩きは聞こえなかったことにしよう

第69話 あたしとアキくんとフジくんと期末試験9（後書き）

感想と評価とお待ちしております！

第70話 あたしとアキ君とフジ君と期末試験10

明久side

「美味しい」

「喜んでもらえて嬉しいよ」

つぐみは幸せそうに食べてる所を見ると本当に癒されるよな。
今、幻視でうさぎみみが見えた気がしたけど…気の所為だよね。

「ところで、皆さん」

これは好機とばかりに姉さんが話を切り出す。 何だ？

「うちの愚弟の学校生活はどんな感じでしょうか？ 例えば、成績
や異性関係など」

やけに後者が強調される

く……っ、卑怯者め……っ！

さては、皆を夕飯に誘ったのはそついう魂胆があつての事だな！

けど、さっきのキッチンの会話で最大の脅威となる雄二とムツツリ
一二の口止めは完了している

綾人はそんなこと言わないから安心だし。

「えっと、明久君はつぐみちゃんに勉強を教わって凄く頑張っていると思います。」

最近は成績も伸びてきたみたいですし」

「そ、そうね。 ドキッとする場面が多いわ」

流石は姫路さんと美波だ。

雄二と違って本人やその家族を前に、悪いことなんて言わない良識人

「そうですか。 それで、異性関係は？」

「え、えっと、それは、その、よく分かりません…… 異性関係は」

「そ、そうね。 ウチもあまり知らないわね…… 異性関係は」

何故、二人とも異性関係を強調するんだろう？

けど、とりあえず姫路さんと美波は何も言わずにいてくれそうだ。

「秀吉くんは何かご存知でしょうか？」

「知らないのじゃ、すまんのう……お役にたてなくて」

姉さんが秀吉に聞くと秀吉は苦笑いして言う。

明久 side end

しばらく他愛もない話をしながら料理を食べていると、玲さんが何かを思い出したらしく

「そう言えば、言い忘れていました。明日から姉さんの食事は用意しなくても結構ですよ」

と言ってきた。

「え？ そうなの？」

「はい。こちらですませておかないといけない仕事があつて、明日から土曜日か日曜日くらいまでは帰りが遅くなりそうなのです」

仕事と言いますと、玲さんが手伝っているアキ君のおじさんの会社のことだよ。

本籍地は日本になっていきますし、手続きが取引でもあるのかも

「アキくん、フジくん、嬉しそうですね？」

玲さんがアキ君とフジ君を見て言うと

「うえ！？ い、いや、そんな事はないよつ。折角帰ってきた姉さんがいないのは凄く残念だよ！」

「そうそう！とても残念だよ！」

二人は慌てたように言う。

「英語で言ってみてください」

「「Regret」」

玲さんが嘘が言えなように英語で言つとすぐにアキ君とフジ君は答えた。

「姉さんは今、凄く驚いています」

「「それどう意味!?!」」

その後、テキパキと後片付けを終えて全員がリビングに集まると、瑞希ちゃんがいよいよ今日の集まりの本題を切り出した。

「そろそろお勉強を始めましょうか？」

「そうね。あまり帰りが遅くなっても困るし」

夕飯の支度が早かったせいも、現在時刻はまだ七時。今からでもたっぴりと勉強はできるね。

「ならば、わしも一緒に教えてもらおうとするかの」

それを聞いた秀吉君が言うと

「……………同じく」

「俺も参加するぜ」

土屋君と神薙君も勉強すると言った。

「「そうだね。テスト前だからってワケじゃなくて、いつものように勉強を始めようか!」「」

アキ君とフジ君が笑顔で言うと

「皆さんでお勉強ですか。それなら良い物がありますよ?」

玲さんが笑顔で言ってきた。

「良い物?」

「はい。今日部屋を片付けていて見つけました。今持ってきてきますね」

トタトタとリビングを出て行く玲さん。

その後、何かを取り出す音がしたかと思うと、再び部屋に戻ってきた

「参考書というものなんですが、役に立つかもしれないので」

玲さんは持ってきた本をテーブルの上に置きます

え、あれ？ これって／＼／

女子高生 魅惑の大胆写真集

「アキくんの部屋で見つけました」

「僕のトップシークレットが っ！！」

な、何を持ってきてるのー！！！！？

「ちなみに、これはフジ君の部屋から」

「わー！！！！なんて物持ってきてるんですか！？」

《女子大生 魅惑の大胆写真集》

ふ、フジ君も持ってたのね。

「保健体育の参考書としてどうぞ」

玲さんがニコニコと笑って言う。

「どうぞじゃないっ！　こんなもんが参考になるかーっ！」

それをアキ君がツツコミをいれていた。

「おい、明久。お前には嫁がいるんだから、こういうの必要ないだろ」

「よ、嫁って誰の事!？」

神薙君が呆れながら言うとアキ君が叫ぶ。

「そ、それじゃ、あくまでお勉強の参考書として……」

「そ、そうね。　うちもちよっと勉強しておこうかな……」

「姫路さんに美波!？　無理に姉さんのセクハラに付き合わなくていいんだよ!？」

「というか、お願いだから見ないで!」

「アキくん。　ベットの下に置いてあった他の参考書も全て確認しましたが、

あなたはバストサイズが大きく、かつヘアスタイルはポニーテールでロリ娘の女子

という範囲を重点的に学習する傾向がありますね」

「冷静に考察を述べないで!

いくら言い方を変えて取り繕ってくれてもそれが僕の趣味傾向だっ
てことがバレちゃうんだから!」

「ポニーテール、ですか……」

「大きなバスト、ね……」

「何かな？」

瑞希ちゃんと美波ちゃんがあたしの一部をじっと見つめてきている。

一体、何のかな？

「お主ら、勉強は良いのか？」

「そ、そうだね。 秀吉の言う通りだよ！ さあ、勉強を始めるよ皆！」

アキ君は瑞希ちゃん達から本を取り上げて教科書を押しつけます

「そ、そうですね。 お勉強を始めましょうか。 んしょ……っ」と

「み、瑞希っ！ どうして急に髪をまとめ始めるのよっ!?!？」

「べ、別に深い意味はありませんよ？ ただ、お勉強の邪魔になるかと思っつて」

「それならウチがやってあげるわ！ お団子でいいわよねっ!！」

「い、いえ。ポニーテールにしたいと」

「ダメっ！ お団子なの！」

「美波ちゃん、意地悪です……」

美波ちゃんが瑞希ちゃんの後ろに回ってお団子の形に髪の毛を括ってあげていた。

「ところでムッツリーニはどうしたんだ？ 随分とおとなしいようだが」

「あ、そういえば」

神薙君が言うとアキ君は気づいたように呟く。確かにあの本が出たらまっさきに喋るよね。

「……………（キョロキョロ）」

「？ どうしたのムッツリーニ？」

土屋君は何かを捜すように辺りを見回している。

何をしてるのかな？

「……………明久」

「ん？」

「……………あと一九九九冊は？」

「ええっ！？ 二千冊以上のエロ本って話を本気にしてたの！？」

あんな嘘信じてたんだ（汗）

「……………エロ本なんかに興味はない」

台詞とは裏腹に、土屋君はしょんぼりと肩を落としていた。

まるで散歩をおねだりしたのにつれて行ってもらえなかった子犬のようだよ。

「明久のエロ本は置いといて、勉強するならさっさと始めようぜ」

呆れたように坂本君が言った。

な、なんかなかったかな？

ところで、瑞希ちゃんと美波ちゃんがもの凄く羨ましそうにあたしを見ているのは気のせいかな？

「お勉強なら、宜しければ私が見て差し上げましょうか？」

「え？ お姉さんが、ですか？」

玲さんの提案に瑞希ちゃんが目を丸くしていた。

「はい。日本ではなくアメリカのボストンにある大学の教育課程を昨年修了しました。多少はお力になれるかと」

「ぼ、ボストンの大学だと……！？ それってまさか、世界に名高いハーバード」

「よくご存知ですね。その通りです」

「……えええっ！？」「……」

不思議なことに玲さんは勉強だけは異様にできるんだよね。その分常識が圧倒的に不足しているけど。

「なるほど、出廻らしか……」

「坂本君！ その言い方はよくないよ！」

哀れむようにアキ君を見る坂本君にあたしは不機嫌そうに言う。

「わ、悪かったよ」

「言い方には気を付けないとダメだろ」

坂本君が苦笑いして言うとフジ君が呆れながら言う。

まったくもう、これでアキ君がグレたらどうするつもりなんだろう。

「そういうことなら教えてもらおうぜ。」

本場の英語とか、こっちの教師には教えてもらえないようなことも色々知ってそうだな」

「……頼もしい」

神薙君が言うと土屋君は頷いて言う。

「わかりました。それでは、まずは英語あたりから始めましょうか」

「……………よろしくお願いします」「……………」

結局この後十時前くらいまで玲さんの講義を聞いて、その日は解散となった。

第71話 あたしとアキ君とフジ君と期末試験 11

アキ君の家に同棲してからなにごともなく過ごしていたんだけど。今朝目が覚めたら、複数のゴスロリ服をもってあたしに近寄る玲さんがいた。

あれ…なんで？

「えっと」

「おはようございます、つぐみちゃん」

あたしが戸惑っていると玲さんが笑顔で言う。

「あ、おはようございます」

とても爽やかな朝の挨拶に思わず返事をしてしまうあたし。と、その時あたしが寝てる部屋を開けてアキ君が叫ぶ。

「姉さん！つぐみの部屋に入るなって言ってるじゃん！！」

「あら、アキ君。おはようございます」

アキ君を見て玲さんが笑顔で言うと

「あ、うん。おはようって違う！！」

アキ君も思わず返事をしていた。

「明久、落ち着きなよ」

「わ、わかってるけど」

フジ君はアキ君を宥めるように言う。

「仕方ないですね、今回は諦めるとしましょう」

玲さんは残念そうにゴスロリの服をあたしの部屋のクローゼットにいれる。

えー、なんでそこにいれるの!?!?

「そういえば、今朝アキ君とフジ君が眠っている間にお部屋の片づけと称して部屋を調べたのですが」

「称してって、堂々と言っていいもんじゃないよね!?!」

そう言う玲さんにあたしはツッコミをいれていた。

「更にエッチな本が二冊でてきました」

「はづあっ!?!?」

玲さんはそう言うつとエッチな本を見せる。

よ、よく見つけることができたよね。

本人すら思い出せなかったのに。

「よって、減点60点を追加します」

「う……。それって。一冊につき30点で60点の減点ってこと?」

玲さんが言つとフジ君は落ち込みながら訊いたら

「ええそうですよ」

どうやら正解みたいだね。

「厳しいようですが。」

それもこれも、全てアキさんとフジ君に勉強を頑張つて欲しいという姉さんの愛情です」

あの、あたしの頭を撫でながら言わないでほしいかと。

「さて、朝食をすませて出掛ける支度をしましょう。今日は姉さんも仕事がありますから」

「うう……。こんな生活、もう嫌だ……」

「アキ君、大丈夫？」

あたしは落ち込んでるアキ君に声をかける。

この後、みんなで朝食を食べて洗濯ものを干してからあたしたちは学校に向かった。

「」というわけで雄二。 今日楽しく勉強会をしよう！」

素早く帰り支度を整えると、アキ君とフジ君は坂本君の席に駆け寄った

「……明久に富士也。似合わない台詞が気持ち悪いぞ」

「「何とでも言っつてよ。今の僕達には体裁を気にしている余裕はないんだから」」

「どんどん減点が追加されている今、アキ君達のテストの点数ブースターを逃がすのはおしいよね。」

「何だ。また減点でも喰らったのか？」

「うん……隠してたエロ本が見つかったさ」

と坂本君に耳打ちする。誰かに聞かれたら困るからかもだけど。

「そうか。それで、今はどのくらいの減点なんだ？」

「確か、合計で260点。もうかなり厳しいんだよね」

「260か。そうすると、期末の総合目標は1060くらいだな」

「そうなんだよ。」

「今までは絶対調でも1000ちょっとだったから、それに更に70点以上アップさせないと……」

「総合1060点程度となるとCクラスの中堅レベルかな？」

アキ君とフジ君、大丈夫かな。

「まあ、その程度ならまだ何とかなるだろ」

「え？ そうかな？」

「暗記科目を中心に今から死ぬ気で根性入れたら、それなりに上がるはずだからな。」

お前の場合、上がり代が残っている世界史あたりが狙い目だ。確か今までは60〜70点程度だったよな？」

「うん。 よく覚えてるね」

「一応クラス代表だからな」

試召戦争をしかけられても大丈夫なようにクラスメイトの点数チェックしてみたい。

戦力の把握は指揮官として必要不可欠なのかな？

「振り分け試験と違って、期末の問題を作るのは田中らしい。お前にはありがたい話だろ？」

「田中先生か……それなら確かに点数を取り易いかも」

世界史の田中先生はおっとりとした初老の先生で、あの人の問題は解き易いと生徒の間では大評判だ。いつもなら全員が解き易いと点数に差が出ないから意味がないけど、今の僕にしてみればありが

たい。重要なのは他の皆との差じゃなくて、点数そのものなのだから

「下手に理数系に力を入れるよりは、暗記科目に集中した方が点数には結びつきやすいはずだ」

「そうだね。今から数学なんて勉強してもあまり点数は上がらなさそうだし」

アキ君達にとつての期末テストの鍵は世界史が握ることになるね。などとテスト対策の話をしていると、そこに鞆を抱えた秀吉君がやってきた

「なんじゃお主ら。今日も明久の家で勉強会か?」

「僕の家? うゝん……今日からは姉さんが仕事でいないから、それも良いんだけど……」

「けど?」

「今日は雄二の家にしようよ。」

たまには僕の家以外にも行ってみたいし、何よりも僕の部屋には参考書とか勉強道具があまり揃ってないし」

すかさず、坂本君の家を提案する。

勉強道具云々の話も確かにあるけど、

会場を坂本君の家にしたのは何より坂本君自身を巻き込むため
いい。

いつ、しかけられも良いように対策する辺りは凄いな。

「良いよね、雄二？ 昨日は無理を押し僕の家に来たんだし」

「まあ、確かに昨日は無理矢理押し入ったようなもんだしな……」

少し何かを考える坂本君。

「分かった。今日は俺の家でやるか。 幸い、おふくろも温泉旅
行で不在だしな」

坂本君の母親が不在なのがどうして幸いなのかは分からないけど、
思ったよりすんなりとオーケーが出たみたい。

「それならば、ワシも同行させてもらって良いかの？
姉上は全然勉強を教えてくれんし、一人では勉強をする気が起きん
のじゃ」

「勿論オーケーだ。 というか、どうせいつものメンツが来るんだ
ろ？ それならさっさとしようぜ」

「そつだね。 おーい、ムッツリーニ、姫路さん、美波ー！綾人ー
」！

まだ教室内に残っている4人に呼び掛ける

「はい。 何でしょうか、明久君？」

「何か用？」

「……どっかに行くとか？」

「なんだ？」

勉強道具を鞆にしまっていた4人は、それぞれ鞆を手にこちらにやつてきた

「うん。 今日には雄二の家でテスト勉強をしようと思っただけど、良かったら」

皆も期末テストに向けて気合が入っているのか、勉強会には二つ返事で参加だった。

さて、あたしも参加しようっと。

「んじゃ、入ってくれ」

学校から歩くこと十五分程度。住宅街の一角にある坂本君の家に到着しました

「…………お邪魔します」「…………」

「ねえ雄二。家には誰にもいないの？」

玄関で靴を脱いで中に入ると、アキ君が前を歩いて居間へと案内してくれる坂本君に尋ねる。

「ああ。親父は仕事で、おふくろは高校の同級生達と温泉旅行らしい。

だから何も気兼ねせずゆっくりしてくれ」

「そうなんだ。そう言えば、前に来たときも雄二の家族は留守だったよね」

「ああ。その方が都合が良いからな。色々」

何故か晴れやかな表情の坂本君がリビングのドアを開ける。

すると

「…………………………！！……ぷちぷちぷちぷち」

居間には一心不乱にプチプチを潰している女の人の姿があった。

「……………」

ボタン

何も言わずに戸を閉める坂本君

「ゆ、雄……………？　今の、山ほどあるプチプチを潰していた人って
」

フジくんが尋ねると

「……………赤の他人だ」

坂本君は苦虫をつぶしたようか感じで話す。

「さ、坂本の母親なの……………？　何だか、随分と凄い量を潰していた
わよね……………」

「う、うむ。　あれほどの量。　費やした時間はおそらく一時間や
二時間ではきくまい」

「……………凄い集中力」

「坂本君のお母さんはそういうお仕事をしているのでしょうか？」

「瑞希ちゃん、それはないよ」

「俺も同感だ」

様々な憶測が飛び交う。

い、今のはいったい……？

「恐らく、精神に疾患のある患者が何らかの手段でこの家に侵入したに違いない。」

何せ、俺のおふくろは温泉旅行に行っているはずだからな」

な、なんか凄く苦しい言い訳をしはじめたよ。

坂本君が戸を閉めてしまったので部屋に入れずにいると、坂本君曰く赤の他人さんの声が中から聞こえてきた。

『あら……？ もうこんな時間。 さっき雄二を送り出したとおもったのに』

どうやら八時間近くあの作業を続けていたみたいだね。

『続きはお昼を食べてからにしましょう』

しかもまだ続けるつもりみたいだね。

「おふくろっ！ 何やってんだ！？」

耐えきれず、ついに坂本君が踏み込みんだ。

「あら雄二。 おかえりなさい」

「おかえりじゃねえ！ 何で家にいるんだ！？ 今日泊りで温泉旅行じゃなかったのかよ！？」

「それがね、お母さん日付を間違えちゃったみたいなの。 七月と十月って、パツと見ると数字が似ているから困るわね」

「どこが似ているんだ！？ 数字の形どころか文字数すら合っていないだろ！？」

「こら雄二。 またそっやってお母さんを天然ボケ女子大生扱いしてっ」

「サラッと図々しい台詞をぬかすな！ あんたの黄金期は十年以上前に終わっているはずだ！」

「あら、雄二のお友達かしら？」

「だから人の話をきけえっ！」

怒涛の応酬に呆気にとられるあたし達。これには、流石のアキ君も何も言えないみたい。

「皆さんいらっしやい。うちの雄二がいつもお世話になってます。

私はこの子の母親の雪乃と言います」

柔らかな微笑みでわたし達に挨拶する雪乃さん。

その優しげな雰囲気と接する限り、坂本君との血のつながりがまったく想像できない人。

そして何より、正面からその姿を見たら、誰もが驚くであろうこと一つがあるの。

といってもあたしは自分の母でなれたけど。

「さ、坂本の母親って……若過ぎない!？」

「むう……とても子を産んでおるとは思えん……」

「……………美人」

「まるでお姉さんみたいですね」

「若い」

皆の言う通り、母親というよりはちょっと年の離れた姉といった感じだね。

あたしの場合は姉妹といった感じだったかな。

「み、皆、とりあえずおふくろは見なかったことにして、俺の部屋に来てくれ……」

「う、うん。それじゃ、お邪魔します」

頭を下げて上にある坂本君の部屋に向かいます

「皆さん。あとでお茶を持っていきますね」

居間からはそんな声が聞こえてきた。

若干、変わってるみたいだけど、若くて綺麗で優しい母親だね。

「ここが俺の部屋だ。入ってくれ」

言われた通り中に入ります。

階段を上って直ぐのところにある坂本君の部屋は、綺麗に片づけられていて、

一人用の部屋としては結構な広さがあった。

「そついや、久しぶりに雄二の部屋に来たよ」

「ワシもじゃな」

「……同じく」

去年の秋くらいに、アキさんと秀吉君と土屋君とで来たのかな？

「え？ アンタ達はよく来てるんじゃないの？」

「大抵は僕の家が集まっていたから。」

雄二君の家だけでなく、ムツツリー二や秀吉の家でもあまり遊んだことはないかな」

「場所といい、広さといい、明久達の家は都合が良いからな」

「一等地で二人暮らしですもんね。 贅沢です」

その二人暮らしを続けられるかどうかは期末試験次第だけどね。しかもあたし同棲みたいなことになってるし。

「それはそうと……やっぱりこの人数で俺の部屋は狭すぎるか。参ったな……」

わたし達は全員で8人。

座って話をするならともかく、道具を広げて勉強するにはちょっと広さが足りないかな。

「居間じゃダメですか？」

「ダメじゃないが、おふくろがいるからな。勉強にならない可能性が高い」

坂本君が心底嫌そうな顔をしてる。

「もつづ。ダメですよ坂本君。お母さんを邪魔者扱いしてっ」

「そうは言うがな姫路。お前はあのおふくろと一緒に暮らしていないからそんな事が言えるんだ。四六時中一緒にいるとツッコミどころが多過ぎて」

P r r r ! P r r r !

坂本君が反論している途中、突然部屋の中に電子音が鳴り響きました。

これは誰かの携帯の呼び出し音だね。

「あ、ウチの携帯ね。ちょっとゴメン」

美波ちゃんがスカートのポケットから携帯電話を取り出して耳に当てる。

メールじゃなくて電話ってことは、何か急用かな？

「もしもし？ あ、Mut お母さん。 どうしたの？ ……うん……うん。 そう。 分かった」

一分もしないで通話を終え、美波ちゃんは携帯電話をポケットにしまった。

「美波、何かあったの？」

「うん……今週は仕事が休みだからって母親が家にいるはずだったんだけど……ちょっと急な仕事が入って家にいられなくなったみたい」

アキ君が聞くと困ったように美波ちゃんが言う。

「あ、そうなの？ それじゃ、葉月ちゃんが家に一人ってこと？」

「そうね。 だから、悪いけど今日はウチは帰るわ。 勉強はまた今度ね」

あたしが聞くととても残念そうに美波ちゃんが言う。
残念だけどそういうことなら仕方がないよね。

まだ小学生の女の子を家に一人にしておくのは可哀想だし。

美波ちゃんが鞆を手にして部屋を出ようとすると、坂本君が引き留めた。

「待て島田。それなら、場所をお前の家に変更しないか？」

「え？　ウチの家？」

美波ちゃんの家？　なるほど、それは良い考えかも。

「それは良いのう。」

島田の妹とは富士也以外の全員が顔見知りじゃし、丁度雄二の部屋は手狭だったところじゃし」

「葉月ちゃんとも会えますしね」

「……………なんなら、夕飯を作る」

「ちみっことはよく言い聞かせないといけないしな」

他の皆さんも乗り気だね、
何より提案者の坂本君が会場を変えたくて仕方がないって顔をしてるみたい。

「美波さえ良かったら、どうかな？」

「う……そ、そうね……じゃ、じゃあ、ウチの家にしましょうか……」

少し考えた後、美波ちゃんの承認がおりた。
これで葉月ちゃんも寂しくないね。

「ただし！ 絶対ウチの部屋に入っちゃダメだからね！」

美波ちゃんはアキ君の目を見てそう言いつた。
何かあるのかな？

「よしっ！ そうと決まれば早速移動だ！ チビツ子も一人じゃ寂しいだろうからな！」

坂本君が背中を押さんばかりの勢いであたし達を玄関に追いやる。
そんなにここで勉強するのが嫌だったんのかな？

皆が靴を履いている間、坂本君は居間に入っていつて雪乃さんに声をかけていた。

『おふくろ。 ちょっと出掛けてくる。』

夕飯は昨日の残りが冷蔵庫にあるから、それを温めて食べてくれ』

『あら、もう行っちゃうの？ お茶を用意しているところなのに』

『悪い。 ちょっと事情が変わったんだ……ところで、その麵つゆのボトルは何に使うんだ？』

『麵つゆ？ あらら………てっきり、アイスコーヒーだとばかり……』

『おふくろ……色や匂いで気づいてくれとは言わないから、せめてラベルで気づいてれ……』

坂本君は家にいる方が学校にいる時より疲れているみたいだね。

第72話 あたしとアキ君とフジ君と期末試験12

「ただいまー。 葉月、いる？」

玄関の扉を開けて美波ちゃんが呼びかけると

「わわっ、お姉ちゃんですかっ。 お、おかえりなさいですっ」

廊下に面した部屋から、小さな影が勢いよく飛び出してきた。

アーモンド状のちよつと吊り上がった目にリボンで結ったツータール。 葉月ちゃんだね

「？ 葉月、今お姉ちゃんの部屋から出てこなかった？」

どうやら今葉月ちゃんが飛び出してきた部屋が美波ちゃんの部屋からみたい。

「あ、あう………実はその………独りで寂しかったから、お姉ちゃんの部屋に行つて………」

言い難そうにしながらパーカーの大きなポケットから何かを隠す葉月ちゃん

「ぬいぐるみでも取ってこようと思ったの？ そのくらい、お姉ちゃんには別に怒らないのに」

「そ、そうですね？ お姉ちゃん、ありがとうございますっ」

よしよし、と葉月ちゃんの頭を撫でている美波ちゃん。

二人の会話が落ち着くの見計らって、

アキ君は美波ちゃんの背中から一歩出て葉月ちゃんに挨拶をする。

「葉月ちゃん、こんにちは」

「あっ！ バカなお兄ちゃんっ！」

アキ君が姿を見せるなり、ドンツと勢いよく腰にしがみ付く。

そしてそのまま葉月ちゃんは額をぐりぐりとアキ君のお腹に当ててる

……葉月ちゃん……おでこが的確に鳩尾に食い込んでるからね。

「こんにちは、葉月ちゃん。お邪魔しますね」

「わあっ。綺麗なお姉ちゃん達まで。今日はお客さんがいっぱいですっ」

やっぱり小学生に一人での留守番は寂しかったみたいだね。
あたし達を見ると、葉月ちゃんは満面の笑みどころか全身で喜びを表現した。
相変わらず天真爛漫という単語が似合う素直な子だね。

「ほらほら、葉月。アキから離れなさい。皆が中に入れないでしょ?」

「あ、はいです。それじゃ、バカなお兄ちゃん達、こっちにどうぞっ」

「っとと、そんなに引つ張らなくても大丈夫 ん?」

アキ君が葉月ちゃんに手をひかれて廊下を歩くと、
その途中にある部屋のドアが開いていて中が少し見えたみたい。
所狭しと並べられているぬいぐるみ。

そして、その中央では見覚えのある大きなキツネがなにかを抱えて座ってる。

抱えているアレは何だろう? 何か……写真立てのようなの……?

「ちよ、ちよつとアキっつ!?!?」

「ほえ?」

「美波ちゃん!」

突然の声にアキ君が振り返ると、

その瞬間に脳天・鼻先・下顎の三か所を美波ちゃんが攻撃しようとしてるのに気づいて
あたしがピコハンで叩いて止めた。

「うう…つぐみ…痛いじゃない」

「痛くしてるんだから当然でしょ！」

頭を押さえている美波ちゃんを見てあたしは腰に手を当てて怒りながら言う。

「やれやれ。お前らは何をやっているんだか……チビツ子、元氣だったか？」

「はいですっ。おつきいお兄ちゃん」

「そうかそうか。それは良かった」

葉月ちゃんの頭にポンポンと手を載せる坂本君。

身長差のせいかな、雄二は葉月ちゃんの頭に手を載せるのが好きみたい。

あたしもよく撫でられてるから確信できるよ。

「はじめまして、葉月ちゃん。僕は天城富士也だよ」

「はじめましてです！でっかいお兄ちゃん」

フジ君が自己紹介すると葉月ちゃんは笑顔で言う。

「はじめまして、俺は神薙綾人だ。よろしくな、葉月ちゃん」

「はいです！変身ヒーローのお兄ちゃん！」

神薙君も自己紹介すると葉月ちゃんはにこにここと笑って言う。

「それで、リビングはこっちで良いのか？」

「はいですっ。」「こっちですっ」

坂本君は自分の家を出てからすっかりいつもの調子を取り戻した様子。

「つぐみ、行くよ」

「あ、うん」

美波ちゃんを説教していたらアキ君に呼ばれたので美波ちゃんの部屋の扉を閉める。

勿論、見ないようにね？

「と、とりあえず適当に座ってもらえる？ 今テーブルを持ってくるから」

あたし達を通すと、美波ちゃんが勉強道具を広げるためのテーブル

を取りに行こうとする。

「？ お姉ちゃん、テーブルなんて何するんです？ トランプですか？」

その様子を見て、葉月ちゃんが首を傾げていた。
ああ、葉月ちゃんには何も話していなかったっけ。

「葉月。 今日はお姉ちゃん達ね、うちでテストのお勉強をするの」

美波ちゃんがそう言うと、葉月ちゃんは少し寂しげに目を伏せた。

「あう……。テストのお勉強ですか……。
それじゃあ、葉月は自分のお部屋で大人しくしてるです……」

察しが良いと言いつつ、気が回ると言いつつか
……葉月ちゃんはあたし達が何かを言う前に、勉強の邪魔になるま
いと部屋に行こうとした。
それはそれで良い子の行動かもしれないけど……でも……

「待つて、葉月ちゃん。 良かったら、あたし達と一緒に勉強し
ない？」

学校の宿題とか、予習とかはないかな？」

小さな子が聞き分けが良過ぎるのもどうかと思うから。
あたし達がやってきたただけであんなに嬉しそうだったから、
一人で部屋にいるなんて寂しいに決まってるしね。

「えっ？ 葉月も一緒にお勉強していいですかっ？」

「勿論だよ。 ね？」

葉月ちゃんの質問あたしは頷いて答えてアキ君を見て聞くと

「もちろんだよ」

アキ君は頷いて笑顔で言う。

「ああ。 どうせ一人に教えるのも二人に教えるのも変わらないか
らな」

「雄二。 それは僕と明久が小学校五年生レベルだと言っているの
かな？」

坂本君は笑顔で言うとフジ君が不機嫌そうに言う。

「葉月ちゃん。 一緒にお勉強しましょうね」

「わしはあまり教えてやれることはないかもしれんが、一緒に勉強
するのは大歓迎じゃ」

瑞希ちゃんと秀吉君が笑顔で言った。

「……保健体育なら教えてあげられる」

「康太、その台詞はアウトだ」

土屋君が言うと神薙君が呆れながら言う。

「（アキ、つぐみ、天城、いいの？ 今度のテストはかなり頑張らないといけないはずなのに）」

「（大丈夫だよ）」

「（そうそう。葉月ちゃんは良い子だから邪魔にならないし。それに部屋に一人にしておいたら、その方が可哀想で、かえって勉強にならないからね）」

「（ま、そういうわけだ）」

「（……ありがと、アキ、つぐみ、天城）」

とわたしとアキ君とフジ君にはにかんだように囁いた。

「葉月、一緒にお勉強したいですっ」

「おう。それなら勉強道具をもってくるといい」

「はいですっ」

トトツと軽い足音を立ててリビングを出て行く葉月ちゃん。
ただ一緒に勉強をするっただけのことだけど、葉月ちゃんはそれが
よっぽど嬉しかったんだね。

「さてと。　　そんじゃ、テーブルを持ってくるんだろ？　　手伝うぞ
島田」

「あ、大丈夫よ。　　ウチ一人で」

「そうか。　　まあ、誰かの写真でも飾ってあるのなら、
下手に歩き回られたくないだろうから無理に手伝うと言わないがな」

「ななな何言ってるのよ坂本！？　　あんたまさか、さっき部屋の中
が見えてたの!？」

「いや、ジョークのつもりだったんだが……」

「島田は存外乙女じゃな」

「わかりやすいぞ、島田。」

「……　　毎度御贔屓に、どうも」

どうやらいつの間にか美波ちゃんも土屋君と写真の取引をしていた
みたいだね。

恐るべし、ムッツリ商会。

「とじるで、テーブルはいいとして夕食はどうする？」

「……………何か作る？」

「僕は別にそれでも良いけど」

現在時刻は午後五時。何かを作るのなら買い物に行かないと遅くなってしまふな。

「今日はピザでも取りましょ。 つくる時間が勿体ないし」

「そうですね。特に明久君は頑張らないといけませんから、ご飯を作っていちゃダメです」

「いや、今度はあたしが作るんだけど……………二人がそう言うならそうしようかな」

「何じゃ。 わしはてつきり島田が手料理を振舞うのかと思っておったのじゃが」

「昨夜、プライドを打ち砕かれたからちよつと、ね……………」

「なるほどのう」

「ほら、いいから皆適当に座って。今テーブル持ってくるから」

美波ちゃんが一旦リビングを退室し、
入れ替わりに葉月ちゃんが両手に勉強道具を抱えて戻ってきた。

「お待たせしましたですっ」

「葉月ちゃん、やる気いっぱいだね」

「はいですっ。 あ、バカなお兄ちゃんとつぐみちゃんどっかい
お兄ちゃん、ここにどうぞぞです」

葉月ちゃんは勉強道具をリビングテーブルに置くと、カーペットの
上にクッションを二つ置く。

「「ありがとうございます、葉月ちゃん」

「ありがとうございます、葉月ちゃん」

「いえいえですっ」

言われた通りクッションの上に座る。　すると

「葉月の席はここですっ」

更にアキ君とフジ君の膝の上に葉月ちゃんが乗っかる。

なるほど、そついでとね。

「お待たせ。このテーブルをそっちに　　って、コラ葉月っ。
何してるのっ」

「えへへー。葉月はここで勉強するです」

戻ってきた美波ちゃんが葉月ちゃんをしかるとにこにこ笑顔で葉月
ちゃんが言う。

「ダメ。アキと天城のお勉強の邪魔になっちゃうでしょ？」

「美波。僕なら別に大丈夫だよ。葉月ちゃんなら小柄だし」

「僕も大丈夫だよ？」

それでも美波ちゃんは葉月ちゃんにどくように言つとアキ君とフジ
君は笑顔で答えた。

「バカなお兄ちゃんとでっかいお兄ちゃん、優しいですっ」

「それならいいけど……アキ。変な気は　　」

葉月ちゃんはとても嬉しそうに笑つと美波ちゃんは諦めてからなに
か言おうとするけど

「美波ちゃん？」

「あ、うん。ごめんなさい」

あたしが牽制するようにピコハンを見せるとすぐに言つのをやめて謝る。

準備を整えて、あたし達は葉月ちゃんを交えてテスト勉強をするこ
とになった。

二時間ほどわいわいと勉強をした後に、ピザを堪能してからまた勉強…そして

「ん？ もうこんな時間か。そろそろ今日は終わりにするか」

気がつくと、時間は九時半を指していました

「なんじゃ。あつと言う間じゃったな」

「……集中してた」

「すっかり暗くなってますね」

「もう真っ暗だな」

坂本君の一言に皆さんがペンを置いた。

「あとはまた今度にするとして、今日は帰ろうぜ」

「そうですね。美波ちゃん、今日はありがとうございました」

「あ、うん。こっちこそ色々ありがとう。ほら葉月、お礼を
言いなさい。葉月？」

「ZZZZ……」

「ふふふ。疲れちゃったみたいだね」

葉月ちゃんはいつの間にかフジ君とアキ君の膝の上で眠ってしまった。
ていた。

「もう、葉月ってば……アキに天城、悪いけどこっちに寝かしても
らえる？」

「あ、うん。そうしたいんだけど……」

ソファアの上に寝かせてあげたいけど、

葉月ちゃんはアキ君とフジ君のシャツを握りしめて寝ているんだよ
ね。

「こら葉月、起きなさい。アキとつぐみと天城が帰れないでしょ
？」

「んう……」

美波ちゃんが葉月ちゃんの肩を叩くと、葉月ちゃんは少しだけ目を開けて

「帰っちゃ、嫌です……」

そう言って更に強くシャツを握りしめました

「葉月。あんまり我儘言つと、お姉ちゃん怒るからね」

美波ちゃんの口調が少しだけ強くなる。

この様子を見てみると、優しいだけじゃなく、きちんと怒る時には怒る良い姉をやっているというのが伝わってくるね。

「……お姉ちゃんには、分からないです……」

「え？ 何が？」

「……お姉ちゃんは、いつも一緒にいられるから良いです。

……でも、葉月はこういう時しか、バカなお兄ちゃんやでっかいお兄ちゃんとつぐみちゃんと

一緒にいられないです……」

美波ちゃんの許可も下りたので、
あたしとアキ君とフジ君はもう少しここで勉強を続けていく事にしよう。

丁度、勉強の方も区切りが悪かったしね。

「あ、あのっ、それなら私も……っ！」

「え？ 姫路さんはダメだよ。女の子があまり遅い時間にで歩いちゃ危ないからね。」

雄二と綾人にでも送ってもらって早く帰らないと」

「でも、心配なんです。その、イロイロと……」

「心配なのは分かるけど」

「いいえっ、明久君は私が何を心配しているのか全然分かってませんっ」

「???」

「おやおや」

「……はあ」

アキ君は瑞希ちゃんがムキになっている理由が分からないっていう表情だね。

そこまで思ってる瑞希ちゃんの想いは尊敬できるな。

あたしより…瑞希ちゃんの方がふさわしいのかも。

「俺と綾人が姫路を送るなら、ムツツリー二は秀吉を送るってことで良いか？」

「……引き受けた」

「わしはイマイチ釈然とせんが、致し方あるまい……」

ぼやぼやしていると更に時間が遅くなつてしまね。

瑞希ちゃんや秀吉君（ま、本人は嫌だろうけど）

みたいに可愛い子が外を歩くにはあまりにも危ないしね。

前に清涼祭の時間におかしな連中に絡まれたこともあるし、用心しておくべきだよな。

「あの、やっぱり私も……っ！」

それでも、なお食い下がる瑞希ちゃん。そしたらアキ君が

「いくら言つても、ダメなものはダメだからね姫路さん」

「でもでもっ」

「でもへちまも何もないよ。最近は大変な人も多いんだからね？
こういった事はきちんとしないと」

「諦める姫路。こうなると明久は考えを曲げないぞ」

「……………うう……………そんなあ……………」

神薙君が言つと瑞希ちゃんは落ち込んでいた。

「それじゃ、島田。今日はありがとうな」

「大勢で押し掛けてすまなかつたのう」

「……………ありがとう」

「美波ちゃん、ありがとうございました……………」

「またな、島田」

どこかなくと、できてない様子の瑞希ちゃんも含め、皆がお礼を言つて玄関に向かう。

「……………じゃ、また明日。皆」

アキ君とフジ君はこの通りの状態なので、座ったままで挨拶をしてあたしは立って挨拶する。

「待って、外まで送るわ」

美波ちゃんは立ち上がって皆についていく。

第72話 あたしとアキ君とフジ君と期末試験12（後書き）

感想と評価をお待ちしております

第73話あたしとアキ君とフジ君と期末試験13

「さて。 それじゃ、続きをやるかな」

「うん」

「おう」

一気に人気のなくなったりリビングで瑞希ちゃん特製プリントをやりだすアキ君とフジ君。
あたしも自分で作ったプリントをやることにした。

「すう、すう……」

膝の上からは穏やかな寝息が聞こえてきた。

それを聞きながら黙々と作業をし、少しの間ぼつと時間を過ごす。

「ごめんね、アキとつぐみに天城。 迷惑かけちゃったわね」

そこに皆を送り出した美波ちゃんが戻ってきた。

「ううん。 別に迷惑でも何でもないよ。 ね、つぐみに富士也」

「うん」

「もちろんだ」

「……………ありがとう」

ちよつと照れくさそうに言うと、美波ちゃんはアキ君の隣に座って葉月ちゃんの頭をそつと撫でた。

「んにゅ……………」

「まったく、この子ってば……………」

アキ君の隣に座って葉月ちゃんの頭を撫でる美波ちゃん。
葉月ちゃんはくすぐったそうに頭を動かしていた

「美波と葉月ちゃんってさ、仲が良いよね」

「そうね。悪くはないかも」

アキ君が葉月ちゃんを見てから美波ちゃんにそう言うと美波ちゃんは笑顔で答える。

「見ていて微笑ましいかな」

「確かに」

「何言ってるのよ。つぐみや天城はアキのお姉さんと仲良いじゃないもちろん、アキもだけど」

あたしが呟くとフジ君も同意してくれた、すると美波ちゃんがこっちを見て言う。

そうかな？いつも着せ替えされてること多いんだけどな。

「……あのね。アキ、つぐみ、天城」

「ん？ 何？」

「何かな？」

「なんだ？」

美波ちゃんがこちらを見て言うので小首を傾げてあたし達は聞いた。

「ウチの部屋に置いてあった、あのぬいぐるみの事なんだけど……」

「ああ、あの大きなキツネのぬいぐるみ？」

美波ちゃんは部屋にあるぬいぐるみの話をきりだすとアキ君が思いだして言う。

「うん。あれなんだけど アキが買ってくれたんでしょ？」

「そっか。僕は美波へのプレゼントに協力したことになるのか」

頷いて美波ちゃんがアキ君を見て聞くとアキ君は納得したように呟いた。

「え？　今まで気づいてなかったの？」

ちよ、美波ちゃん。アキ君をバカを見るような目でみないでよ！

「まあ、アキだけ」

「美波ちゃん…？」

何か言おうとする美波ちゃんに笑顔で言つと美波ちゃんは固まる。

「な、なんでもないわ」

「なら、いいけど。アキ君のこと大切に思うならそついうのダメなんだからね？」

美波ちゃんは苦笑いしながら言つとあたしは言い聞かせるように諭すように言つ。

「わ、わかつたわ」

「よし　あ、話つづけて？」

苦笑いしながら美波ちゃんは頷いたので笑顔であたしは笑う。

「あ、うん。学校祭の後にね、どうしてアキとつぐみと知り合いだったのが気になったから、
葉月に話を聞いたの」

「ああそつか。　そう言えば説明してなかったよね」

「その話を聞いたらね、凄く……嬉しくなっちゃった」

「そりゃそうだよ。　妹が自分のために頑張ってくれたんだから。嬉しくないワケがないよね」

「」「」「」

アキ君…鈍いよ。

フジ君もすっごく呆れてるじゃん。

「はあ……アンタって、本当に察しが悪いわね」

美波ちゃんが大きいため息をついて言う。

「えっと…ごめんね?」

「えー!?　つぐみがどうして謝るの!?!」

あたしは申し訳なくて美波ちゃんに謝って言うとアキ君が驚いた。

「べつにいいわよ。さっきウチの部屋を見た時、そのぬいぐるみが見えたでしょ?」

「あ、うん。　写真立てか何かを持っている大きなぬいぐるみがチラッと見えたよ」

「その写真立てなんだけど……」

「うん」

「誰が写っていたいたのか、知りたくない……?」

「ふえ?」

そっか、美波ちゃん。告白するんだ。

あたしも…頑張ろうかな。いつまでも…こんなんじゃ…ダメだよね。

「んにゅっ!」

「」「ひゃあっ!」「」

その時、突然寝ていた葉月ちゃんが身体を起こした。
アキ君と美波ちゃんとあたしは物凄くびっくりしてしまった。

「にゅう……」

そして、再び身体を横たえる葉月ちゃん。
ね、寝惚けていたみたい。

「あ、あははは……びっくりしたね」

「そ、そうね。びっくりよね」

「び、びっくりした」

「驚きすぎだろ」

少しの間、あたし達はぎこちなく笑い合つと慣れない妙な雰囲気を変えるために。
何か他の話題をさがす。

「あ。今ので葉月ちゃんが手を離してくれたみたいだ」

「え？ あ、ホントね」

「みたいだね」

寝惚けて身体を起こしたときに手を離れたようだね。
これなら帰れそうだね。

明久 s i d e

「それじゃ、僕らもそろそろ帰るよ」

葉月ちゃんの身体を抱き上げてソファーに横たえる。
今ならまだ雄二達が帰ってから少ししか時間が経っていない。
急げば追いつけるかもしれない

「そう。じゃあ、また明日ね」

「「ええ(うん)」」

勉強道具を鞆にしまってリビングのドアに手をかける。
そして、ドアを開けて出て行こうとしたところで

「…………アキ」

「ん？」

「…………ウチの部屋の写真……。…見て帰っても、いいから」

そんな事を言われた

「う、うん…………」

思わず何かに気圧されて頷いてしまふ。

美波はそれ以上は何も言うことなく、よそを向いてしまった

「そ、それじゃあ…………」

リビングのドアを閉めて、玄関に向かう

「……………美波の部屋の、写真、か……………」

「アキ君、見るの?」

「見るのか、明久?」

僕が呟くとつぐみと富士也こちらを見て聞いてきた。

「あ、あんな事言われたら、見ないで帰るなんてできるワケがない
よ」

「そっか」

「明久が決めたのならそれでいいけど」

あの会話の流れから言って、
きつとそこに飾られている写真は美波の好きな人とか、そういうた
ものだ。

そして、それは 僕の写真という可能性だって考えられる

「……………（じくじ）」

緊張で汗をかいている手でドアを開けて、 つぐみと富士也と一緒に
中を覗き込んで

……写真立てを確認する。そして、僕は靴を履いて玄関から外に出て行った。
そうか、美波は……

美波 side

「あ、アキは見たかしら……。
あの写真……見たら、流石にあの鈍感でも分かるわよね。それで、
そうしたら……」

「んにゅ……」

「あ、葉月、起きた？」

「はいです……」

「それなら、きちんと着替えてお部屋で寝なさい。一人が寂しい
なら、一緒に寝てあげるから」

「大丈夫です……。
お姉ちゃんのお部屋から借りてきた写真があるから、寂しくないで
す……」

「そう。それならいいけど……って、え？　じゃ、写真？　ウチ
の部屋からって」

「さつき、バカなお兄ちゃんの写真をお姉ちゃんのお部屋から借り
てきたんです。
だから、寂しくないです……」

「ええっ？　じゃ、じゃあ、今ウチの部屋にある写真は……？」

「代わりに図画で使ったオランウータンさんの写真を置いといたです……」

「いやぁぁーっ！」

明久 side

美波は、オランウータンのことが好きなのか……何というか、色々な意味でシヨックだ。

「アキ君、もしかしたら勘違いをしてるかもしれないから言っけど」

「何、つぐみ？」

「美波ちゃんが好きなのはオランウータンではないよ？」

「ええ！？」

「はぁ……。やっぱり、勘違いしてたんだね……」

つぐみは足を止めるとため息を吐く。富士也は呆れた様子で僕を見てる。

だって、あの写真立てにはオランウータンの写真が……

「じゃ、じゃあ……美波の好きな人って……」

「それは本人から聞いてね。でも、オランウータンではない事は確かだし」

「でも、写真立てには……」

「……恐らく葉月ちゃんが本来の写真立てにあった写真とオランウータンの写真を入れ替えたのかも」

「あ、そっか。だから、葉月ちゃんは慌ててたんだね？」

「「そっだよ」「」

僕の質問に二人は笑顔で頷いた。

美波の家に最初に来た時に葉月ちゃんが何かをポケットにしまったけど、

それが写真だったのか……

「そっか……でも、あの写真に写ってたのは誰なんだろう……」

「それは本人から言われるまで、待ってればわかるんじゃない？」

「富士也はわかるの!？」

「本人から聞けよ」

僕が呟くと富士也はにやにやと笑って言う
間違いなく知ってる顔だ、これは!

「あ、二人共待ってよ!」

僕らが走るつとするとつぐみが慌てたように言っ。

「「あ、ごめん。つぐみ」」

「もう、あたしのこと忘れないでよね」

僕と富士也は同時に謝っていたのでつぐみは苦笑いしながら許してくれたけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1624p/>

僕とちっさい幼なじみと召喚獣

2011年12月11日09時48分発行